

まつ なし い せき
松 梨 遺 跡

犬丸小学校プール建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1994. 3

石川県小松市教育委員会

例　　言

1. 本書は、小松市の大丸小学校プール建設事業に伴って、平成2・3年度に実施した松梨遺跡（まつなしいせき）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査及び出土品整理は、小松市の単独事業として実施した。
3. 発掘調査の調査地、調査面積、調査期間、担当者は次のとおりである。
《調査地》 小松市蛭川町（びるがわまち）西15-1・2番地
《調査面積》 1,100m²
《調査期間》 平成3年3月1日～平成3年5月24日
《担当者》 小松市教育委員会 埋蔵文化財調査室 宮下幸夫・望月精司
4. 出土品整理及び報告書作成は、望月が担当し、下記各氏の協力を得た。
《遺物洗浄・注記》 伊藤節子
《遺物接合》 伊藤節子・村井美樹・一島和美・打田外喜代・山口美子・国本久美子
《遺物実測・トレース》 打田外喜代・国本久美子・林真樹
《遺物拓本》 山口美子
《石器実測・トレース》 横田誠
5. 写真撮影は、遺構・遺物とも望月が担当した。
6. 本書の執筆・編集は、望月が担当したが、土師器の蛍光X線分析については、奈良教育大学教授三辻利一氏に、漆器の塗膜分析については、漆器文化財科学研究所四柳嘉章氏に、それぞれ依頼し、玉稿を戴いた。心から感謝の意を表したい。
7. 本書で示す方位は、全て真北である。なお、第2図の松梨遺跡と周辺の遺跡には国土地理院発行25,000分の1地形図（昭和62年発行「小松」、「美川」）を、第3図の松梨町の範囲と今回調査区域には小松市発行2,500分の1国土基本図を使用した。
8. 本調査において出土した遺物をはじめ遺構・遺物の実測図、写真等の資料は、小松市教育委員会が保管している。
9. 発掘調査と報告書の作成にあたっては、次の方々、機関、団体から御協力・御指導を賜った。御芳名を記し、感謝の意を表したい（敬称略）。
上野与一、宇野隆夫、柿田祐司、加納他家男、川畠 誠、木立雅朗、北野勝次、北野博司、小西博之、鈴木三男、田嶋明人、田嶋政和、出越茂和、棚木英道、橋本澄夫、浜岡賢太郎、平口哲夫、藤田邦雄、安 英樹、山口 充、吉岡康暢、小松市立大丸小学校、石川県立埋蔵文化財センター、石川県埋蔵文化財保存協会

目 次

第1章 遺跡の環境	(望月精司) 1
第1節 遺跡の立地と自然環境	1
第2節 遺跡周辺の歴史環境	2
第2章 調査に至る経緯と調査概要	(望月) 6
第1節 調査に至るまでの経緯	6
第2節 調査の経過	6
第3節 発掘調査の概要	8
第3章 発見された遺構と遺物	(望月) 12
第1節 弥生時代中期以前の遺構と遺物	12
第2節 弥生時代後期～古墳時代前期の遺構と遺物	13
第1項 遺構	13
第2項 遺物	13
第3節 古墳時代中期～末期の遺構と遺物	23
第1項 遺構	23
第2項 遺物	29
第4節 奈良時代後期～平安時代前期の遺構と遺物	50
第1項 遺構	50
第2項 遺物	50
第3項 まとめ	79
第5節 平安時代中期～末期の遺構と遺物	87
第1項 遺構	87
第2項 遺物	91
第3項 当該土器群のまとめ	112
第6節 中世の遺構と遺物	117
第1項 遺構	117
第2項 遺物	118
第4章 考 察	119
第1節 松梨遺跡出土土器器の螢光X線分析	119
第1項 分析の目的と分析試料の概要	(望月) 119
第2項 螢光X線分析	(三辻利一) 120
第3項 螢光X線分析結果に対する考古学的所見	(望月) 128
第2節 小松市松梨遺跡出土漆器の科学的分析	(四柳嘉章) 132
写真図版	1 ~ 19

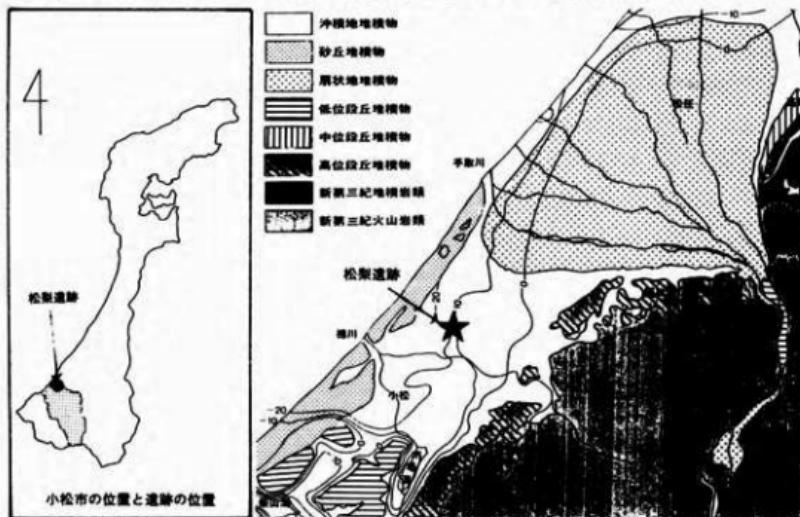
第1章 遺跡の環境

第1節 遺跡の立地と自然環境

本遺跡は、小松市の北端、市街地から北へ約3km隔てた水田地帯に位置し、蛭川町、丸町、松梨町の三町にまたがって分布する。遺跡範囲は、南北約600m、東西約450mの広い区域にわたり、北端は根上町との境界線に接している。

さて、本遺跡の立地する平野部は、総称加賀平野あるいは金沢平野と呼ばれる。北は河北潟から南は片山津まで広がる県内最大の平野地帯の一部で、平野の中央を占地する手取川扇状地の南側にあたる小松・江沼平野の北端に位置する。この小松・江沼平野は、沿岸州（沿岸砂丘列）により閉塞されて生じた潟湖（海跡湖）が埋積されて形成されたもので、南側には潟湖の名残として加賀三湖（今江潟・木場潟・柴山潟、今江潟は干拓で消滅）が点在している。潟埋積平野は、海面の低下時に、河川等から運ばれた土砂が堆積してできたものであるが、泥質層が主体で、これに砂層がサンドされるように混在し、特に、梯川流域や手取川扇状地の南端に位置する当区域は、砂層が厚く、耕作土直下に砂層が露出する、砂層を地山にもつ所が多い。

さて、次に、当平野を流れる河川についてであるが、当平野には北側に県内最長の手取川と南側に第2の梯川が存在し、これに大小の支流が流れ込んでいる。本遺跡は位置的に梯川下流右岸



第1図 遺跡と位置と周辺の地形
(石川県地質誌 図版5を一部改変 (紹野 1993))

に存在するもので、現在の河道から北へ1km程度の所に位置し、北から流れ込む支流八丁川と宮竹用水によって区画された区域に存在する。この宮竹用水は手取川の西南側を灌漑する用水路として整備・構築されたものであるが、古くから梯川に注ぐ流路が確認でき、旧河川を利用して用水路として整備したものと予想する。これらの他、当区域には折橋川や桑原川などの小河川の名前も見え、古くは大小の河川が流れる水田に適した、低湿な区域であったわけで、本遺跡の存在する町の一つ、蛭川町の地名からもそれが窺える（地内を流れる桑原川や湿地帯に無数の蛭が生息していた事から蛭川の地名が付けられたとされている、浅香 1981）。

第2節 遺跡周辺の歴史環境

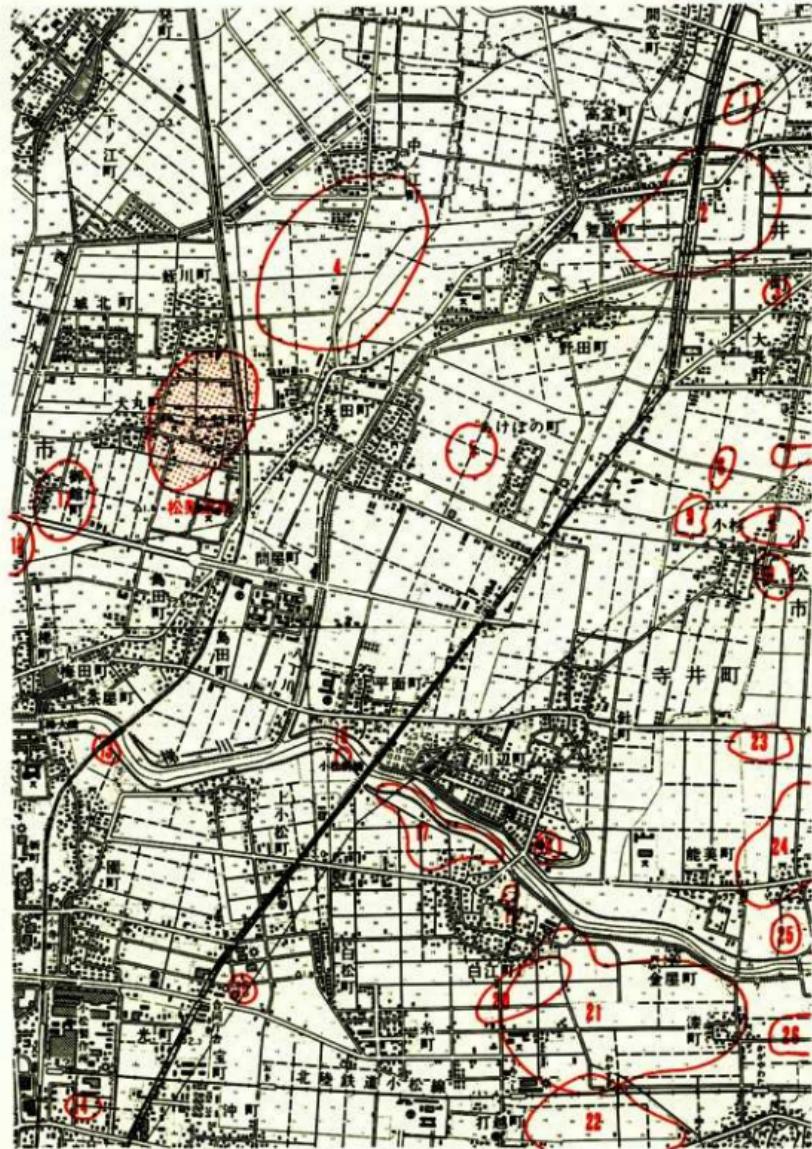
本遺跡の周辺に分布する遺跡の様相を、以下に時代を追って概観してみたいと思う。

まずは、縄文時代であるが、本遺跡で1点の縄文時代後期頃の土器が出土しているように、遺跡内から數点土器が出土する程度で、この近辺の平野部でまとまって出土しているのは一針遺跡程度である（佐々木ノテウラ遺跡でも晚期1点出土）。これは縄文時代早期・前期頃の気候温暖化に伴う海面上昇により、海岸線が前進、集落形成が丘陵部を中心として営まれていたためであるが、後晩期には海岸線は後退し、現在の海岸線に近い状態となり、徐々に平野部に集落が営まれ始める。しかし、上記のように、その数は極めて少なく、この状況は弥生時代前期まで続く。

弥生時代前期は縄文時代同様、極少なく、中期になって遺跡数が増加する。この中にあって、本遺跡の前期資料は貴重であり、千代オオキダ遺跡の前期資料も合わせ、近辺に縄文後晩期から弥生前期へと続く集落遺跡が存在する可能性を示唆しているかのようである。中期の遺跡としては、八日市地方遺跡、梯川鉄橋遺跡が古くから知られ、錢畠遺跡のような断片的な資料も増えつ

番号	名称	種別	時代	番号	名称	種別	時代
1	高堂四方堂遺跡	散布地	弥生	14	八日市地方遺跡	集落跡	弥生中期
2	高堂遺跡	集落跡	弥生～中世	15	上小松遺跡	散布地	平安
3	小長野B遺跡	散布地	古墳	16	平瀬梯川遺跡	集落跡	弥生後期
4	中ノ江遺跡	散布地	古墳	17	白江梯川遺跡	集落跡	弥生・中世
5	長田遺跡	散布地	弥生～古墳	18	一針遺跡	散布地	縄文
6	大長野B遺跡	散布地	不詳	19	白江堡跡	館跡	室町
7	牛島宮の島遺跡	集落跡	平安	20	白江念佛寺塔遺跡	集落跡	弥生～中世
8	千代デジロA遺跡	集落跡	弥生・平安	21	塗町遺跡	集落跡	弥生～中世
9	大長野A遺跡	集落跡	弥生・中世	22	打越遺跡	集落跡	弥生～中世
10	千代デジロB遺跡	集落跡	弥生・平安	23	千代能美遺跡	散布地	奈良～中世
11	御館遺跡	集落跡	鎌倉・室町	24	千代オオキダ遺跡	集落跡	弥生～中世
12	錢畠遺跡	集落跡	弥生～室町	25	千代マエダ遺跡	散布地	古墳～平安
13	梯川鉄橋遺跡	散布地	弥生中期	26	佐々木遺跡	集落跡	平安

第1表 遺跡地名表



第2図 松井遺跡と周辺の遺跡 ($1/25,000$)

つある（小松市 1992）。この時期は、確実に梯川下流域を中心として集落形成が本格的に始まる時期と言え、その集落分布や規模は、後期になって爆発的に拡大・増加する。後期の遺跡は分布図で上げたように、梯川両岸の中・下流域に多く分布し、漆町遺跡や高堂遺跡など大規模複合集落遺跡を初めとして、この時期に開始する遺跡が多く存在する。これは、当地の梯川の水利と低湿な土壤が農耕に適していたために、水田經營の浸透する弥生時代中期以降に当地への集落進出が活発となったことを意味するものであり、同様の規模で、古墳時代前期まで営まれる遺跡が多い。

古墳時代中・後期になると、近隣の複合集落遺跡では遺物出土量が減少、集落規模を縮小する傾向が見られ、中・後期に一時中断する遺跡もある。しかし、当遺跡のように、断続的ではあるが、前期よりも活発化する遺跡も少なくなく（錢畠遺跡・佐々木ノテウラ遺跡）、集落占地の移動のあった時期である可能性をもつ。しかし、大規模複合集落遺跡で集落規模の衰退する現象は間違いなく、この時期に梯川流域において集落經營の衰退がおこったとする見方もある。この点については、さらなる資料の収集が必要であろう。

8世紀から9世紀中頃も、梯川流域での集落規模・遺跡数は低い状況が継続する。しかし、一方では、当遺跡のような8世紀末～9世紀中頃に墨書き土器や漆器などを出土する遺跡もあり、高堂遺跡でも9世紀中頃に多量の墨書き土器を廃棄した構が検出されている。また、梯川中流域ではあるが、最近調査された荒木田遺跡では8世紀中頃を中心とする集落遺跡が検出され、ここでも多量の墨書き土器が検出されている。この時期に大規模に営まれる集落遺跡は墨書き土器を伴うこと、祭祀的遺物・遺構を含むことが特徴で、8世紀中頃から9世紀中頃に営まれるケースが多く、9世紀後半には衰退する傾向がある。この時期、初期莊園と想定される上荒屋遺跡、藤江遺跡、辰口西部遺跡群などが県内で存在するが、そのランクの違いはあるものの、比較的類似した性格をもち、集落の存続期間もよく似ている。梯川流域の当該遺跡が初期莊園遺跡とは考えられないが、翌年永年私財法に端を発する、広大な加賀平野の土地開発に伴う遺跡であるものと予測する。

9世紀後葉～10世紀になると、漆町遺跡周辺の梯川中下流域左岸の集落遺跡が再び活性化し、古代ではこの時期にピークを迎える遺跡が多い。当遺跡でもまとまった資料が出土しているが、主に梯川左岸流域の集落が活発的と言える（梯川中流域左岸に分布する集落遺跡はこの時期を盛期とするものが多く、この時期の遺物を出土しない遺跡は皆無に等しい）。さて、加賀国は弘仁14年（823）に立国し、國府推定地としては從来梯川流域の古府町が上げられていた。しかし、古府周辺の集落遺跡では立国当時の9世紀前半に隆盛を示す遺跡ではなく、梯川中・下流域の集落遺跡が活性化する9世紀末か10世紀初頭頃に加賀國府が移動したとする考えが有力視されている（北野 1986）。そして、最近ではこれを裏付けるかのような、立国時期の官衙級でもトップクラスの遺跡（戸戸大西遺跡等）が金沢で検出されており、注目されている。

9世紀後葉～10世紀代に隆盛したこれらの集落遺跡は12～13世紀まで継続するものが多く、白江梯川遺跡や荒木田遺跡のようにプランクをおいて、12世紀頃に再出現するものも存在する。

さて、梯川中・下流域には当該期、能美荘、板津荘などの荘園名が見られる。板津荘は嘉応3年（1171）の中原頼貞譲状案に「牛嶋堺板津庄訪示外重友村」、能美荘は建久2年（1191）の長講堂所領注文に初見され、いずれも11世紀末～12世紀後半に成立したものと考えられている（浅香1977・1993）。両荘園の荘域は、板津荘が能美平地北部、小松市北端から根上町・寺井町にかけてで、能美荘はその南の小松市八幡町・能美町から一針町・長田町にかけての梯川下流域两岸区域に能美惣荘（乃美・長野・一針三カ荘）を置き、板津荘を隔てて寺井町東部に能美荘重保、辰口町北西部に能美荘山上郷、辰口町岩内町に能美荘石内保を分散させて配置している。両荘園とも、領主グループの主力となった勢力は、王朝国家時代に任用国司として外來し、郷・保に定着した在庁勢力であったとされており、当遺跡の位置する区域に所在したと目される板津荘では在庁勢力である藤原姓グループ=加賀斎藤氏に属する板津介景成を初代とする板津氏が領主として存在していたと考えられている。この板津氏は後に得構郷・能美荘にも領主經營を拡大し、地頭領主として成長、当地域の筆頭領主としての位置を確保している。

引用・参考文献

- 浅香年木 1977 「古代における手取扇状地の開発」
『古代地域史の研究』 法政大学出版局
- 浅香年木他編 1981 『角川日本地名辞典17 石川県』
角川書店
- 浅香年木 1993 「加賀国」『講座日本荘園史』6
吉川弘文館
- 石川県教育委員会 1992 『石川県遺跡地図』
- 石川県立埋蔵文化財センター 1986 『漆町遺跡!』
- 石川県立埋蔵文化財センター 1990 『高堂遺跡』
- 石川県立埋蔵文化財センター 1992 『千代』
- 北野博司 1986 「加賀における奈良・平安時代遺跡の動態—加賀国府の所在地をめぐって—」『佐々木ノテウラ遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター
- 小松市教育委員会他 1992 『銭掘遺跡!』
- 小松市教育委員会他 1993 『銭掘遺跡II』
- 紹野義大編著 1993 『新版・石川県地質図 石川県地質誌』 石川県
- 出越茂和 1994 「金沢市戸水大西遺跡（第2次）」
『第43回埋蔵文化財担当市町村職員等研修会資料』
- 石川県立埋蔵文化財センター



第3図 加賀国荘園分布図（浅香1993より転載）

第2章 調査に至る経緯と調査概要

第1節 調査に至る経緯

平成2年4月、小松市教育委員会は小松市立丸小学校のプール老朽化に伴い、プール新設工事を計画、小学校の北側隣接地、小松市蛭川町西15-1番地にその用地を決定した。

同年7月、小松市教育委員会庶務課（以下庶務課）より埋蔵文化財調査室（以下調査室）へプール建設に伴う埋蔵文化財の取り扱いに関する協議書が提出。計画用地は、周知の埋蔵文化財包蔵地松梨遺跡内に存在することから、調査室は文化財保護法第57条の3第1項の規定による文化庁長官への通知義務と発掘調査に先立つ遺跡の分布調査の必要性を庶務課に回答した。

同年10月、調査室は、庶務課より提出された試掘調査依頼を受けて、1,800m²を対象として試掘トレンチ（南北2本、東西1本のトレーニング）による調査を実施。その結果、全域で遺物を検出し、溝や土坑と思われる遺構を数箇所で検出した。よって、当該区域全域には濃密に遺跡分布があり、発掘調査必要の旨を庶務課に報告した。

同年11月、庶務課と調査室とで、発掘調査計画についての協議。庶務課は平成3年7月プールオープンを計画しており、工事期間の確保から、平成3年4月末まで発掘調査を完了することを要望。これを受けて、調査室は平成3年3月1日から調査に着手することで了承した。また、調査面積は、調査期間の短縮のため、直接プール建設工事が影響する1,400m²のみとし、西側の駐車場区域は盛り土碎石敷き工事とすることに改めた（当初はアスファルト舗装）。

平成3年2月5日、文化財保護法第57条の3第1項と第98条の2第1項の発掘通知を提出。

同年2月18日、庶務課より丸小学校プール建設工事に伴う松梨遺跡の発掘調査依頼が提出。これを受けて、調査室は平成3年3月1日から4月30日の調査期間で実施する旨の回答を行った。

同年2月末、現地にて工事区域の設定を実施、東側農道から西側へ23mまでを工事区域とすることを改めて設定し、調査面積を1,100m²まで縮小した。

第2節 調査の経過

平成3年2月末、調査区域の表土除去作業を重機械によって実施。田地耕作土のみ除去した。

3月1日、発掘調査を開始。調査区域周縁に排水溝を掘り下げ、エンジンポンプ設置。

3月4日、調査区域内に5m×5mのグリッドを設定し、調査区北東部分から表土（旧耕作土）除去を開始。同時に、遺構確認を実施し、4月3日で表土除去を完了。

4月4・5日、調査区域の北側半分の遺構プラン確認を実施。調査区を斜行する大型の1号溝とそれと直交する2号溝、1号溝と並行して走る3号溝を確認、その他土坑・ピット等を確認。

4月11日、3号溝の掘り下げを開始。土層断面ベルトは約5～6mごとに設定し、A～E区に区割りして掘り下げ、遺物を取り上げた。12日までに完掘、土層断面図作成し、断面写真撮影。

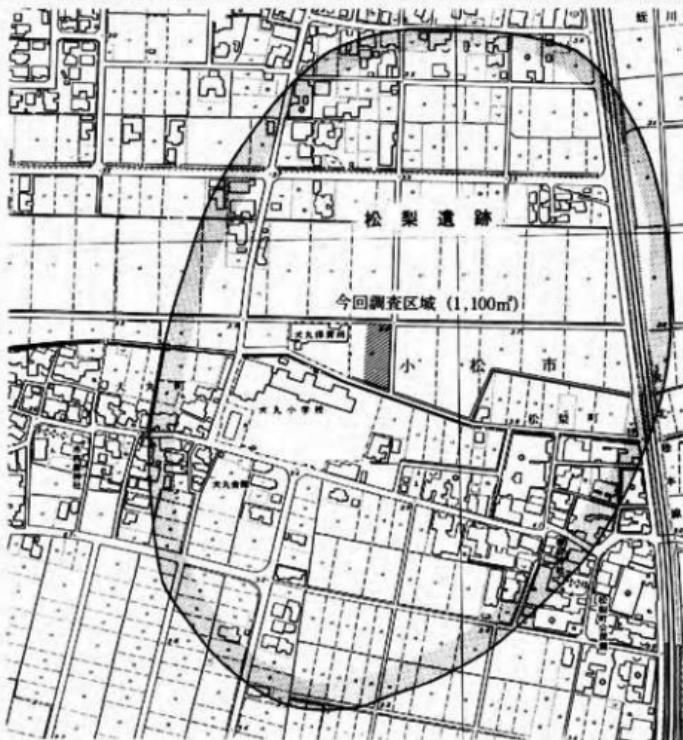
4月12日、1・2号溝の掘り下げを開始。3号溝と同様の方法で行うが、特に1号溝については確認面から7～8cmごとに分層し、上層・中層・中下層・下層・下底の5層に分けて遺物の取り上げを行った。また、大きめの破片や完成品については出土状況写真を随時撮影した。

4月16日、2号溝掘り下げを完了し、土層断面図作成、写真撮影。また、1号溝A区下層（下底面より10cm上）より漆器出土。出土地点と状況写真を撮影。尚、この時点では、予定調査期間内では作業完了しないことが確定。土曜・日曜・祭日・少々の雨天でも調査を実施することを決定。

4月20日、1号溝の土層断面図及び写真撮影を随時実施。26日までに掘り下げを完了。

4月22日、調査区域北東側のピット及び1号土坑を半載して掘り下げ。ピットは深く、柱穴状のものも存在するが、覆土の新しそうで浅いものは埋めもどした。

4月27日、調査区域南側で表土掘り下げの十分に行われていない区域が判明。調査期間の短縮



第4図 松梨遺跡の範囲と発掘調査区域 (1/5,000)

のため、止む無く重機械により地山まで表土除去を実施。30日、プラン確認。この結果、南東隅に河道のような大型溝、井戸状土坑も3～4基、掘立柱建物跡も1棟存在することが分かった。これから着手する区域での遺構密度は高く、それに加え、作業員が稻刈りに突入。作業員は半減し、調査期間の見直しと作業員の臨時募集を庶務課に要請した。

4月30日、1号掘立柱建物跡のピット半裁作業及び2・3号土坑の半裁を実施。1号掘立のピット覆土は一層であったため、土層断面図省略、ピット完掘し、5月1～5日、エレベーション図及び平面図を作成。同時に2・3号土坑の土層断面図を作成した。

5月4日、4号溝掘り下げを開始。当溝は上層、中上層、中層、中下層、下層、下底層、最下底層の7層に分層して掘り下げ、遺物を取り上げた。当現場には電気配線施設が整備されておらず、排水作業が手間取り、勤務時間内での調査時間確保が困難であったため、やむなく、毎朝排水作業を実施することとなった。また、1号溝のH・I区下底で墨書き土器がまとまって出土。地点を記録し、写真撮影を行った。

5月6日、2・3号土坑を完掘。全景写真の撮影と平面図作成を実施。

5月7日、1号掘立柱建物跡の全景写真撮影及び調査区域全景写真撮影。

5月11～13日、4・5・6号土坑を掘り下げ。半裁作業、土層断面図・写真撮影、平面図作成を実施。また、6号土坑から井戸枠を検出。井戸枠掘り上げ後、丸木舟の再利用と判明。

5月18・19日、4号溝下底から木製椀・皿の略完成品が出土。20～21日、土層断面図及び写真撮影を行い、4号溝を完掘。調査区域内の遺構掘り下げを完了。

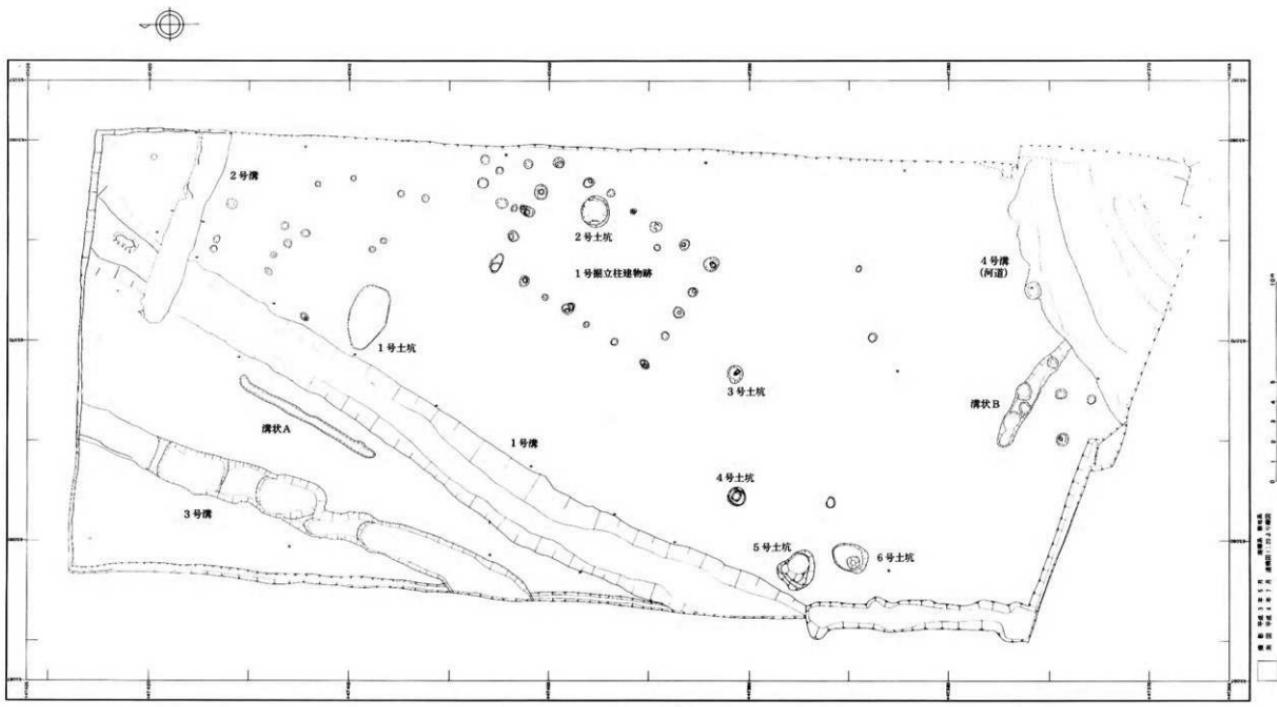
5月23日、調査区域全体の清掃作業を実施。24日、バルーン・ラジコンヘリコプターによる航空測量を実施し、全ての作業を完了した。

第3節 発掘調査の概要

松梨遺跡は松梨町、蛭川町、丸町の3町にまたがる、東西450m、南北600mの広い範囲に分布する集落遺跡で、今回の発掘調査は分布域のほぼ中央、丸小学校の北側にあたる。調査区域は、南北56m、東西23mの面積約1,100m²で、現況は、標高3.5m程度の平坦な水田地帯である。

まず、調査区域の表土の状況についてであるが、現耕作土は暗褐色粘土を呈し、現況面から深さ15cmで存在する。この耕作土の除去はバックホーで行い、その下の掘削は、5m×5mのグリッドごとに人力で行った。この土層は黒灰色粘質土で、地山粘土の直上まで存在し、深さは20～30cmで存在する。遺物出土はあるが、概して疎らで、近世～近代の遺物を含んでいる。当初、この土層は中世以前の遺物包含層と判断して掘り下げたが、近世～近代頃の旧耕作土であることが分かり、中世以前の遺物包含層はこの旧耕作土によって破壊されていると判断された。

本調査区域の時代は出土遺物から縄文時代～室町時代が確認できるが、主なものをブロックに分けると、弥生時代中期以前、弥生時代後期～古墳時代前期、古墳時代中期～古墳時代末期（7



第5図 調査区域全体図 ($1/200$)

世紀)、古代前半期(8~9世紀前半)、古代後半期(9世紀後半~12世紀)、中世以降の6時期に分けられ、古墳時代中期以降は遺構を伴っている。以下に、各時期の遺構と遺物の概要を記す。

《弥生時代中期以前》当期の遺構はなく、古代前半期の1号溝に混じる形で主に出土している。遺物量は概して少なく、縄文時代後期頃の土器1点と弥生時代前期~中期の土器10点程度が出土。

《弥生時代後期~古墳時代前期》この時期も遺構は確認できず、弥生時代後期の遺物は主に古代前半期の1号溝から混じって、古墳時代前期の遺物は主に古代後半期の4号溝から混じって出土する。遺物量は概して多いが、表土の出土は皆無に近い。

《古墳時代中期~末期(7世紀)》当期に位置付けられる遺構は、6号土坑(5世紀頃)と1号掘立柱建物跡(7世紀頃)のみで、遺物出土量(今調査では最も多い時期)から考えると、やや少ないくらいがある。遺物出土はないが、遺構覆土の状況から調査区域北東側と南側のピット、3号土坑が当期に位置付けられる可能性が高い。6号土坑の井戸枠は丸木舟の舳先と艤を再加工して作られたものである。

《古代前半期(8~9世紀前半)》当期の遺構は調査区域を北東から南西へと斜行する1号溝とこの溝の西側を並行して走る狭く浅い溝(溝状A)のみで、建物跡の検出はない。遺物は1号溝下底から主に出土し、墨書き器や漆器、金属器が出土している。

《古代後半期(9世紀後半~12世紀)》当期の遺構は、調査区域の南東隅を曲がりながら走る幅20m以上、深さ1mの河道と思われる4号溝と東西に伸びる2号溝(10世紀頃)、浅い1号土坑(10世紀頃)、井戸と考えられる2号土坑(10世紀)・4・5号土坑(11世紀末頃)で、遺物の出土は4号溝からが多い。4号溝は最下底から9世紀末の遺物が、中~下層の遺物包含層から11世紀末~12世紀前半の遺物がまとまって出土しており、下底からは木製の椀・皿が出土している。

《中世以降》当期の遺構は、3号溝のみで、1号溝の西側、1号溝よりも若干西側に主軸を振って走る。時期の比定は難しいが、室町時代頃と推察される。当期の遺物は表土や4号溝上層からも出土している。

次に、遺構覆土の状況について述べる。上記した遺構覆土には時代によって異なる傾向がある。まず、古墳時代以前の遺構であるが、基本的に上層も下層も黒褐色を呈し、上層では砂質、下層では粘土質である。これに対し、古代前半の遺構は上層が暗灰褐色系の砂質、下層が黒褐色系の粘土質を呈し、古代後半の遺構も古代前半のものに類似する。ただ、4号溝下層~下底には河道のためか暗灰褐色系の砂層が堆積している。中世以降の遺構は上層から下層まで暗灰褐色系の土で、上層は砂質、下層は粘土質である。つまり、いずれも上層は砂質、下層は粘土質であるが、時代の古い方が黒く、新しい方が明るく褐色を帯びる特徴をもち、遺物を出土しない遺構においては覆土が大きな判断材料となる。

以上の調査から、当遺跡は、弥生時代から中世にかけての複合集落遺跡であることが判明。特に、8世紀末~9世紀前半には溝で区画された中で、墨書き器や金属器、漆器を出土するような高いランクの集落が営まれたことが分かった。また、丸木舟の井戸側再利用は県内初である。

第3章 発見された遺構と遺物

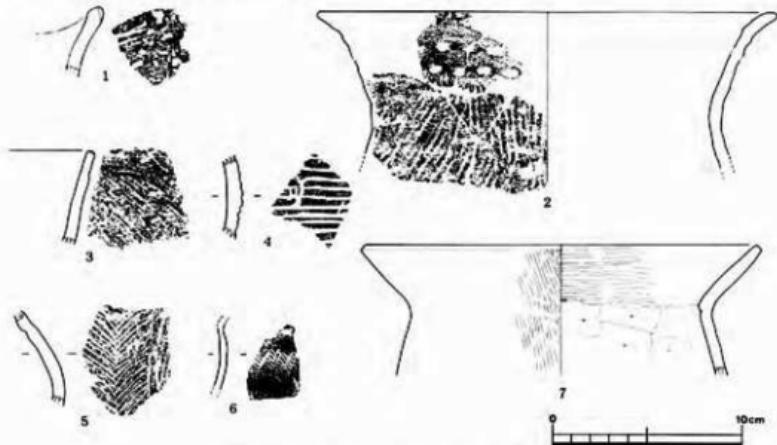
第1節 弥生時代中期以前の遺構と遺物

当期に位置付けられる遺構はなく、少量のみの遺物散布である。

まず、縄文時代であるが、深鉢の口縁部破片が1点のみ出土している(1)。これは波頂部に半円形突起がつく波状口縁のもので、口縁部下端を沈線で縁取る。破片のため、詳しい型式名はわからないが、後期後半ころのものと推察する。

次に、弥生時代前期の遺物について述べる。いずれも柴山出村式と呼ばれるもので、その中でも古い様相をもつ土器群と言える。2・3は胴部に条痕文をもつ粗製深鉢形土器である。2は口縁端部に棒状工具による押圧文をもち、胴部上位に指頭(?)押圧による浅い円形瘤み列を2列に施す。外面には赤色塗彩を施し、胎土には海綿骨子・大粒石英粒子を含む。3は口縁端部に棒状工具による押圧文をもつもので、1~2mmの砂粒(やや濁った色の砂粒)を多く含む。同様の破片は他に10点ある。4・5は胴部に文様帯をもつ精製壺形土器で、4は工字文風の沈線文を、5は綾杉状沈線文をもつ。いずれも1~2mm大の砂粒を含むもので、5と同様の破片はもう1点出土。

次に、弥生時代中期の土器であるが、6は胴部上位に櫛描波状文を1段施す薄手のもので、7は「く」の字状に外反する、外面縦刷毛、内面口縁部横刷毛、内面胴部横ヘラ削りの変形土器である。7は後期に下る可能性もある。



第6図 弥生時代中期以前の土器 (S = 1/2)

第2節 弥生時代後期～古墳時代前期の遺構と遺物

第1項 遺構

弥生時代中期以前と同様、当該期も遺構の検出はない。ただし、遺物の出土はまとまりをもつており、弥生時代後期は1号溝から、古墳時代前期は4号溝から出土する。1号溝・4号溝はそれぞれ奈良・平安時代の遺構であるため、これらは遺構埋没時の混入品ということになるが、時期を違えて、それぞれの遺構からまとまって出土することは偶然とは言えず、調査区の北西区域には弥生時代後期の遺構が、調査区の南東区域には古墳時代前期の遺構が存在しているものと予想する。

第2項 遺物

1. 弥生時代後期の土器（第7・8図）

器種は甕と高坏、器台、鉢、蓋が出土している。口縁部破片での破片数を数えると、甕44点、高坏・器台8点、鉢3点、蓋2点で、甕の量が圧倒的に多い。

甕は有段口縁をもつもので、縁帶幅広形擬凹線文装飾のA類と縁帶幅広形無文のB類、縁帶幅狭上下端突出形無文のC類に分類できる。量比率はA類36点、B類7点、C類1点で構成され、A類が8割以上の主要部分を占める。胎土はいずれも直径1mm前後の砂粒（流紋岩系）を多く含むもので、素地にはやや砂っぽいもの（a胎土）と粘土質のもの（b胎土）がある。a胎土とb胎土ではb胎土が主体的で、器形と対応する感じはない。色調はa胎土が若干黄色を帯びた極薄い肌色を呈するのに対し、b胎土は類似する色調だが肌色の度合いが強い（煮炊具用の砂粒を多く含む胎土を精製胎土に対してそれぞれa-2、b-2とする）。

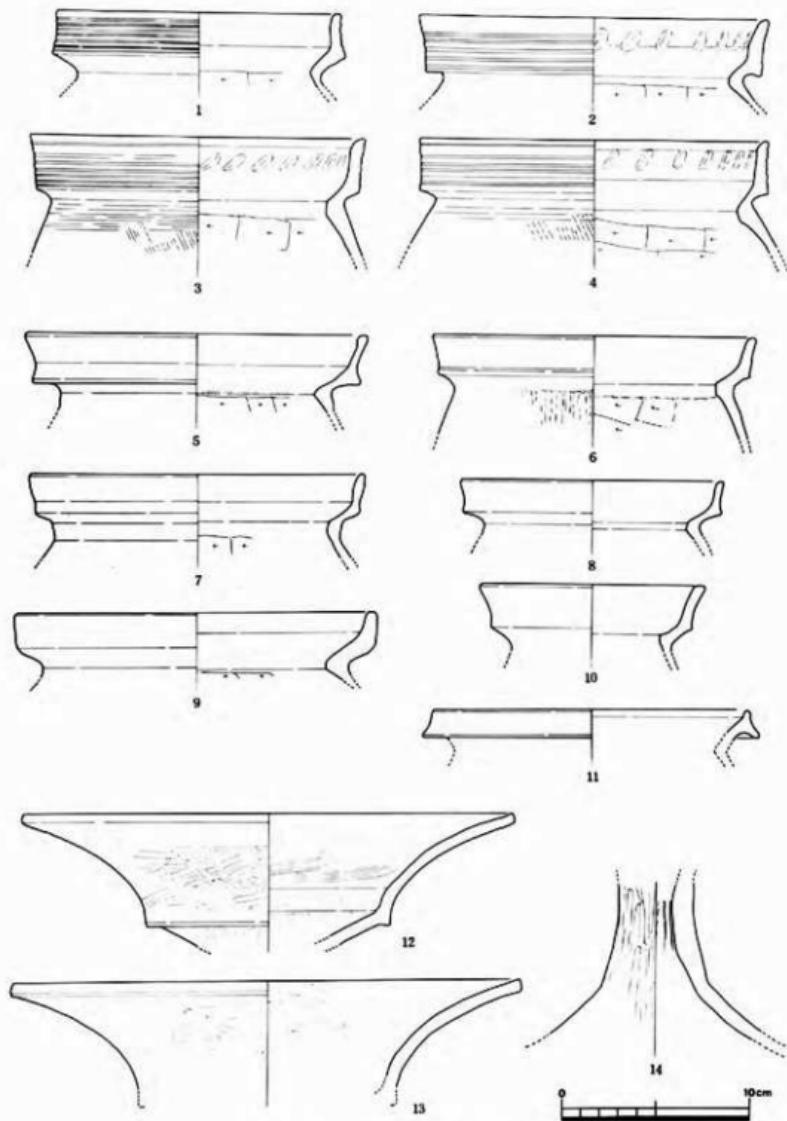
甕A類（1～4） 口径15cm程度の小型のもの（1）もあるが、18cm前後が主体的で、後者には内面に指頭痕が残っている。概して口縁縁帶部の器肉は厚く、口縁端部は丸味を帯びる。調整は、胴部外面上位に横刷毛が、胴部内面にヘラ削りが施される。擬凹線文は比較的明瞭で、口縁端部直下から施されるものが多い。

甕B類（5～10） 口径14cm程度の小型のもの（8）と口径18cm前後の通常法量のものとがあり、後者が主体的である。口縁縁帶部の器肉は厚手の9以外は概して薄手であり、縁帶部の外反する器形をもつ。基本的に胴部調整はA類と変わらないと判断される。また、10のような口径12cm程度の小型よりもさらに一回り小さいものがある。

甕C類（11） 口径17cm程度で、縁帶部の内傾する器形を呈す。

器台はいずれも有段口縁をもつタイプで、無文のA類とスタンプ祭文をもつB類に分けられる。

器台A類（12～14） 口縁部の長く外反する器形で、口縁端部は外に面をもつ。調整は内外面とも丁寧なヘラ磨きで、内面に一部刷毛目かヘラ削りが残る。脚部は筒状から裾広がりに徐々に広がる器形で、外面はヘラ磨き、筒部内面にはしぶりが見られる。胎土はいずれも砂粒が極少なく、

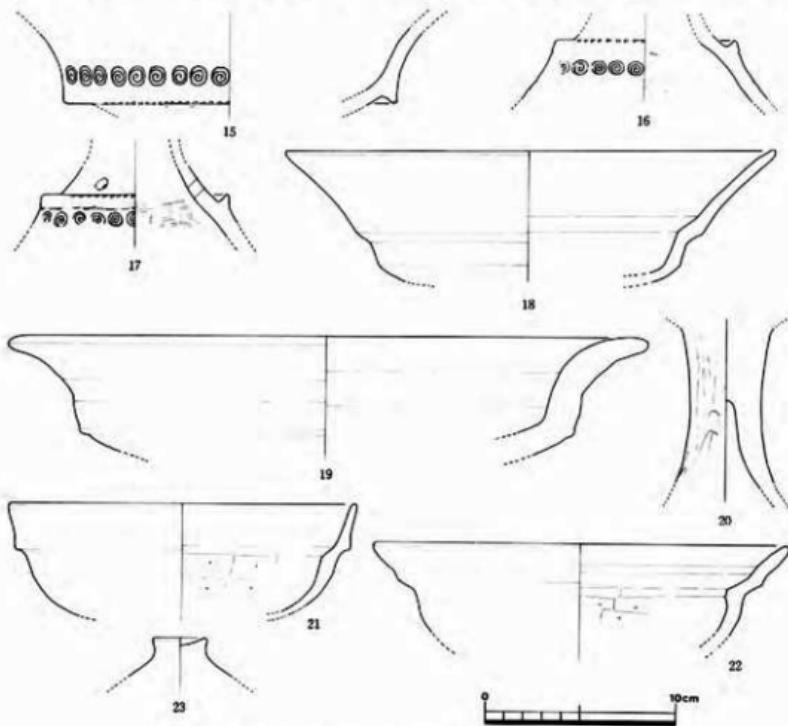


第7図 弥生時代後期の土器 (1) (S=16)

素地は粘土質、色調は肌色を呈す。b 胎土系のもので、壺などの煮炊具胎土に対して精製胎土として位置付けられる（b'-1）。

器台B類（15～17） 口縁部外反する器形で、段は下に突帯状に突出、下端に細い棒状工具による刻み目をもつ。脚部も口縁部同様、有段で刻み目をもつタイプで、段の上には円孔スカシをもつ。文様は、器受部の段の上にスタンプ祭文が一段施され、脚部の段の下には沈線で区画した中にスタンプ祭文が1段施される。スタンプのタイプは同心円文に類似する単体の渦文で、陰刻渦文（柄木 1987）と呼ばれるものである。調整は、外面と器受部内面がヘラ磨き調整、脚部内面が刷毛目調整である。胎土は細かい砂粒を少量含むもので、素地はやや砂気を帶び、灰白色を呈す。a 胎土に近いが、やや異なる感じもある（a'-1）。

高坏は点数が少なく、20の棒状タイプ脚部片の他は、弱い抉り入り状の有段口縁をもつタイプ（18）が3点出土している程度である。また、19のような口径 34cmを測り、極めて厚手の有段口



第8図 弥生時代後期の土器（2）（S=1g）

縁タイプのものも出土している。胎土は 18・19 が a-1、20 が a-1' (a-1 よりも砂粒を多く含む) である。

鉢はいずれも縁帯幅広の有段口縁をもつもので、凹線はなく無文。直立気味の 21 と外傾する 22 がある。口径は前者で 19cm 程度、後者で 22cm 程度で、体部内面にはヘラ削りを施す。胎土はいずれも a-1' である。

蓋は中へこみのつまみをもつもので、山笠状に開くタイプである。胎土は b-1?

2. 古墳時代前期の土器 (第 9・10 図)

器種は壺、壺、高坏、器台、鉢が出土している。口縁部破片での破片数を数えると、壺 39 点、壺 8 点、高坏 7 点、器台 6 点、鉢 3 点で、壺の量が多いが、壺や高坏・器台も目立つ。

壺は有段口縁をもつものと「く」字状口縁をもつものとに分けられる。そしてさらに、有段口縁は縁帯幅広形擬回線文装飾の A 類と縁帯幅広形無文の B 類に、「く」字状口縁は口縁端部摘まみ上げの縁帯部回線状のものが入る D 類と口縁端部内側肥厚させた E 類、口縁部薄手で端面部取り状の F 類、口縁端部丸い G 類に分けられる。量比率は A 類 4 点、B 類 3 点、D 類 1 点、E 類 17 点、F 類 8 点、G 類 7 点で構成され、E 類以降の「く」字状口縁が 8 割以上の主要部分を占め、その中でも特に E 類が主体的である。胎土は弥生時代後期の a-2 胎土、b-2 胎土が主体をなすが、砂粒が目立たず、撥形の光る鉱物を多量に含む胎土 (c-2 胎土) があり、これは G 類器形でのみ見られる。主要器形である E 類では a-2 胎土が多い傾向をもつ。

壺 A 類 (1) 口径 16cm 程度で、口縁部器肉薄く、外傾する。

壺 B 類 (2・3) 口径 16cm 程度。全体的に厚手で、口縁端部は内傾する。胸部内面はヘラ削り。

壺 D 類 (4) 幅狭の縁帯部内外面に刷毛状回線文が入るもので、外面は縦方向の刷毛調整、内面は縦・斜方向のヘラ削り調整が施される。器形・調整から弥生時代後期に測る可能性大。

壺 E 類 (5~11) 口径 20cm を測る大型のものもあるが、16cm 前後が一般的である。器肉は比較的薄手で、口縁部内面が肥厚して上端に面をもつ。調整は外面刷毛、内面ヘラ削りで、所謂布留系壺と呼ばれるものである。

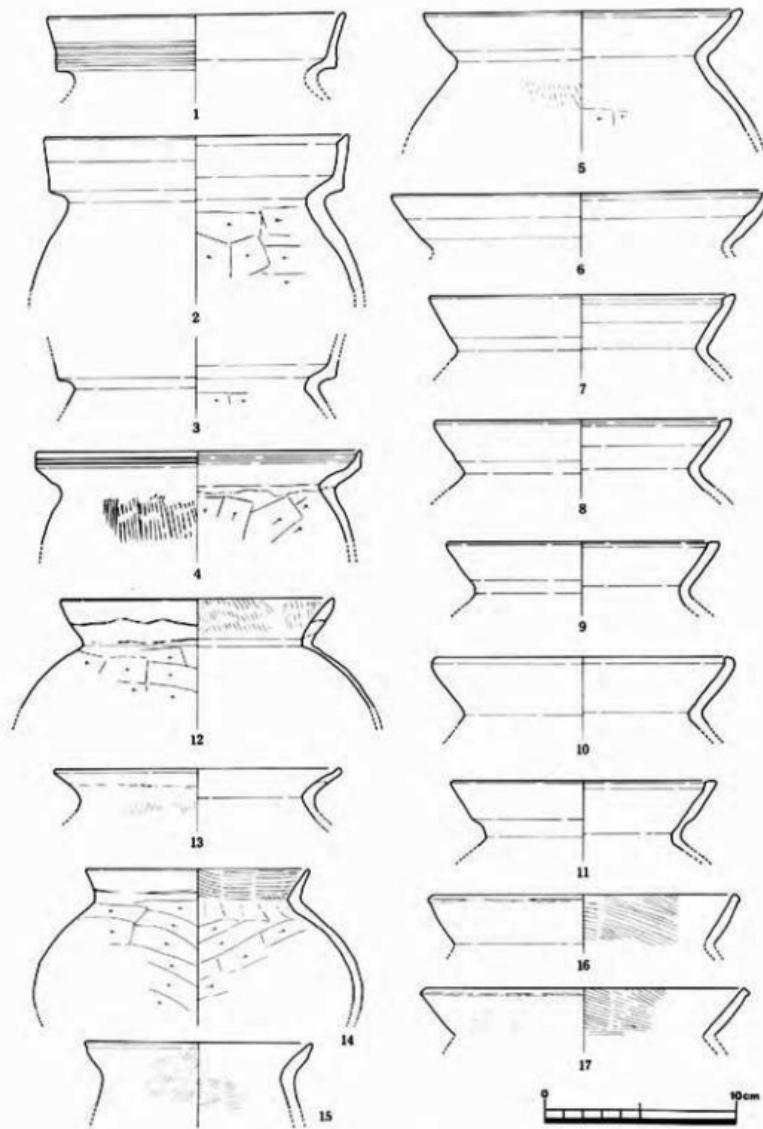
壺 F 類 (16・17) 口径 16~17cm 程度のもので、口縁部薄手、口縁部内外面に横刷毛調整をもつ。これも所謂布留系壺と呼ばれるものであろう (田嶋分類 I : 類? 田嶋 1986)。

壺 G 類 (12~15) 口縁端部の先細り状に丸くなるものを一括してこの類に入れた。12・14 は胸部内外面にヘラ削りをもつ、口縁部内面刷毛調整のもので、胸部は球形状に膨らみ、薄手の作りをしている。13 は口縁部外反気味の薄手の製品。15 は小型のもので、内外面に刷毛調整をもつ。

壺は口縁帶貼り付けの複合口縁をもつ A 類と有段口縁の B 類に分けられる。

壺 A 類 (18・19) 口径 17cm 前後を測るもので、内外面とも赤彩を施すバレススタイル型の装飾壺である。口縁帶には棒状浮文が見られ、ヘラ磨きが施される。19 は刻目を施す突窓をもつ頸部付近の破片で、器形からこれも A 類に入れた。胎土はいずれも a-1' である。

壺 B 類 (20・21) 口縁端部の下端が突出する山陰系 (20) と頸部太め器形 (21) がある。口径



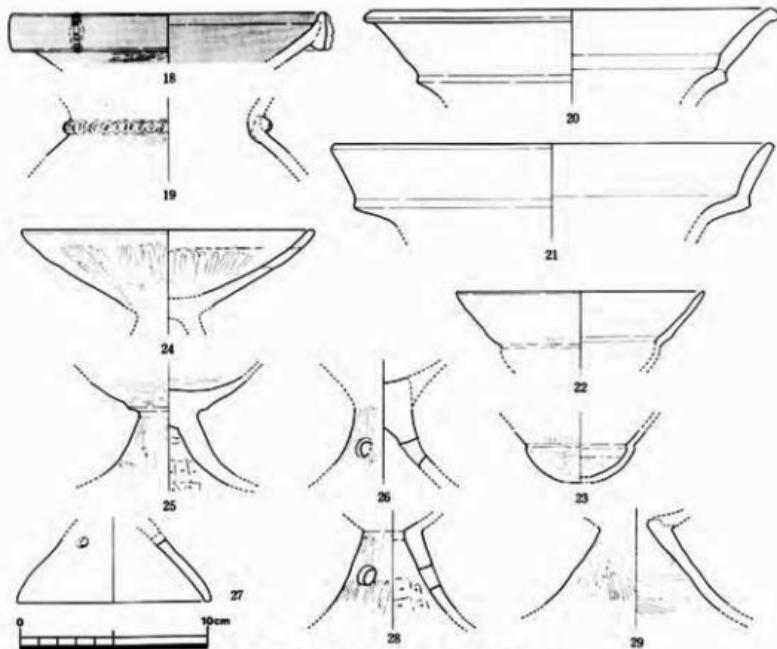
第9図 古墳時代前期の土器 (1) (S=34)

はいずれも20cm以上を測る大型のもので、内外面とも横ナデが施される。胎土はb-1' (b-1で砂粒の多いもの)とa-1'がある。

鉢(22・23)は比較的浅身で丸底の体部をもち、口縁部の長く外傾する器形のもので、所謂小型丸底鉢と言われるものである。調整は内外面とも丁寧で単位の細かいヘラ磨きを施し、薄手で、胎土も精選され(b-1)、精製土器の感が強い。

高坏(24~26)は内湾気味に開く坏部に「八」字状に開く脚部が伴うもので、比較的小型の法量をもつ。坏部下端に段をもつ25と段をもたない24がある。調整は坏部内外面と脚部外面でヘラ磨き、脚部内面でヘラ削りを施す。胎土はa-1とb-1が主であるが、光る鉱物を多く含むc系統のものもある。

器台(27~29)は主に脚部の破片で、脚部器形より内湾気味に「ハ」字状に広がる27と「八」字状に裾広がりとなる28・29に分けられる。調整は高坏同様ミガキ主体であるが、内外面刷毛調整を施すものもある。胎土は高坏と同様である。



第10図 古墳時代前期の土器(2) ($S=1/6$)

3. 弥生時代頃の石製品（第11・12図）

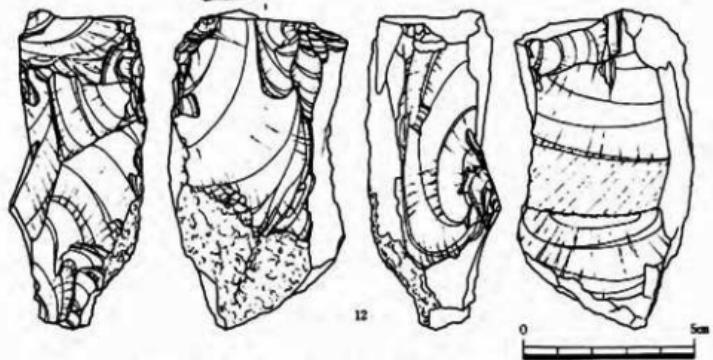
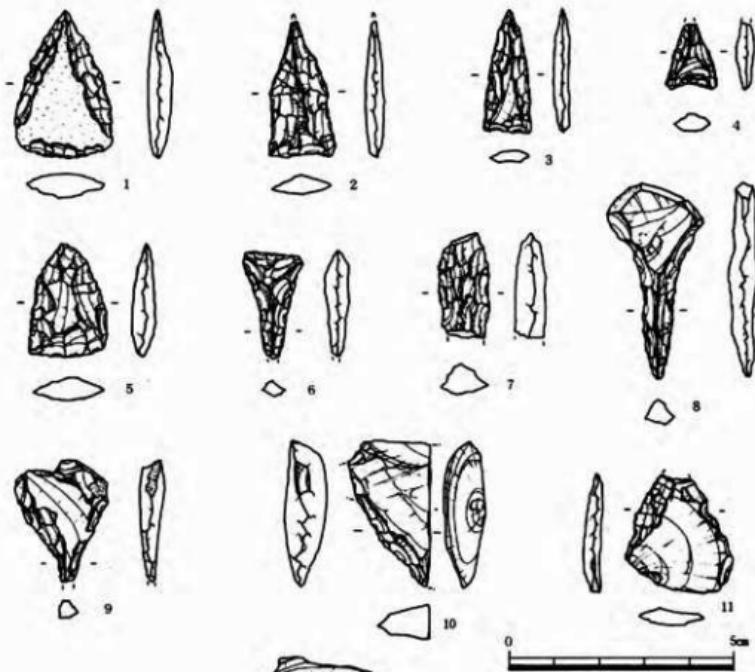
石器は石鎌、石錐、搔器、石斧、敲石、石錘が出土し、石鎌未製品、石錐未製品、玉の原石（石核）も出土している。出土地点の大半が1号溝である点から、弥生時代後期に位置付けられるものが大半であろうと予測しているが、前期や中期の土器も出土しているため、遡る可能性はある。また、20とした砥石は1号掘立柱建物跡の柱穴内から出土しており、1号掘立柱建物跡に伴う可能性が高い（古墳時代後期）。

まず、石鎌、石錐に関しては、同一の材質（輝石安山岩）によるものが5点あり、これには石器の未製品が含まれ、剥片も18点出土している。内訳は未製品も含めると、石鎌2点、石錐5点で、この材質の石器に関しては当遺跡内で石器製作を行っていたことが理解される。他はいずれも石鎌で、淡緑色系珪質頁岩がやや幅広のタイプ、白色系珪質頁岩が細長五角形タイプ、緑色流紋岩のものが小型タイプと、材質によって形が異なっている。

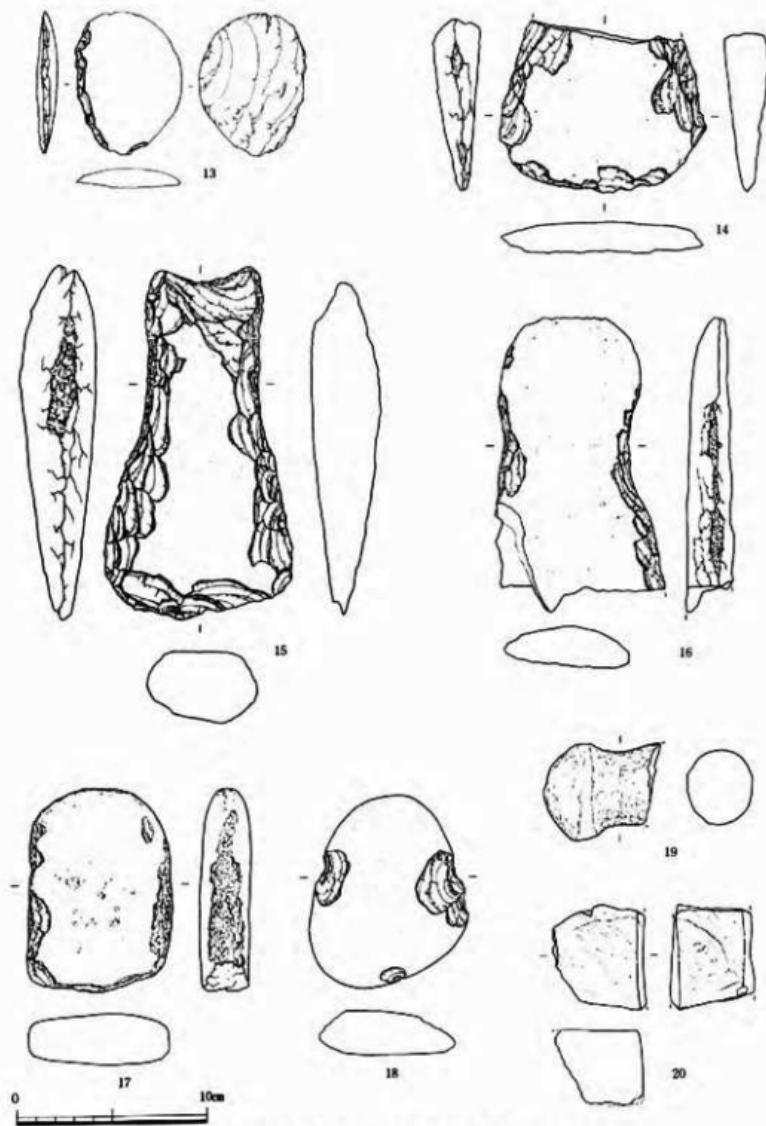
次に、大型の石器についてだが、搔器1点、敲石1点、石斧3点、石錘2点で、石斧はいずれも打製石斧、石錘は分銅型の磨製石錘と偏平な自然石の両側を打ち欠いた打製石錘がある。

番号	器種	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
1	石鎌	珪質頁岩	3.3	2.2	0.5	3.38	
2	石鎌	#	3.0	1.5	0.4	1.49	
3	石鎌	輝石安山岩	2.75	1.1	0.35	0.90	
4	石鎌	緑色流紋岩	(1.45)	(1.2)	0.4	0.51	先端・両足小欠
5	石鎌	珪質頁岩	2.5	1.7	0.5	2.28	
6	石錐	輝石安山岩	(2.35)	1.35	0.55	1.09	先端小欠
7	石錐	#	(2.3)	1.15	0.65	2.19	先端小欠
8	石錐	#	4.3	2.15	0.65	3.69	
9	石錐	#	(2.7)	2.0	0.55	2.66	先端小欠
10	石錐未製品	#	3.25	1.85	0.9	5.57	
11	石鎌未製品	#	(2.5)	2.4	0.35	1.88	先端小欠
12	石核	緑色流紋岩	9.4	4.8	3.8	248.40	玉の原石
13	打製搔器	砂岩	7.5	5.5	1.1	53.58	
14	打製石斧	凝灰岩	(9.1)	11.0	2.3	261.73	基部側欠損
15	打製石斧	安山岩	18.8	9.8	3.65	724.8	
16	打製石斧	凝灰岩	(15.7)	(8.6)	2.5	449.9	刃部側欠損
17	敲石	砂岩	12.1	8.3	2.6	373.1	
18	打製石錘	安山岩	10.2	8.4	2.3	303.3	
19	磨製石錘	#	5.2	(5.8)	4.0	155.77	片側半欠
20	砥石	流紋岩	(5.3)	(4.2)	4.0	163.75	大半欠損

第2表 弥生時代頃の石製品観察表



第11図 新石器時代～古墳時代前期の石製品（1）(S = 1/5)



第12図 弥生時代～古墳時代前期の石製品（2）(S=½)

4. 小結

以上、弥生時代後期～古墳時代前期の遺物を述べてきたが、結びとして、当期の土器様相について若干まとめておきたい。

まず、弥生時代後期であるが、比較的土器群としてのまとまりは強く、当期に行われたであろう、石器製作の痕跡などからも一括性の高い資料と判断できる。土器群の特徴は、まず擬回線をもつ有段口縁壺A類の主体化が目立つことである。A類は縁帯幅の広いもので、口縁端部は丸くやや厚手を保っている。一方、擬回線をもたない有段口縁壺B類も定量存在、これは縁帯幅がやや狭く、薄手の作りのものが多い。高坏は弱い抉り状の有段口縁のもので、口縁部外傾強く、口径も大きい。器台は外反する有段口縁で、口径大きく、精製品の感が強い。そして、セット関係にある有段口縁鉢も出土している。器台のスタンプ祭文は全て陰刻溝文で同范、定量存在する。

以上から類推する当土器群の編年的位置付けは、有段口縁壺A類の縁帯幅の広さとその主体性から月影I式を中心とするものであると判断できるが、有段口縁壺B類の定量存在、大型精製土器群である器台の口径の大きさと、有段口縁鉢の口径、スタンプ祭文の盛行など法仏II式の様相を引きずる感じのものも定量存在し、月影I式を中心としてやや古手の様相を引きずるものとして位置付けたい。編年の概念では、吉岡編年のVI2期（吉岡 1991）が相当するものと判断する。

次に、古墳時代前期だが、少量の初頭段階のものを除けば、比較的まとまりをもった土器群として位置付けできる。初頭段階に位置付けられるものは1の擬回線文をもつ有段口縁壺A類、2・3の有段口縁壺B類、4の壺D類（これは弥生時代まで遡る可能性）で、漆町編年（田嶋 1986）の5・6群土器、白江式に相当するものと考えたい。

これら初頭の土器群を除外して当土器群の特徴をまとめると、まず、布留系壺と言われる壺E類の主体的存在が上げられる。壺E類は口縁端部の上端に面形成するタイプで、田嶋氏のI₂類に相当、壺F類はI₁類に類似する（田嶋 1986）。これらは布留系壺として位置付けられ、また、壺G類の薄手作りもその影響下のものと判断したい。壺以外では、口縁部貼り付け縁帯をもつ装飾壺（A類・東海的？）の存在と有段口縁壺B類、山陰系有段口縁壺の存在、小型精製土器群として定着した小型器台と小型丸底鉢のセット、高坏の小型化が特徴として上げられ、外来系の壺類と祭式様式として定型化・確立した小型精製土器群の存在が見られる。つまり、当土器群は布留系壺の定着・定型化の段階とともに、小型精製土器群として祭式土器様式が確立されたものと評価でき、東海的な装飾壺や山陰系の壺の外来系土器群の影響も一つの特徴として上げられる。以上の土器様相を漆町編年の概念（田嶋 1986）に当てはめると、田嶋氏が「小型丸底壺・小型有段鉢・小型器台のいわゆる小型三点セットが定型化・確立し、壺形土器I₁に代わりI₂が定着・盛行することに特徴付けられる時期」とした8群土器が該当し、これに相当するものと評価する。

引用文献

- 田嶋明人 1986 「土師器よりみた古墳時代土器群の変遷」『漆町遺跡！』石川県立埋蔵文化財センター
柳木英道 1987 「スタンプ文について」『吉竹遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
吉岡康暢 1991 「北陸弥生土器の編年と画期」『日本海域の土器・陶磁〔古代編〕』六興出版

第3節 古墳時代中期～末期の遺構と遺物

第1項 遺構

当該時期の遺構は、古墳時代中期に位置付けられる6号土坑と後期に位置付けられる1号掘立柱建物跡が確認されているのみで、遺物出土量の割には遺構が少ない。覆土の状況から3号土坑と北東側のピットが当該期に属すると思われるが、遺物の出土が僅少で、時期を比定するまでには至っていない。

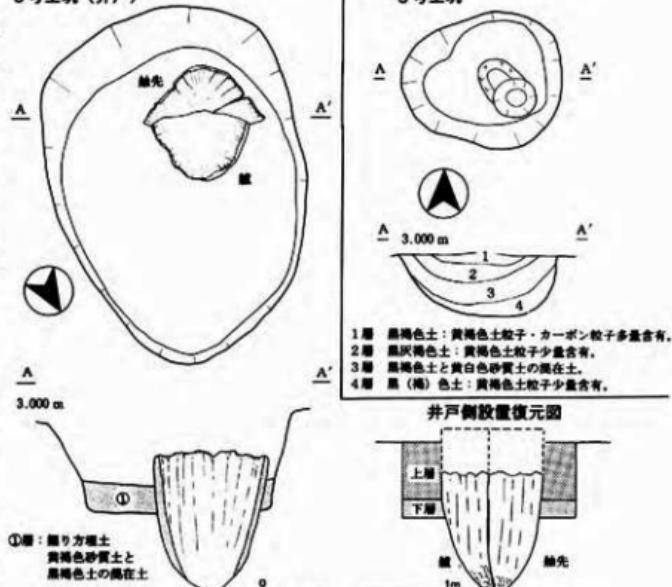
当該時期の遺物の多くは弥生時代後期～古墳時代前期と同様、古代の溝である1号溝と4号溝から混入品として出土している。8～9割方は1号溝からの出土であるが、4号溝から定量、3号溝からも出土しており、調査区域からまんべんなく出土している。

1. 6号土坑（井戸）（第13～15図）

6号土坑は掘り方の上端137×189cm、下端124×162cmを測る楕円形で、検出面から深さ23cmで井戸側材が検出される。井戸側材は掘り方土坑内の南北側に偏って存在し、検出面から同様の土層（黒褐色砂質土）でさらに15cm程度下がって、土層が変わる。上層の黒褐色砂質土も下層の黄褐色砂質土と黒褐色土の混在土も掘り方の埋め戻しの土と予想され、当時の井戸自体は検出面の上方に出ていたもの

6号土坑（井戸）

と予想される。さて、井戸側についてだが、これは丸木舟の舳先と櫓の部分を再利用したものであり、掘り方底面からさらに地山へ深さ45cm打ち込んでいる。つまり、この井戸側は掘り込んで設置したのではなく、直接地山に打ち込んで設置したものであり、舳先側を先に打ち込み、続いてやや怪の小さな櫓の側を入れ子状に打ち込んでいる。また、舳先・櫓とともに打ち



第13図 6号土坑（井戸）・3号土坑平面・断面図 ($S = 1/30$)

込む側の方を打ち込み易いように、再調整して先細りする形をしている。残存する井戸側の規模は上端で $64 \times 61\text{cm}$ 、平面形は略円形、深さは 76cm 、舳先と艤を合わせ口の底面砲弾形をしている。つまり、底面は袋状となり、湧水は合わせ口の間からのみとなる。井戸側内の覆土は掘り方土上層よりも黒味の強い黒（褐色）色土で、粘土質を帯びる。遺物は主に掘り方土上層からで、井戸側内からは少ない。ただ、井戸側内底面からはややまとまって出土している。

さて、井戸側材を第14・15図に上げた。第14図は丸木舟の舳先側の部分の再利用したもの、第15図は丸木舟の艤側の部分の再利用したものである。丸木舟は独木削り貫きのもので、杉材を使用（金沢大学教養学部助教授鈴木三男氏よりご教示）しており、舳先・艤の感じから同一の丸木舟と思われる。

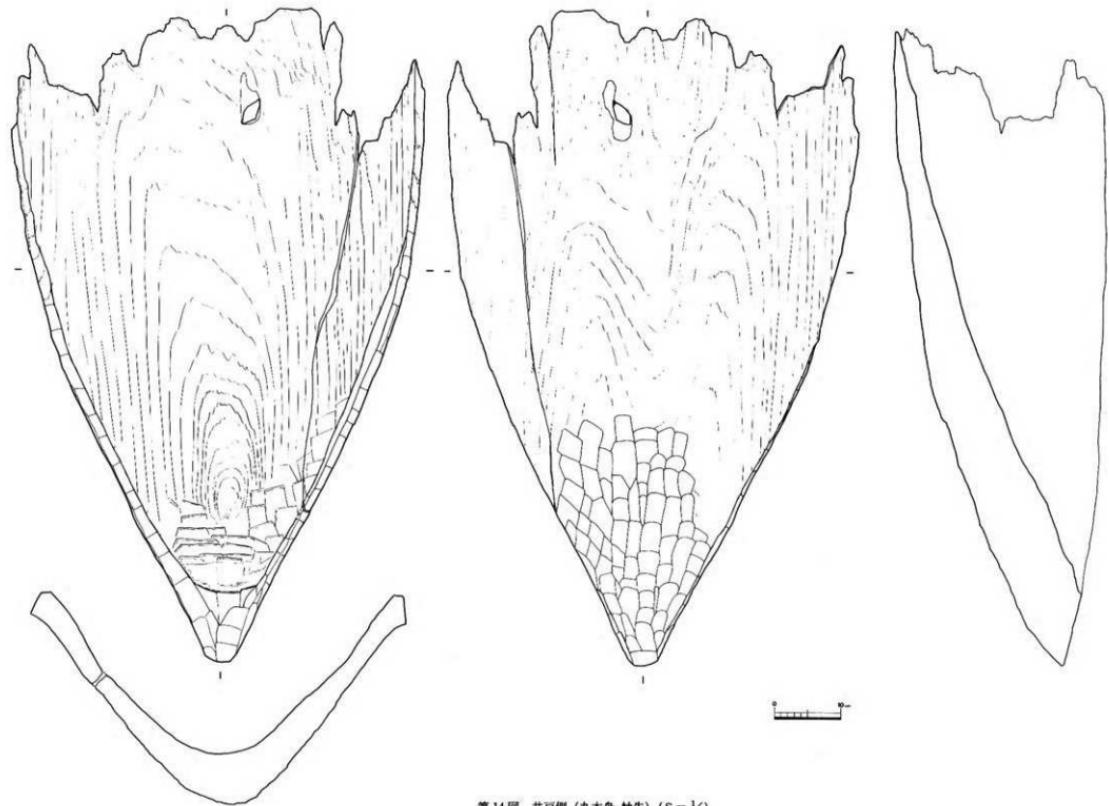
舳先側の規模は残存長 98.5cm 、幅 61.6cm 、深さ 28cm で、厚さは底の部分で $34 \sim 45\text{mm}$ 、舳先では 100mm の厚さを測る。平面形状は舳先に向かって急激にすぼまって行くもので、断面は幅狭の底から両側へ直線的に開く、「V」字形に近い形をしている。舳先側は船として使用していた時点でも先端のすぼまる形状であったと予測できるが、さらに舳先端付近の両面を工具により削り（図示した削りは全て井戸側再利用時の再加工）、外側は打ち込みやすくするために、内側は井戸内の容量を増すために再加工している。

艤側については、残存長 96cm 、幅 56.2cm 、深さ 23.5cm と舳先側よりも一回り小さいが、厚さは底の部分で逆に $60 \sim 90\text{mm}$ と厚手で、艤先端では 100mm を測る。平面形状は舳先側よりもなだらかにすぼまって行く、丸味をもっており、断面形も丸味を帯びて開いている。艤側に見られる削り加工痕も舳先同様、井戸側再加工時のものであるが、外側は先端から 56cm 程度まで行っており、艤側の厚手で丸い形状を削り加工によって打ち込みやすい形状をしている。内側の削り範囲は舳先側と変化ない。

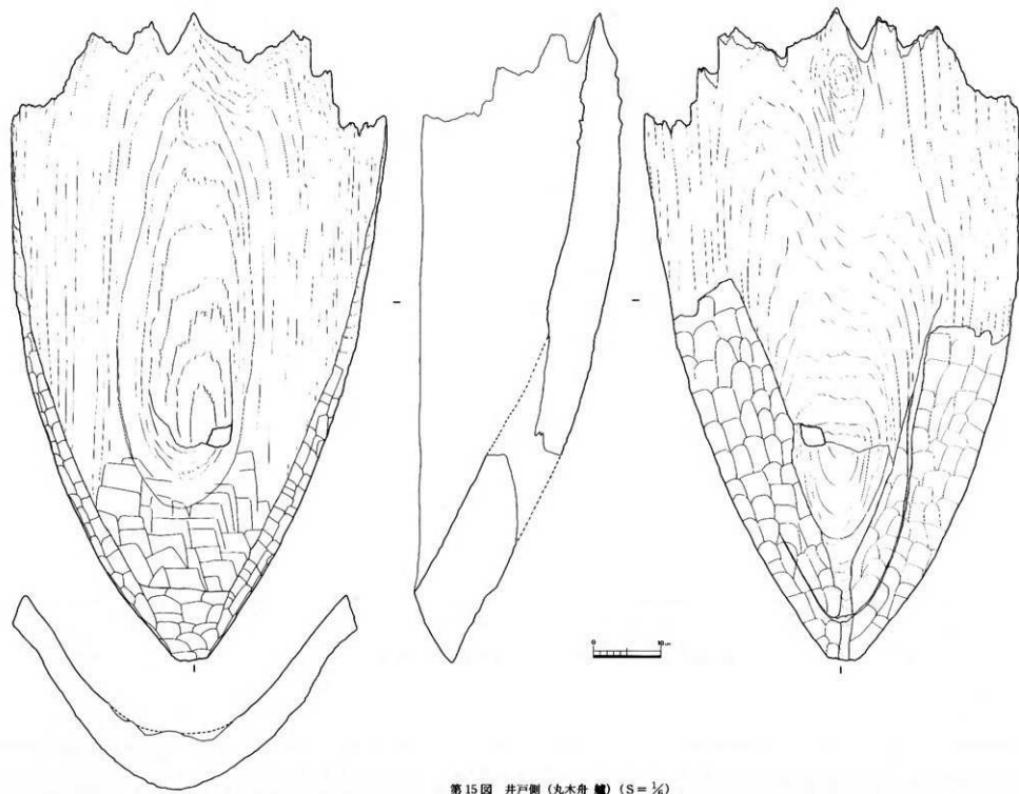
さて、丸木舟を井戸側に転用した例は福井市の下屋敷遺跡で検出例がある（福井県埋蔵文化財センター山口充氏よりご教示）。これは丸木舟の舳先側と艤側を使う点で共通性があるが、その先端（下端側）は水が入り易いように切り取っており、当該資料のような底をもつタイプではなく、底の開いた形状をしている。この井戸は出土遺物から奈良時代初頭頃と考えられている。また、大阪府八尾市萱振遺跡では丸木舟の舳先側と艤側とを切り取った残りの胴体部分を合わせて利用したものがあり、これは奈良時代中期頃のものと考えられている。丸木舟を井戸側材として再利用することは確認例こそ少ないが、このような確認例が存在することを見ると、小型舟を利用する地域では比較的頻繁に行われていたものと予想する。

2. 3号土坑（第13図）

3号土坑は上端で $85 \times 72\text{cm}$ 、下端で $64 \times 54\text{cm}$ を測る梢円形の土坑で、深さ 32cm を測る。遺構覆土は上層から下層まで比較的黒味の強い色調をしており、下層へゆくと粘土質となる。土層堆積状況はレンズ状で井戸側等の抜き取りの痕跡は確認できない。遺物は上層から極少量中世の遺物が、下層からは極少量の古墳時代土師器・須恵器が出土しているが、細片である。



第14図 井戸側（丸木舟 軸先）（ $S = \frac{1}{6}$ ）



第15図 井戸側（九木舟鱗）（ $S = \frac{1}{6}$ ）

3. 1号掘立柱建物跡（第16図）

1号構とほぼ方位を同じくしているもので、構から南東側へ7.5m隔てて存在している。主軸方位は北から東へ33度振り、規模は桁行6間（9.2m）×梁行4間（6.1m）、面積56.12m²で、柱の本数の割りにさほど大型建物ではない。柱間隔はP-1・5・11・15の四隅柱からそれぞれ桁行・梁行へ1本目は170～180cmを測るが、その間の柱間隔（P2～4、P6～10、P12～14、P16～20）は130～150cm程度と短く、柱穴掘り方の規模も径40～65cm程度の小型のものが目立つ。柱穴掘り方の平面形はほぼ円形で、柱痕跡は径20～30cm程度、検出面からの深さは15～30cm程度と浅い。柱穴覆土は暗灰褐色土のほぼ一層で、黄白色土粒子、炭化粒子を多量に含有する。遺物は柱穴から細片で数点出土する程度で、意識的に柱穴内に投棄・埋納されたものはない。

第2項 遺物

1. 6号土坑出土遺物（第17図上段）

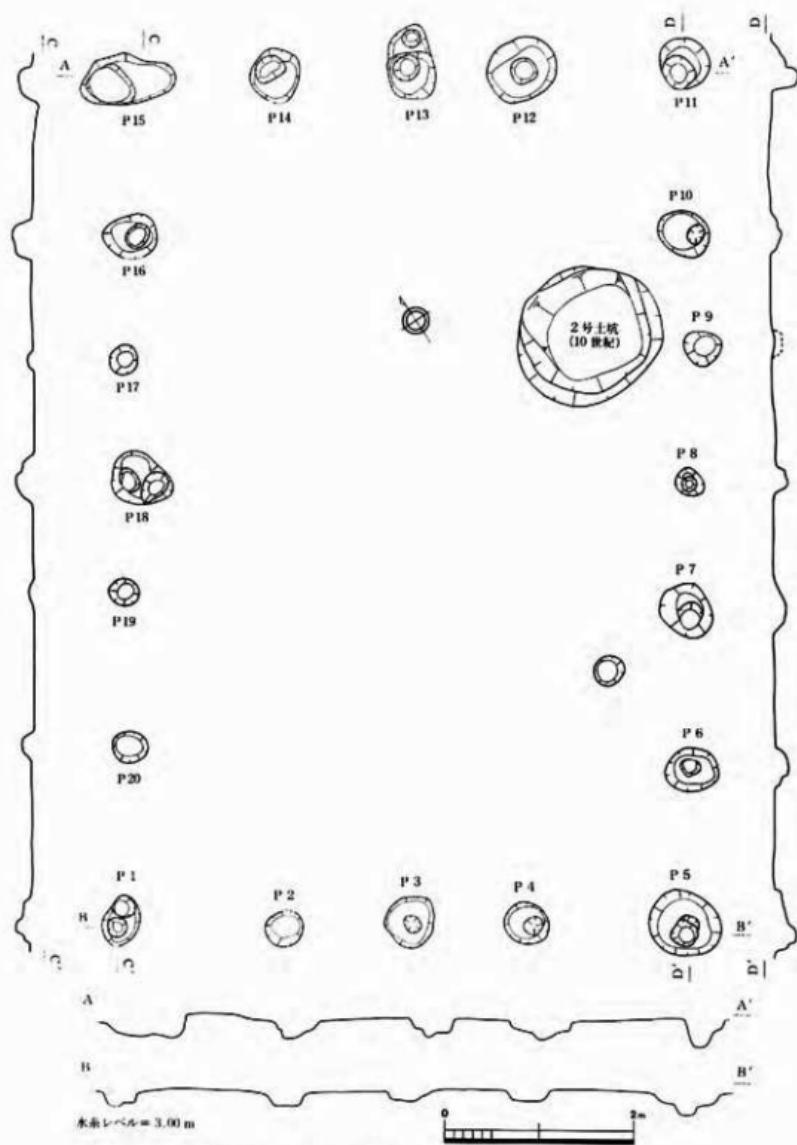
6号土坑から出土するものは土器類のみで、掘り方上層から甕片205点、高坏片41点、塊片8点が、掘り方下層から甕片8点、高坏片1点、塊片1点が、井戸側内覆土下層から甕片24点、塊片3点が出土している。大半が掘り方上層からの出土であるが、井戸側覆土下層の遺物と類似した特徴をもち、ほぼ同時期のものとして取り扱えるものである。

1～3は井戸側覆土下層のものである。1は胴部最大径17.4cm程度の小型甕で、胴部外面には綫方向の刷毛調整、胴部内面には縦方向のヘラ削りが施されている。2も口径12cm程度の小型甕、3は底部突出の厚手塊形態のものである。胎土は甕が流紋岩系の砂粒を多量に含むもので、破面がギザギザしており、色調はくすんだ肌色又は灰褐色を呈す。塊は砂粒をほとんど含まない粉っぽい土で、やや赤味を帯びた薄肌色を呈す。

4～8は掘り方上層出土のものである。4・5は厚手の甕で、胴部内面に粘土接合痕を残す。調整は頸部付近から胴部へと綫方向の単位の粗い刷毛調整を施し、内面は4の口縁部で横刷毛が見られる。6は前者よりも比較的薄手の甕で、口縁部は「く」字状になり、端部を外側に肥厚させている。当該遺構で出土する甕の大半はこの2種には分けられ、前者のタイプが目立つ傾向をもつ。7は厚手の塊で、口径12cmを測り、内外面ともナデ調整である。3のような突出底部をもつタイプと予想される。8は高坏の脚部破片で、筒状にのびて裾で折れて広がる器形のものである。以上の胎土は塊と高坏の小型製品で、3と同質のもの、甕でも1・2と同質のものが主体を占めるが、素地がやや粘土質で薄肌色に黄色を帯びる発色のものも定量ある。

当該土器群は比較的一括性の高いものであり、その時期を想定すると、塊類の定量存在と底部突出型塊（漆町分類A3類）の存在、厚手で粘土接合痕を残す粗い刷毛調整タイプの甕（漆町分類J-1類）と口縁部「く」字形でやや薄手の甕（漆町分類J-2類）の共存から、漆町編年の13群土器（田嶋1986）が相当し、これに比定できる。

2. 1号掘立柱建物跡出土遺物（第17図下段）



第16図 1号据立柱建物跡平面・断面図 ($S = \frac{1}{60}$)

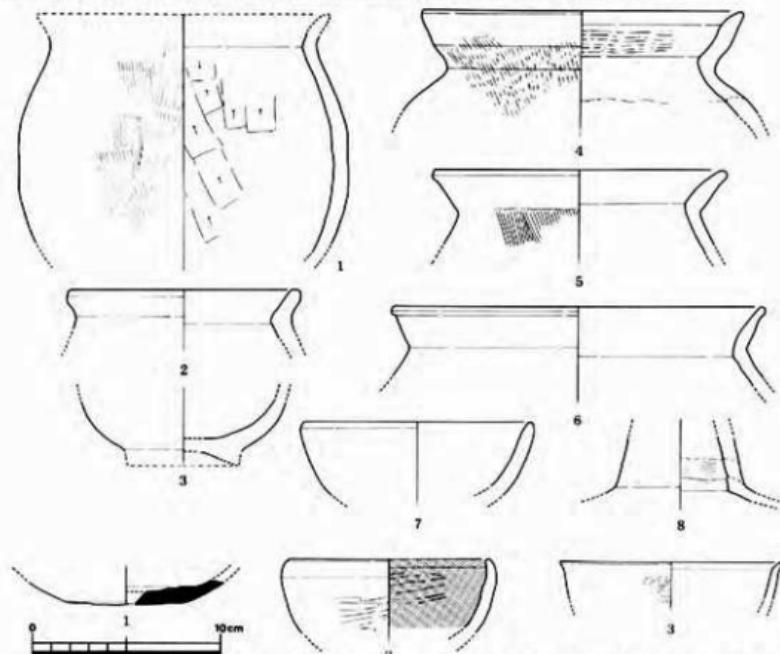
1号据立柱建物跡から出土する遺物は須恵器と土師器、砥石で、砥石については第12図に載せてある。須恵器は壺H2点と高壺1点が出土している。いずれも在地産須恵器と思われるもので、壺Hの底部にはヘラ切り痕が残り、ヘラ削り調整は省略されている。土師器は甕16点と塊5点が出土している。甕の底部は厚く、刷毛調整はさほど粗い単位のものではない。塊は内湾器形のものと口縁端部外反器形のものがあり、前者は2の内面黒色と内外面赤彩のものがある。胎土は甕が6号土坑のものと類似、塊は砂粒を含まないやや粉っぽいものと砂粒を含み光る鉱物を含むものとがある。須恵器壺Hのヘラ切り未調整や内面黒色塊の存在から、6世紀末から7世紀初頭頃に位置付けられるものと推察する。

3. 遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物は、須恵器と土師器が主で、他に1点石製紡錘車が出土している。

a. 須恵器

須恵器は僅かに6世紀前半～中頃のものも出土しているが、主に5世紀末～6世紀初頭に位置付けられるものと6世紀末～7世紀中頃に位置付けられるものとに分けられる。



第17図 6号土坑出土土器(上段1～8、1～3は井戸側内、4～8覆土層)及び1号据立柱建物跡出土土器(下段1～3)
(S=16)

《5世紀末～6世紀初頭》(第18回上段)

当該時期の須恵器は全て非在地産と思われる胎土をもっている。胎土特徴は全体的にサラサラの質感をもつ素地で、やや表面のツルツルした硬質の砂粒（石英状）を含む。黒色吹き出しを含むものと含まないものがあるが、この黒色吹き出しは粒子が横に流れて伸びる特徴をもち、南加賀古窯跡群の黒色吹き出しとは異なる特徴をもつ。発色は青灰色のものが多く、それには断面赤灰色のものが定量ある。また、表面の暗灰色系のものは断面灰色のものが多く、これに黒色吹き出しが目立つ。つまり、胎土には大きく、青灰色系のA胎土と暗灰色系黒色吹き出し含有のB胎土の2種類が存在するわけで、いずれも和泉陶邑窯跡群産の可能性が高い。さて、在地産須恵器は6世紀初頭頃より出現し、6世紀中頃には安定した生産段階に入るが、当該時期は在地での須恵器生産が始まる直前か初期の小規模生産段階に位置するわけで、当該時期の消費地における須恵器供給の様相を如実に物語るものと理解する。

器種は壺H・高壺・甕・壺があり、個体識別法（口縁部破片による個体識別を中心として、甕では胸部叩き・当て具の原体同定による個体数を算出）では壺H蓋21個体、壺H身19個体、無蓋高壺2個体、有蓋高壺4個体、甕4個体、壺16個体が出土している。

壺H蓋（1～5）は口径11～12cm前後のもので、天井部と口縁部の境に比較的鋭い稜をもち、口縁端部は内傾する明瞭な段をもつ。天井部はヘラ削りが施される。

壺H身（6～9）は受け部径14cm以上を測るものもあるが、口径10cm前後が一般的と言え、器高はやや深身を呈するものが多い。口縁端部はやや内傾して明瞭な段をもち、底部は広い範囲でヘラ削りが施される。6には内底周縁にシッタ痕が見られる。

高壺は10の無蓋高壺の壺部と11の有蓋高壺の脚部がある。無蓋高壺はやや椀形の器形で、櫛描波状文が施され、比較的薄手で良好な作り。有蓋高壺脚部は短めに開き、端部で弱い段をもって内傾するもので、方形の3方スカシをもつ。

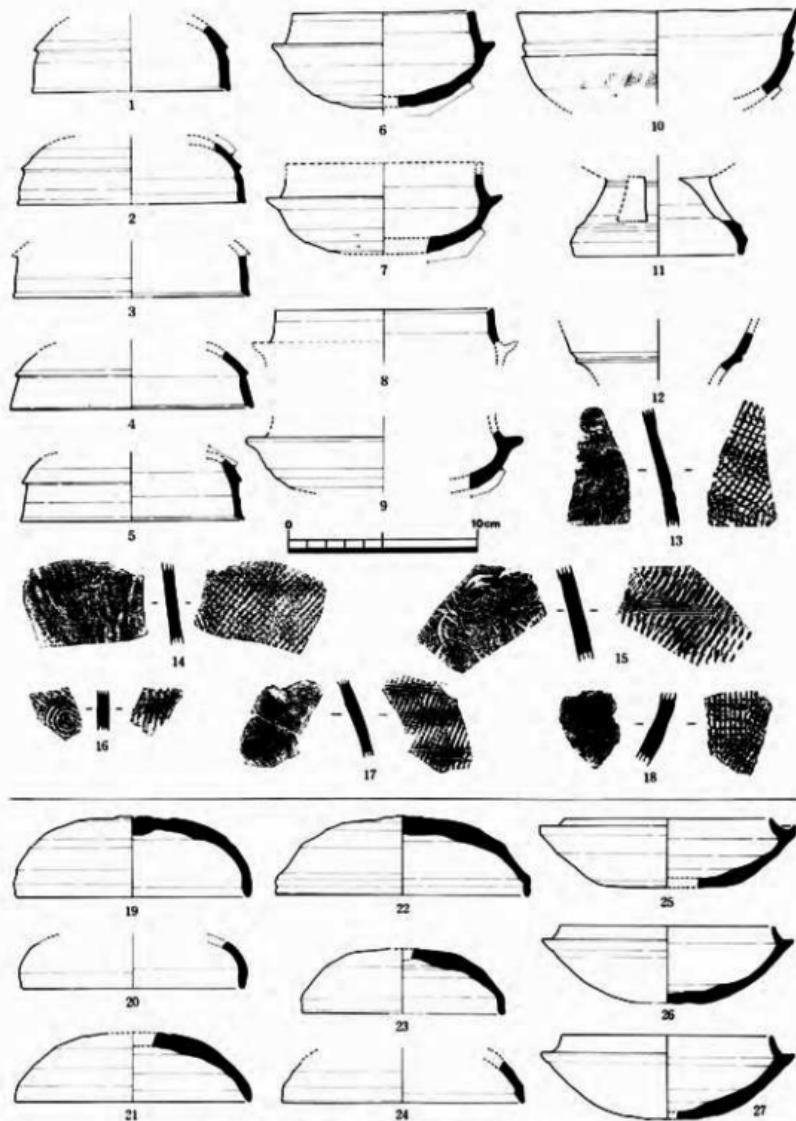
甕は口頸部の破片で、有段状に屈曲する部分で明瞭な稜をもち、口縁部文様は確認できない。

甕はいずれも薄手のもので、中型程度の法量である。外面叩きは直交する木目をもつ平行線文（Ha類）が主体で、これに定量の格子叩き（K類）が存在する。内面當て具は木目の見られない同心円文（Da類）が主であるが、ナデ消すものが多く、無文當て具も定量確認される。

以上の須恵器は壺Hの口径や稜の存在、口縁端部の段形状、有蓋高壺脚部の脚端部形状から陶邑編年でのTK-47型式かややそれよりも遅る時期に位置付けられる。

番号	器種	法量	胎土	番号	器種	法量	胎土	番号	器種	叩き・當て	胎土
1	壺H蓋	口10.6	A	7	壺H身	受12.5	B	13	甕	K, ナデ消	A
2	#	口12.1	A	8	#	口11.5	A	14	#	Ha, Daナデ	A
3	#	口12.6	A	9	#	受14.5	A	15	#	"	B
4	#	口13.0	B	10	高壺	口14.5	A	16	#	Ha, Da	A
5	#	口12.0	A	11	#	脚8.8, 高4.2	A	17	#	Ha, 無文当	A
6	壺H身	口9.7, 高5.0	A	12	甕	-	A	18	#	"	A

第3表 5世紀後半代須恵器観察表



第18図 古墳時代中期～後期の須恵器（1）（S=16）

《6世紀末～7世紀中頃》(第18図下段～第22図)

当該時期の須恵器はいずれも南加賀古窯跡群か能美窯跡群かの在地産須恵器であり、非在地産の須恵器は搬入されない。在地産須恵器の胎土は、C～E類の主に3種類に分けられる。C類は白色の細かな砂粒を多量に含むもので、焼きの強い部分では器面に砂粒が浮き出す特徴をもつ。素地は概して粗く、破面はギザギザし、黒色の吹き出しを伴うものが多い。基本的に南加賀古窯跡群に多く見られる胎土であり、当該時期としては戸津・林地区又はニッリオオダニ地区の須恵器が該当するものと思われる。ただ、この中には比較的粒子の大きな砂粒（あまり白くない）の多量に含む一群が定量あり、これは南加賀古窯跡群以外の産地（福井県金津付近の窯跡群）の可能性をもつが、識別困難である。D類はC類よりも素地の粒子が細かく緻密で、やや砂っぽくサラつく触感を受ける。砂粒はあまり目立たず、大粒のものを少なめに含む。C類とは異なる胎土であるが、南加賀古窯跡群で確認される胎土であり、動橋川流域の那谷・分校地区が該当するものと推察される。E類は素地が緻密である点、砂粒が少ない点、大粒白色粒子を含む点でD類と酷似しており、両者の識別は難しい。しかし、E類胎土素地が粘土質である点で異なり、触感（ツルツル）も異なる。また、E類には軟質の白色塊が混じることが多く、やや硬質の白色大粒粒子の多量に含まれる胎土もある。以上の胎土の量比を示したものが第4表であるが、D・E類の識別できなかったものはDE類として提示した。また、数値は個体識別による個体数であり、壺は叩き具原体同定により識別した個体数である。胎土の主体はD類で、全体の半数近くを占め、壺G以外ではいずれの器種でも高い占有率をもつ。残りの半分がC類とE類であるが、C類は特に壺Gで高い比率をもつ。C・D類が南加賀古窯跡群産であるわけだから、8割近くを占めるわけで、能美窯跡群産は2割程度の占有率に止まる。さて、当該時期の須恵器生産は南加賀古窯跡群で群（窯場）を分けて活動的に生産をしており、6世紀中頃～後半に比べるとその生産量を倍増させ、南加賀古窯跡群最初の隆盛期を迎えていている。また、一方、能美窯跡群では当該時期より須恵器生産を開始し、定量の須恵器を消費地に供給している。以前に、この遺跡近郊の鐵炮遺跡で当該時期の須恵器を産地別に分類したことがあるが、その時の量比では南加賀古窯跡群が7割、能美窯跡群が3割という結果を得ており（望月1993）、今回の量比に近い数値を得ている。距離的には近い能美窯跡群よりも南加賀古窯跡群から主体的に須恵器供給を受ける状況は窯群の規模とも関連することがだが、供給圏の広がりが両窯とも比較的北側に向いていたことを示すものと評価する。

器種は壺H、壺G、高壺、甌、甕で、その量比は第4表に上げた通りである。

壺Hは蓋と身の量比が異なり、蓋は16個体、身は46個体で、身が圧倒的多数を占める。これ

	胎土	壺H	壺G	高壺	甌	甕	計
C類	13	13	7	2	29	64	
%	27	52	41	22	29	32	
D類	28	4	6	5	42	85	
%	57	16	35	56	42	42.5	
E類	8	7	3	2	18	38	
%	16	28	18	22	18	19	
DE類	0	1	1	0	11	13	
%	0	4	6	0	11	6.5	
個体数	46	17	17	9	100	200	
%	24.3	9.0	9.0	4.7	53.0	189	

第4表 6世紀末～7世紀中頃須恵器胎土構成表

は身のみでの使用の可能性を示すものであり、特に小型化した段階はそれが顕在化する。

蓋は口径 12 ~ 13cm 前後のものと 10cm 前後のものとに分けられる。前者は天井部から丸味をもつて口縁部に至る器形 (19 ~ 21) が主体的で、口縁部薄手となり段をもつ器形 (22) のものは少ない。後者は口縁部薄手段形成のものが主体的 (23 ~ 34) で、丸味をもつて口縁部に至る器形は確認できない。いずれも口縁端部は丸くおさめる。天井部調整は大半がヘラ切り無調整のもので、僅かに切り離し時に削りを入れる補助削りが確認される程度である。

身は口径 11 ~ 12cm 前後のものと 9 ~ 10cm 程度のものとに分けられる。口縁部立ち上がりは 0.5 ~ 1cm 程度のものが主体的で、後者の法量では立ち上がりの短いものが目立つ。立ち上がり器形から 26 ~ 27 のような一般的なタイプと 31 のような内反気味に直立するタイプ、25 のような受け部の巻き上がるタイプ、30 ~ 32 のような受け部下がくぼみ水平に出るタイプの 4 つに分けられる。產地別に見ると、内反りタイプは C・D 類でのみ、巻き上げタイプは D 類でのみ、水平タイプは E 類でのみ確認できるもので、窯場による器形（作り手の特徴？）の特徴として提示できるかもしれない。底部調整は蓋と同様、ヘラ切り未調整のものが大半を占める。また、33 のヘラ削りを伴う小型法量のものはつまみを伴う長頸瓶の蓋の可能性が高い。

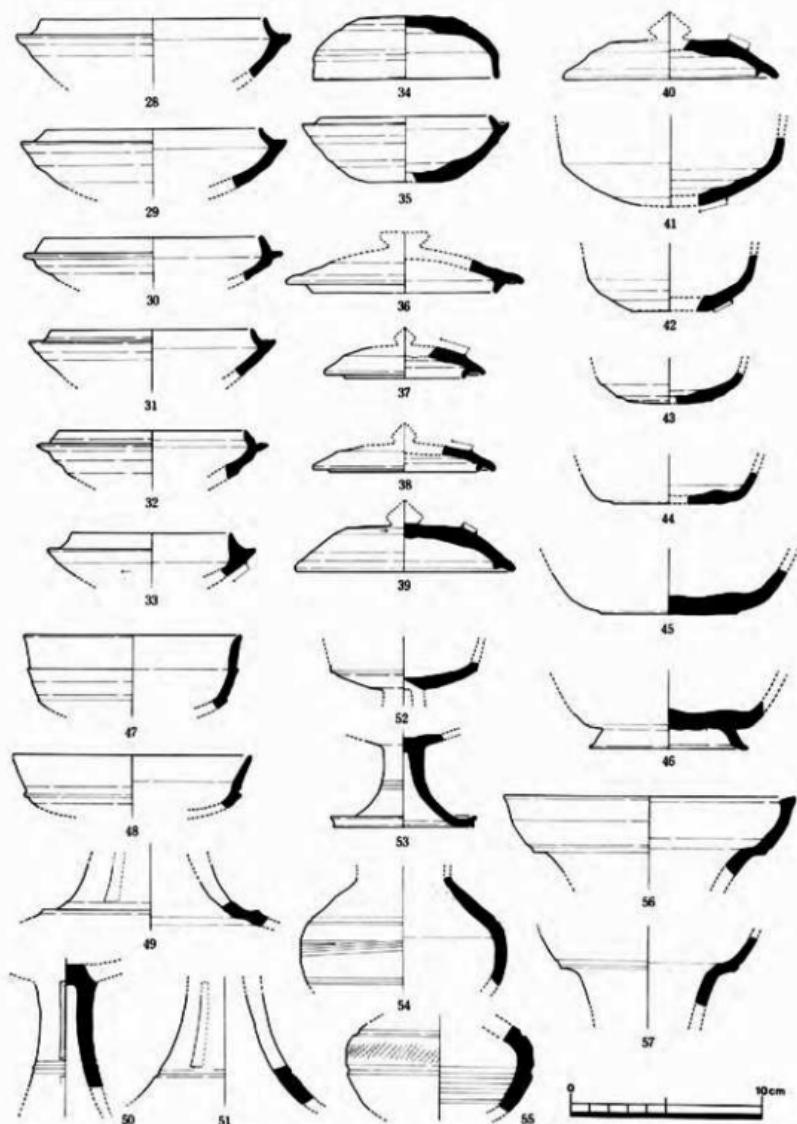
以上、坏 H は法量から 2 時期に分けられ、比較的大型の方は南加賀古窯跡群の分校 3 号窯～戸津六字ヶ丘 2 号窯場（田嶋編年 I : 期併行、以下南加賀窯編年は望月 1990、田嶋編年は田嶋 1988 文献による）に、小型のものはそれ以降の段階、田嶋編年 I 2 期に位置付けられる。

坏 G は蓋と身があるが、焼器種とされているものも含んでいる。量比は蓋が 17 個体、身が 7 個体で、比較的時期にはばらつきがある。

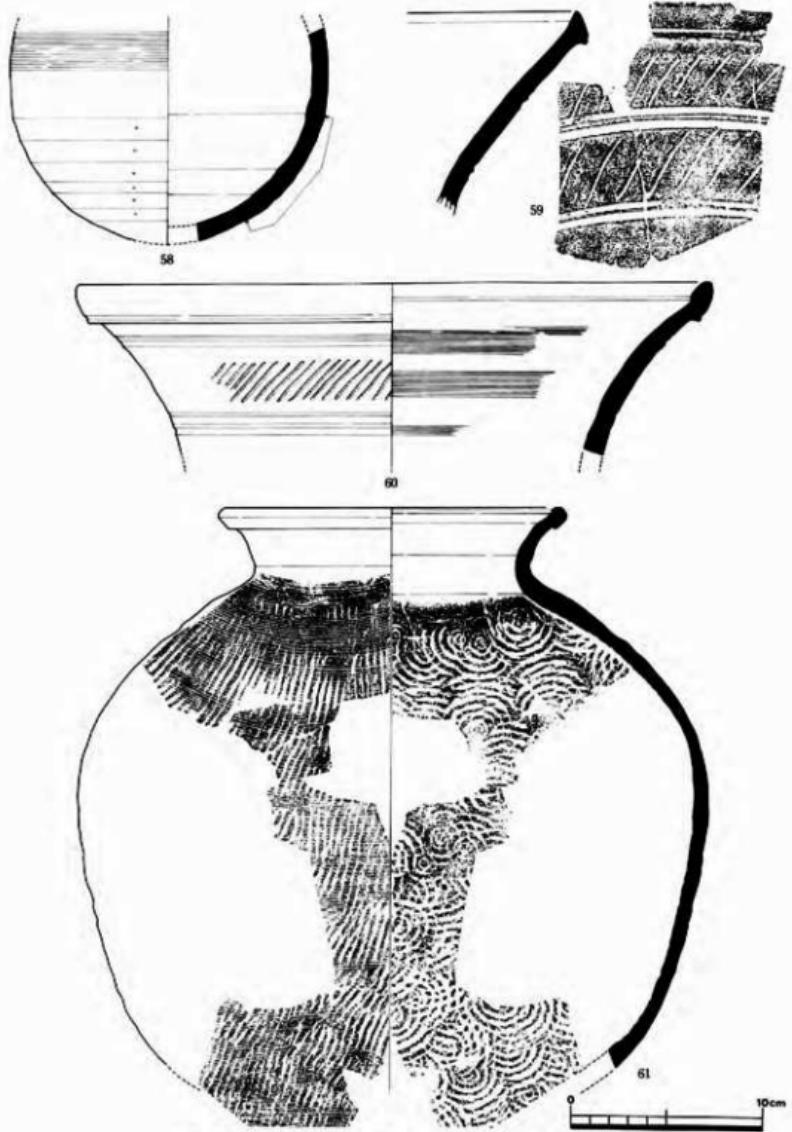
蓋はつまみをいずれも欠損しており、返りの形状と口径から 3 時期に分けられる。36 は返りの長く口縁より突出するもので、古い形態をもつ。戸津六字ヶ丘 2 号窯段階、田嶋編年 I : 期、飛鳥 I 期併行に位置付けられる。37 ~ 38 は口径 9cm 前後の最も小型の一群で、作りは比較的丁寧、天井部全面にヘラ削りをもつ。田嶋編年 I : 期、飛鳥 II 期併行と思われる。39 ~ 40 は返りが小さくなるもので、作りは雑となり、天井部ヘラ削りは外周のみ施される。田嶋編年 II : 期、飛鳥 III 期併行のものと思われる。

身は底部の丸い焼器形のものも含め、蓋と同様 3 時期のものが存在する。41 は底部にヘラ削りをもつもので、田嶋編年 I 1 期に、42 ~ 43 は小型法量から田嶋編年 I 2 期に、44 は田嶋編年 II 1 期に位置付けられる。また、46 の高台が付く坏 B 器種が 1 個体のみ確認できる。

高坏は 48 ~ 51 のスカシをもつタイプと 52 ~ 53 の小型タイプとに分けられる。前者は坏部下端に稜をもつもので、脚部は長脚で 2 段スカシをもつ。スカシには 2 方スカシと 3 方スカシがあり、後者はやや古手の器形をしている。小型タイプの高坏は、坏部下端に沈線の巡るもので、脚部はスカシをもたない短脚のものである。前者の長脚タイプは分校 3 号窯～戸津六字ヶ丘 2 号窯段階（田嶋編年 I : 期）に、後者の小型タイプは田嶋編年 I 2 ~ II 1 期頃に位置付けられる。出土量の比率は前者が 14 点に対し、後者は図示した 2 点のみで、古い時期のものが主体的である。また、



第19図 古墳時代中期～後期の須恵器（2）(S=36)



第20図 古墳時代中期～後期の須恵器（3）（S=1/2）

第21図 古墳時代中期～後期の須恵器（4）（S=14）

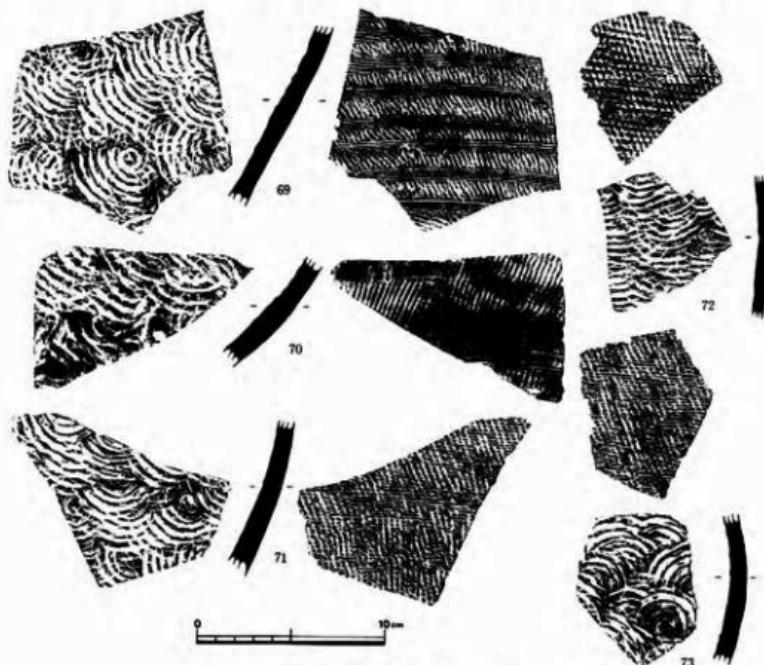


47は6世紀中頃の無蓋高壺の壺部破片である。

龜は口頸部と胴部破片のみで、口頸部は有段後内湾する器形を呈す。胴部は小型球形、沈線と櫛齒列点文をもつ。いずれも田嶋編年Ⅰ期頃に位置付けられるものと予想する。

壺・瓶類は58の1点のみで、胴部下半へラ削り、胴部上半カキ目調整を施す。長頸壺か？

壺は口径30cm以上を測る大壺と口径15～25cm程度を測る中壺に分けられる。大壺(59・60)は口縁端部の上下に突出(肥厚)するもので、口頸部高は10cm以上と長い。口頸部文様は沈線で区画された中に櫛齒状列点文やヘラ描き斜線文を施すものと、櫛描き波状文を施すものがある。中壺(61～63)は口頸部文様をもたないもので、口頸部高は5cm以内と短い。口縁端部形状には大壺と同様の上下突出の装飾をもつもの(61・62)と2～3条の沈線を巡らし口縁端部平坦なもの(63)の2種類あり、前者は6世紀代からの流れを汲む器形、後者は当該時期より出現し、7・8世紀へと継続して行く器形である。この時期の壺は概して胴部張り出しが大きく、底部叩きだしは長く延ばさず、比較的丸くなる。胴部叩き・当て具文様については、外面で平行線文木目直交のH_a類叩き、平行線文木目左下がり斜交のH_b類、右下がり斜交のH_c類が確認でき、内面



第22図 古墳時代中期～後期の須恵器(5)(S-14)

では木目の見られない同心円文D a類年輪状木目をもつ同心円文D b類が確認できる。主体は外面H a類叩き、内面D a類當て具でこの組み合わせのものが全体の7割近くを占める。次いでH b類叩き・D a類當て具が2割強程度で、H c類叩きやD b類當て具は極少ない。胎土別での偏りは、H a類・

胎土	外面叩き+内面當て具				
	Ha + Da	Ha + Db	Hb + Da	Hc + Da	Hc + Db
C類	17(26%)	4(80%)	8(36%)	1(33%)	0(0%)
D類	26(41%)	0(0%)	10(45%)	2(67%)	2(100%)
E類	12(19%)	1(20%)	3(14%)	0(0%)	0(0%)
DE類	9(14%)	0(0%)	1(5%)	0(0%)	0(0%)
計	64(67%)	5(5%)	22(23%)	3(3%)	2(2%)

第5表 各胎土の雙側部叩き・當て具文様の構成(個体数)

D b類組み合わせの大半がC類胎土である点、H c類叩きはD類胎土に多い点が指摘でき、叩き・當て具文様の主的となるHa + Da a、H b + Da aは胎土占有率に比例しており、これと言った偏りは確認できない。また、外面については叩き後にカキ目調整を頻繁に施すが、全面に等間隔で施す細い単位の通常のタイプ(72・73)の他、6本程度の櫛歯?を1単位として1cm間隔で施

番号	器種	法量	胎土	番号	器種	法量	胎土	番号	器種	法量・叩当具	胎土
19	坏H蓋	口12.5、高4.3	C	36	坏G蓋	口12.6、返9.7	C	57	龜	-	E
20	"	口11.7	D	37	"	口8.4、返6.3	D	58	壺?	胴17.0	D
21	"	口12.6	E	38	"	口9.6、返7.8	E	59	大甕	-	C
22	"	口13.4、高4.2	E	39	"	口11.6、返9.5	D	60	"	口33.8	D
23	"	口10.6、高3.5	E	40	"	口11.3、返9.2	C	61	中甕	口18.5、頸14.6	C
24	"	口12.7	D	41	坏G身	-	C			胴33.6、高29.6	
25	坏H身	口10.8、高3.7 受13.7	E	42	"	-	C			外Ha + カキ目、内Da	
26	"	口11.2、高4.0 受13.2	C	44	"	底7.6	C	62	"	口25.2、頸19.2	D
27	"	口10.8、高4.4 受13.2	D	45	"	-	C			胴58.5、高31.2	
28	"	口12.0、受14.6	C	48	"	-	D	63	"	外Ha + カキ目、内Da	D
29	"	口11.4、受14.2	C	49	"	-	D			外Ha + カキ目、内Da	
30	"	口11.7、受13.8	E	50	"	-	D	66	"	外Ha + カキ目、内Db	C
31	"	口10.6、受13.2	C	51	"	-	C	67	"	外Ha + カキ目、内Da	DE
32	"	口10.0、受12.5	E	52	"	-	E	68	"	外Ha + カキ目、内Db	E
33	壺蓋?	口11.1、返8.5	D	53	"	脚7.4	D	69	"	外Hc + カキ目、内Da	D
34	坏H蓋	口9.8、高3.3	D	54	龜	胴11.0	D	70	"	外Ha + カキ目、内Da	E
35	坏H身	口8.9、高3.5 受11.0	D	55	"	胴10.0	D	71	"	外Hc + カキ目、内Db	D
				56	"	口15.4	D	72	"	外Hc + カキ目、内Da	C
								73	"	外Hc + カキ目、内Db	D

第6表 6世紀末~7世紀中頃の須恵器観察表

すもの(69)、2本単位のやや太いカキ目を5mm間隔で施すもの(67)、太めのカキ目で1本ごとの線間隔が5mm程度のもの(70)などが存在し、後者の太めの単位のカキ目はE類胎土にのみ確認できる。

以上、6世紀末～7世紀中頃の須恵器について述べてきたが、編年的には分校3号窯段階から存在し、田嶋編年Ⅰ期の古段階から田嶋編年Ⅱ期、飛鳥Ⅲ期併行まで存在する。最も出土量の多い時期は田嶋Ⅰ期で、7割近くを占め、Ⅱ期2割半、Ⅲ期については1割未満で存在する(出土量の半数を占める壺については詳しい時期比定ができないため、除外して、その量比を出している)。Ⅰ期に集中することは1号掘立柱建物跡の時期に符合しており、都合がいい。

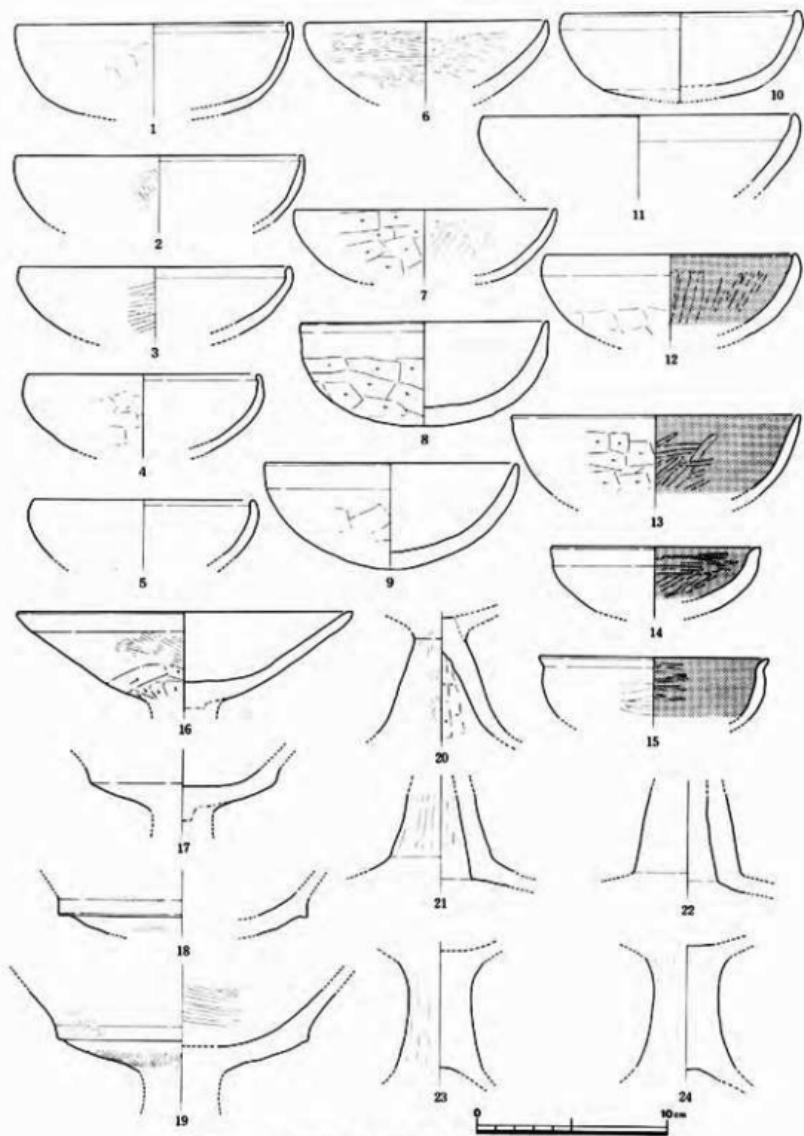
b. 土師器(第23～26図)

須恵器の様相から考えて、土師器についても5世紀後半を中心とする時期と7世紀初頭を中心とする時期に大別できると考えるが、時期比定の困難なものもあるため、一括して取り扱い、各器種の項目でそれぞれの時期を考えてみることにしたい。

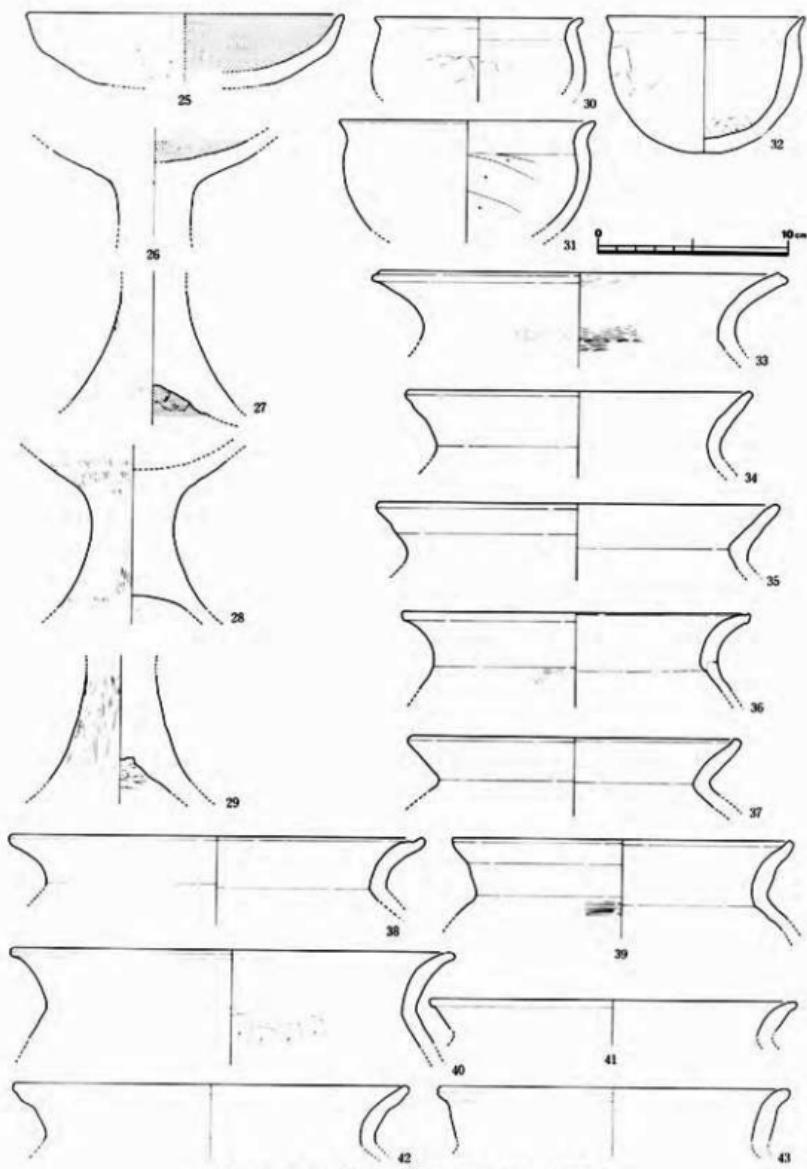
器種は塊、高坏、小型鉢、壺、甑、鍋がある。口縁部破片を中心とする個体識別の個体数は、塊58点、高坏42点、小型鉢3点、壺80点、甑11点、鍋1点で、総体的には壺の量が多いが、甑が定量存在し、塊・高坏も目立つ。

さて、各器種の内容を述べる前に、胎土について述べておきたい。基本的に塊・高坏の供膳具と小型鉢・壺・甑・鍋の貯蔵・煮炊具の胎土に分けられるが、高坏の中にも煮炊具と同様の胎土もあるため、胎土を意識的に分けることはややなくなっている。まず、供膳具であるが、0.3mm程度の砂粒を多く含み(雲母系の光る鉱物も含む)やや黄色味帯びた薄肌色又はくすんだ肌色を呈す砂質素地のa1類(この中で精製された胎土をa1'類とする)、a1類と同質の素地で0.5mm前後の砂粒を多量に含むa2類、ややa類に近い砂質の素地で砂粒を含み赤褐色に発色させた(a)1類、粘土質の素地(トロトロ)で赤色酸化粒を含み赤褐色(オレンジ色)に発色させた(b)1類(同質の素地をもつが肌色に発色したものをb1類とする)に分けられる。次に、貯蔵・煮炊具であるが、供膳具で見られたa2類が主体的に存在する以外では、ややb1類に近い粘土素地をもち薄肌色発色のものがあり、これは0.3～0.5mm程度の砂粒をやや少なめに含むb2類と多めに含むb3類に分けられる。以上の胎土は砂質の素地をもつa系統と粘土質素地をもつb系統とに分けられ、これは弥生時代後期～古墳時代前期のa・b胎土に該当するが、微妙に異なる感じもあり、同質としてのみ位置付けておきたい。以下に、各器種の説明と胎土を提示する。

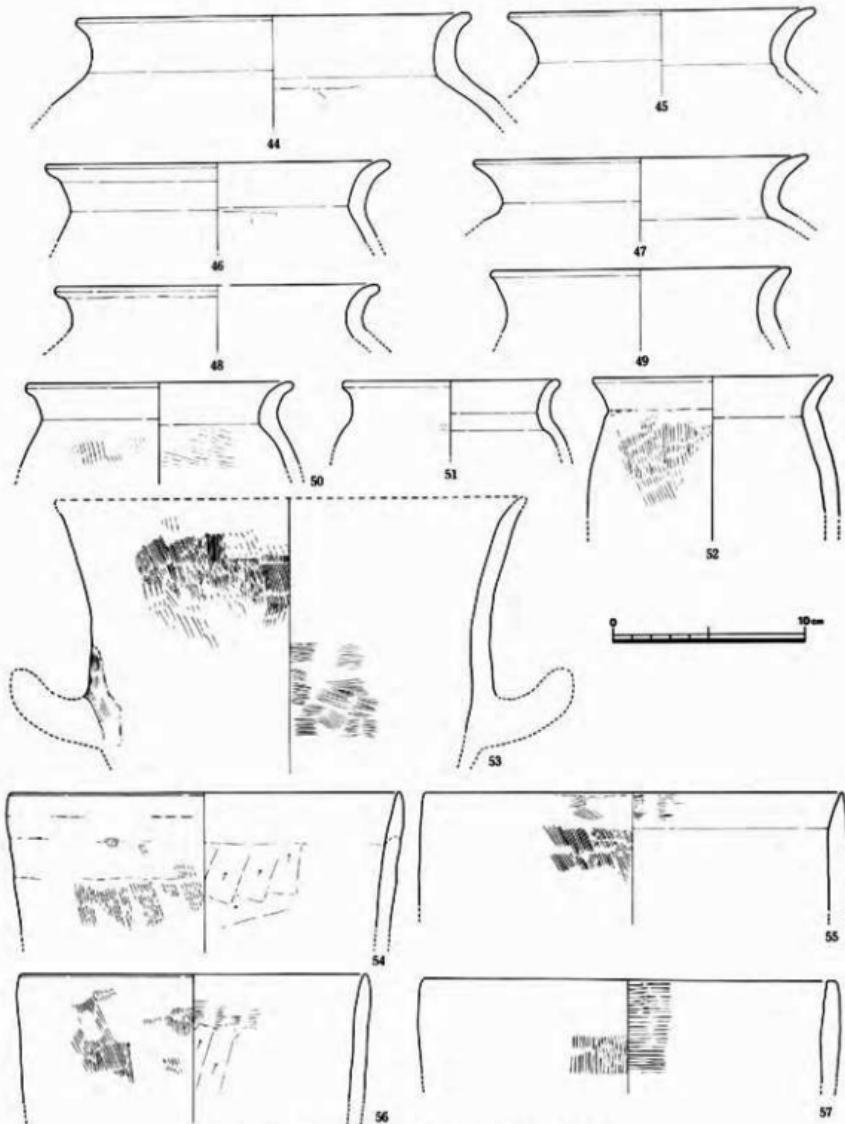
塊は器形と調整から、やや薄手で内湾器形、口縁端部の内巻状となる、内面横ナデ・外面ヘラ磨き又はヘラ削り調整のA類(1～5)とやや厚手で内湾器形、A類よりやや器高低め、内面ヘラ磨き・外面ヘラ削り又はヘラ磨き調整のB類(6・7)、B類より厚手深身の内湾で、内面横ナデ・外面ヘラ削り又は横ナデ調整のC類(8～11)、C類同様厚手・深身・内湾器形(口縁端部外屈のものはD'類)で、内面ヘラ磨き・外面ヘラ削り調整の内面黒色D類(12～14)、やや薄手の口縁部外反器形で、内外面ヘラ磨き調整の内面黒色E類(15)の5類に分類できる。以上の類



第23図 古墳時代中期～後期の土師器（1）(S=1/5)



第24図 古墳時代中期～後期の土師器（2）（S=1/2）



第25図 古墳時代中期～後期の土器（3）（S=36）

型は時期的に分けられるもので、A類は漆町13・14群土器（田嶋1986）頃に比定、5世紀後半頃を、E類もこれに近いものと予想する。B・C・D類はB類がやや古手の感じも受けるが、厚手の点ではC類と同様であり、一群として考えれば、6世紀末～7世紀初頭を前後する土器群に位置付けられる。つまり、A・E類とB・C・D類とで時期が異なる説で、これらの群は比較的胎土と符合する。まず、A類はオレンジ発色の(b)1類主体で、僅かに同系統色の(a)1類が存在。B類はa1'類のみ確認でき、量は少ない。C類はa1類のみで占められ、D類も同様a1類、E類はB類と同じa1'類である。つまり、古い時期の塊は(b)1類主体、新しい時期の塊はa1類主体で構成され、口縁部破片による個体識別ではA類19個体、B類5個体、C類9個体、D類14個体、E類1個体で存在し、5世紀後半ではA類主体、6世紀末～7世紀初頭前後ではD類5割、C類3割強、B類2割弱で構成される。

高坏は中空タイプの脚部（20～22）と中実タイプの脚部（23～29）に大別できる。

中空タイプの脚部は据部屈曲して広がるもので、外面は粗いヘラ磨きか刷毛調整を施す。これに伴う坏部はやや塊形を呈するA1類（16）と下端部の屈曲するA2類（17）、坏底部に突帯状の稜が巡るやや大型法量のB類（18・19）に分けられ、いずれも外面はやや粗い刷毛調整を施し、内面は粗い刷毛かナデ調整を施す。胎土は塊Aと同様の(b)1類と赤味の薄いb1類、塊C・D類と同様のa1類があり、形態に関係なく、(b)1類5割、b1類1割、a1類4割で存在する。個体識別の個体数ではA類6個体、B類4個体で、形態的にはA類が主体であるが、B類も目立つ傾向をもつ。時期的に比較的まとまっており、漆町13群土器併行項（田嶋1986）に位置付け可能である。

中実タイプの脚部は細長く柱状となって裾部で広がるC類（23・24）とやや太く基部付近から裾部へ徐々に広がるD類（26～29）に分けられる。C類は縦方向の粗いヘラ磨き又は削り調整を施し、D類は縦方向の刷毛調整を施す。坏部器形はC類が25のような浅い塊形のものが、D類はやや深身の塊形のものが付くものと思われ、C類ではヘラ削り、D類では刷毛調整を基本とするものと予想する。内面調整はヘラ磨きするものが多く、C・D類いずれも内面黒色のものが定量を占める。胎土はC・D類いずれも砂粒の多いa1類・a2類が主体で、後者が主体的である。中実タイプは5世紀に遡るものではなく、すべて6世紀末～7世紀初頭前後に位置付けられるものと予想する。脚部による個体識別の個数はC類5個体、D類9個体である。

小型鉢（30～32）は口径10～14cm程度を測るもので、半球形の丸底を呈し、口縁部は短く外反する。調整は外面がヘラ削りと刷毛調整、内面削り・ナデ調整で、a2類胎土をもつ。個体数は図示した3個体のみで、漆町13群土器併行（田嶋1986）に考えられる。

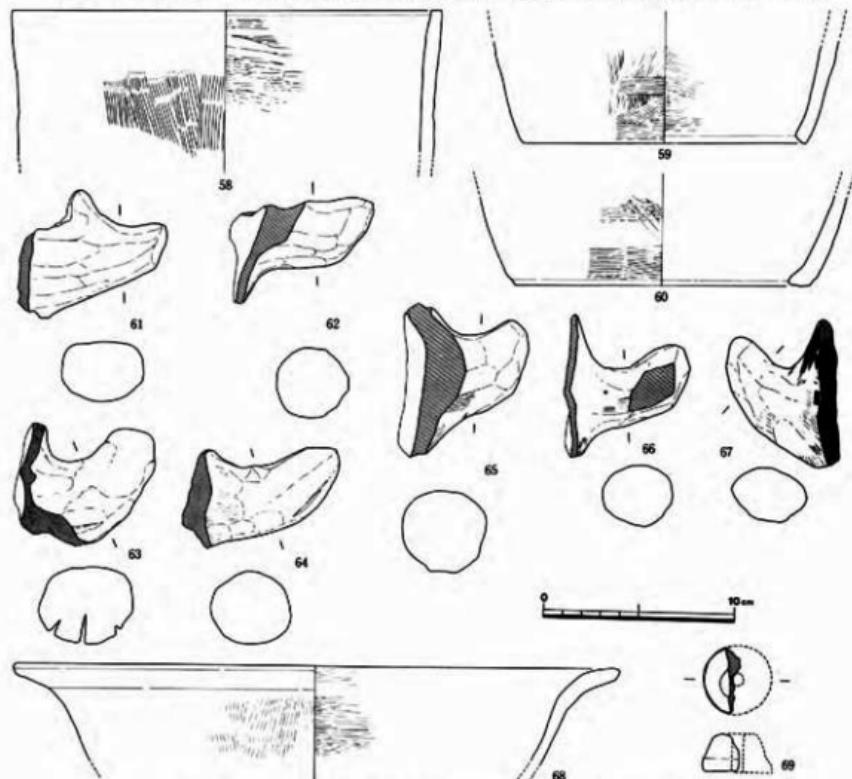
甕は頸部で特に肥厚せず、口縁部の長めに外反（外屈）するA類と頸部付近で肥厚する口縁部外反（反りが強い）するB類に分けられる。

A類はさらに口縁端部器形から、面取りするA1類（33～35）と端部の上につまみあげるA2類（36～39）、端部の外側に肥厚又は外屈するA3類（40～43）に分けられる。口縁部個体識別

個体数はA 1類が7個体、A 2類が10個体、A 3類が10個体でほぼ等しく存在し、胎土はa 2類主体、b 2・3類は2割程度で存在する。A 3類の一部は6世紀末～7世紀初頭の時期まで下るものもあるが、主体は他の時期と同様で、漆町13群土器併行前後に位置付けられるものと考える。

B類(44～52)は口径によって分けられるが、細分できる感じはない。口径の大きなものは比較的口縁部の長いものが多いが、概してこの器形には口縁部の短いものが多い。調整は外面刷毛を基本とし、比較的細かな刷毛目が多い。胎土はA類同様、a 2類が主体を占める。6世紀末～7世紀初頭を前後する時期に位置付けられるものと予想する。口縁部個体識別個体数では32個体を数える。

甑は口縁端部の丸いA類と上端に面をもつB類に分けられる。A類はほぼ口縁部の真っすぐ立ち上がるA 1類(54～56)と外反気味のA 2類(53)があり、外面縱方向の刷毛、内面ヘラ削り



第26図 古墳時代中期～後期の土器 (4) (S=35) (69は石製紡錘車)

を施すものが多い。胎土は a 2 類主体である。B 類 (57・58) は外面縦方向の刷毛、内面横方向の刷毛調整と磨き調整を施すもので、胎土は b 2 類のみ確認できる。口縁部破片数では A 類が 8 個体に対し、B 類は図示した 2 個体のみで、A 類主体であるが、破片数が少なく、詳細は不明である。瓶の時期比定は難しいが、B 類の口縁部面もち器形は比較的 5 世紀後半で確認できるもので、刷毛の粗さからも当該期に位置付け可能と思われる。主体となる A 類は大半が瓶の増加する 6 世紀後半以降と思われる。さて、口縁部破片の他に底部破片と把手破片が出土している。把手破片は個体識別個数で 40 個体確認でき、かなりの量をもつが、この内の 3 割近くは 6 世紀後半以降目立つ把手付き甕と予想される。

鍋は口縁部大きく外反するもので、口縁端部丸く仕上げる。調整は外面で縦方向、内面で横方向の刷毛を施し、作りはやや雑である。胎土は b 3 類で、1 個体のみ出土している。7 世紀中頃以降のものであろう。

以上が土師器であるが、須恵器同様 5 世紀後半代（漆町 13・14 群併行）のものと 6 世紀末～7 世紀初頭頃のものとに分けられ、胎土では古い時期に粘土質の b 類が目立つ傾向が見られた。

番号	器種	法量	胎土	番号	器種	法量	胎土	番号	器種	法量	胎土
1	塊 A	口 14.6	(b) 1	24	高坏 C	—	a 2	47	甕 B	口 17.5	a 2
2	"	口 15.2	"	25	"	口 16.6	a 1	48	"	口 17.4	"
3	"	口 14.4	"	26	高坏 D	—	a 2	49	"	口 15.8	"
4	"	口 11.4	"	27	"	—	"	50	"	口 14.4	b 3
5	"	口 11.8	"	28	"	—	"	51	"	口 11.6	a 2
6	塊 B	口 12.7	a 1	29	"	—	"	52	"	口 12.6	"
7	"	口 13.8	"	30	小型鉢	口 11.0	a 1	53	甕 A	—	b 3
8	塊 C	口 13.1, 高 5.6	a 1	31	"	口 13.4	"	54	"	口 20.8	a 2
9	"	口 13.4, 高 5.7	"	32	"	口 10.4, 高 7.2	"	55	"	口 22.0	"
10	"	口 12.4	"	33	甕 A 1	口 22.0	b 2	56	"	口 20.5	"
11	"	口 16.3	"	34	"	口 18.4	b 3	57	甕 B	口 21.6	b 2
12	塊 D	口 13.0	"	35	"	口 21.4	a 2	58	"	口 23.0	"
13	"	口 15.0	"	36	甕 A 2	口 18.4	"	59	甕	底 14.8	b 3
14	塊 D'	口 10.9	"	37	"	口 17.6	"	60	"	底 15.4	a 2
15	塊 E	口 11.9	a 1	38	"	口 22.0	"	61	甕把手	—	"
16	高坏 A 1	口 18.0	(b) 1	39	"	口 18.0	"	62	"	—	"
17	高坏 A 2	—	a 1	40	甕 A 3	口 23.5	"	63	"	—	b 3
18	高坏 B	—	"	41	"	口 19.4	"	64	"?	—	a 2
19	"	—	(b) 1	42	"	口 21.0	"	65	"?	—	"
20	高坏 AB	—	a 1	43	"	口 18.6	"	66	甕把手	—	"
21	"	—	"	44	甕 B	口 21.0	"	67	"	—	b 3
22	"	—	(b) 1	45	"	口 16.2	"	68	鍋	口 32.3	"
23	高坏 C	—	a 2	46	"	口 18.4	b 3				

第 7 表 古墳時代中期～末期の土師器観察表

特に、塙・高坏の(b)1類はオレンジ発色の一群で、新しい時期には見られず、新しい時期ではa1類主体となり、高坏にはa2類の砂を多量に含む土が使用される。これは時期により胎土を確実に変える事例として興味深い。煮炊具では供膳具のような胎土の違いはなく、いずれの時期もa2類主体で、b類胎土は従来にしか存在しない。

c. その他の遺物（第26図）

石製紡錘車（69）が1点出土している。上面径1.8cm、下面径3.6cm、高さ2.0cm、孔径0.7cmを測るもので、器形は側面に稜をもつ台形状を呈する。線刻はなく、材質は流紋岩である。

4. 小結

以上、古墳時代中期～末期の遺物について述べてきたが、最後に各時期の須恵器・土師器の器種構成を提示し、この節の結びとしたい。

まず、数量把握であるが、口縁部破片の数を基本とし、各器種の特徴となる部位を参考として個体識別を行った。須恵器については比較的数量把握が容易であったが、土師器については時期の確認が困難なものが多く、確認できた各類型の割合を個体識別数に換算し、数値を割り出した。また、須恵器の壺については本文で胴部破片による原体同定個体数を提示したが、土師器煮炊具類と対比した場合、土師器煮炊具の口縁部破片のみの識別個体数と大きな隔たりが生じ、量比としては歪んだ数値となるため、下表では壺の口縁部及び頸部破片数を基本として個体数を割り出した。

まず、TK 23～47型式併行期についてだが、供膳具の中での須恵器の率は4割程度と決して少なくなく、在地窯の出現以前に定量の搬入須恵器が使用されていたことを物語る。ただ、この搬入須恵器は供膳具を中心としたものであり、壺に関しては著しく低く、煮炊具・貯蔵具も含めた須恵器・土師器の量比は須恵器3割未満となる。当該時期の須恵器量の増加は在地窯の成立に起因するものと理解されているが（田嶋1989）、当遺跡では在地産須恵器を含んでおらず、須恵器量の増加は必ずしも在地産須恵器が加わることによってのみ起きた現象ではなく、一般集落において須恵器が使われ始める時期であったと理解したい。

次に、田嶋I:～II:期についてだが、供膳具の須恵器比率は6割近くとなり、確実に土師器を逆転するが、塙も定量存続し、土師器供膳具が急激に出土量を減少させることはない。供膳具の土師器から須恵器への置換現象は在地窯の出現とともに急激に進行したと予想され、当該時期には「食器の須恵器化」がかなり進んでいたものと理解されているが（田嶋1989）、遺跡の内容によてもかなり差異があったものと予想され、波状的に行われたものと予想する。

さて、在地窯出現以降に確実に激増したのは壺などの須恵器大型器種である。当遺跡では須恵器貯蔵具が5世紀後半の4.1%から7世紀前半後ろの13.3%に3倍増となり、特に大型壺の存在などから、壺破片数としては20倍にも跳ね上がっている。在地窯出現以前は、基本的に小型製品を主体とした流通になることは当然であり、大型器種の増加は在地窯の出現を待たなければならなかったわけで、この点が器種構成の中で大きな画期となったものと予想する。貯蔵具=須恵器

の図式は在地窯の出現と同時に成立したものと予想する。

以上、思いつくままに記したが、須恵器供膳具の集落内導入は5世紀後半には始まり、在地窯の出現によって進行したことは間違いない。古墳時代での集落内での須恵器供膳具の使われ方にについては、食器としての性格をどれほどもっていたかは分からぬが、7世紀中頃に急激に小型化する壺Gを見ると、これを日常食器に使うことは無理があり、集落内での祭祀的要素を多分に含んだ儀礼的行為に関わる容器であった可能性を指摘したい。ただ、この須恵器供膳具も7世紀後半には多分に食器としての要素を有していたものと思われ、日常食器として的一面と儀礼用具として的一面を有していたものと考える。この問題解明には木立雅朗氏の指摘する使用痕観察(木立 1988)が大いに役立つが、今後の研究課題としておきたい。

時 期	須恵器供膳具			土師器供膳具供膳具の			須恵器貯蔵具			土師器煮炊具			須恵器と 土師器の率	
	壺H	壺G	高壺	壺	高壺	須恵器率	甕	壺	甕	小型鉢	甕	瓶		
TK23～47型式	21	0	6	24	17	27/41	4	0	2	3	37	2	0	33/83
(%)	18.1	0.0	5.2	20.7	14.7	39.7	3.4	0.0	1.7	2.6	31.9	1.7	0.0	28.4
田嶋I : ~ II : 期	46	17	17	34	25	80/59	9	1	20	3	43	9	1	110/115
(%)	20.5	7.6	7.6	15.1	11.1	57.5	4.0	0.4	8.9	1.3	19.1	4.0	0.4	48.9

第8表 TK 23～47型式・田嶋 I : ~ II : 期の須恵器・土師器種構成表

引用・参考文献

- 木立雅朗 1988 「須恵器の使用痕について」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題(報告編)』石川考古学研究会・北陸古代土器研究会
- 田嶋明人 1986 「土師器よりみた古墳時代土器群の変遷」『漆町遺跡Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター
- 田嶋明人 1988 「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題(報告編)』石川考古学研究会・北陸古代土器研究会
- 田嶋明人 1989 「加賀・能登の古代土器生産」『北陸の古代手工業生産』北陸古代手工業生産史研究会
- 望月精司 1990 「南加賀古窯跡群成立期の様相」『二ヶ梨東山古窯跡・矢田野向山古窯跡』小松市教育委員会
- 望月精司 1993 「須恵器・土師器の产地と供給体制について」『越前遺跡Ⅱ』小松市教育委員会

第4節 奈良時代後期～平安時代前期の遺構と遺物

第1項 遺構

当該時期の遺構は、調査区域を斜めに横切る1号溝のみで、建物跡は検出されていない。1号溝以外で、当該時期の遺物を出土する遺構としては4号溝があるが、この遺構は平安時代中期から末期にかけて営まれた遺構であり、最下底付近の土層から混入品として出土している。当該時期の遺物出土量は概して多い。

1. 1号溝（第27図）

発掘調査区域の北東隅から南西方向に伸びる大型の溝で、北東側でやや東側に、南西側でやや南側に主軸を振るが、ほぼ真っすぐに走る溝である。幅は平均して3m程度で、部分的に3.5mを測る。深さは確認面から50～58cmで、南西側にやや深くなっているが、溝底での標高レベルを見ると、北東端断面A-A' と南西側断面H-H' ともH=2.500m程度で、南西側に下がっている感じはない。規模や深さから近隣の小河川から引いた水路的なものであったと思われるが、集落を区画する溝としての機能も考えられる。

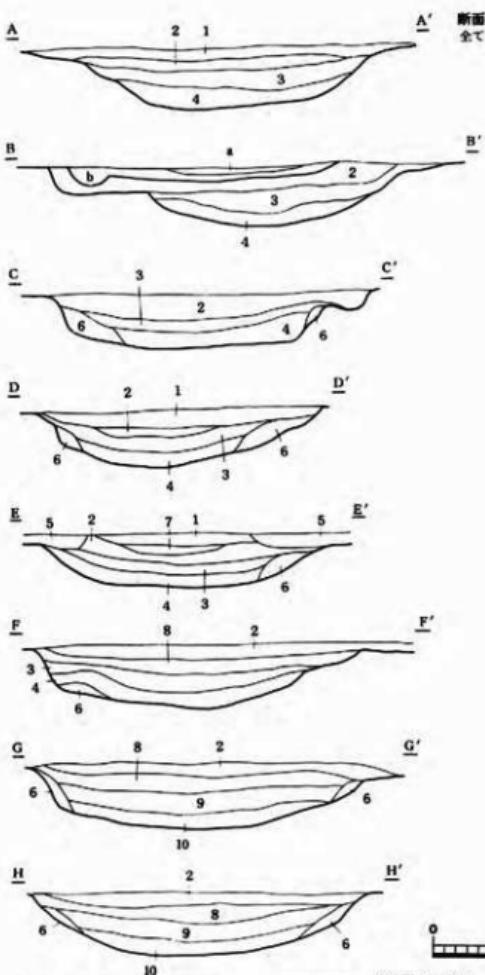
覆土は上層が暗灰褐色系の弱砂質土、中層が暗灰褐色系の砂を含まない土、下層（下底）が黒灰褐色系の粘質土で、下層は泥土の感じが強く、木片等が混在している。溝下底の地山は北東側で黄白色の粘土、南西側で白色砂層となっており、南西側での湧水が著しい。

当該時期（8世紀後葉～9世紀中葉）の出土遺物は下底層（4・10層）から出土し、その量は比較的多い。この層は粘質泥土で、通常低湿地の溝などに見られる下層の土である。井戸などの覆土と酷似するため、意識的に埋めた土である可能性をもつが、覆土堆積の状況からそれを予想させるものはない。遺物は大半が須恵器で、食膳具を中心としてA・B区とH・I区より集中して出土し、墨書き器を含めて完形品に近いものが多い。遺物出土の仕方は、溝下底面直が多く、下に間層を挟むようなものはない。また、溝の北西側壁際から投げ込まれたような須恵器甕の一括品も数個体出土している（6層）。次に、中下層・中層であるが、遺物出土量は少なく、時期の異なる混在品が多いようである。新しいものでは9世紀後葉～10世紀前半のものも存在する。下底層以外で、遺物を多く出土する層は上層で、9世紀後葉から10世紀代の遺物が比較的まとまって出土している。中層・中下層と時期的に類似しており、同時期の覆土と予想される。基本的に黒色系粘質泥土の下底層と暗褐色系砂質土の中～上層とに分けられ、下底層は8世紀後葉～9世紀中葉に、中層～上層は9世紀後葉～11世紀に位置付けられ、その時期に埋没した土層と推察する。なお、下底の遺物出土状況については別項で詳述する。

第2項 遺物

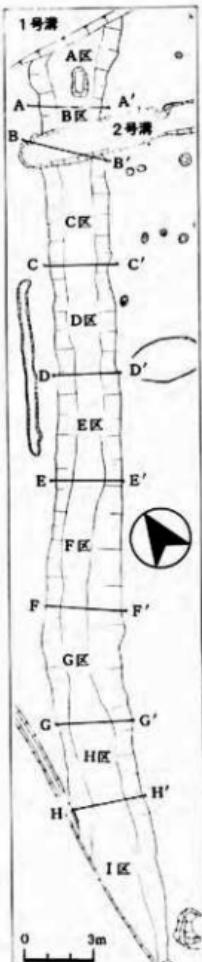
1. 1号溝下底出土遺物（第28～40図）

1号溝下底出土の遺物は、出土状況がまとまりをもっているわりには、出土量が少なめで、遺



逐層覆土土層注

1層 (暗)灰褐色(砂質)土:褐色吹出多、土器多。	7層 黑(灰)褐色土:褐色吹出多、炭化粒多、黃白粒少。
2層 灰褐色(砂質)土:褐色吹出多、炭化粒少。	8層 暗灰褐色土:褐色吹出多、炭化粒少。
3層 單灰褐色砂質土:褐色吹出多、炭化粒少。	9層 暗灰(褐)色(砂質)土:褐色吹出少、炭化粒少。
4層 黑(褐)色粘質土:褐色吹出少、炭化粒少、土器・木片多。	10層 黑灰(褐)色(砂質)土:褐色吹出少、炭化粒少、土器・木片極多。
5層 (青)灰褐色(砂質)土:褐色吹出少、攪亂土。	(2号機覆土)
6層 黑灰褐色土:黃白色砂土塊・粒多、炭化粒少、褐色吹出多。	a層 (暗)灰褐色土:褐色吹出多、黃白色粘土粒・塊多。
	b層 暗灰褐色土:褐色吹出多、黃白色粘土粒・塊多。



第27図 1号溝平面図と土層断面図 ($S = 1/50$)

物箱で12箱程度である。遺物の大半は須恵器で9箱を数え、次いで土師器の2箱、その他に、土錐等土製品・金属器・鍛冶関連遺物が1箱である。また、木製品としては漆器が1点出土しており、用途不明だが、加工木製品が数点出土している。下底層より多く出土する木質遺物は大半が加工していない自然木である。以下に、須恵器・土師器・その他の遺物の順で述べることとする。

a. 須恵器

当遺構下底より出土する須恵器は、いずれも南加賀古窯跡群か能美窯跡群かの在地産で、南加賀地方以外の窯跡群から搬入された須恵器は確認されない。つまり、地元の基幹的窯跡群から全て貿われていたものであり、郡域程度を供給範囲とした中城流通品と評価されるものである。さて、在地産須恵器は基本的に白色の細かな砂粒を多量に含む、素地の粗いC類と砂粒が少なく、白色大粒粒子を含み素地の緻密な粘土質のE類とに分けられ（この分類は6世紀末～7世紀中頃須恵器胎土分類に準ずる）、C類は南加賀古窯跡群産（南加賀古窯跡群でも戸津窯跡群や箱宮窯跡群のような砂粒の多く含む地区の胎土）、E類は能美窯跡群産と判断できる。以上の胎土識別による器種ごとの量比を示したのが第9表であるが、C類かE類に属するものとは思われるが、識別の困難なものはC E類として示した。また、数値は個体識別による個体数であり、甕は口縁部と胸部叩き、当て具原体同定による識別個体数を併記した。胎土の主体を占めるものはC類の南加賀古窯跡群産で、全体の7割近くを占め、食膳具ではいずれの器種でも過半数を占める。甕についても7割以上の高い率をもち、長頸瓶・横瓶などの壺・瓶類のみE類に占有率を逆転している。E類は長頸瓶で6割以上、横瓶で10割と、壺・瓶類のみ高い率をもつが、全体では3割強程度であり、従的な存在となっている。

器種は第9表で上げた通り、壺B・壺A・皿A・皿B・高壺の食膳具、寸リ鉢等の調理具、長甕の煮炊具、長頸瓶・双耳瓶・横瓶・短頸壺・平底壺・その他壺類・甕の貯蔵具が確認でき、その量比率は食膳具主体の構成を示す。まず、食膳具比率であるが（甕については口縁部破片数による個体数換算）、食膳具が162に対し、貯蔵具は44で、食膳具が78%を占める。この量比は当該時期の須恵器窯跡の食膳具構成比率と比較すると（南加賀古窯跡群の8世紀後半～9世紀後半の資料では食膳具率9割以上を占める）、食膳具の圧倒的多数を示す数値とは言えず、貯蔵具器種が目立つ傾向をもつ。窯跡データが小型器種に高く数値の出る口縁部計測法による数値である

胎土											短頸壺	平底壺	其他壺類	甕			胎土計(%)
	壺B	壺A	皿A	皿B	高壺	寸リ鉢	長甕	長頸瓶	双耳瓶	横瓶				蓋	口縁	胸	
C類	37	13	44	17	5	8	0	1	6	2	0	1	3	2	7	41	187 (64.5)
E類	16	11	16	9	0	5	1	0	10	0	6	0	0	4	3	9	90 (31.0)
CE類	1	2	2	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	13 (4.5)
器種計	54	62	26	5	15	1	1	16	2	6	1	3	6	10			胎土計 290
(%)	(26.0)	(29.8)	(12.5)	(2.4)	(7.2)	(0.5)	(0.5)	(7.7)	(0.9)	(2.9)	(0.5)	(1.4)	(2.9)	(4.8)			器種計 208

第9表 須恵器器種構成・胎土構成表（数値は個体識別個体数）

ことを注意しなければならないが（宇野 1982），実際に、長頸瓶や甕が目立つ傾向はあり、須恵器貯蔵具の定量消費を一つの特徴として上げておきたい。

さて、食膳具の中での構成率についてだが、最も多いのは壺Aで、4割弱を占め、同じ無蓋器種である皿A（1割半）も含め、5割強を占めている。同じ無蓋器種の中で比較的少いのは皿Bで、3%しか占有率をもたず、当該時期としては少ない量比と言える。有蓋器種は壺Bのみで、3割強程度を占める。3法量存在し、大法量に主体をもつ。食膳具の中で比較的目立つ器種としては高壺があげられ、1割程度の占有率は当該時期としては高いものと言える。

次に、貯蔵具であるが、長頸瓶と甕で大半を占める。長頸瓶は口縁部破片は少ないものの、胸部～底部破片が多く、目立つ器種である。甕についても口縁部から底部まで復元可能な個体1個を初めとして、大型の胸部破片が多く、復元実測可能なものが多い。

以下に、各器種ごとに説明を加える。

壺Bは蓋と身に分けられる。底部・天井の切り離し痕は全て回転ヘラ切りによるもので、ヘラ削りによる再調整が見られるものはその範囲と方向を図示してある。

壺B蓋は口径により16～19cm前後のI類、13～15cm前後のII類、11～12cm前後のIII類に分けられる。量比はI類20個体、II類8個体、III類8個体で、主体をI類が占め、II・III類が似たような占有率をもつ。器形はI類（1～6・11）が天井部平坦、口縁部や外屈するものを基本とし、これには通常ヘラ削りが伴う。これに対し、天井部の丸いものはヘラ削り省略の傾向をもち、11は新しい器形のものである。II類（7～10）は基本的にI類と同様の器形であるが、8は天井部に沈線を施し、作りも丁寧で、金属器模倣のタイプと推察する。III類（12～14）は基本的に口縁端部に折り返しをもたないもので、天井部はやや平坦、ヘラ削りを施すものは少ない。蓋には壺身との重ね焼きの痕跡を残すものが多く、重ね焼き方法から蓋と身を正位の状態で重ねるI類と身に逆位状態の蓋を乗せたものを重ねるII類（II類には蓋身+蓋身+蓋身…のIIa類と蓋身+身蓋+蓋身…のIIb類がある）とに分けられる（北野 1988）。この分類で述べると、I類法量は重ね焼きがI類2、IIa類1、IIb類6で、II類法量は重ね焼きI類7、IIa類1、III類法量は重ね焼きIIa類4、IIb類3であり、I類重ね焼きがII類法量に目立つ傾向はあるが、これはこの法量に古手のものが多いということに起因するもので、主体はII類重ね焼きということになる。II類重ね焼きではIIa類・IIb類ともに定量存在し、南加賀古窯跡群と能美窯跡群の産地別では、南加賀古窯跡群でIIb類主体、IIa類少量で存在し（当該時期の南加賀古窯跡群ではIIa類主体の戸津窯跡群とIIb類主体の箱宮窯跡が存在し、窯場によって壺B重ね焼きの方法が異なる傾向が見られる）、能美窯跡群ではIIa類のみ確認される。

壺B身も蓋と同様、口径により15～18cmのI類、12～14cmのII類、10～11cm程度のIII類に分けられる。量比は、I類16個体、II類7個体、III類2個体で、蓋に比べややII類が目立つ傾向はあるが、I類主体であることには変わりはない。器形は、I類が径高指數38以下の15・16・22・23と38以上の17～21に分けられ、前者は口径17cm以上の法量をもつ。後者は口径15～16cmとやや

小型で、前者に比べてやや薄手、後出の様相をもつ。胎土は前者がほぼC類のみで、後者はE類が主体である。また、この法量には体部沈線を巡らす金属器模倣の24も出土しており、これは胎土が精製されている。II類は径高指数30~32前後のもので、口径から13~14cm程度の大型のものと12cm台の小型のものとに分けられる。法量の小型化からすれば、後者が後出の様相であり、I類と対応している。また、II類には体部外傾の特異器形を呈する31があり、蓋なし器種と思われ、同様の器形・胎土のものが南加賀古窯跡群箱宮5号窯跡で出土している。III類は極少なく、底部破片のみの出土で、詳細は不明。

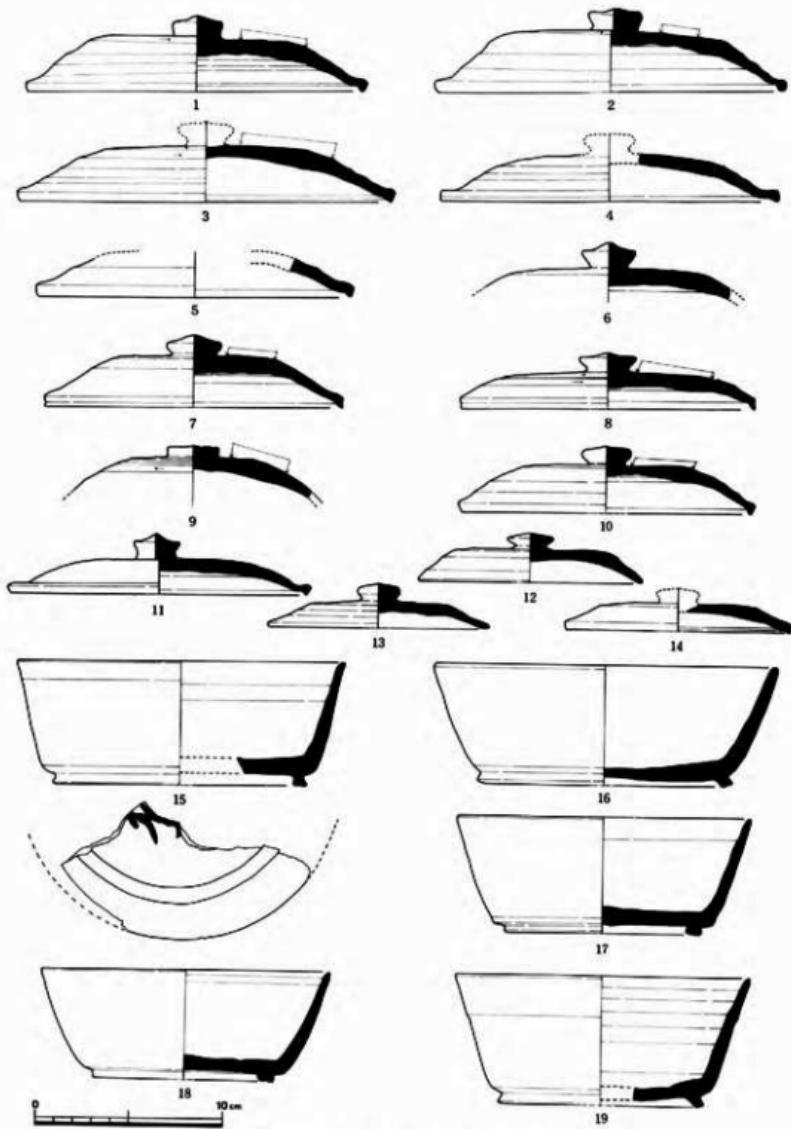
さて、坏Bには墨書したものが少なく、15のみ底面に判読不可能の文字が記されている。蓋には墨書したものではなく、ただ蓋の内面に比較的広い範囲で墨痕を認めるものが3点確認され(4・8・12)、これは転用碗として使用されたものと予想する。

番号	器種	法量	胎土	重焼	番号	器種	法量	重焼	胎土	番号	器種	法量	胎土
1	坏B蓋	口17.8,高4.0	C	II b	12	坏B蓋	口11.7,高2.6	II a	C E	23	坏B身	台11.6	C
2	"	口18.0,高4.4	E	II a	13	"	口11.6,高2.4	"	C	24	"	口17.2	E
3	"	口19.7	C	II b	14	"	口11.6	"	"	25	"	口14.2,高4.3,台10.0	"
4	"	口17.6	C	"	15	坏B身	口17.4,高6.6,台13.6	"	"	26	"	口12.2,高3.5,台8.8	"
5	"	口16.6	E	"	16	"	口17.9,高6.3,台13.0	"	"	27	"	口13.7,高4.3,台9.2	"
6	"	-	C	-	17	"	口15.3,高6.2,台10.4	"	"	28	"	口13.4,高4.2,台9.9	C
7	"	口15.8,高3.9	"	I	18	"	口15.4,高5.9,台9.6	E	"	29	"	口12.1,高4.0,台9.6	"
8	"	口15.4,高3.0	"	"	19	"	口15.4,高6.8,台10.8	C	"	30	"	台7.0	"
9	"	-	"	-	20	"	口14.9	"	"	31	"	口15.2,高3.8,台9.9	"
10	"	口15.1,高3.5	"	I	21	"	口15.2,高6.3,台9.0	E					
11	"	口15.8,高3.2	"	II b	22	"	台12.0	C					

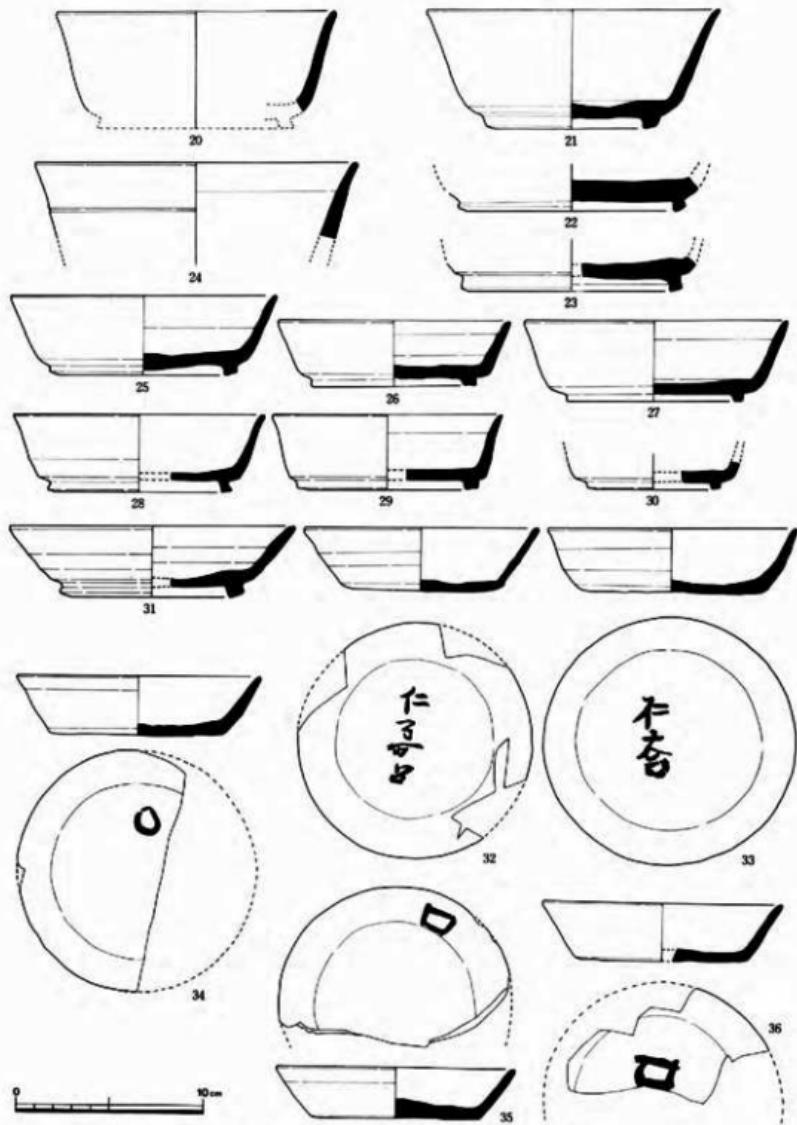
第10表 1号窯下底出土須恵器坏B観察表

坏Aは口径11~14cmを測るもので、器形から、体部立ち上がり丸味をもって立ち上がるA類と底部から体部外傾して立ち上がるB類に大別できる。A類は口径13cm以上、径高指数26前後の低平なA1類(33・39・41~43)と口径12cm台に縮小、径高指数も29前後となるA2類(38~40・44~46)に分けられ、後者は後出的。B類は径高指数23~24前後のB1類(34~37・48)と28~29前後のB2類(32・50~53・55・56)に分けられ、後者は後出的、底部厚手のやや小型法量の57・58も存在する。いずれも底部回転ヘラ切りによるものである。産地による器形の違いはE類胎土がやや薄手で、作りがシャープな感をもち、C類胎土は厚手の感じが強い。坏Aには墨書するものが多く、外底面と内底面、内体部に見られる。基本的に3種類で、「仁口万呂」・「仁口呂」の人名を記したものと「口」を記したもの、「十」を記したものとに分けられ、人名と思われるものは外底面でE類胎土に、「口」「十」はC類胎土に記されている。

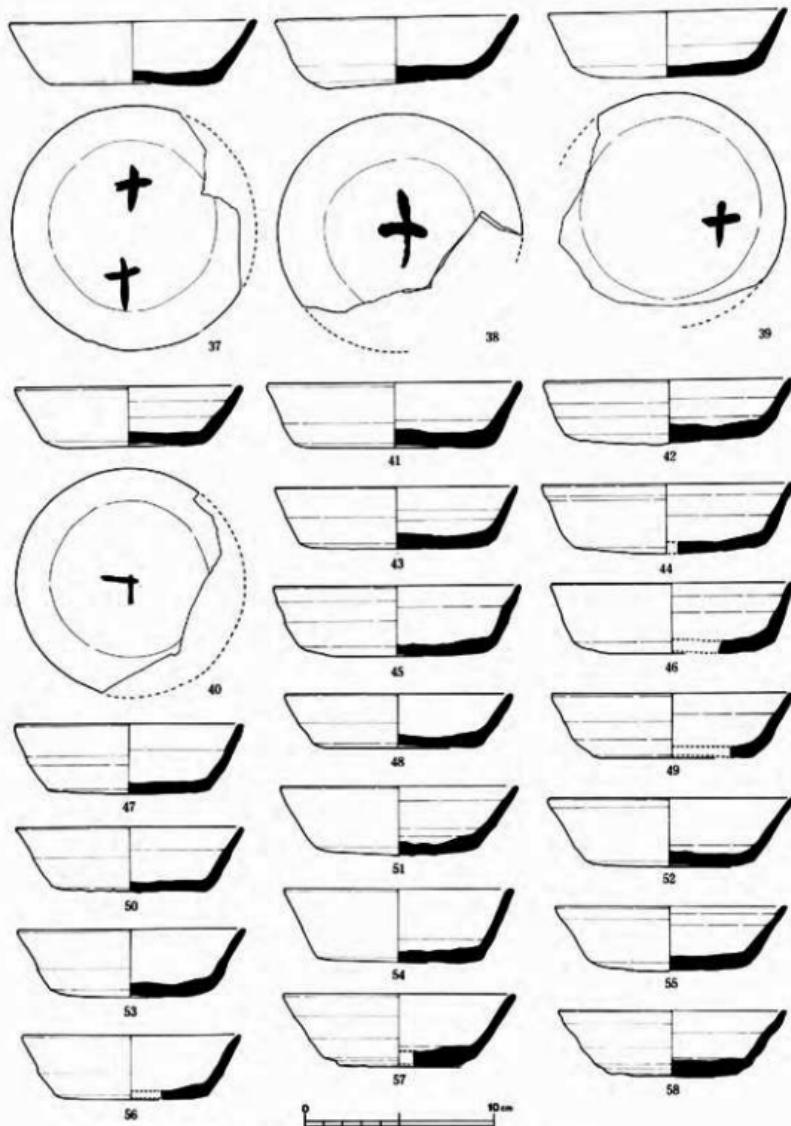
皿A(無台盤)は口径15~18cmを測るもので、いずれも底面回転ヘラ切りによるもので、切り離し後の調整は認められない。器形により、体部立ち上がりの短く直立気味となるA類(64・66・67)、2cm程度体部外傾のB類(68~71)、2.5cm程度長めに体部外傾するC類(59~63・65・72~74)に分けられる。胎土による器形の違いはE類胎土が薄手、底部・体部境のはっきりしている



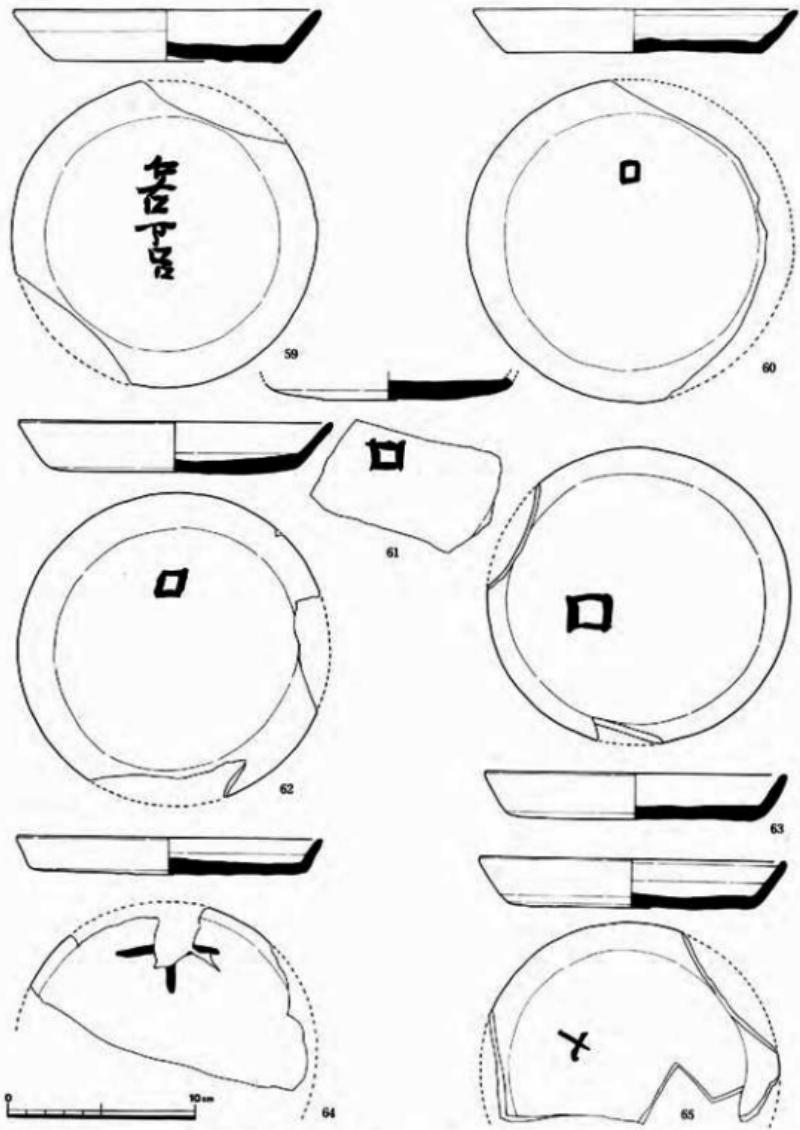
第28図 1号溝下底出土須恵器 (1) ($S = \frac{1}{4}$)



第29図 1号溝下底出土須恵器(2) ($S = \frac{1}{2}$)



第30図 1号溝下底出土須恵器(3) (S=1/4)



第31図 1号構下底出土須恵器(4) (S=35)

特徴をもち、C類の体部・底部境の不明瞭なものと識別しやすい。皿Aは個体数の割に、墨書きするものが多く、7 / 26確認され、坏A同様、「仁古万呂」の人名と「口」・「十」が確認される。人名墨書きは坏A同様E類胎土のもので、E類胎土には他に「口」が1点記されている(60)。ただこの「口」はC類胎土の「口」よりも小さく、筆も細いもので、異なる筆跡である。

皿B(有台盤)は口径17~21cmを測るもので、大型の26が底面ヘラ削り調整する以外は、回転ヘラ切り無調整のものである。径高指数は20前後、いずれもC胎土である。墨書きは1点のみ存在し、外底面に「廣」と記されている。記入部位から廣の下にもう1文字記されてると予想する。

高坏は皿状の浅い坏部をもつ高盤器形のもので、坏部径21cm台を測る。脚部は裾広がりの器形で、長脚となるものと予想される。なお、83・84は7世紀代の脚部の可能性が高い。また、79の坏部外面には「大」のヘラ書き文字が記されている。このヘラ書きは焼成前のもので、3回薄く下書き練習した後、そのうちの一か所に強く記したもので、計4回の大が記されている。

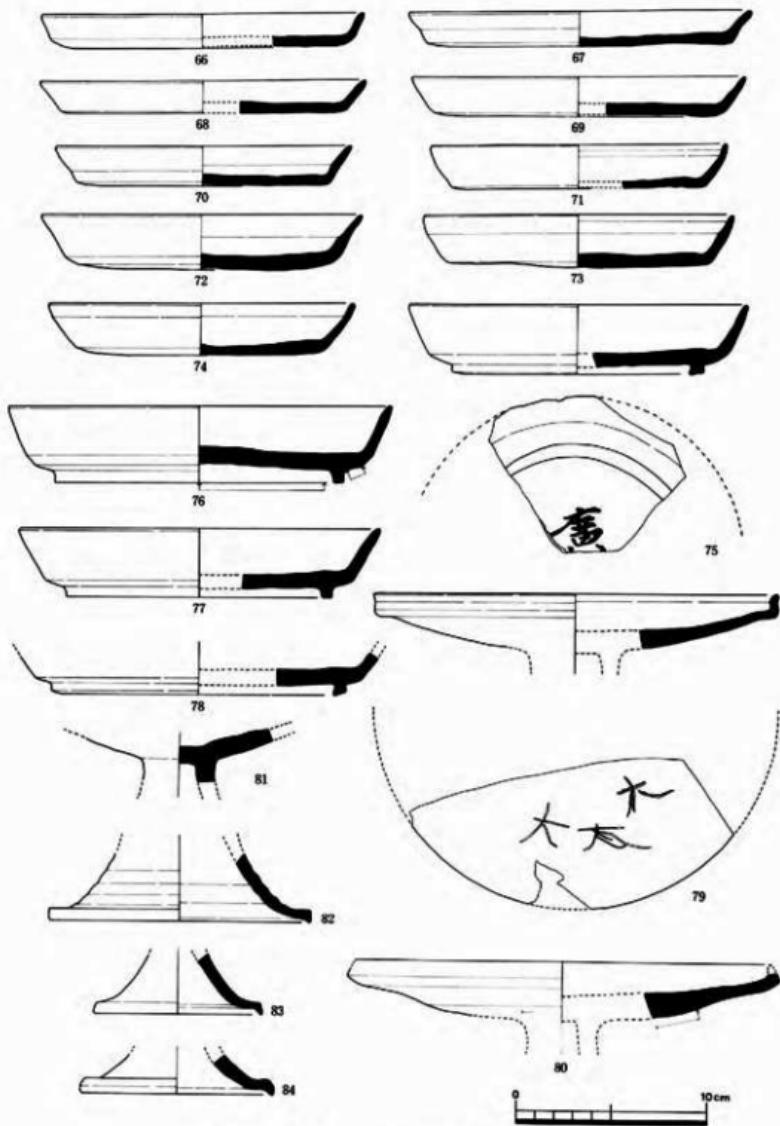
番号	器種	法量	胎土												
32	坏A	□12.4,高3.4	E	46	坏A	□12.4,高3.7	C	60	皿A	□17.0,高2.3	E	74	皿A	□16.2,高2.8	C
33	#	□13.2,高3.5	#	47	#	□12.0,高3.8	#	61	#	-	C	75	皿B	□17.7,高3.7	台13.2
34	#	□13.0,高3.2	C	48	#	□12.0,高2.9	#	62	#	□16.7,高2.7	#	76	#	□20.4,高4.1	#
35	#	□12.6,高2.7	#	49	#	□12.6,高3.3	#	63	#	□15.7,高2.5	#	77	#	□19.2,高3.7	#
36	#	□12.6,高3.1	#	50	#	□12.2,高3.5	E	64	#	□16.2,高2.0	#	78	#	□14.2	#
37	#	□13.0,高3.3	#	51	#	□12.7,高3.7	C	65	#	□16.0,高2.6	#	79	高坏	□21.2	#
38	#	□12.8,高3.8	#	52	#	□12.8,高3.6	#	66	#	□17.1,高1.8	#	80	#	-	E
39	#	□12.4,高3.5	#	53	#	□12.2,高3.6	#	67	#	□18.1,高1.8	#	81	#	-	C
40	#	□12.0,高3.3	#	54	#	□12.2,高3.9	#	68	#	□17.4,高1.7	#	82	#	□14.0	#
41	#	□13.4,高3.5	#	55	#	□12.1,高3.4	#	69	#	□17.6,高2.1	#	83	#	□8.9	E
42	#	□13.0,高3.3	#	56	#	□11.6,高3.4	#	70	#	□15.7,高2.1	E	84	#	□10.2	#
43	#	□13.0,高3.3	#	57	#	□12.2,高3.9	E	71	#	□15.6,高2.3	#	85	#	-	
44	#	□13.2,高3.7	#	58	#	□11.9,高3.5	#	72	#	□17.0,高3.0	C	86	#	-	
45	#	□13.0,高3.8	#	59	皿A	□16.3,高2.8	#	73	#	□16.2,高2.8	#	87	#	-	

第11表 1号溝下底出土須恵器坏A・皿A・皿B・高坏観察表

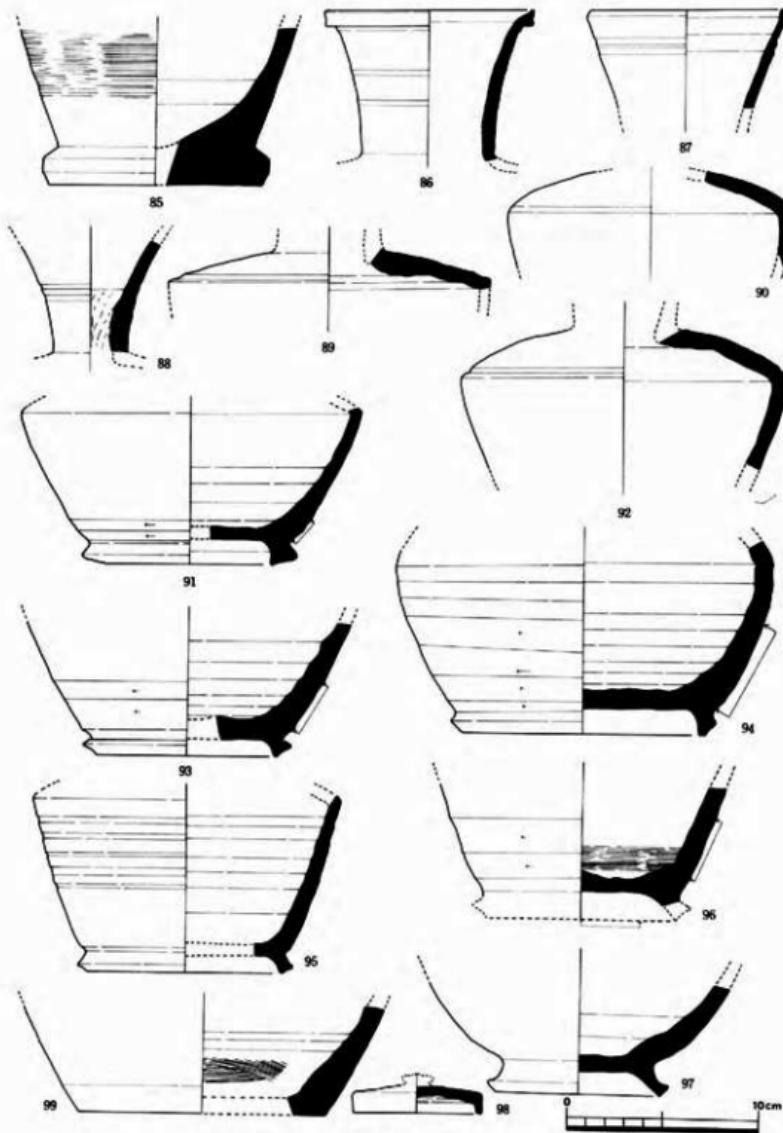
すり鉢(85)は図示した1点のみで、体部外面にはカキ目が施される。

壺・瓶類は図示した双耳瓶の口頭部(86)、長頸瓶(87~97)、横瓶(100~101)の他、短頸壺のミニチュア品の蓋(98)、平底の壺(99)、胴部上半カキ目、体部下半に叩きをもつ長胴の壺が確認される。出土量の多いのは、長頸瓶で、胴部立ち上がりの開く、算盤玉器形の91~94と立ち上がり開かず、逆台形状を呈する89・95・96とに分けられる。比較的前者はC類胎土、後者はE類胎土のものが多く、前者の肩は丸味をもち、後者の肩は角張る傾向をもつ。

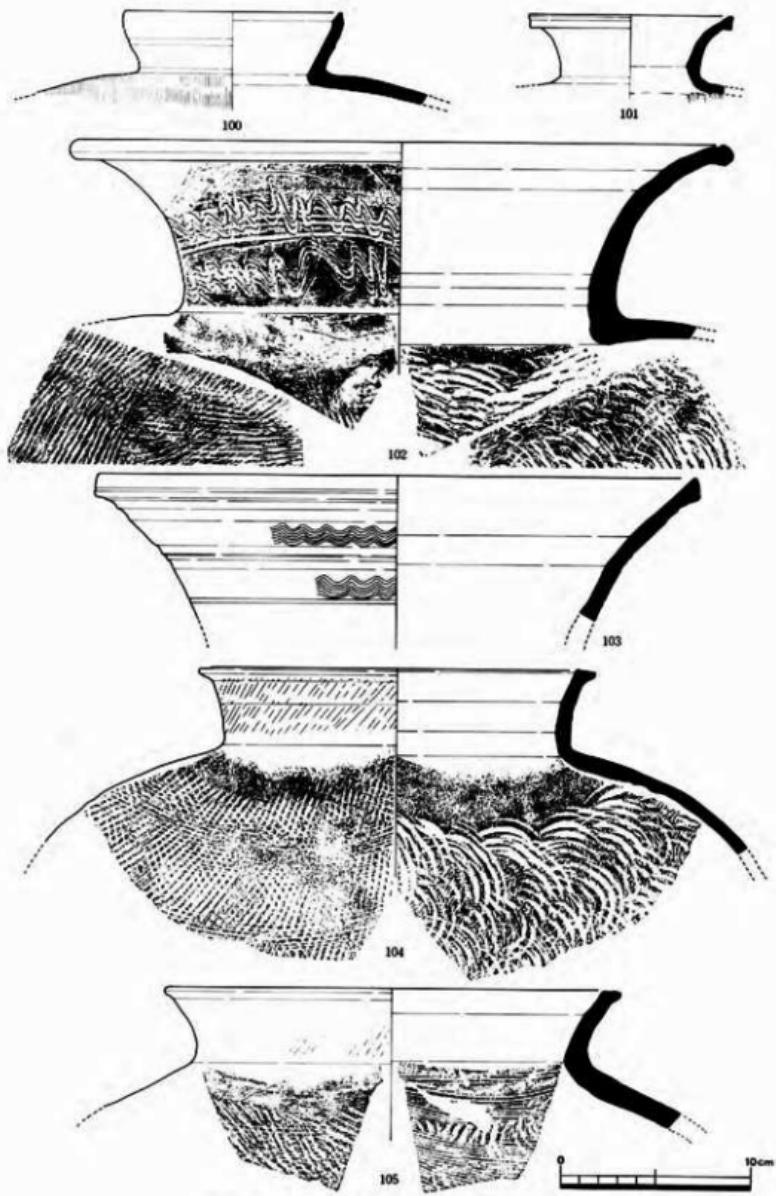
壺は口径から30cm台の大壺と20cm台の中壺に分けられる。大壺は口縁部長の長いもので、口縁部に波状文をもつものが多く、口縁端部外面が突堤状に肥厚する。中壺は口縁部短く、口縁端部上端に面を形成するもので、文様は施さず、口縁部外面に施される叩き程度である。胴部叩き・当て具文様については、一部外面で格子文(K類)が、内面で底部叩き出し専用当て具として平



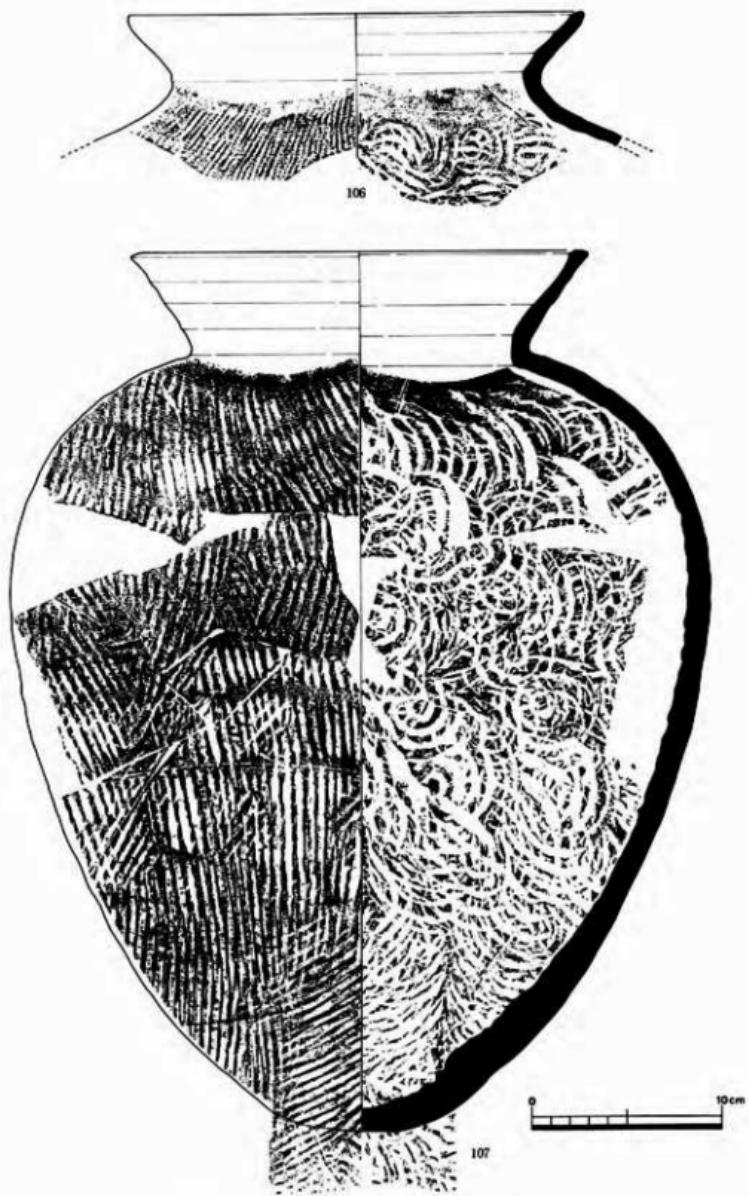
第32図 1号溝下底出土須恵器(5) (S=1/3)



第33図 1号窯下底出土須恵器 (6) (S=16)



第34図 1号溝下底出土須恵器(7) ($S = \frac{1}{3}$)



第35図 1号溝下底出土須恵器(8) ($S = \frac{1}{2}$)

行線文 H e 類が使用される以外は、外面平行線文、内面同心円文を基本としている。平行線文は木目直交の H a 類、木目右上がりの H b 類、木目左下がりの H c 類、木目のない H e 類があり、同心円文は木目のない D a 類、年輪状木目の D b 類、柾目状木目の D c 類がある。主体は外面 H a 類叩き + 内面 D a 類当て具の組み合わせのもので、全体の 4 割を占め、次いで、H b 類叩き + D a 類当て具で、内面 D a 類当て具が 6 割半を占める。D b 類・D c 類当て具はほぼ同量 2 割程度存在し、これも H a 類叩きとの組み合わせが主体を占める。さて、このような脣部叩き文様の割合を見ると、当該時期に主体を占めるはずの内面 D c 類当て具の占有率の低さが気になる。南加賀古窯跡群の資料では 8 世紀中頃から主体は D c 類であり、D a 類主体は 8 世紀前半の様相と言える。また、大甕の口縁部文様も 8 世紀中頃には衰退の傾向が強く、後半は無文となるものが目立つ。つまり、当資料は 8 世紀前半の須恵器甕の様相が強く、食膳具などよりも古い時期に主体をもつことが指摘できる。これは甕等の大型貯蔵具が使用期間が長いことを意味し、食膳具等の小型品に比べ、伝世的に使用され、廃棄年代がずれることを意味するものと理解する。

胎土	外面叩き + 内面当て具														計
	Ha+Da	Hb+Da	Hc+Da	He+Da	K+Da	Ha+Db	Hb+Db	Hc+Db	He+Db	Ha+Dc	Hb+Dc	Hc+Dc	He+Dc		
C 類	15(36)	6(14)	5(12)	0	1(2)	6(14)	1(2)	1(2)	0	5(12)	1(2)	1(2)	0	42(71)	
E 類	6(55)	1(9)	0	1(9)	0	0	0	0	1(9)	0	0	1(9)	1(9)	11(19)	
CE 類	3	1	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	6(10)	
計	24(40)	8(13)	5(9)	1(2)	1(2)	6(10)	2(3)	1(2)	1(2)	6(10)	1(2)	2(3)	1(2)	59	

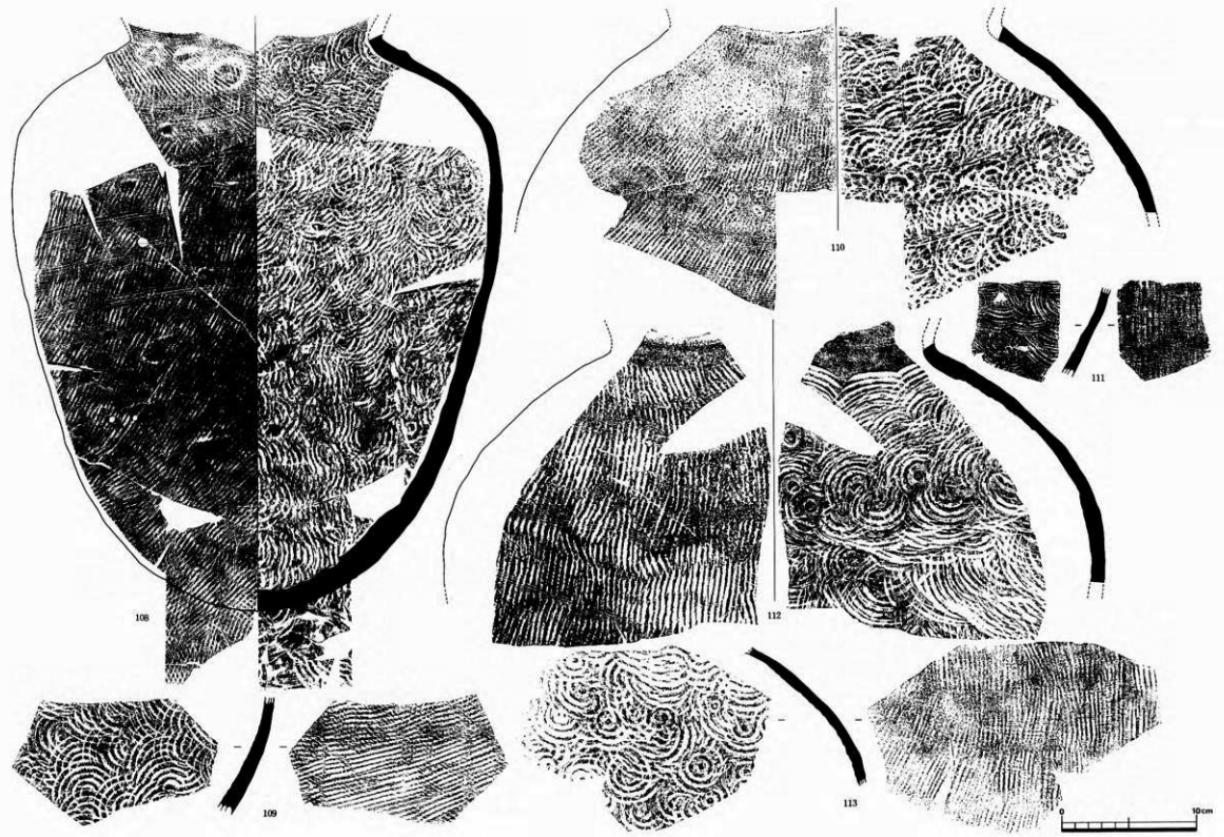
第12表 各胎土別須恵器甕脣部叩き・当て具文様の構成（数値は原体同定個体数、括弧書は%）

番号	器種	法量	胎土	番号	器種	法量	叩き+当具	胎土	番号	器種	法量	叩き+当具	胎土
85	すり鉢	底11.4	E	98	短頸壺蓋	口6.8		C	109	壺片	-	Hb+Da	C
86	双耳瓶	口11.0, 頂高7.6	C	99	平底壺	底13.0	"	110	大 壺	頸24.8	Hb+Da	"	
87	長頸瓶	口10.0	"	100	横 瓶	口11.4		E	111	壺片	-	Ha+Da	"
88	"	頸4.0	"	101	"	口10.7		"	112	大 壺	頸24.1, 頂49.4	Hc+Db	"
89	"	頸17.1	"	102	大 壺	口35.0, 頂高9.0	Ha+Da	"	113	壺片	-	Ha+Db	"
90	"	頸15.0	E	103	"	口31.6		C					
91	"	頸18.2, 台11.4	C	104	中 壺	口21.0, 頂高4.2	Ha+Dc	"	114	中 壺	-	Ha+Da 底Hb+He	"
92	"	頸17.1	"	105	"	口24.2, 頂高3.8	Ha+Da	"	115	壺片	-	Ha+Dc	"
93	"	台11.0	"	106	"	口24.0, 頂高3.3	Hb+Da	E	116	"	-	Hb+Dc	"
94	"	頸19.8, 台14.0	"	107	"	口24.2, 頂高5.2 頸36.8, 高36.6	Hc+Dc	"	117	"	-	Hc+Da 底Hc+Dc	"
95	"	頸16.4, 台11.5	E	108	"	頸36.6, 頂18.8 頸高42.7	Ha+Da 底Ha+Da	C	118	"	-	He+Da	E
96	"	-	"										
97	"	台9.5	"										

第13表 1号拂下底出土須恵器壺・瓶・壺観察表

b. 土師器

土師器は食膳具と煮炊具のみで、食膳具は壺B蓋・身、壺A、皿C、高壺が確認され、基本的に全て赤彩されている。個体数は多いとは言えないが、定量出土している。煮炊具は長壺、中壺、小壺、鍋、瓶があり、一通りの煮炊具器種はそろっているが、その量は多くはない。



第36図 1号坑下底出土須惠器(9) ($S = \frac{1}{2}$)



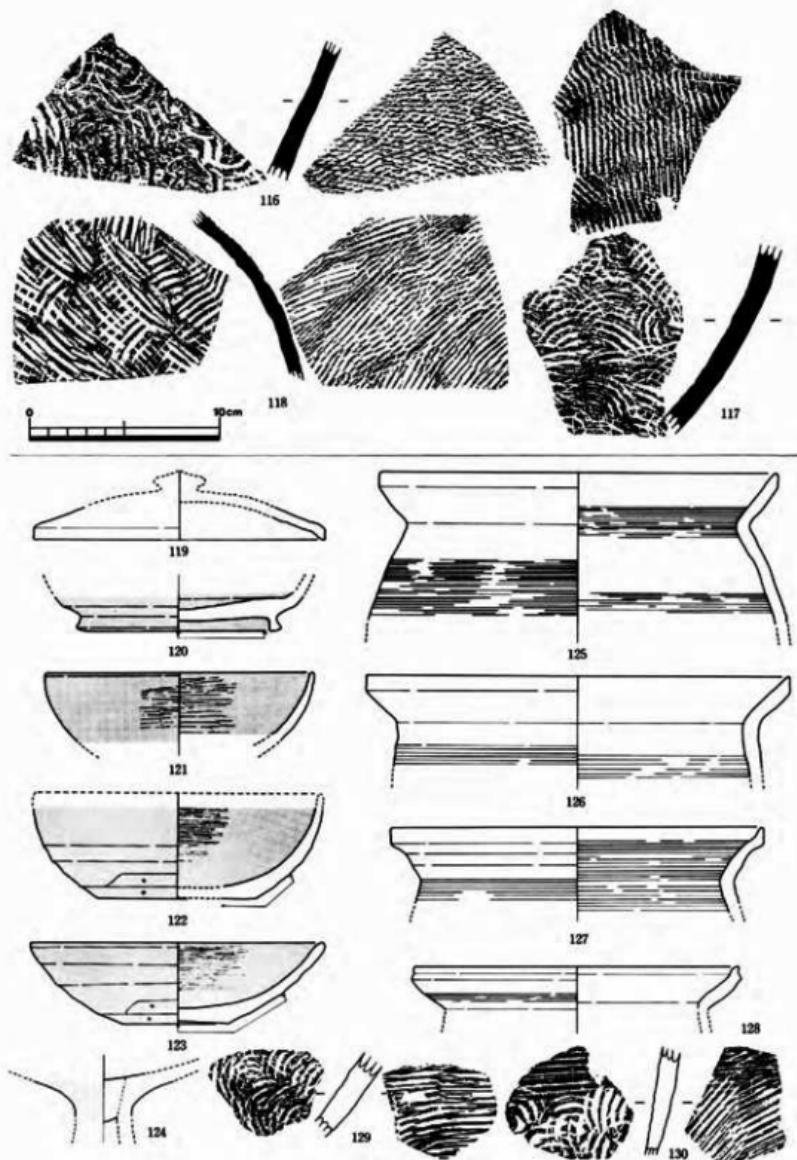
114



115



第37図 1号構下底出土須恵器 (10) (S=3)



第38図 1号構下底出土須恵器(11)(上段)・土篩器(1)(下段)(S=1/5)

まず、土師器の胎土について述べる。土師器胎土は古墳時代中期～末期と同様、a系統とb系統の胎土に大別され、同様の記号を使用しているが、素地の感じや砂の入り方が若干異なる印象を受けるため、まったく同一の胎土とは言えない。また、食膳具と煮炊具でそれぞれ砂粒の入り方が異なっているが、基本的には胎土素地の感じからa・bを分けている。まず、食膳具であるが、細かで均質な砂粒を多く含み、薄肌色（ややくすんだものもあり）を呈する砂質素地のa-1と砂粒をほとんど含まず、粘土質素地の緻密な胎土で、明るい薄肌色を呈するb-1に分けられる。次に、煮炊具であるが、a系統のみ食膳具と同様のa-1が少量存在するが、大半はやや粒の大きな砂を多く混入するものである。a系統はa-1の胎土に0.5～1.0mmの粒の大きな砂粒を多く含むa-2、1.0mmの黒褐色砂粒を目立って含むa-3があり、b系統は粘土素地に細かな砂粒は含まず、0.5～1.0mm程度の大粒の砂粒を多めに含むb-2がある。これらの胎土を分類し、器種別に示したものが第14表である。主体はa系統の胎土で、その中でもa-1が多い。

a-1は食膳具と煮炊具の両方で見られ、南加賀古窯跡群の土師器胎土に類似しており、窯場供給品の可能性が高いものである。a-2・3については、基本的にa-1に砂粒を混入したものであり、同質のものと評価し、南加賀古窯跡群窯場と見るが、詳細は不明である。b系統はb-2が煮炊具で定量を占め、4割の占有率をもつ。b系統の胎土は古墳時代のb系統胎土に類似しており、集落近郊の地元産の可能性をもっているが、能美窯跡群の粘土質の素地にも類似しており、どちらとも言い難い。この問題は別項で考察する。

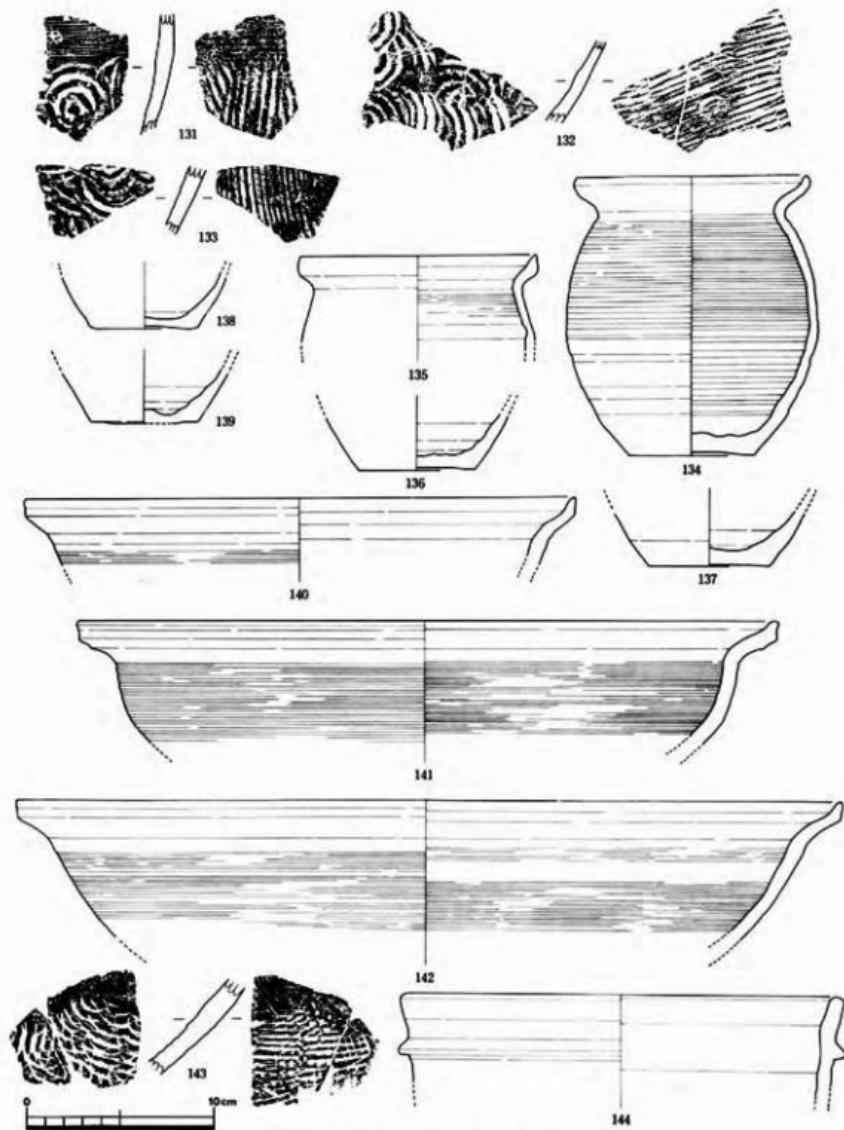
以下に、食膳具と煮炊具の説明を加える。

食膳具については、一部赤彩してないものもあるが、両面赤彩を基本とする。赤彩はややくすんだ薄目の色で、鮮明な色彩のものはない。a-1よりもややb-1の方が明るい色をしている。内面黒色ではなく、出現前と考えたい（南加賀古窯跡群では9世紀第3四半期以降生産開始していると予想する）。坏B（119・120）は蓋と身が出土しており、基本的に須恵器器形と同様である。坏B身は底面に回転ヘラ削りを施し、精製品の感を受ける。また、蓋の内面には漆が付着している。塊Aは体部内湾の8世紀前半～中頃に盛行する古手器形の121・122と体部外傾の9世紀初頭頃に出現する新しい器形の123とに分けられる。古手のものは内外ヘラ磨きするものがあり、精製品の感が強く、また、この中でやや後出するものは体部下半～底面に回転ヘラ削りを施す。新手のものは内面のみヘラ磨き、体部下半～底面を回転ヘラ削りしている。高坏（124）は基部のみの破片である。

煮炊具は、長甕、中・小甕、鍋、甑が存在し、長甕は口径20cm前後、胸部叩き出し成形による

胎土	坏B	古塊A	新塊A	III C	高坏	小中甕	長甕	鍋	甑	胎土計
a-1	2	4	2	1	2	4	3	0	1	19
a-2	0	0	0	0	0	3	8	0	0	11
a-3	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
b-1	1	4	0	0	0	0	0	0	0	5
b-2	0	0	0	0	0	4	6	3	0	13
器種計	3	8	2	1	2	12	17	3	1	49

第14表 1号溝下底出土土師器胎土構成表（数値は個体識別数）



第39図 1号溝下底出土土器(2) ($S = \frac{1}{3}$)

丸底を呈する。口縁部器形はやや肥厚して口縁端部外側に面を作るA類(125・126)、口縁端部の上端をややつまみ上げ状として外側に面を作るB類(127・128)に分けられ、前者が6~7割の主体を占める。調整は胴部上半でカキ目調整を施すものを基本としており、下半は外面平行線文叩き、内面同心円文当具が見られる。外面平行線文叩きは木目の入り方により、H a類・H c類・H e類(須恵器の項を参照)に分けられ、内面同心円文当具はD a類とD c類に分けられる。主体となる文様はH e類+D a類の組み合わせで、4割を占め、H a類・H c類の組み合せも含めれば、D a類当具は6割近くを占める。D c類当具は4割程度で、その中ではH e類・H c類との組み合わせが主体的である。また、胎土別ではD c類はa系統の胎土に目立ち、a系統では5割近くを占める。また、a-1とa-2では外面叩きが異なり、興味深い。次

胎土	外面叩き+内面当具						計
	Ha+Da	Hc+Da	He+Da	Ha+Dc	Hc+Dc	He+Dc	
a-1	0	0	4	0	5	2	11
a-2	4	2	7	2	1	5	21
b-2	1	0	7	0	2	1	11
計	5	2	18	2	8	8	43

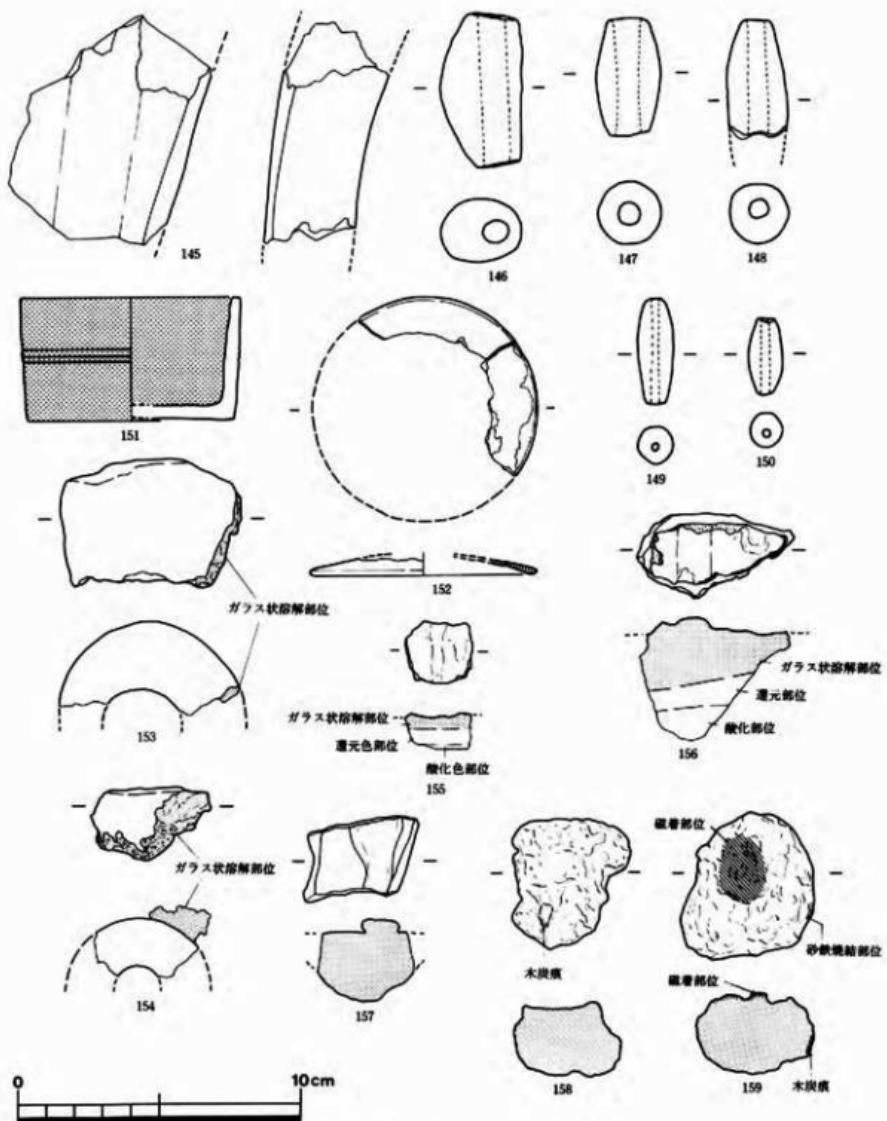
に、中・小甕(135~139)についてだが、口径10~14cm程度を測り、底部平底、底部には回転糸切り痕を残す。口縁部器形は長甕同様、肥厚気味のA類と上端つまみ上げのB類に分けられ、胴部は内外面ともにカキ目調整が施される。鍋(140~142)は口径30~40cmを測るもので、やや厚手のものが多い。調整は底部外面付近ヘラ削り以外はカキ目を施す。甕は144の口縁部破片1点のみで、口縁部下には鉗状の突帯がつく。以上が煮炊具だが、いずれの器種においても煮炊具として使用した痕跡、外面スス、内面焦げつきが確認される。しかし、134のような小・中甕の完形品で使用痕の確認できないものもあり、使用痕のつきやすい胴下部や底部破片で、スス・焦げの痕跡をもたないものが定量存在する。このことからすぐさま未使用のものが廃棄されたとは言えないが、ススの付着するものとしないものとでは使用状態が異なることはありそうな気がする。

番号	器種	法量	胎土	番号	器種	法量又は叩き+当具	胎土	番号	器種	法量又は叩き+当具	胎土
119	坏B蓋	口15.4	b-1	127	長甕	口19.5	b-2	135	中小甕	口12.4	a-2
120	坏B身	台10.8	a-1	128	"	口17.0	a-1	136	"	底6.2	a-3
121	塊A	口14.2	b-1	129	"	外面He+内面Da	a-2	137	"	底6.4	a-2
122	"	底8.4	a-1	130	"	外面He+内面Da	b-2	138	"	底5.9	a-1
123	"	口15.4, 高4.3 底5.4	"	131	"	外面Hc+内面Da	a-2	139	"	底5.8	b-2
				132	"	外面He+内面Dc	a-1	140	鍋	口29.4	"
124	高坏	-	"	133	"	外面Hc+内面Dc	"	141	"	口37.4	"
125	長甕	口20.7	b-2	134	中小甕	口12.0, 脇13.2 底6.6, 高14.8	a-1	142	"	口43.8	"
126	"	口22.4	a-2					143	"	外面He+内面Da	"
								144	甕	口22.5	a-1

第16表 1号構下底出土土師器観察表

c. その他の遺物

その他の遺物としては置き甕と思われるもの、土錐、漆器、不明金属器、製鉄関連遺物が出土している。まず、置き甕と思われる145であるが、厚手で、内面は粗い削り、土師器胎土のb-2



第40図 1号溝下底出土土製品・木製品・金属製品 (S=1/2)

に類似する。土錐は全て管状土錐で、やや太い大型のものと細い小型のものとがあり、大きさと重量は 146 が 5.5cm・31.5g、147 が 4.2cm・17.4g、149 が 3.7cm・5.3g、150 が 2.7cm・3.4g である。胎土は 146 と 148 が土師器 a-2、それ以外は土師器 b-2 である。151 は内外面黒漆の漆器で、口径 7.8cm、器高 4.4cm、底径 7.4cm を測るコップ形（筒形）を呈する。体部には 4 本の沈線を施し、金属器を意識している。なお、漆器の詳細については、四柳嘉章氏の考察に詳しいので、ここでは割愛する。152 の金属器は口径 8cm 程度を測る平たい円盤状のもので、蓋と思われるものである。金属探知機による反応はあるが、磁着しないため、銅製又は金銅製と推察する。153～159 は製鉄関連の遺物で、153・154 は轆の羽口破片、155・156 は炉壁片、それ以外は鉱滓である。羽口は砂粒を極多量含む耐火度の高い土で作られており、153 の方がやや大型、いずれもガラス状に光沢をもって溶けた部分をもつ。炉壁は 155 がやや粘土質の土、156 が砂粒が多く含む土で、両者とも表面が鉱滓と同様に溶けている。鉱滓状に溶けた部分は気泡を多くもち、156 は溶けた部分の中にも砂粒が多く確認される。炉壁はこの他に 5 例あり、いずれも 156 のタイプである。鉱滓は 157 の表面がツルツルで黒（褐）色を呈し、破面が平滑で中が緻密な炉外流出滓（砂鉄製鍊滓？）と 158・159 の表面・破面がゴツゴツして気泡を多くもつ、炉内滓（精鍊鍊冶滓かも？）に分けられる。流出滓は裏面に石や土を咬んでおり、炉外で急激に冷えたものであろう。光る結晶が多く含まれ、表面はほんの少し赤味（酸化）を帯びる。流出滓はこれ 1 点のみ確認できた。炉内滓は炭粒を咬んだり、表面の酸化するものが多く、磁着するものが 159 も含めて 7 点ある。いずれも金属反応は弱く、金属探知機の目盛り最大で一部分反応する程度である。非磁着のものは 9 点あり、形状は磁着するものと同様である。

2. 4 号溝混入遺物（第 41～43 図）

4 号溝から混入して出土する遺物は、遺物箱 3 箱程度で、その大半は須恵器である。1 号溝下底とほぼ同様の時期ではあるが、9 世紀中頃まで下る遺物も若干含んでいる。また、土器以外では「神功開寶」が 1 枚出土している。

a. 須恵器

当遺構より出土する須恵器は、1 号溝下底同様、南加賀古窯跡群か能美窯跡群かの在地産で、南加賀古窯跡群と想定する C 類と能美窯跡群と想定する E 類とに分けられる。以上の胎土識別による器種ごとの量比を示したのが第 17 表であるが、C 類か E 類に属するものとは思われるが、識別の困難なものは C E 類として表示した。また、数値は個体識別による個体数ではあるが、小破片が多かったため、1/2 以上底部と口縁部の個数である。甕は口縁部と胴部叩き・当て具原体同定による識別個体数を併記した。胎土の主体は C 類で、全体の 6 割を占め、いずれの器種でも半数以上を占めるが、1 号溝下底同様、長颈瓶と横瓶のみ E 類が高い傾向をもつ。

器種は、壺 B・壺 A・皿 A・皿 B・高壺の食膳具、鉄鉢、盤（把手付きの鉢）・すり鉢の調理具、長颈瓶・双耳瓶・水瓶・横瓶・平底甕・甕の貯蔵具が確認でき、その量比率は食膳具主体の構成を示す。まず、食膳具比率であるが（甕については口縁部破片数による個体数換算）、食膳

具が417に対し、貯蔵具は67で、食膳具が85%を占める。この数値は1号溝下底よりも高い数値であり、当該時期の須恵器窓跡の食膳具構成比率に近い。次に、食膳具の中での比率であるが、坏Aが5割、次いで皿A 2割半、坏B 2割強で、皿B・高坏は極少量である。1号溝下底同様、当資料でも皿Bの占有率は低く、生産地における器種構成割合とは異なる印象を受ける。次に、貯蔵具であるが、壺が主体的で、壺・瓶も定量存在し、特記すべき構成は見られない。以下に器種ごとの説明を加える。

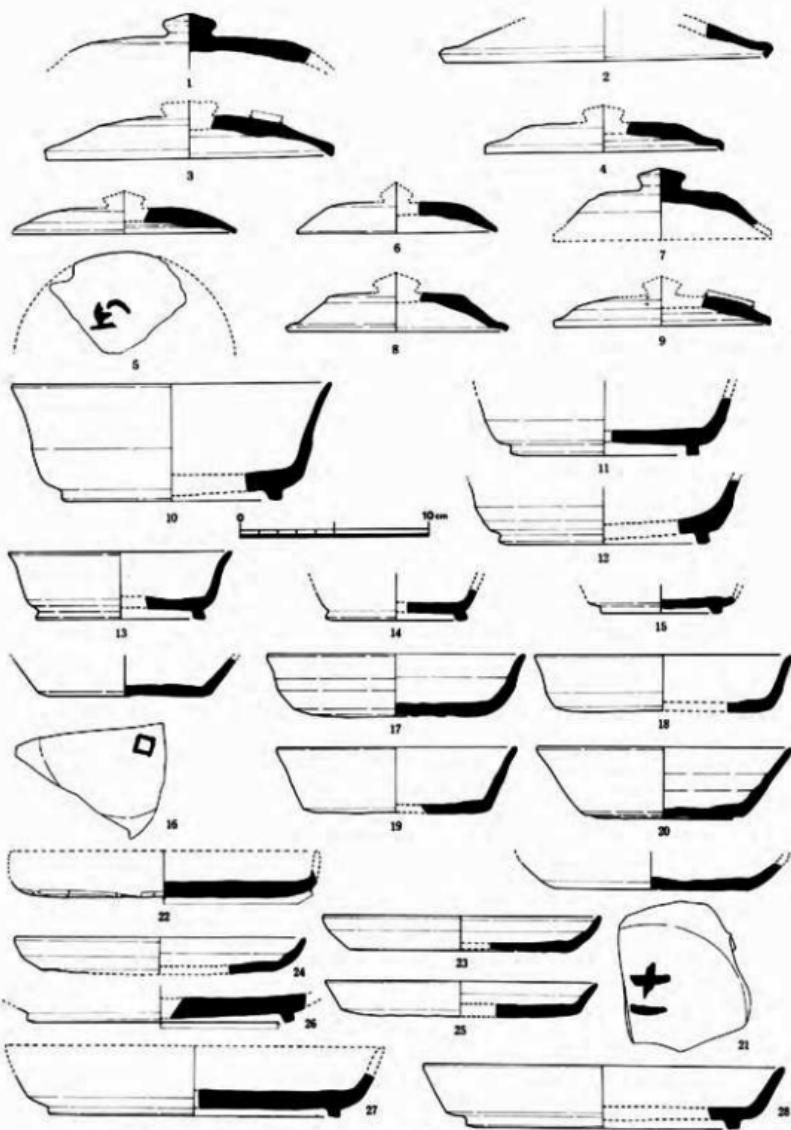
胎土	坏B		坏A	皿A	皿B	高坏	盤	すり鉢	鉢	長頸瓶	双耳瓶	横瓶	水瓶	平底壺	壺 口縁 胴	胎土計(%)	
	蓋	身															
C類	51	46	139	55	10	8	1	3	1	10	2	6	1	4	15	62	414(60.4)
E類	35	35	63	51	7	1	0	0	0	11	0	6	0	3	9	38	259(37.8)
CE類	7	2	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	12(1.8)
器種計	93	203	107	5	9	1	3	1	21	2	12	1	7	24			胎土計685
(%)	(19.0)	(41.5)	(21.9)	(1.0)	(1.8)	(0.2)	(0.6)	(0.2)	(4.3)	(0.4)	(2.5)	(0.2)	(1.4)	(4.9)			器種計489

第17表 須恵器器種構成・胎土構成表(数値は個体識別個体数)

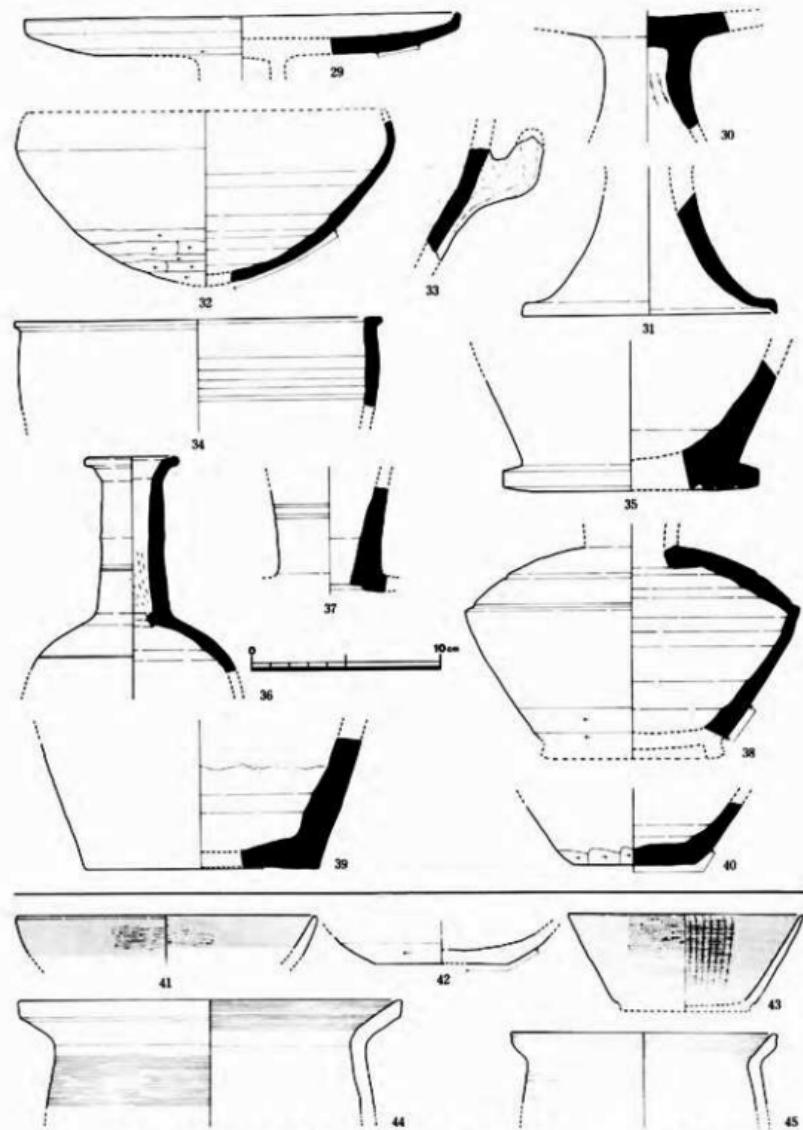
まず、食膳具であるが、ここでも墨書き土器が数点出土しており、内容は1号溝下底と類似する。坏Bは法量によりI類・II類・III類に分けられ、蓋でI類23個体、II類10個体、III類14個体、身でI類24個体、II・III類39個体の構成を示す。主体はI類と言えるが、II・III類を小型法量とすれば、合わせて半数以上は占めている。坏蓋(1~9)は天井部へラ切り痕を残すものが多く、ヘラ削り省略の傾向をもつ、新手のものが目立つようである。III類法量の蓋は南加賀古窓跡群のものが口縁端部折り返しなし、能美窓跡群のものが口縁端部折り返しありという特徴をもっている。坏蓋に残る重ね焼き痕は、C類胎土でI類8、IIa類19、IIb類2、E類胎土でI類3、IIa類12、IIb類4とC類胎土でI類が目立つ以外は、両方の胎土ともIIa類主体で構成される。坏B身(10~15)はほとんど底部破片で、ヘラ切り無調整である。蓋には1点のみ、墨書きがあるが、部位は天井部外面で、墨が薄れて判読不可能である。複数字句記されているものと予想する。

坏Aは口径12~14cmを測るもので、器形から、体部立ち上がり丸味をもって立ち上がる径高指数23前後のA類(17~18)と底部から体部外傾して立ち上がる径高指数28前後のB類(16~19~20)に大別できる。いずれも底面回転へラ切りによるものである。16は底部外面に「口」の墨書きが見られる。細字タイプのもので、書き方は1号溝下底のものと類似する。

皿類(盤類)は無台の皿Aと有台の皿Bがあり、皿Aは口径14~17cmを測る。底面調整は22の底面へラ削りを施す体部直立タイプ以外は、いずれも底面回転へラ切り無調整である。器形は体部のまっすぐ外傾するB類(25)と体部段状にうねるD類(23~24)に分けられ、前者が主体を占める。21は底面に「土」と墨書きされたもので、「十」の部分は1号溝下底のものと類似する。皿Bは口径20cm前後を測るもので、26が底面へラ削り調整する以外は、回転へラ切り無調整のものである。底部破片がほとんどである。



第41図 4号溝出土の8世紀後葉～9世紀中葉の須恵器 (1) (S=1g)



- 第42図 4号構出土の8世紀後葉～9世紀中葉の須恵器(2)と土師器(1)(S=1/4)

高坏は皿状の浅い坏部をもつ高盤器形のもので、29は坏部径23cmを測る。脚部は裾広がりの器形で、8世紀中頃のものが主体的である。

これら食膳具の他に、仏器的器種として鉄鉢(32)が1点出土している。口径20cm程度のもので、底部丸底、底部付近外面には手持ちヘラ削りが施される。器肉薄手で、C類胎土である。

調理具はすり鉢と盤(把手付きの鉢)のみで、すり鉢は口径20cm程度、底面には刺突が施される。盤は把手付近の破片のみ出土している。

壺・瓶類は図示できた個体数が少なく、長頸瓶と平底壺、水瓶程度である。長頸瓶は算盤玉形の胴部のものがC類胎土で、これは頸部接合がE類胎土のものとは異なっている(頸部接合の器肉肥厚部位がC類は胴部側から、E類は頸部側から肥厚している)。これは同様のC類胎土である水瓶の頸部接合とも共通し、技術的な地域性として提示できるものである。

壺は図示できたものではなく、データのみ提示する。まず、大壺であるが、口縁部波状文をもつものが主体的で、口縁部無文のものとの比率では、7対5である。口縁端部形態は内外上下又は下端のみ突出する。中壺の口縁端部形態は、上端に面を形成するものが主体であるが、下端の突出するものも定量ある。数量的には大壺12個体、中壺12個体で、同量である。壺の胴部叩き・当て具は以下の表に示した通りである。

胎土	外面叩き+内面当て具											計	
	Ha+Da	Hb+Da	Hc+Da	He+Da	Ha+Db	Hb+Db	Hc+Db	He+Db	Ha+Dc	Hb+Dc	Hc+Dc		
C類	11	7	2	2	11	3	1	0	16	1	7	1	62
E類	11	4	1	1	3	1	0	1	10	4	2	0	38
計	22	11	3	3	14	4	1	1	26	5	9	1	100

第18表 各胎土の須恵器壺胴部叩き・当て具文様の構成(数値は原体同定個体数)

番号	器種	法 量	重焼胎土番号	器種	法 量	胎土番号	器種	法 量	胎土番号	器種	法 量	胎土
1	壺B蓋	-	-	C	11	壺B身	台9.9	E	21	皿A	-	C
2	"	口16.9	I	"	12	"	台11.0	"	22	"	-	"
3	"	口15.3	-	"	13	"	口12.0, 高3.6	C	23	"	口14.6, 高1.9	"
4	"	口12.6	II a	"		"	台9.0	24	"	口15.6, 高2.0	"	34
5	"	口12.0	"	"	14	"	台7.6	"	25	"	口14.4, 高1.9	"
6	"	口10.7	II b	"	15	"	台6.4	"	26	皿B	台14.5	E
7	"	-	II a	E	16	壺A	-	"	27	"	台19.7	C
8	"	口11.6	"	C	17	"	口13.6, 高3.2	"	28	"	口19.0, 高3.3	"
9	"	口11.4	"	E	18	"	口13.5, 高3.0	"		"	台14.3	
10	壺B身	口11.8, 高6.2	"		19	"	口12.7, 高3.5	"	29	高坏	口23.0	"
		台11.8			20	"	口13.3, 高3.7	E	30	"	基部径4.0	"
											39	平底壺底12.5

第19表 4号構出土混入須恵器観察表

b. 土師器

土師器は食膳具と煮炊具のみで、食膳具は壺B身?、塊Aが確認され、基本的に全て赤彩されている。個体数は少なく、口縁部破片8点のみである。煮炊具は長壺、中・小壺、鍋があり、定

量出土している。胎土は1号溝下底と同様、食膳具がa-1とb-1で構成され、a-1が10点、b-1が2点で構成される。煮炊具も1号溝下底と同様の胎土があり、a-1が9点、a-2が38点、a-3が9点、b-2が13点で構成される。主体はa系統の胎土で、長甕にはややb-2が目立つ傾向はあるが、4割程度で、中小甕にはa-1が目立つ傾向が見られる。

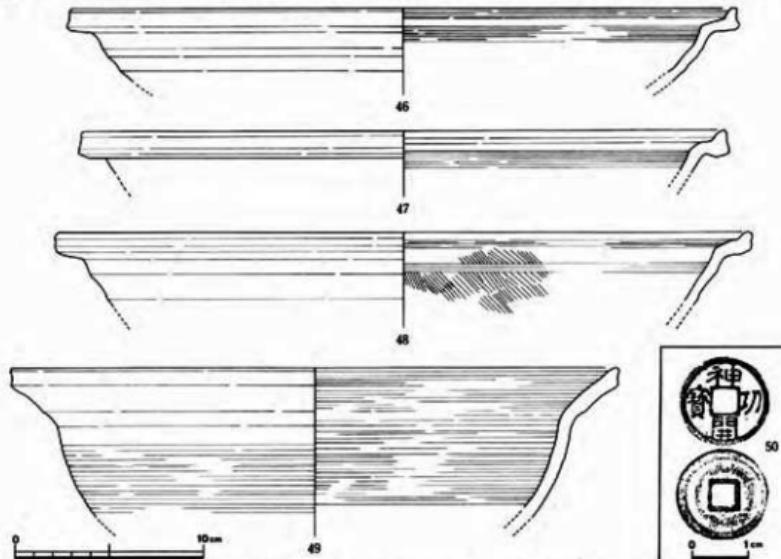
食膳具は赤彩が基本で、塊Aが主体的である。いずれも古手器形で、内外ヘラ磨きをする41や内面のみヘラ磨き、底面ヘラ削りの42がある。胎土はいずれもa-1である。また、43の坏B器形は外面に単位の細かいヘラ磨き、内面に放射状暗文が見られ、胎土b-1の精製品である。

煮炊具は長甕、中小甕、鍋で、口縁部器形から口縁部肥厚のA類と上端摘まみ上げのB類に分けられる。A類B類どちらも定量存在するが、ややB類の方が多い傾向はある。長甕、中小甕、鍋の量比は口縁部破片で長甕31、中小甕20、鍋16で、それぞれ定量存在する。調整は胴部上半がカキ目主体、下半は中小甕がナデ中心、鍋が外面ヘラ削り主体、長甕が底部叩きだしで、その文様構成について第20表に上げたとおりである。a系統におけるDc類当具率の高いことが目立つ。

土器以外では「神功開寶」が1点出土している。これは皇朝十二銭の3番目の銅錢で、天平神護元年（765年）鑄造である。4号溝下底出土であるが、曆年代から当該時期資料として扱った。

胎土	外面叩き+内面当て具							計
	Ha+Da	Hb+Da	Hc+Da	He+Da	Ha+Dc	Hb+Dc	He+Dc	
a系統	6	0	1	8	12	1	5	33
b系統	6	6	0	4	1	3	2	22
計	12	6	1	12	13	4	7	55

第20表 各胎土の土師器長甕叩き・当て具文様構成
(数値は原体同定個体数)



第43図 4号溝出土の8世紀後葉～9世紀中葉の土師器(2)(S=3%) (50のみS=2%)

第3項まとめ

1. 当該土器群の器種構成と縦年の位置付け

これまで、述べた1号溝下底出土土器と4号溝混入土器をまとめ、当該土器群の器種構成と縦年の位置付けを試みてみたい。

a. 器種構成

ここでは1号溝下底出土と4号溝混入の土器群を総合し、当該時期の様相を提示する。まず、食膳具（鉢も含む）／貯蔵具／煮炊具の比率であるが、 $613 / 111 / 102$ で、食膳具が74%を占め、残りを貯蔵具と煮炊具でほぼ同量占める。この構成率は食膳具中心の構成を示しているものと言え、煮炊具率の低さ、そして貯蔵具特に瓶類の量は目立つものと言える。この構成率に似た様相は官衙クラスの格上の遺跡に多く、当該土器群もそれに近い様相をもったものと言える（田嶋 1992 を参考）。さて、この段階、食膳具と貯蔵具は須恵器、煮炊具は土師器と、須恵器と土師器の用途別区分がほぼ確立しているが、食膳具のみ内外赤色塗装する土師器壺・壇が5%存在している。5%の量比を高いと言うことはできないが、定量存在することは評価すべきで、これも当該土器群の一つの特徴と言える。赤彩土師器の評価については用途も含めて問題があるが、格上の遺跡で目立つ存在であることは間違いない、食膳具中心の構成を示す様相と呼応している。さて、各器種の構成比率については第2項で数値を提示しているので、それを参照願いたいが、この構成比率を当該土器群の主要な生産地である南加賀窯跡群の当該時期の須恵器種構成と比較すると、須恵器種の中で皿Bが少ないことと、壺・瓶類が多いことが目につく。まず皿Bだが、当器種は南加賀窯跡群では箱宮5号窯段階（8世紀第4四半期）で、生産のピークを迎える。食膳具中2割の占有率をもち、9世紀前葉頃の戸津58号窯でも2割近い数値、9世紀中頃になつてはじめて減少・消滅の傾向をもつ。生産地での皿Bの高比率は南加賀窯跡群の場合、窯内での床面置き台に転用される例が多いため、実際の生産量をやや少なめに見る必要性は感じるが、それでも消費地での構成率の差は明瞭で、その評価については今後問題とすべきものと言える。次に、壺・瓶類とくに長頸瓶の高比率であるが、当該時期の生産地での量比をかなり上回り、当遺跡では大量消費されている器種と位置付けできる。一般的な集落遺跡でどれだけの占有率をもつかは把握していないが、これも当遺跡が格上の遺跡であることを物語るものと評価したい。

b. 当該土器群の縦年の位置付け

ここでは1号溝下底出土の須恵器食膳具を中心に述べる。なお、ここで使用する須恵器縦年は南加賀窯跡群縦年を基準としたものである（望月 1991）。さて、1号溝下底土器群については一括性の高い出土状態から、かなり短期間に廃棄された資料であると想定しているが、土器自体は一時期に集中する傾向はなく、比較的の時期幅をもっている。この中で上限資料としては、28図7・8の壺B蓋のような戸津46号窯～矢田野向山Ⅲ次窯頃（8世紀前葉）に位置付けられる資料が上げられるが、これらは極少量であり、主要土器群の前段階資料として位置付けられるものである。主体を占めるのは、箱宮5号窯～戸津5号窯段階のものと思われ、暦年代観としては8世紀後葉

～9世紀前葉に位置付けられるものである。さて、この中で、箱宮5号窯に位置付けられるものは比較的坏Bに多く、坏Aや皿Aではあまり目立たない。後で詳しく述べるが、墨書き土器はこの段階から存在し、定量を占める。次に、二ッ梨10-B号窯段階であるが、この段階と次の戸津5号窯段階が数量的に多く、大半を占める。坏A、皿Aは多くがこの段階のもので、数量的には戸津5号窯段階に属するものが目立つようである。墨書き土器は前段階より確実に増加し、墨書き土器も戸津5号窯段階に位置付けられるものが多い。基本的にこの段階までが一括廃棄資料の時期であるが、一括廃棄箇所とは別の区域で若干時期の下る資料（28図11の坏B蓋、戸津29号窯段階に比定）が少量存在し、これは溝廃棄以降のものと予想される。以上、1号溝下底出土の須恵器を食膳具中心に見てきたが、他の器種についても、若干古手のものも存在するものの、ほぼ箱宮5号窯～戸津5号窯段階に位置付けられるものと見てよく、土師器についてもほぼ同様である。また、4号溝混入土器群については、この段階に中心はおくものの、これより前に位置付けられるものや後続するものも定量存在し、1号溝下底出土土器群のようなまとめは確認されない。

2. 当該須恵器の生産地と須恵器流通について

肉眼観察による須恵器の胎土分類から、当該須恵器はC類とした南加賀窯跡群産とE類とした能美窯跡群産の2つの生産地に分けられるものである。両生産地の比率は、1号溝下底、4号溝混入ともに南加賀窯跡群産が6割以上の主体を占め、能美窯跡群産は3割半前後の従属性の存在である。能美窯跡群産の3割半という数値は決して少ない量とは言えないが、当該須恵器の時期が能美窯跡群の全盛期に重なっていることと直線距離や河川（鍋谷川一梯川）の交通の便で能美窯跡群が近い位置にあることを考えれば、予想以上に少ない量である。7世紀代の当該遺跡出土須恵器での能美窯跡群産2割強の占有率よりは確実に増加していると言えるが、能美窯跡群の生産量向上率から考えれば、それほど増加した感じではなく、須恵器生産地から消費地への供給は距離や生産量の問題だけではない、別の要因が存在したものと言える。さて、能美窯跡群の須恵器供給圏は窯跡群から主に北側に分布することは本文の7世紀の須恵器供給のところでも想定したことだが、木田清氏の加賀地域を対象とした消費遺跡の須恵器供給のデータ（木田1991）でも、辰口町下開発遺跡の能美窯跡群産9割前後、松任市域消費遺跡の南加賀窯跡群産4割前後、能美窯跡群4割前後、末窯跡群、高松・押水窯跡群産2割前後という結果が出ており、能美窯跡群が距離・河川交通の利便のある梯川流域ではなく、辰口丘陵以北、手取川を交通手段とした手取扇状地への供給を主体としていることが想定できる。南加賀窯跡群は梯川流域を主体としながら、手取扇状地にも定量供給する、北側へ同心円状に供給圏を広げるのに対し、能美窯跡群は辰口丘陵以北、手取扇状地の比較的狭い地域を供給圏とする状況は、能美窯跡群が南加賀窯跡群の補完的な立場にあったのみではなく、能美窯跡群のスポット的に多量供給される遺跡の存在（野々市町粟田遺跡など）や当該遺跡のような瓶類供給の多さなども考え合わせ、南加賀窯跡群とは質の異なる生産体制・流通体制がとられていたものと推察したい。

3. 墨書き土器と溝内廃棄について

1号溝下底において一括出土した墨書き土器を中心とする土器群について以下にその性格を考察する。

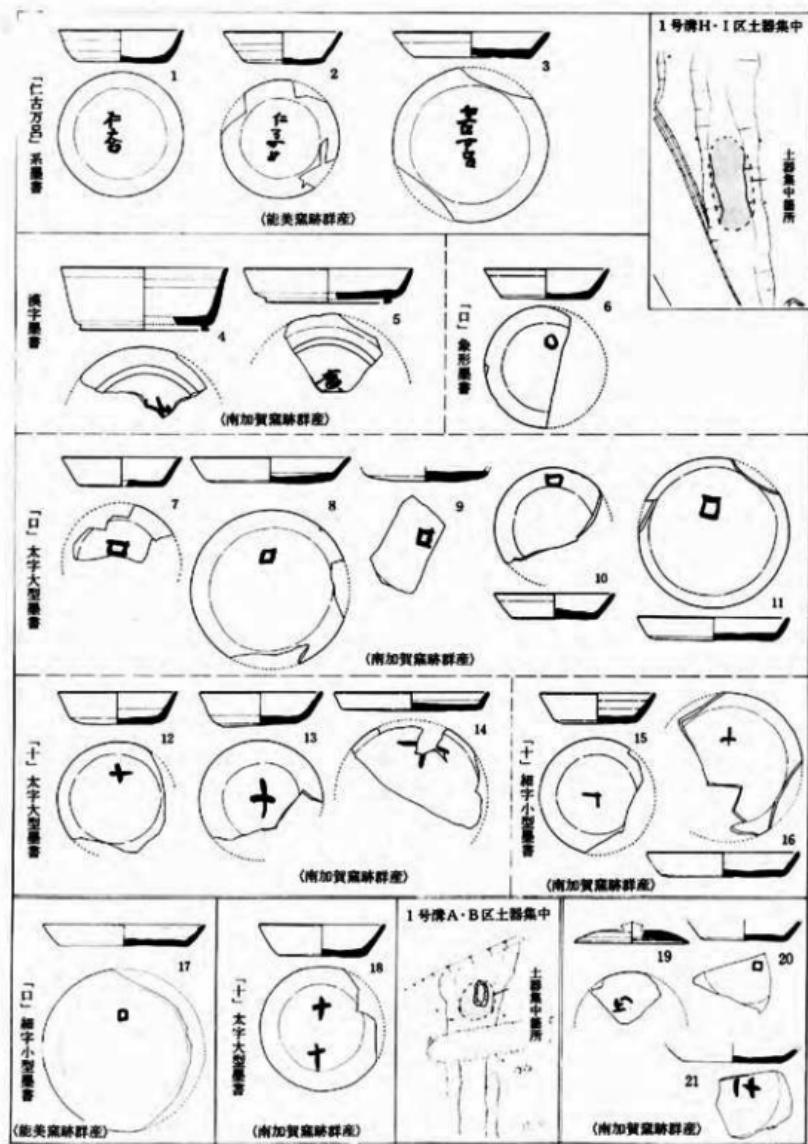
a. 1号溝下底の土器出土状態

1号溝下底から土器群が一括して出土していることは再三述べているが、溝全般で土器群がまとまって出土しているわけではなく、一括集中する箇所は限られている。最も集中するのは、溝の南側、H区とI区にまたがった長さ6m程度の箇所で、そこだけで、墨書き土器16個体を含む須恵器食膳具が54個体（図示できた1／2以上の個体）、須恵器貯蔵具が6個体（図示できた個体）土師器食膳具が5個体出土している。また、同様の土器集中箇所はA区とB区の境付近でも見られ、長さ3m程度の箇所から墨書き土器2個体を含む須恵器食膳具11個体、須恵器貯蔵具2個体が出土し、両土器集中箇所で、須恵器食膳具は下底出土総量の8割近くを占める。両土器集中は須恵器食膳具、土師器食膳具が主体で、須恵器壺等の貯蔵具器種や土師器煮炊具はあまり目立たず、食膳具を主体にして、意識的に集中廃棄した感じを受ける。つまり、溝としての遺構に土器廃棄したというよりは、別の空間としての意識が高かったものと思われ、墨書き土器がこの2箇所の土器集中箇所からのみ出土することや、当時としては高級品である筒形漆器がA・B区土器集中箇所から出土することも、この土器廃棄の性格を考えるにおいて重要である。

b. 墨書き土器について

墨書きされる器種は須恵器食膳具のみで、器種ごとの数値は坏B蓋1、坏B身1、坏A11、皿A7、皿B1を数え、坏A・皿Aの無蓋器種が大半を占める。当遺構での器種構成率では坏Bが坏Aに近い程度の高率を保有していることを考えれば、数量的には坏Bに定量の墨書き記入があつてもよかったです。その意味では優先的に無蓋器種を墨書きの対象としていたものと言える。次に、記入される部位であるが、圧倒的に外底面が多く、17／20の率、次いで、底部内面が2、体部内面が1で、体部外面に記入される例はない。身の浅い坏Aと皿Aが大半であるため、記入部位はどうしても底部中心となるが、当資料では内面への墨書きが15%程度存在し、全国的に見て、高い比率と言える。さて、平城宮資料を見ると、内面に墨書きのあるものは全体の5%程度、県内資料では数例確認されるのみで、通常は外底面が一般的で、当資料の内面墨書きの比率の高さが窺われる。また、平城宮資料では内面に墨書きするもののうち、文字数の多いものが3割程度と高く、そのうち習書・戯書と思われるものが多い（平城宮資料のデータは宇野隆夫氏の墨書き土器データベースより算出したものである）。内面の墨書きはその器の継続的な使用によって、次第に文字が消えるという墨書きする箇所としては適さない部位であり、そのようなものに文字数の多い、習書的なものが高い頻度で存在することは、墨書き行為の性格を考えるうえで、興味深い。ちなみに、辰口町徳久・荒屋G地区大溝出土皿Bの習書的な墨書きは内底面に記されている（平川1988）。

次に、墨書きの文字内容であるが、基本的に漢字を記入したものと記号のような单字句を記入したものとに分けられる。漢字は「仁口呂」「仁口万呂」「仁古万呂」と記入された人名らしき複数字句（「仁古万呂」系とする）が3個体ある以外は、「廣」と不明文字で、单字句か複数字句かは



第44図 8世紀後葉～9世紀前葉の墨書き土器 (S = 1 / 6)
 (上段 = 1号溝H-I区, 下段左 = 1号溝A-B区, 下段右 = 4号溝混入出土)

不明である。さて、「仁古万呂」系は基本的に仁の人辺の字体が似ることや2の2字目が古とも読めることから、「仁古万呂」を記入する意識があったものと思われ、3個体のいずれもが能美窯跡群産須恵器であること（他の漢字墨書は南加賀窯跡群産）もそれを裏付ける。ただ、筆の太さや呂の書き方など筆跡は異なる印象を受け、記入者は異なるものと推察する。漢字墨書はいずれもH・I区集中箇所からの出土である。次に記号に類する單字句であるが、数量的にはこれらが主体で、「十」と「口」が存在する。「十」は「十」の單字句の他に「十」を2字連ねたもの、「十」の下に「一」をえたものもあり、これも同種として捉えれば、7個体存在する。いずれも南加賀窯跡群産のもので、大半はH・I区からの出土であるが、A・B区や4号溝混入からも出土している。字体は比較的太字で大きめのものが主体で、15・16の細字タイプは少ない。「口」は4本の直線を四角く囲む書き方の太字大型が主体で、いずれもH・I区から出土し、南加賀窯跡群産に統一される。これに対し、比較的細字小型は現在の口の書き方と同様のもので、正方形形状が整っている。H・I区からの出土ではなく、A・B区と4号溝混入から1個体ずつで、4号溝混入のものは南加賀窯跡群産、A・B区のものは能美窯跡群産である。また、6は「U」字状の上を直線で塞いだようなものであるが、「口」の象形に類似しているため、これも「口」として捉えた。これは南加賀窯跡群産、H・I区の出土である。さて、この「口」の單字句墨書は管見によるかぎり、類例を知らない。「口」は口、穴、出入り口、物の端部の他、土器の個数の単位として使用する場合もあるが、「ぐにがまえ」の可能性もあり、何かの略字と評価することもできる。現段階ではどのような意味の文字であるか判断できないが、「十」ともあわせ、複数字句と思われる漢字墨書に対し、單字句の記号的墨書として区別されるものと性格づけたい。

さて、これら墨書土器の類別を行うと、比較的それらのグループで時期的にまとまる傾向が見られる。まず、箱宮5号窯段階では南加賀窯跡群産で「十」の太字タイプの一群（12～14・18）がこの時期に該当し、坏Bでは4の不明文字のものが該当する。また、能美窯跡群産では1の「仁口呂」がこの段階に併行する和気後山谷2号窯段階に位置付けられる。次の段階に位置付けられるのは、「十」の細字タイプの一群（15・16）と5の「廣」の皿Bで、いずれも南加賀窯跡群産、ニッ梨10-B号窯段階に属するものである。それ以外の「口」太字タイプの一群（7～11）と6の「口」の変形タイプの南加賀窯跡群産、能美窯跡群産の「仁口万呂」・「仁古万呂」、「口」の細字タイプは戸津5号窯段階、能美窯跡群では和気中和気窯段階に属するもので、この段階のものが数量的に最も多いようである。時期的な流れをまとめると、能美窯跡群産の「仁古万呂」系は墨書出現期の箱宮5号窯段階より存在し、戸津5号窯段階まで継続して記入される墨書であると理解される。南加賀窯跡群産では出現期、漢字墨書と「十」太字タイプが存在、ニッ梨10-B号窯段階でも漢字墨書と「十」の單字句墨書の構成ではあるが、「十」は細字タイプへ変わっている。最終段階の戸津5号窯段階では基本的に「口」の單字句墨書で構成され、能美窯跡群産でもタイプが異なるが、「口」墨書が存在する。このように見て行くと、これらの土器群は一括廃棄された資料であるにもかかわらず、3段階の墨書が併存し、产地によっても異なる傾向が見られ、須恵

器を産地から搬入した各段階で、その都度、墨書きされた可能性が指摘できる。つまり、この土器集中箇所が一度の廃棄に伴う資料としての前提に立てば、各須恵器産地から供給された時点で墨書きされたやや特殊な性格を帯びる食膳具類は、四半世紀又は半世紀の間に継続使用され、何かのきっかけで一括廃棄された事になる訳であるが、これには継続的に使用したような痕跡がそれらに残っているかが鍵となるもので、それについて使用痕観察が有力である。

c. 須恵器食膳具の使用痕について

ここでは墨書き土器も含め、H・I区集中箇所とA・B区集中箇所から出土した須恵器食膳具について、内底面と外底面（接地部分）の摩耗痕を観察し、その土器の使用痕状況について述べる。なお、この使用痕観察は木立雅朗氏が以前指摘している（木立1988）、ここで述べる使用痕頻度基準は筆者の主観で設定したものである。なお、この使用痕観察においては、胎土や焼成状態によって使用痕の着き易いものと着きにくいものがあり、その判断が難しかったが、摩耗痕のほとんど着かない予想される体部外面や外底面の接地しない部分を基準として、触感を基本とし、面の光沢等からそれを観察した。ただ、この観察方法は観察者の主観に左右される所が大きく、今後、客観的にそのデータを使用できるような観察方法、使用頻度基準を考案する必要性を感じる。まず、内底面だが、その使用痕の頻度をA（内底全面がツルツルと摩耗した感じで擦り減りが観察できるもの）・B（内底面中央や見込み部分にのみ部分的に摩耗痕を観察できるもの）・C（B同様部分的に摩耗痕が観察されるが、器面が滑らか程度で、使用頻度は低いと判断されたもの）・D（使用痕のつきにくい部位と同様の触感で、摩耗痕を観察できないもの）の4段階に区分し、外底面の接地部分（有台では高台疊付き面、無台では底面中央や底面周縁）の摩耗痕を有・無で区分した。基本的に、内面に使用痕の残るものは外底面に摩耗痕の観察される場合が多く、対応関係にあることが理解されるため、外底面の摩耗痕はここでは省くこととする。

以下に示した表が集中箇所出土の墨書き土器と墨書き以外の須恵器食膳具の使用痕頻度である。また、集中箇所以外の4号溝混入出土須恵器食膳具の使用痕頻度についても掲示した。

使用痕 頻度	「仁古万呂」		漢字		「十」太字		「十」細字		「口」太字		「口」細字		「口」象形	計
	坏A	皿B	坏B	皿B	坏A	皿A	坏A	皿A	坏A	皿A	坏A	皿A		
A	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0(0%)
B	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	2(11%)
C	0	1	0	0	1	0	0	1	1	1	0	1	1	6(33%)
D	2	0	1	1	1	1	0	0	2	1	0	10	10(67%)	

集中箇所出土墨書き土器の使用痕頻度

使用痕頻度	坏A	坏B	皿A	皿B	計		使用痕頻度	坏A	坏B	皿A	皿B	計	
					A	B							
A	1	0	0	0	1	(2%)	A	1	0	0	0	1	(1%)
B	2	2	4	2	10	(19%)	B	21	5	3	2	31	(23%)
C	10	6	5	1	22	(41%)	C	40	15	14	10	79	(60%)
D	14	4	2	0	20	(38%)	D	8	7	3	3	21	(16%)

集中箇所出土須恵器食膳具の使用痕頻度

4号溝混入出土須恵器食膳具の使用痕頻度

まず、集中箇所出土の墨書と墨書以外の食膳具との対比では、墨書土器に全く使用痕の確認されないDが7割近くを占めるのに対し、墨書以外では4割以下に止まり、墨書以外の土器に使用痕の確認される頻度が高まることは確実と言える。これは墨書に比べて、墨書しないものが使用頻度・使用回数が高かったことを物語るもので、異なる使用状態が予想される。ただ、墨書土器でも使用痕の確認されるものは定量あり、比較的摩耗の顕著なものも少量ながら存在し、全く飲食に使用しない土器として性格づけるものではない。また、墨書土器の3段階の時間的幅の保有において課題とした、古手の墨書に使用痕が多く認められるかどうかということでは、そのような傾向はなく、いずれの段階でも同様の使用痕の確認があり、古手の土器が長い間使用されたというような結果は出ていない。次に、集中箇所出土の墨書以外のものと4号溝混入のものとを比較すると、集中箇所の使用痕6割頻度に対し、4号溝混入の使用痕8割半頻度は、使用痕観察のできないものがほとんどないと言ってよいに等しい割合と言え、A・B頻度もやや高く、4号溝混入土器においては頻繁な使用状況が予想される。また、各個体の残存率を見ても、集中箇所は完形又は半完形品が主体であるのに対し、4号溝混入はほとんどが破片であるという、捨てられた時点での個体の破損状態の違いが明確で、これは4号溝混入の土器群があたかも継続的な使用によって破損した状況を想定させるものである。このような4号溝混入の土器群が通常の飲食に使用された土器群と仮定すると、集中箇所の食膳具は墨書以外でもそれよりは使用頻度の少ないか使用回数の少ない状態で捨てられたものと言え、特に墨書土器については日常生活の中で継続的に使用するような食膳具ではなかったことを予想させる。

d.まとめ

以上の各項目の検討内容を以下にまとめ、結びとしたい。

まず、出土状態からは溝内に広く土器が出土するのではなく、土器集中箇所が存在することを指摘した。墨書土器はこの土器集中箇所からのみ出土し、集中箇所での墨書率は3割と比較的高い率であった。さて、これら土器群の器種構成は、甕や土師器煮炊具が少なく、食膳具器種で大半を構成し、赤彩土師器塗も定量存在、貯蔵具としては須恵器長頸瓶が目立つ。この構成は一般日常での生活用具とはやや異なる傾向であり、食膳具を中心にして消費する、主に飲食の場での使用が予想される土器群と言える。その使用頻度は通常の使用的な土器群（4号溝混入）よりは確実に少なく、特に墨書されたものはその7割が内面の摩耗痕がつかない程度しか使用していない。また、この土器集中から出土するものは残存率が高く、通常の使用的な土器群と予想されるものの破片での出土と一線を画する。さて、墨書土器からは3時期（箱宮5号窯・ニッケ10-B号窯・戸津5号窯）に区分でき、それぞれが墨書内容・筆跡と呼応、産地でも対応することを指摘したが、これは上荒屋遺跡や横江庄遺跡の墨書でも同様の傾向が指摘されており（出越・小西1993、吉岡1983）、墨書行為が須恵器産地からの搬入直後に行われたものであることが予想される。つまり、須恵器供給の都度墨書きされたものが溝内の一部の箇所に廃棄されたもので、古い段階の墨書土器に長い期間の使用的な痕跡（内面摩耗痕の顕在）が確認できないことから、土器集中

は一回の廃棄に伴う土器群とは考え難く、数回にわたる土器群の溝内集中廃棄であったと予想する。この墨書きされたものを定量含む土器群は、日常の飲食等に使用される土器群とは別に扱われていたことは使用痕のデータでも明らかであるが、かと言つて、祭祀的行為に伴うような投棄に意義をもたせているものとは違い、飲食の場での使用を前提としていたことは間違いないと考える。ただ、その飲食の場が、特別な飲食、例えば、年中行事や儀礼的行為に伴う飲食の場を想定するもので、特別の儀礼用の食器類として通常は保管、特別の飲食でのみ使用され、数回使用された後、次の食器類の入荷によって、新たなものと入れ替わり、溝の中での特別の空間に集中的に廃棄、それが何回かのうちに土器集中を形成したものと予想する。墨書き行為はこれら全ての土器群に行われたものではなく、そのうちの3割程度という少ない量比ではあるが、墨書きすることによって、儀礼的行為に何らかの付加価値をもたらしていたものと考えられ（ただ、墨書き内容にも漢字による文字墨書きと記号的なものがあり、これらが同一の意図で記されていたとは限らないが、この点については検討不足である）、当時の食膳儀礼様式の一端を示すものと予想する。さて、墨書き土器は北陸では8世紀初頭頃より出現はじめ、8世紀中頃には定量出土するようになるが、食膳具を中心とする大量消費型の食膳具使用形態（様式）が顕在化するのもこの時期からであり、同時に須恵器において食膳具主体の器種構成や宮都的な新器種が出現してくる。つまり、食膳具を中心とする消費の仕方に大きな転換点が存在していることは明らかで、墨書き土器の導入も含め、宮都的な食器様式（使い方・食膳への理念）の導入によって、廃棄された飲食儀礼様式であったと推察する。

以上、当該土器群より見た、墨書き土器を含めての食膳具の使われ方の試案を述べたが、幾多の時期の全ての墨書き土器において該当するものではなく、異なる使用状況の報告も存在しているわけで、ここでの試案は当該資料においてのみの事例報告であることを断っておきたい。

引用参考文献

- 宇野隆夫 1982 「考察の方法」『丹羽周山窯址』京都大学考古学研究室
宇野隆夫 1994 「墨書き土器をめぐって」『石川県立埋蔵文化財保存協会文字資料集成委員会資料』
北野博司 1988 「重ね焼きの觀察」『辰口西部遺跡群I』石川県立埋蔵文化財センター
木田 清 1991 「7～9世紀の加賀地域における須恵器の流通について」『松任市法仏遺跡第7次発掘調査報告』松任市教育委員会
木立雅朗 1988 「須恵器の使用痕について」『シンポジウム北陸古代土器研究の現状と課題』報告編 石川考古学研究会・北陸古代土器研究会
田嶋明人 1992 「古代の土器と中世の土師器」『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』北陸中世土器研究会
出越茂和・小西昌志 1993 「上荒屋遺跡（二）」金沢市教育委員会・上荒屋西部土地区画整理組合
出越茂和・小西昌志 1993 「初期莊園の墨書き土器」『月間文化財』362号 第一法規出版株式会社
平川 南 1988 「石川県徳久・荒屋遺跡出土墨書き土器」『辰口西部遺跡群I』石川県立埋蔵文化財センター
福島正実 1988 「能美窯跡群の概要」『シンポジウム北陸古代土器研究の現状と課題』資料編 石川考古学研究会・北陸古代土器研究会
望月精司 1991 「出土遺物」『戸津古窯跡群I』小松市教育委員会
吉岡康暢 1983 「墨書き土器」『東大寺領横江庄遺跡』松任市教育委員会・石川考古学研究会

第5節 平安時代中期～末期の遺構と遺物

第1項 遺構

当該時期の遺構は、調査区域の南東隅を一部横切る4号溝の他、調査区域北東側を東西に走る2号溝、1・2・4・5号土坑がある。

1. 4号溝（第45図）

調査区域の南東隅を一部かすめる大型の溝で、調査区域内での最深部は確認面から100cm以上を測る。幅は溝の反対側の立ち上がりが検出されていないため、不明であるが、最深部を中心とすれば、少なくとも8mはあったものと予想される。溝の下底面の地山は粒の大きな砂層で、湧水が激しく、調査中に形状が変化し、明確には捉えきれてないが、下底面には2条の溝が走り、2～3面の底面が存在していたものと予想される。覆土は上層が灰褐色系の弱砂質土、中上層が土器を極めて多量に包含する黒褐色系の土、中下層が遺物をほとんど包含しない暗褐色系の土、下層（下底）が淡緑灰白色系の砂層で、下層には木片等が混在している。遺物の出土は主に下層と中上層からで、この2層に挟まれた中下層からはほとんど遺物が出土していない。まず、下層であるが、この層はやや荒目の砂で構成された層で、層の厚さの割りには遺物出土量は少ない。時期は9世紀後葉から10世紀代のもので、特に、南東隅の最深部に堆積する8層からは9世紀後葉の時期のものがまとまって出土している。次に、中上層だが、この層は下層から間層を挟んだ上に存在する10～20cm程度の土層で、腐植土のような黒褐色を呈し、11世紀末～12世紀初頭頃のまとまりをもった土器を極めて多量に包含している。さて、この溝の各層からは8世紀中頃～9世紀前半の土器が混在して出土していることは前項で述べたが、中上層からは他の時期の遺物が混在して出土することはなく、極めて短期間に意識的に埋められた又は堆積した土層と考えられ、土器群も意識的に一括廻棄されたものと考えられる。この溝の機能については、深さ・幅が大きいことと、下層の厚い砂層堆積や湧水から考えて、旧河川とするのが妥当であるが、機能していたのは、下層遺物の9世紀後半～10世紀前半頃までで、以後はどのような性格をもっていたのか不明である。

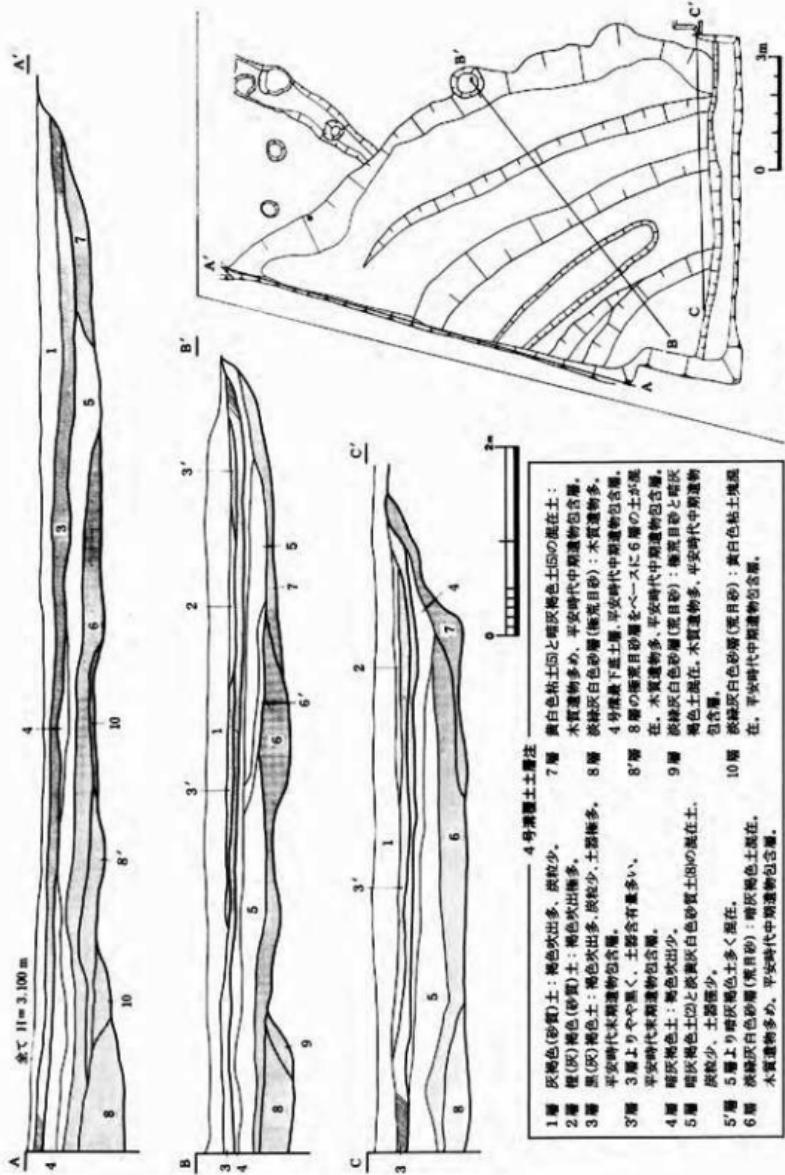
2. 2号溝（第46図）

2号溝は調査区域の北東側を東西に走る溝で、西側の1号溝と重なる部分で止まっている。幅は140cm前後、深さは確認面から20cm前後の浅い溝で、覆土は上・下層とも暗褐色系の土層である。遺物は少なく、10世紀頃の須恵器と土師器が十数点出土している。

3. 土坑（第47図）

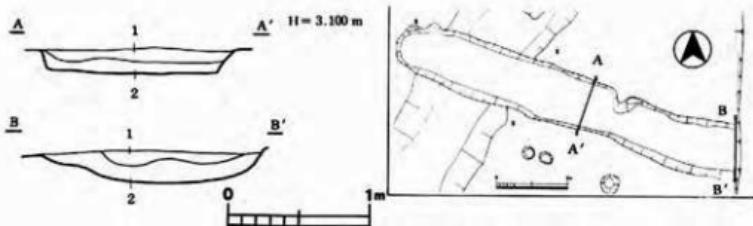
a. 1号土坑

1号土坑は調査区域の中央やや北側に位置するもので、深さ10cm程度の深い土坑である。平面プランは3.3m×2.0mの梢円形で、暗褐色系の砂質土の覆土をもつ。遺物は10世紀頃の須恵器と土師器が数点出土する以外は8世紀後半～9世紀前半の混入遺物である。



4号土壤土壁注
1層 灰褐色(砂質)土：褐色吹出多、炭粒少。
2層 棕褐色(砂質)土：褐色吹出極多。
3層 棕褐色(砂質)土：褐色吹出多、炭粒少、土器碎片多。
4層 平安時代中期遺物包含層。
5層 3層よりやや黒く、土器含有量多い。
6層 平安時代中期遺物包含層。
7層 棕褐色土：褐色吹出少。
8層 棕褐色白色砂質土(灰目砂)：褐色吹出と暗灰色土塊少、土器碎片少。
9層 棕褐色白色砂質土(灰目砂)：褐色吹出と暗灰色土塊少。木質遺物多、平安時代中期遺物包含層。
10層 淡棕褐色白色砂質土(灰目砂)：褐色吹出と暗灰色土塊少。木質遺物多、平安時代中期遺物包含層。

第45図 4号土壤土壁断面図 ($S = \frac{1}{50}$) 平面図 ($S = \frac{1}{50}$)



2号溝覆土土層註

- | | |
|-------------------------|----------------------------|
| 1層 暗灰褐色土：弱砂質、褐色吹出多、炭粒少、 | 2層 單灰(褐)色(弱粘質)土：褐色吹出多、炭粒少、 |
| 黄白色粘土粒多、粘土塊少。 | 黄白色粘土粒・粘土塊多。 |

第46図 2号溝土層断面図 ($S = 1/40$)

b. 2号土坑

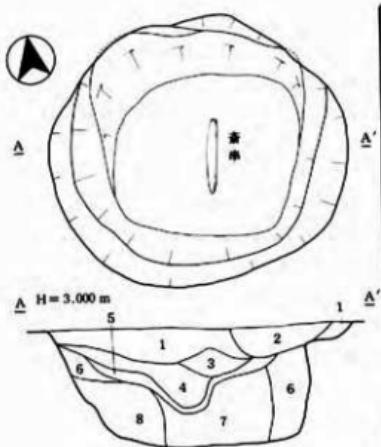
2号土坑は調査区域の中央東寄り、1号掘立柱建物跡と重複して存在するもので、深さ65cmを測り、井戸と予想されるものである。平面プランは上端のみ円形に近いが、中途で隅丸方形となり、下端も同様のプランを呈す。規模は上端が $160 \times 145\text{cm}$ 、中段で 130cm 前後、下端で 110cm 前後を測る。覆土は上層が暗褐色系の弱砂質土、下層中央が黒褐色系の弱粘質土、下層周縁が地山土と黒褐色系土との混在土で、井戸側材が抜き取られているため、やや土層堆積は混じっている部分をもつが、下層周縁は井戸掘り方裏込め土、下層中央は井戸側内の埋め戻し土と推察する。遺物は上層と下層中央から出土し、10世紀代の須恵器と土師器が主体だが、上層より11～12世紀の土師器が数点出土している。また、下底面からは畜串と思われる木製品が1本出土しており、井戸埋め戻し時の祭祀用具と推察する。

c. 4号土坑

4号土坑は調査区域の南西側に位置するやや小型の土坑で、平面プランは隅丸方形、規模は上端で $79\text{cm} \times 88\text{cm}$ 、下端で $65\text{cm} \times 75\text{cm}$ 、深さ63cmを測る。覆土は単純レンズ状堆積で、上層が暗褐色系、下層が黒褐色系を呈し、下層はやや粘質を帯びる。遺物は中央下底から柱状高台をもつ完形の土師器小皿と土師器塊A1点、須恵器甕胴部破片1点、中層壁際から完形の柱状高台をもつ小皿1点が出土しており、11世紀後半～12世紀前半頃のものと予想される。素掘りの井戸か。

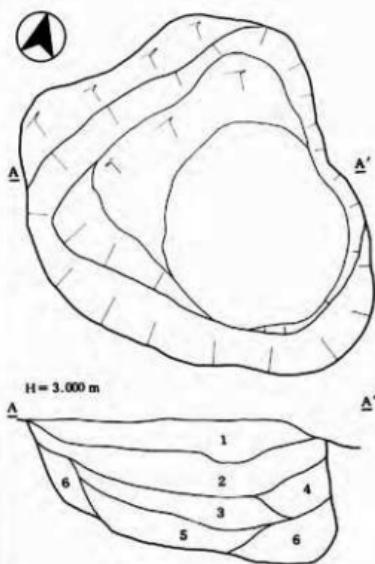
d. 5号土坑

5号土坑は調査区域の南西側に位置する、直径180cm程度の大型不整円形の土坑で、深さは76cmを測る。細かな砂地の地山に掘り込んでいるため、壁面が崩れやすく、形が整っていないが、円形のものであったと予想する。覆土は上層が暗褐色系、下層周縁が掘り方裏込め土、下層中央が黒褐色系粘土を呈し、廃棄時に井戸側を抜き取ったような土層堆積を示す。遺物は大半が上層からで、11世紀後半～12世紀代の土師器が主体的である。下層からは9世紀後葉～10世紀前半の須恵器と土師器が極少量出土している。



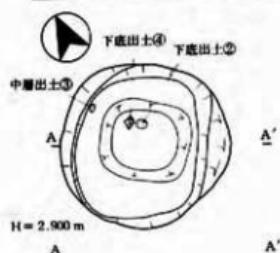
2号土坑覆土土層註	
1層	暗褐色土：黃白色砂質土粒、塊多、炭粒少。
2層	青灰白色砂土：塊亂土。
3層	暗褐色土と黃白色砂質土の混在土。
4層	暗褐色土：褐色吹出多、黃白色砂質土粒、塊多。
5層	暗褐色土：褐色吹出多。
6層	黑灰(褐)色土と黃白色砂質土との混在土。井戸掘方土。
7層	黒灰(褐)色土：青灰白色砂質土少。炭粒多め、木質遺物多。井戸側内埋土(?)
8層	黒灰(褐)色土と青白砂質土との混在土。井戸掘方土。

(2号土坑)



5号土坑覆土土層註	
1層	暗褐色土：黃土粒少、炭粒少。
2層	黒褐色土：炭粒少。
3層	(暗)灰褐色土：褐色吹出少、炭粒少。
4層	黒褐色土と黃白色砂質土との混在土。井戸掘方土？
5層	黒灰(褐)色土：褐色吹出少、炭粒少、井戸側内埋土？
6層	黒灰(褐)色土と黃白色砂質土との混在土。井戸掘方土？

(5号土坑)



(4号土坑)

4号土坑覆土土層註	
1層	暗灰褐色(砂質)土：褐色吹出少、黃白色砂質土塊多、炭粒少。
2層	暗灰褐色土と黃白色砂質土との混在土。
3層	黒灰(褐)色土：黃白色砂質土塊少、炭粒少。



第47図 2号土坑・4号土坑・5号土坑平面図・土層断面図 (S = 1/50)

第2項 遺物

1. 4号溝出土遺物

4号溝より出土する遺物は9世紀後葉～10世紀前半に位置付けられる下層の遺物群と11世紀後葉～12世紀前半に位置付けられる中上層の遺物群とにはほぼ分けられる。

《4号溝下層出土遺物》(第48～52図)

一部6層などの遺物を含むが、極少量で、大半は南東隅の一段下がった溝底から出土したものである。出土量は遺物箱で7箱程度と、多くはないが、比較的まとまった遺物群と言える。遺物は須恵器が2箱半、土師器が4箱、土鍵や木製品が半箱で、下底層より多く出土する木質遺物の大半は未加工の自然木である。以下に、須恵器・土師器・その他の遺物の順で述べることとする。

a. 須恵器

当遺構下底より出土する須恵器は、能美窯跡群産の可能性のあるCE類が極少量存在する以外は、ほとんど南加賀古窯跡群産のC類である。ただ、能登高松・押水窯跡群産の可能性が高い、F類(2～5mmの石英状砂礫を目立って含むもので、素地は極細かな砂粒の集合体のようなサラサラの質感をもつ。発色は青色の薄い灰色系統)が数点出土しており、小松の消費地では比較的珍しい。当該時期は地元供給基幹窯の一つである能美窯跡群が衰退・消滅の状況にあり、それが南加賀古窯跡群の一局供給化に繋がるものであるが、興味深いのは能登産の須恵器が少量でも存在することで、当該時期の須恵器流通の実態を如実に物語る資料と言える。

器種は第23表で上げた通り、壺B・壺A・皿A・皿C・塊A・塊Bの食膳具、広口鉢の調理具、長頸瓶・双耳瓶・甕の貯蔵具が確認でき、その量比率は食膳具主体の構成を示す。まず、食膳具の中では壺盤形器種が定量存在するものの、壺B・皿Aは極少量で、壺Aのみ目立つ器種である。主体は塊皿形器種であり、塊Aが2割、塊Bが2割半、皿Cが0.5割で構成される。調理具では広口鉢の定量存在、貯蔵具では蓋・瓶類の長頸瓶と双耳瓶への器種淘汰傾向が見られる。

胎土	壺B		壺A	皿A	皿C	塊A	塊B	広口鉢	長頸瓶	双耳瓶	甕		胎土計
	蓋	身									口縁	胴	
C類	1	2	14	4	4	14	20	3	5	4	1	21	93
CE類	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	2
F類	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	1	1	4
器種計	2		14	5	4	15	20	3	7	4	2		胎土總計99
(%)	(2.6)		(18.4)	(6.6)	(5.3)	(19.7)	(26.3)	(4.0)	(9.2)	(5.3)	(2.6)		器種總計76

第23表 須恵器器種構成・胎土構成表(数値は個体識別個体数)

以下に、各器種ごとに説明を加える。

まず、壺盤形器種であるが、いずれも底部切り離し回転ヘラ切り痕を残すもので、ヘラ削りは認められない。壺Bは蓋のみ図示した。1は無鉢のもので、深身無台壺(壺E)に伴う蓋と思われる。壺A(2～4)はいずれも口径12cm台のもので、底部やや薄手、体部外傾器形を呈す。皿Aで図示したものは8のみで、口径17cm、器高1.5cmの極めて低平な器形を呈す。

塊皿形器種は底面糸切りによるもので、塊類の底面～体部下半にヘラ削りを施すものが少量確

認される。皿Cは口径13cm台のもので、あまり深身でないタイプ。壺Aは口径12.5~14.5cmを測るもので、径高指数から27程度の深身10・13と25台の11・12に分けられる。前者はやや底部大きめで、13には体部下端をヘラ削り、後者はやや底部小型である。壺Bは底部破片が主で、口径の分かれるものが数点しかないが、底部の大きさから台径8cm程度の大型法量と6~7cmの通常法量とに分けられる。高台は比較的しっかりと断面方形状に踏ん張るものが主体的である。

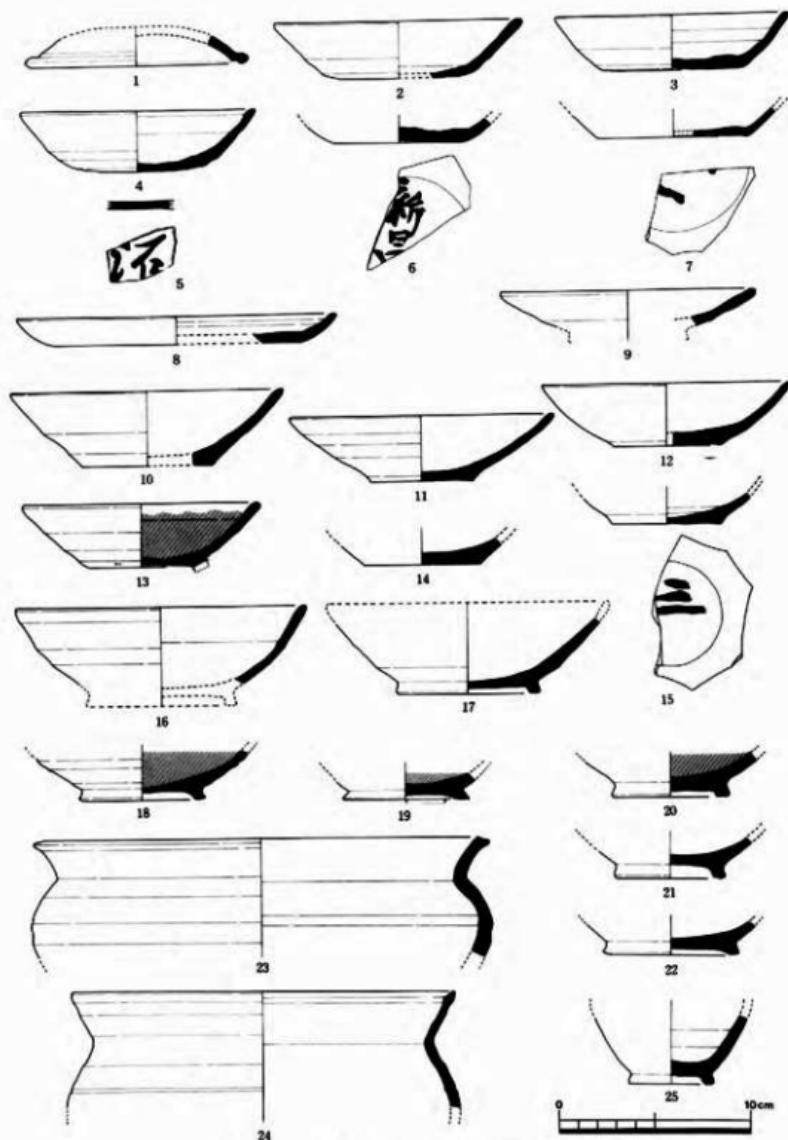
これらの食膳具には墨書きするものが定量存在し、判読不可能なものも數えれば、11点ある。記入部位は1点のみ体部外表面がある以外は全て外底面に記され、器種は壺Aが多く、壺が2点ある以外は全て壺Aである。墨書き内容は6の「新日口」と15の「三ヶ」以外は判読不可能であるが、記号よりも文字墨書きが多いものと予想される。また、食膳具には内面にススのような付着物の見られるものが定量あり（図では斜線のスクリントーンで表示）、器種は壺類のみに限られる。内面底部付近が顯著で、健芯油痕のようなタール状のものではなく、比較的薄く広い範囲で見られ、煮炊具のようなスス痕に類似している。

調理具は広口鉢のみで、口径20~25cm程度の中型のものである。底面糸切りのもので、体部下半外面には手持ちヘラ削りが施される。

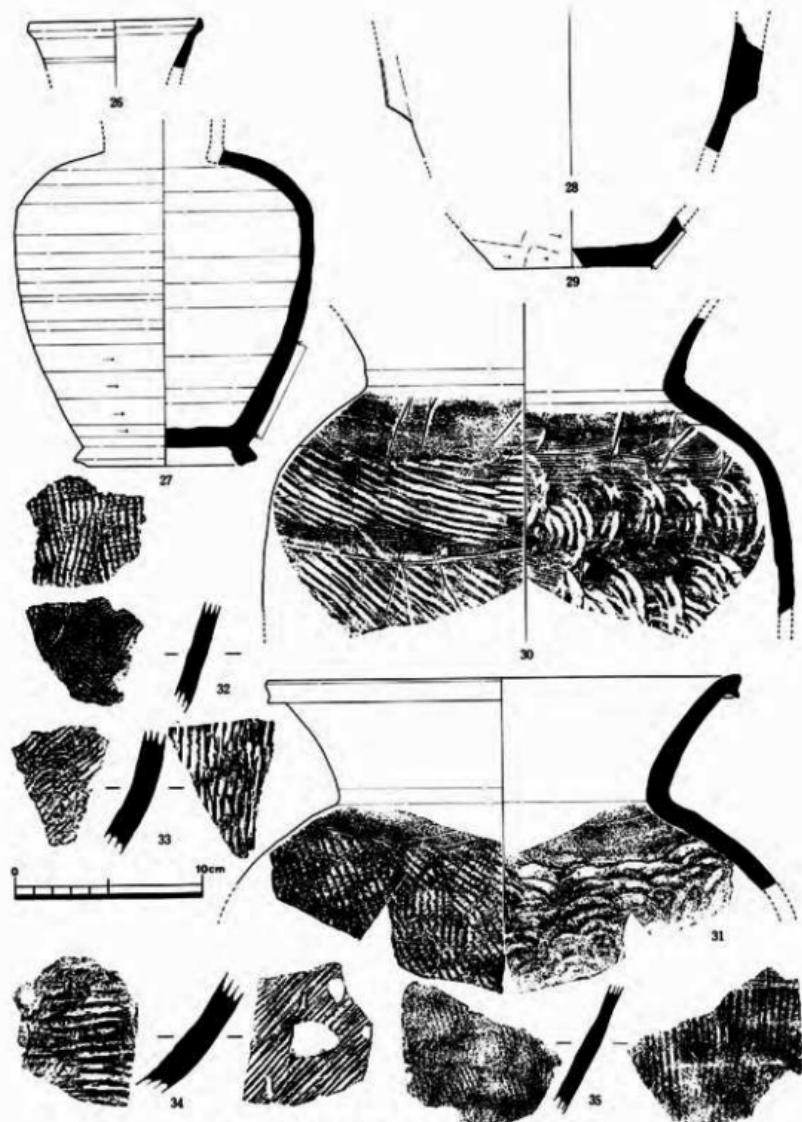
貯蔵具は長頸瓶・双耳瓶・甕の基本3器種にはほぼ淘汰されるもので、双耳瓶は板状の耳が下にやや垂れるタイプ、長頸瓶は口縁部外反のそれほど顯著でないタイプ、甕は胴部砲弾形に延びる報告書戸津古窯跡群IIで甕Bとしたタイプが出土している。胴部叩き・当て具文様については、外面は8世紀後半~9世紀前半と同様の文様であるが、内面当て具については以前まで主体的であったD a類、D b類、D c類が減少し、底部専用当て具として一部使用されていた平行線文（木目の見られないH e類と年輪状木目の見られるH f類が存在）が主体的となる。また、新しい文様として、無文当て具が定量出現する。この無文当て具は木目の見られない無文当て具の他、年輪状木目のみ見られる木製無文当て具S D類、柾目状木目のみ見られる木製無文当て具S H類があり、この中ではS D類が最も多い。また、内面にナデを施すものが多く、一部ナデを施すものは5割程度、完全にナデ消しものは2割半程度存在する。これらはいずれも南加賀古窯跡群産で

番号	器種	法量	粘土番号	器種	法量	粘土番号	器種	法量	粘土番号	器種	法量	外叩+内当	粘土		
1	壺蓋	口11.4	C	11	壺A	口13.9, 高3.5	C	19	壺B	台6.7	C	29	広口鉢	底8.3	
2	壺A	口13.0, 高3.0	"		底5.5	"		20	"	台6.2	"	30	中甕	底16.8, 脚28.2	
3	"	口12.2, 高2.9	"	12	口13.0, 高3.3	"	"	21	"	台5.8	"	"	外He+内Da	"	
4	"	口12.6, 高3.2	"		底5.6	"		22	"	台7.1	"	31	口25.2, 脚6.3	"	
5	"	-	"	13	口12.6, 高3.4	"	23	広口鉢	口24.4, 体24.6	"	"	外Ha+内Da	C		
6	"	-	"		底5.6	"	24	"	口20.6, 体21.0	"	32	甕片	外Ha+内SD	"	
7	"	-	"	14	底6.2	"	25	長頸瓶	台4.4	F	33	"	外He+内Hf	"	
8	皿A	口17.0, 高1.5	"	15	底5.7	E	26	"	口9.2	C	34	"	外He+内He	"	
9	皿C	口13.3	"	16	壺B	口15.5	C	27	"	脚16.0, 台9.8	F	35	"	外Ha+内SH	"
10	壺A	口14.5, 高4.0	"	17	"	台7.6	"	28	"	脚16.8	F	36	"	外Ha+内Heナデ	"
		底7.0	"	18	"	台6.8	"				C				

第24表 4号溝下層出土須恵器観察表



第48図 4号墳最下底出土須恵器(1)(S=1/2)



第49図 4号溝最下底出土須恵器(2)(S=1/2)

あるが、F類とした高松・押水窯跡群産の須恵器が3点出土している。長頸瓶2点と壺1点で、長頸瓶は通常法量27と25のミニチュア品がある。27は南加賀古窯跡群産に比べ胴部張りが弱く、縦長で、底面には壺形焼台の痕跡が見られない。壺(30)は胴部径28cm程度の中壺サイズで、やや胴長形を呈す。頭部のすぼまりはさほどなく、外面He叩き、内面Da類当て、カキ目及び沈線が見られる。

外側叩き+内側当て具															計
Ha+Da	Hc+Db	He+Db	He+Dc	Ha+SD	He+SD	Ha+He	He+He	He+He	Ha+Hi	He+Hi	Ha+SH	He+無	Ha+ナテ	He+ナテ	
1	2	3	2	3	4	5	1	5	1	2	1	1	4	7	42
第25表 C類胎土須恵器壺胴部叩き・当て具文様の構成(数値は原体同定個体数)															

b. 土師器

土師器は食膳具と煮炊具の他、匣状器形のものが數個体出土している。食膳具は外側のみ赤彩するもの、内面黒色・外側赤彩のもの、内面黒色のもの、赤彩も黒色もされていない生地のままの土師器の4種に分けられ、器種は皿C、壺A、壺Bが確認される。個体数は多く、須恵器とはほぼ同量程度存在し、煮炊具は長壺、中小壺、鍋で、これも比較的出土量が多い。

まず、土師器の胎土について述べる。土師器胎土は8世紀中頃～9世紀前半と同様のa系統とb系統が存在するが、新たにc系統胎土が加わり、食膳具では、細かで均質な砂粒を多く含み、薄肌色を呈するa-1(砂粒の大きさは同じだが、量が特に多いものをa-1'とする)と砂粒をほとんど含まず、粘土質素地の緻密な胎土で、明るい薄肌色を呈するb-1、素地はaとbの中間的なもので、砂粒が少なく、若干粉っぽく、赤色酸化物を僅かに含む、黄色味帯びた灰白色を呈するc-1の3つに分けられる。煮炊具ではb系統、c系統は確認できず、a系統に統一され、食膳具と同様のa-1とa-1'胎土に1.0mmの粒のやや大きめな砂粒を含むa-2で構成される。これらの胎土を分類し、器種別に示したもの

胎土	赤壺A	黒壺A	素壺A	赤黒壺B	黒壺B	素壺B	赤黒壺C	小中壺	長壺	鍋	胎土計
a-1	2	1	3	9	1	0	7	8	9	4	44
a-1'	0	0	18	0	2	7	0	3	7	1	38
a-2	0	0	0	0	0	0	0	3	3	0	6
b-1	0	0	0	4	0	0	0	0	0	0	4
c-1	0	0	0	0	7	0	0	0	0	0	7
器種計	2	1	21	13	10	7	7	14	19	5	99

黒壺にのみ見られ、c系 第26表 4号構下底出土土師器胎土構成表(数値は口縁部個体識別数)
統は内黒壺にのみ、また、生地の土師器壺にはa-1'が多い。煮炊具ではa-1が目立ち、a-2はかなり少なくなる。

以下に、食膳具と煮炊具の説明を行う。

食膳具については、生地のままの土師器が最も多く、45%程度を占め、次いで、外赤内黒土師器が3割強、内黒土師器2割弱で、外側赤彩の壺は極少量である。いずれも底部糸切りのもので、体部下位に回転ヘラ削りを施すものが定量存在する。まず、外赤土師器であるが、内面にはヘラ

磨きがなく、胎土も通常のもので、精製品の感じはない。器種は塊Aが確認できるが、塊Bも存在するものと予想する。やや特殊なものとして底部と体部下位に円孔を穿った61がある。外赤内黒土師器は塊B(37~41)と塊C(59~60)のみ確認できるもので、内面に丁寧なヘラ磨きを施し、胎土も比較的良好な精製品の感じを受けるものである。高台の作りは比較的高い断面方形状に踏ん張る。内黒土師器は1点の塊A以外は塊B(42~46)のみで、外赤よりも高台低く、作りもやや雑で、内面のヘラ磨きが簡略化の傾向を見せ始める。生地土師器(47~58)は塊Aと塊Bがあるが、主体は塊Aで、3/4程度の割合。口径は前三者よりもやや小ぶりとなり、器肉もやや薄手、塊Bの方は高台が低い三角形状となる。

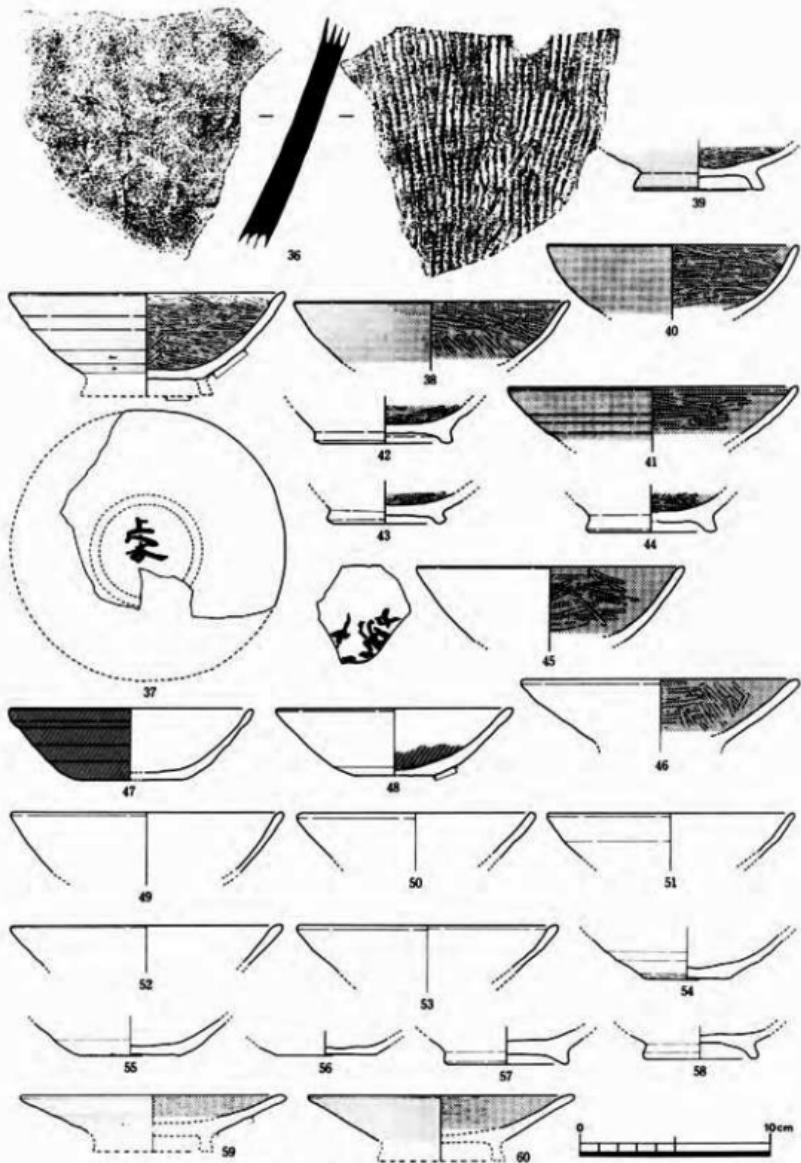
以上の食膳具には墨書したものが2点あり、底面に「上家」と記した37と体部外面に判読不能の複数字句記した45がある。また、須恵器食膳具と同様、内面にスス痕の見られるものが11点あり、これについても斜線のスクリントーンで範囲を示した。このスス痕のものはいずれも生地土師器の塊Aのみに付いている。

煮炊具は、長甕、中小甕、鍋が存在し、長甕は口径20cm前後、胴部叩き出し成形による丸底を呈する。口縁部器形は、口縁端部の上端が直立するものと強く外反するものがあり、後者がやや主体的である。調整は胴部上半ナデ、下半は叩きで、叩き・当具の文様については第27表に示したとおりである。文様構成は須恵器甕と良く類似しており、この時期出現してくるSD類が定量存在することと内面He類が定量存在すること、内面ナデ消しが半数近く存在することが特徴として上げられる。次に、小中 第27表 長甕叩き+当具文様の構成(原体同定個体数)甕についてだが、底部切り離しはいずれも糸切りで、底径6~7cm程度と胴部から底部へとすぼまる器形を呈す。口径は12~13cmを測る中と9cmを測る小があり、口縁部器形は長甕と同様である。胴部下半に厚くススの付着したものが多く、内外面で見られる。鍋も口縁部上端の著しく外反する器形のもので、口径は20~30cm程度である。

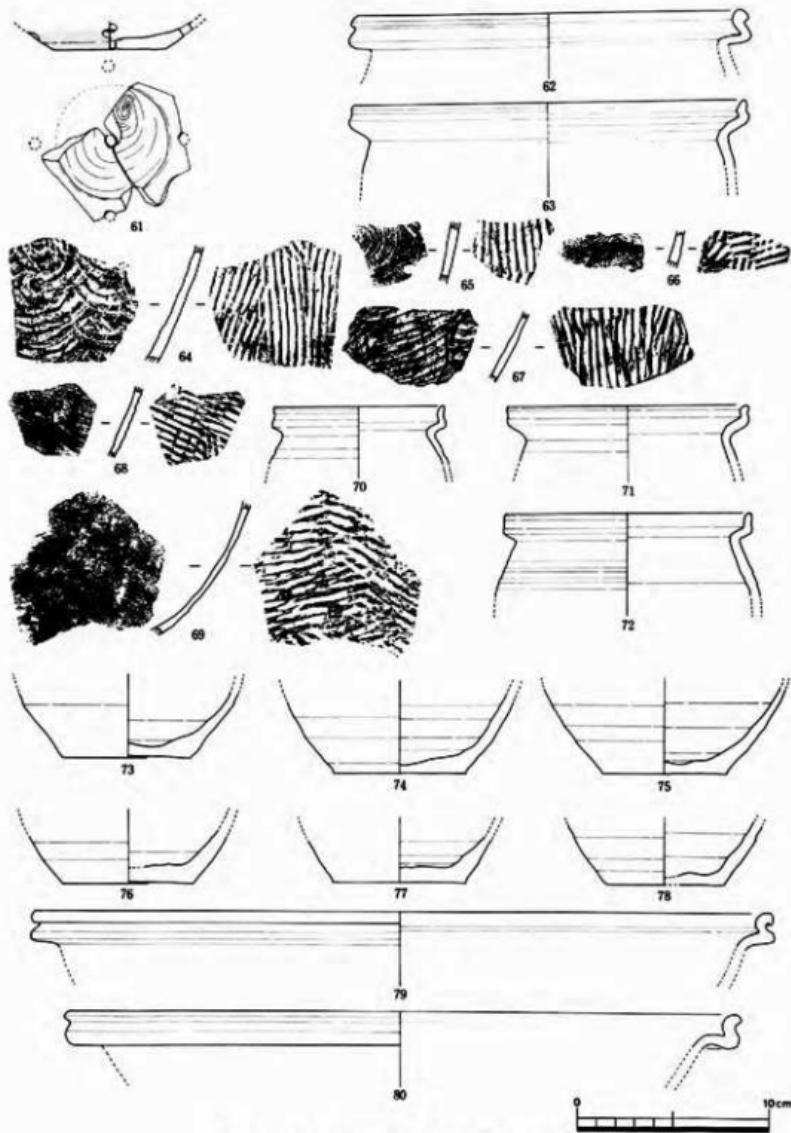
外面叩き+内面当具							計
Ha+Dc	Ha+SD	Ha+He	He+He	Ha+ナデ	He+ナデ		
5	8	3	2	7	8	33	

番号	器種	法量	胎土	番号	器種	法量	胎土	番号	器種	法量	胎土
37	赤塊B	口14.4	a-1	48	生塊A	底4.3	a-1	61	赤塊A	底6.0	a-1
38	#?	口14.4	#	49	生塊A	口14.2	a-1	62	長甕	口21.0	#
39	#	台6.8	#	50	#?	口12.6	a-1	63	#	口20.6	#
40	#?	口13.1	b-1	51	#?	口13.0	#	64	#	外Ha+内Dc	#
41	#?	口15.2	#	52	#?	口14.2	#	65	#	外Ha+内SD	#
42	黒塊B	台7.0	a-1	53	#?	口13.7	#	66	#	外Ha+内SD	#
43	#	台6.3	#	54	#	底4.8	#	67	#	外Ha+内He	#
44	#	台6.8	c-1	55	#	底5.2	#	68	#	外He+内He	a-1
45	#?	口14.0	#	56	#	底5.2	#	69	#	外He+内ナデ	a-1
46	#	口14.2	#	57	生塊B	台6.4	#	70	中小甕	口9.0	#
47	生塊A	口12.8,高3.8 底5.6	a-1	58	#	台6.0	#	71	#	口12.5	#
				59	赤塊C	口14.0	a-1	72	#	口12.7	a-2
48	#	口12.8,高3.6	a-1	60	#	口14.1	#	73	#	底6.8	a-1
								85	#	口12.4	#
								86	#	口10.6	a-1

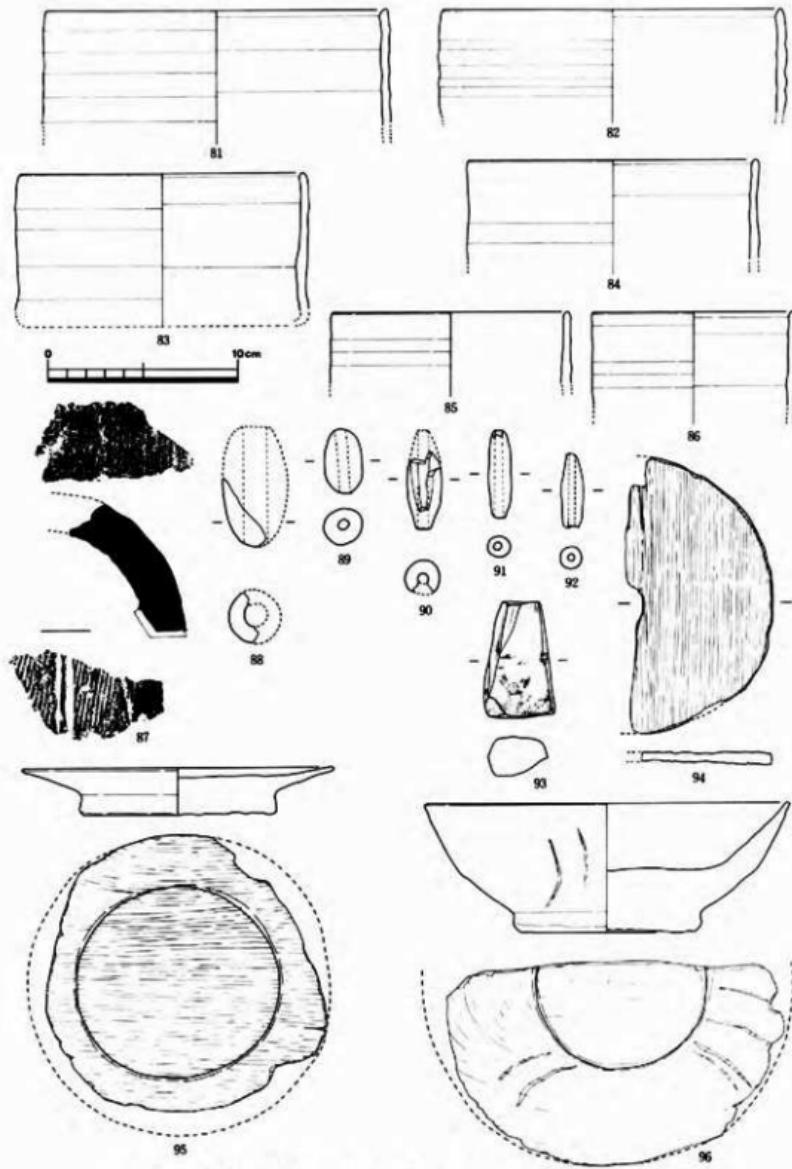
第28表 4号溝下層出土土師器観察表



第50図 4号窯最下底出土須恵器(3)(36のみ)・土築器(1)(S=16)



第51図 4号溝最下底出土土器 (2) ($S = \frac{1}{3}$)



第52図 4号溝最下底出土土師器(3)(81~86)・その他の遺物(S=16)

これら食膳具、煮炊具の他に 81 ~ 86 に上げた匣状器形のものがある。これは底部回転ヘラ切りで、極めて器内の薄い、円筒形をしており、体部にはロクロヒダが顕著に残る。南加賀古窯跡群の土師器窯で良く出土する器形のもので、時期は 9 世紀後葉より土師器生産の終焉まで存続し、須恵器窯でも 10 世紀以降少量見られるようになる。消費地では検出例が皆無に近かったことや窯跡での出土の仕方が窯道具（匣鉢）を予想させたこと、そして、土師器質のものにヘラ切りを使うという特殊性から、これまで窯道具として考えてきたが、当遺跡で出土するものは一部外間にススの付着しているものが 2 点あり、煮炊きに使われていた可能性があるもので、さらに、口径に大中小があることも、容器の可能性を感じさせる。当遺跡の事例からすぐさま製品と決定づけることはできないが、窯道具の用途については再考の必要性を感じる。

c. その他の遺物

その他の遺物としては瓦、土錐、砥石、木製品が出土している。瓦（87）は丸瓦で、凹面の布目が薄く、糸切り痕のみ目立つ。凸面はナデで、胎土は南加賀古窯跡群産である。土錐は全て土師質の管状土錐で、太い大型の 88 と細長い 91・92、中藤らみ形の 90、長軸の短い 89 がある。胎土はいずれも a 系統。93 は小型の砥石と思われるもので、石材は乳白色の滑石片岩である。94 ~ 96 は木製品、94 は直径 15cm 程度の曲物底板、95 は口径 16.5cm、底径 10.4cm、器高 2.5cm の皿、96 は口径 19.4cm、底径 10.0cm、器高 6.9cm の椀である。いずれも漆の塗布痕は認められず、白木製品と思われる。皿・椀とともに底部厚く、ベタ高台風で、皿は体部直線的に開き、椀はやや深身の器形を呈す。

《4 号溝中上層出土遺物》(第 53 ~ 56 図)

中上層から出土する遺物は出土量が多く、遺物箱で 11 箱あり、そのほとんどが土師器食膳具である。土師器食膳具以外では土師器の鉢と羽釜、灰釉陶器、中国製磁器、土錐が出土している。

a. 土師器

土師器は食膳具が大半で、それ以外では鉢が 7 個体、羽釜が 1 個体が出土するのみである。食膳具は全部で、1281 個体確認でき、その量比率は表に提示してある。

まず、胎土であるが、9 世紀後半～10 世紀前半の土師器胎土と比較すると、同質のものとしては砂粒多く含まれる a 系統の土が少量見られる (a-1') 以外は、異なる胎土特徴をもつもので占められる。a 系統以外を大別すると、2 種類に分けられ、この胎土を d 系統・e 系統とする。d 系統は胎土素地がやや粉っぽい感じを受けるものの、0.3mm 程度の比較的均質な細砂粒を多く含むもので、僅かに肌色味を帯びた (黄) 灰白色を呈し、比較的焼成良である。これに対し、e 系統は胎土素地が d 系統よりも粉っぽく、器面のトロつく感じで、焼きが甘く、砂粒をほとんど含まず (e 系統の内、砂粒の目立つものを e' とする)、赤色酸化粒を含むものが定量存在する。発色は薄い肌色系統であるが、概して赤味強く、橙褐色を呈するものも定量ある (特に赤色の強いものや赤色酸化粒の多いものは e 赤とする)。以下に、食膳具と鉢・羽釜の説明を加える。

食膳具は塊と小皿で、底部器形により、塊は無台の塊 A と輪高台の付く塊 B、柱状高台状底部

の塊Cに分けられ、小皿は無台の小皿Aと柱状高台状底部の小皿Cに分けられる。

塊Aは、さらに底径4~5cm程度で底部から体部へやや内湾気味に立ち上がる底部薄手のa類と底径5~6cm程度で厚手底部から体部へ外傾気味に開くb類、厚手底部から体部との境が段状となるc類に分けられる。a類(1~11)はやや器高の低いものが多く、ロクロヒダの頗著なもので、内底面に渦巻き状調整痕の頗著なものが定量ある。胎土はa-1'が1割弱、d系統が3割存在する以外はe系統で占められるが、a-1'やd系統のものはやや古く位置付けられる可能性が高い。b類は体部外傾器形(12~25)を基本とするが、体部内湾気味に立ち上がるもの(26~29)が定量あり、また、内面黒色のもの(33)が少量確認される(d系統胎土のみで確認)。胎土はe系統が8割を占め、d系統が2割弱で構成される。c類(30~32・34~36)は底部がb類より厚いが、柱状高台状ほど厚くないので、d系統胎土のみ内面黒色が見られる。胎土はd系統が多い。塊Aで主体を占めるのはb類で65%、次いでa類、c類は極少量である。内面黒色の率は3%弱。

塊Bは、高台の器形から、断面方形状に踏ん張るa類(37~43)と極めて低い断面三角形状の(台高5mm以下)b類(44~63)、足高高台のc類(64~67)に分けられ、b類が9割以上の圧倒的多数を占める。a類は底面に糸切り痕を残すものが多く、胎土はa-1'主体で、この中ではやや古く位置付けられるものである。b類は底面の糸切り痕が全てナデ消されており、a類とは明瞭に識別できるもので、内面黒色のものが6割を占め、生地のものを瘦いでいる。胎土はほぼd系統で占められ、極少量e系統もあるが、これは生地のもののみである。c類は高台作りや底面ナデ消しがb類と良く似ており、b類高台の足高タイプのものである。胎土はd系統主体。全体的に胎土はd系統主体で構成され、塊Aで主体を占めたe系統は1割程度しか存在しない。

塊C(68~79)は、底径5~7cm程度、底部厚2cm程度を測るもので、内底面に渦巻き状ナデ痕、外底面に小孔の空くものが定量存在する。⁽¹⁾ 胎土の主体はe系統で8割を占め、2割d系統が存在するが、このd系統の大半は内面黒色のものである。

小皿A(98~120)は口径8cm程度のやや小型な115・120も存在するが、9cm台が主体で、底径は4cm前後を測る。器形は底部から体部へ開く器形を基本とするが、やや深身のものと浅身のものとがある。内底面に渦巻きナデ痕

を残すものが多く、半数程度存在する。

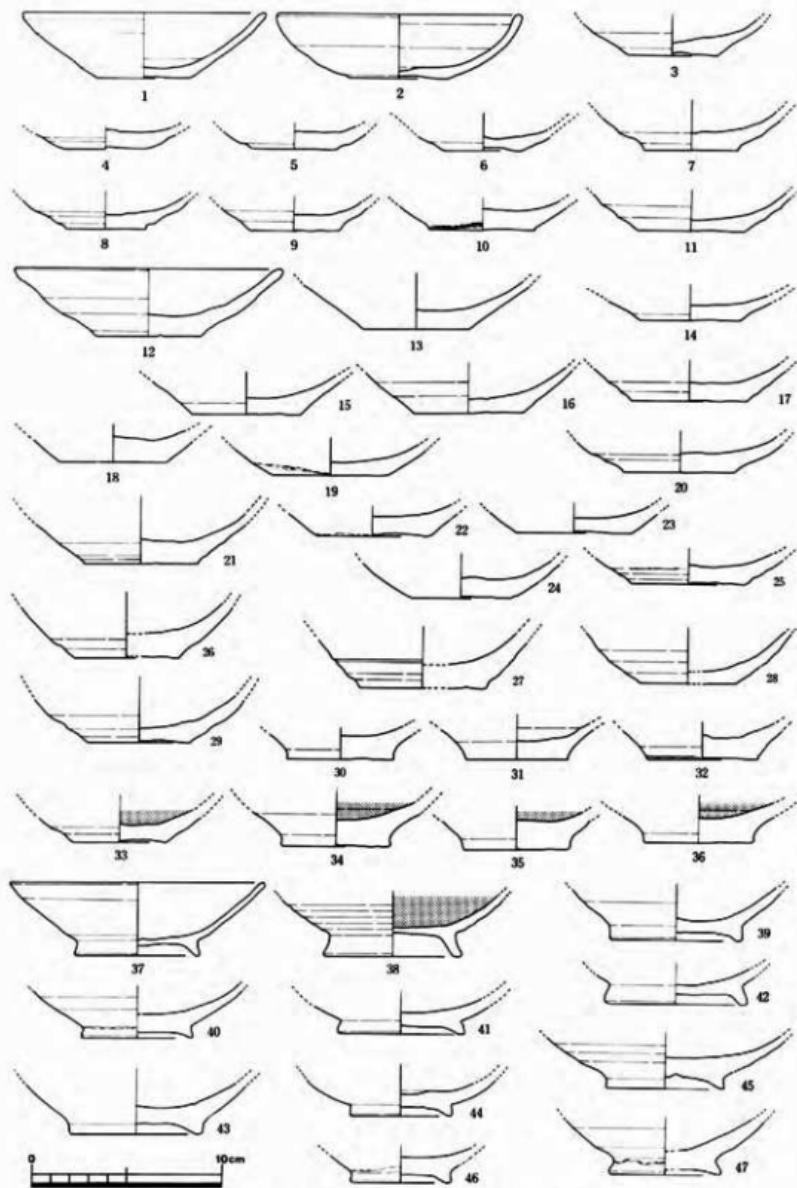
胎土はe系統が9割の圧倒的主体を占め、その中でも赤を意識したe赤が半数以上を占める。

小皿Cは体部器形から、浅い皿状となるa類(80~89)とやや塊形に立ち上がるb類(90~97)に分けられる。

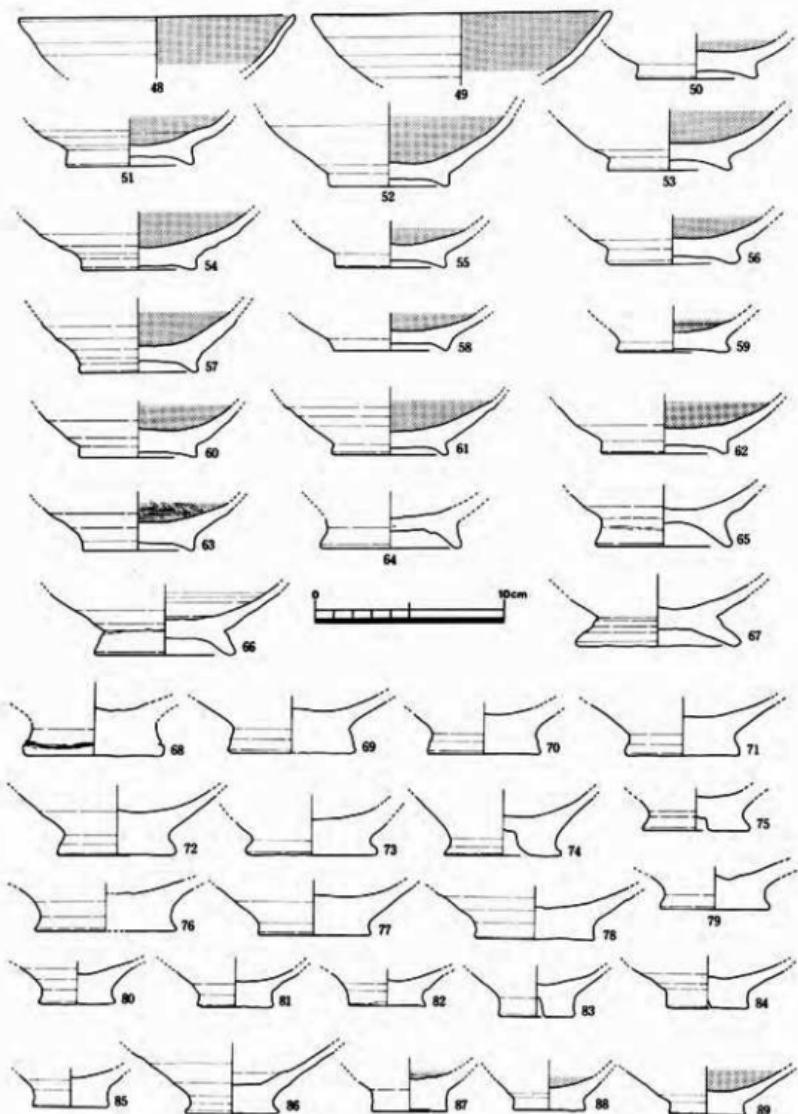
量比率はほぼ同量であるが、a類はe系統胎土主体、b類はd系統胎土主体

胎土	塊A			塊B			塊C			小皿A		小皿C		胎土計
	a	b	c	a	b	c				a	b			
a-1'	10	5	0	11	0	0	0	0	0	0	0	0	0	26
(黒色)				(2)										(2)
d	42	55	11	3	247	8	17	34	3	42	462			
(黒色)		(10)	(3)		(166)		(12)					(11)	(191)	
e	86	255	18	0	29	4	66	275	48	12	793			
(e赤)	(14)	(83)	(4)	0	(2)		(18)	(140)	(4)	(2)	(267)			
器種計	138	315	29	14	276	12	83	309	51	54	1281			

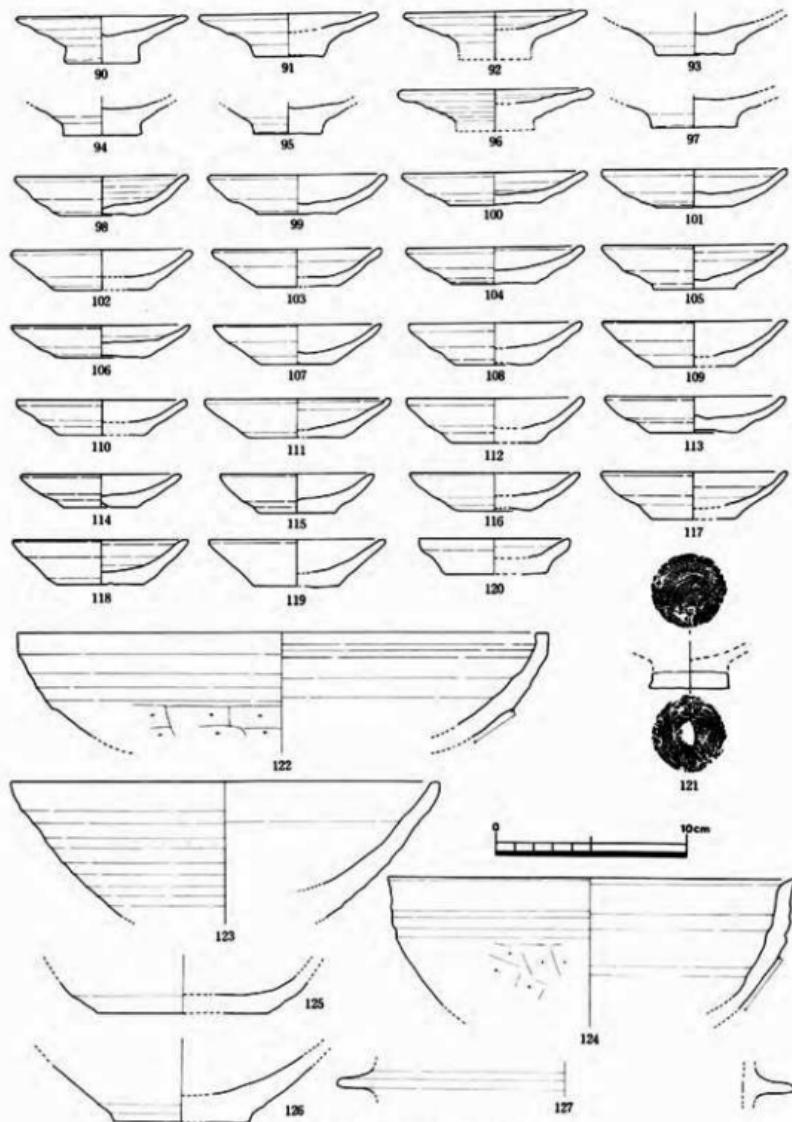
第29表 土師器食器胎土別器種構成(数値は底部破片個体識別数)



第53図 4号溝中上層出土遺物(1) (S=1)



第54図 4号溝中上層出土遺物(2) (S=½)



第55図 4号溝中上層出土遺物(3) (S=1/4)

番号	器種	口/高/底	底孔内溝	胎土	番号	器種	口/高/底	底孔内溝	胎土	番号	器種	口/高/底	底孔内溝	胎土	
1	塊A a	12.8/3.5/4.8			a-1'	43	塊B b	-/-7.0		d	85	小皿Cb	-/-4.0		e
2	"	12.8/3.4/5.2			" 44	"	-/-5.2			" 86	"	-/-5.0		e'	
3	"	-/-4.6	○	d	45	"	-/-6.2	○	d'	87	" 黒	-/-4.0	○	d	
4	"	-/-4.2	○	"	46	"	-/-5.3		d	88	" 黒	-/-4.0		"	
5	"	-/-4.5	○	"	47	"	-/-5.9		"	89	" 黒	-/-4.0		"	
6	"	-/-4.0		"	48	" 黒	14.8/-/-		"	90	小皿Ca	9.2/2.5/4.0		e	
7	"	-/-4.9	○	"	49	" 黒	15.8/-/-		"	91	"	9.4/2.2/3.8		"	
8	"	-/-4.3	○	e赤	50	" 黒	-/-6.3		"	92	"	9.7/-/-		"	
9	"	-/-4.6	○	e	51	" 黒	-/-6.8		"	93	"	-/-4.0		"	
10	塊A b	-/-5.6		e赤	52	" 黒	-/-6.4		"	94	"	-/-4.2		"	
11	"	-/-5.4		"	53	" 黒	-/-6.4		"	95	"	-/-3.6	e赤		
12	"	14.2/3.6/5.4		"	54	" 黒	-/-6.0		"	96	"	10.4/-/-	d'		
13	"	-/-5.5		"	55	" 黒	-/-6.0		"	97	"	-/-4.4	○	"	
14	"	-/-5.2	e'		56	" 黒	-/-7.0		"	98	小皿A	9.2/2.1/4.4	○	e赤	
15	"	-/-5.8		e赤	57	" 黒	-/-6.3		"	99	"	9.4/2.1/4.2	○	e	
16	"	-/-5.8	○	"	58	" 黒	-/-6.0		"	100	"	9.5/1.7/4.8	○	"	
17	"	-/-6.0		"	59	" 黒	-/-6.0		"	101	"	9.6/2.0/4.0	○	"	
18	"	-/-5.6	○	"	60	" 黒	-/-6.2	○	"	102	"	9.5/2.1/5.0	e赤		
19	"	-/-6.0		e	61	" 黒	-/-6.2	○	"	103	"	8.8/2.0/4.2		"	
20	"	-/-5.8		"	62	" 黒	-/-6.6	○	"	104	"	9.4/2.0/4.4	○	e	
21	"	-/-6.0	○	d	63	" 黒	-/-6.0	発き	"	105	"	9.6/2.3/4.2	○	e赤	
22	"	-/-6.0		"	64	塊B c	-/-7.6	○	"	106	"	9.6/1.7/4.5		"	
23	"	-/-6.0	○	"	65	"	-/-7.2	○	"	107	"	8.8/2.1/3.8	○	"	
24	"	-/-5.4	○	"	66	"	-/-7.6	○	"	108	"	9.0/2.2/4.0		"	
25	"	-/-6.0	d'		67	"	-/-8.6	e'		109	"	9.6/2.4/4.2		"	
26	"	-/-5.6	e'		68	塊C	-/-7.4	○	e	110	"	9.0/1.9/4.6	d		
27	"	-/-6.6		e	69	"	-/-6.8		"	111	"	9.6/2.1/5.0	○	"	
28	"	-/-5.1		e赤	70	"	-/-6.0	○	"	112	"	9.2/2.4/4.4		"	
29	"	-/-5.4	d'		71	"	-/-6.0	○	"	113	"	9.5/1.9/4.6	○	"	
30	塊A c	-/-5.6		e	72	"	-/-6.3	e赤		114	"	8.3/1.8/4.0	○ ○	"	
31	"	-/-5.3		e赤	73	"	-/-7.0	e		115	"	8.0/2.1/4.0		"	
32	"	-/-5.8	○	d	74	"	-/-6.2	○	○	116	"	8.8/2.0/3.8		"	
33	" 黒	-/-5.0	○	"	75	"	-/-5.6	○	○	e赤	117	"	9.6/2.5/4.3		"
34	" 黒	-/-5.6	d'		76	"	-/-7.6	e		118	"	9.4/2.4/4.6	○	"	
35	" 黒	-/-5.4		"	77	"	-/-6.0	e'		119	"	9.4/2.5/4.4		"	
36	" 黒	-/-5.6		"	78	"	-/-6.3	○	e赤	120	"	8.0/1.9/5.5		"	
37	塊B a	13.4/3.9/6.6		a-1'	79	"	-/-5.8	○	"	121	小皿C	-/-4.2		e	
38	" 黒	-/-7.2		"	80	小皿Cb	-/-4.0	○	d'	122	鉢	28.4/-/-	d		
39	"	-/-7.0		"	81	"	-/-4.0		"	123	"	23.0/-/-		"	
40	塊B b	-/-5.8	d		82	"	-/-4.0	○	"	124	"	21.4/-/-	e'		
41	"	-/-6.8		"	83	"	-/-4.0	○	○	125	"	-/-9.2		"	
42	塊B a	-/-7.6	a-1'		84	"	-/-4.2	○	○	126	"	-/-7.2	d'	e'	

第30表 4号構中上層出土土器類観察表

127 羽釜 鋼径24.0 e'

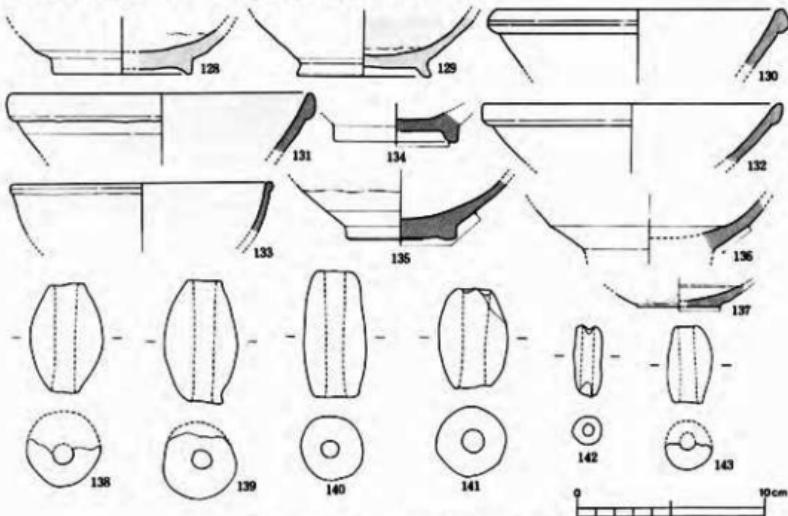
と、胎土が明瞭に別れており、特に b 類の d 系統胎土の内 3 割近くが内面黒色のものであることは特徴的である。また、塙 C と同様の底面に小孔の空くものが定量存在する。

以上、食器について述べたが、塙 A 38%、塙 B 24%、塙 C 6%、小皿 A 24%、小皿 C 8%で構成され、塙 A・塙 C・小皿 A・小皿 C a では e 系統胎土、塙 B・小皿 C b では d 系統胎土の胎土の偏りが見られる。また、内面黒色のものは塙 B に偏って見られるが、d 系統の胎土をもつ器種には量の差はあれ、普遍的に見られるものであり、内面黒色も生地のものも基本的に器形、調整に違いはなく、焼成方法のみの違いである。

次に、鉢と羽釜であるが、鉢は口径 20cm 以上を測る体部内湾器形のもので、口縁端部は面を形成し、体部外面下半に手持ちヘラ削りを施す 122・124 とロクロナデの 123 とがある。後者は底面に糸切り痕を残す。羽釜は鉢部分のみの破片で、これ 1 点のみの出土である。

b. その他の遺物

土師器以外では国産陶器が 4 点と、中国製磁器が 15 点、土師質の土錐が 8 点出土しているのみである。まず、国産陶器だが、129 は灰（白）色を呈するきめの細かな良質の胎土のもので、釉は薄青緑色。高台は断面三角形を呈すが、やや高く作りも比較的丁寧な特徴をもつ。128 は灰白色の発色を呈するややきめの粗い胎土のもので、釉はややすくすんだ薄緑、高台は低い断面三角形を呈す。富山大学前川要氏によれば、いずれも東濃産と見てよく、129 は灰釉陶器終末段階である大原 10 号窯式に、128 は初期山茶塙の西坂 1 号窯式に比定でき、前者は 11 世紀第 3 四半期頃、後者は 11 世紀第 4 四半期頃の曆年代観が与えられるようである。



第 56 図 4 号溝中上層出土遺物 (4) (S = 1/2)

次に、中国製磁器であるが、白磁のみで、器種は碗と皿が出土している。尚、以下に記す分類は山本信夫氏の太宰府白磁分類（山本 1993）に基づいたものである。碗の口縁部は口縁端部玉縁状のもので、厚手で玉縁の大きなⅣ 1 類と薄手で玉縁の小さなⅡ 1 類（133）に分けられる。Ⅳ 1 類は胎土緻密で黒い粒の入る 130・132 とやや緻密に欠け黒粒の入らない 131 とに分けられ、前者は釉色黄色帯び白色の厚手施釉に大きな貫入が入るもの、後者は釉色灰白色のやや薄手施釉に細かな貫入が入るものである。Ⅱ 1 類は胎土の粗い陶器質のもので、釉色黄色味の強い薄手施釉に細かな貫入が入るものである。底部破片は高台外面を直に、内面を斜めに削る、底部やや厚手のⅡ 類（134）と削り出しが浅く、底部の厚いⅣ 1 類（135）に分けられる。前者は胎土やや粗く、釉がやや黄色を帯びる薄手施釉で、細かな貫入があり、底・高台外面には施釉されない。後者は緻密、黒粒を含む胎土で、やや青味がかった灰白色の釉が厚め、貫入はなく、体部下半～底面には施釉されない。136 もこれと同質の胎土で、同類だろう。皿（137）は底部付近の破片で、平底の底部、内面下位に見込みの段をもつ、V 類か VI 類に分類されるものである。胎土は灰色系でやや粗く、釉色はやや青味帯びた灰白色で体部下位外面～底面は施釉されない。いずれも山本氏の C 期に該当するもので、11 世紀後半～12 世紀前半頃に位置付けられるものである。

土鍤は全て管状土鍤で、長さ 6～7cm、幅 3.5cm 前後、重量 50g 以上の大型と、長さ 4cm 程度、幅 2cm 前後、重量 20g 以下の小型とに分けられる。主体は大型で、さらに器形から、中膨らみの 138・139 とややすん胴の 140・141 に分けられ、胎土も同様、e 系統と d 系統とに分けられる。

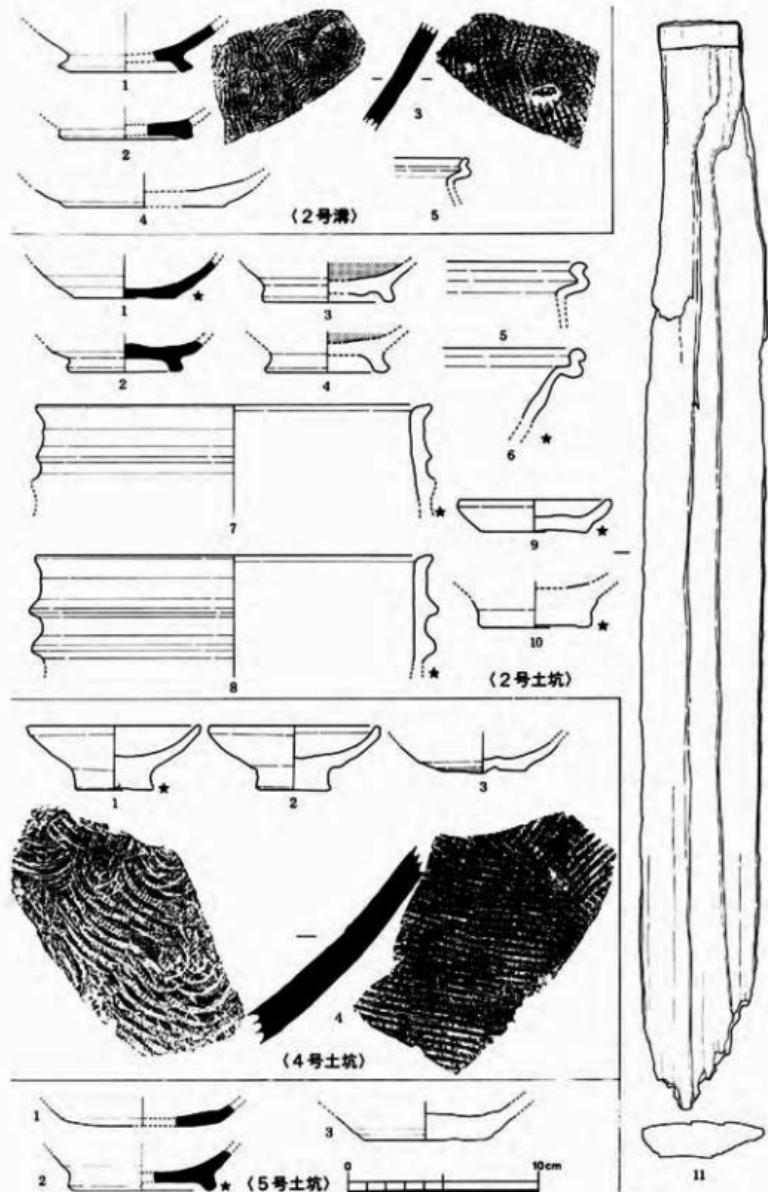
2. 2 号溝出土遺物（第 57 図左上 1～5）

当該遺構より出土する遺物は極少なく、図示した須恵器・土師器の他は、小破片数点である。須恵器は塊 B 3 点と壺 1 点のみで、壺は外面 H a 類叩き、内面 S D 当てである。胎土は全て C 類。土師器は生地土師器のみで、4 の塊は糸切り底で、e 系統胎土、5 の小壺は a - 2 胎土である。概ね、10 世紀頃に位置付けられる。

3. 土坑出土遺物（第 57 図）

当該時期の土坑は 1 号土坑、2 号土坑、4 号土坑、5 号土坑で、1 号土坑のみ小破片のみで、図示していないが、9 世紀後半～10 世紀前半頃と考えている。

（2 号土坑）上中層出土のものに少量 12 世紀の遺物が混じる以外は、ほぼ 10 世紀前半代にまとまる遺物である。須恵器は塊類 4 点とすり鉢 2 点（生焼けで土師質 7・8）、壺・瓶類 3 点、壺 2 点で、胎土はほぼ南加賀窯産の C 類で占められるものの、壺に高松・押水窯産と推定される F 類と塊 A（1）に能美窯産と推定される E 類が 1 点ずつ認められる。特に、高松・押水窯産と思われる壺は 4 号溝下層出土の壺に類似しているものの、当て具文様が異なり、2 個体は存在しているわけで、当該時期の須恵器流通を考える上で、興味深い。土師器は内面黒色の塊 4 点、生地塊 6 点、長壺・鍋 24 点で、胎土はほぼ a 系統で占められる。内面黒色のものは外面赤彩は認められず、また、生地土師器の塊は薄手の作りである。これら土器以外に、井戸の下底面中央から完形に近い木製祭祀具の斎串（11）と思われる木製品 1 点が出土している。長さ 57.5cm、最大幅 6.2



第57図 2号溝・2号土坑・4号土坑・5号土坑出土遺物 (S=1/2)
(土坑出土の★印は上層～中層出土、無印は下層出土である)

cm、厚さ1.7cm前後を測るもので、上部が細くなり、両面に抉り状の切り込みを入れている。以上の他に、12世紀代に下る土師器が4点出土している。いずれもe系統胎土のもので、器種は9の無台小皿と10の柱状高台状塊があり、前者は口径8cm、器高1.7cm、底径5.6cmの法量、後者は底径6cmを測る。

(4号土坑) 下底から土師器2点と須恵器1点が出土する以外は上・中層からの出土である。須恵器は外側H a類叩き、内面D c類当ての壺破片で、9世紀後半代の混入品である。他はいずれも11世紀後半~12世紀前半の土師器で、図示した底径4.5cmを測る無台の塊A(3)と口径9cm、器高3.4cm、底径4cmを測る柱状高台の小皿C b類(1・2)以外にも無台の小皿A類など数点出土している。胎土は1がd系統、3がe'系統である以外はe系統のものである。

(5号土坑) 下層からの遺物が少なく、上中層の遺物も小破片が多いため、時期比定は困難だが、下層の遺物で最も新らしい3や上・中層の小破片の胎土の状況(e系統の胎土主体)から12世紀頃と推察する。器種は塊Aが多く、厚手の底部を呈す。1・2の須恵器は混入品であろう。

4. 1号溝上層~中層出土遺物 (第58・59図)

1号溝は8世紀中頃~9世紀前半の遺構であるが、中層~上層の堆積層に9世紀後半~12世紀の遺物が定量入り込んでいる。遺物量は遺物箱で2箱半程度で、須恵器が目立つ。

a. 須恵器

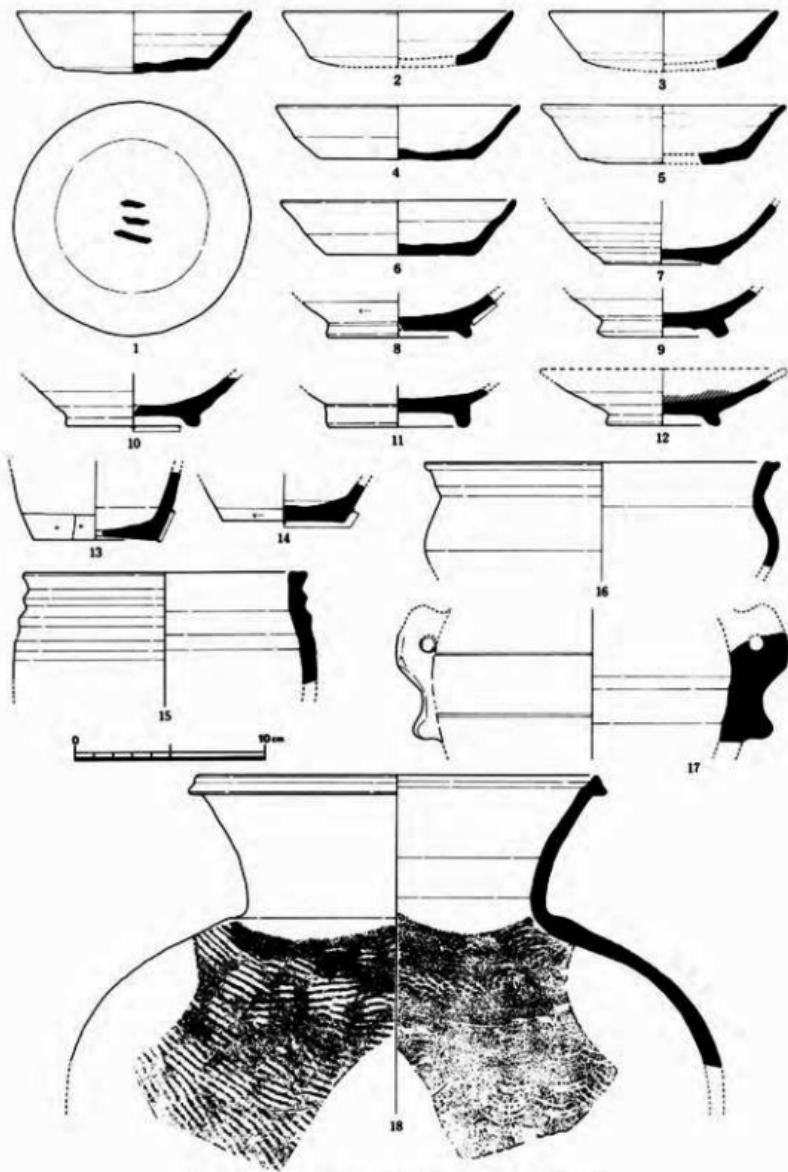
当遺構より出土する須恵器は、		胎土	壺B	壺A	塊A	塊B	皿C	コップ	すり鉢	広口鉢	双耳瓶	壺
		C類	1	7	6	19	1	1	1	4	2	6
		E類	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0
		器種計	1	7	7	19	1	2	1	4	2	6

できる。器種は、塊類主体で、第31表 須恵器器種構成・胎土構成表(数値は個体識別個体数)その中でも塊Bが目立つ。壺Aも定量存在、壺Bと皿Cは極少量しか出土していない。鉢類は広口鉢が定量、貯蔵具は双耳瓶と壺(特に中型壺B)が確認できる。須恵器の時期は9世紀後半代から10世紀初頭頃のもので、南加賀古窯跡群最終末の10世紀中頃まで下るものは確認できない。

以下に、器種ごとの説明を行う。

まず、食器であるが、壺Aは体部外傾、器内薄手の特徴をもつもので、1のみ底面に「三」の墨書きが見られる。塊・皿器種は小破片が多く、図示できたものは少ない。塊Bが主体で、高台は断面方形の厚手で、底面の糸切り痕を削りかねて消すものが目立つ。皿Cの高台も同様。以上の器種のほかに、コップ形が2点(13・14)出土している。底部糸切りのもので、体部下位付近にヘラ削りを施す。調理具はすり鉢と広口鉢で、広口鉢の図示したものはやや小型のものである。貯蔵具は双耳瓶と壺のみで、双耳瓶は1穴穿孔耳の付く小型タイプの17と大型タイプがある。壺は出土量が少なく、口縁部破片は2点とも口径20cm前後の胴部抱弾形器形の壺B類のみで、胴部叩き文様は外側がH a類かH e類、内面がD a類かS D類、内面をナデ消すものが定量存在する。

以上の須恵器のほかに、丸瓦が1点出土している。胎土C類のもので、凹面は糸切り痕が目立



第58図 1号窯上層～中層出土須恵器(1) (S=16)

ち、布目は薄く確認しづらい。4号溝下層出土と極めて類似しており、同一個体の可能性が高い。

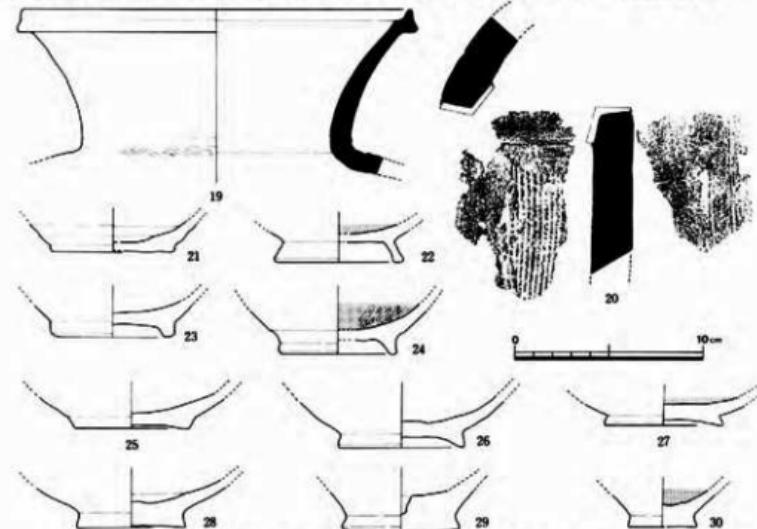
b. 土師器

土師器は9世紀後半～10世紀前半のものと11世紀後半～12世紀前半のものとに分けられる。
《9世紀後半～10世紀前半》

該期に位置付けられる土師器は食膳具が内面黒色の塊A 2点、塊B 6点、生地の塊A 16点、塊B 10点の計34点、煮炊具が鍋4点、長壺6点の計10点で、全てa系統の胎土。その中でもa-1が主体的だが、砂の多いa-1'も多い。まず、内面黒色だが、器種は塊B(22・24)が多く、内面にヘラ磨きが施される。塊Aは少ない。生地土師器(23)は、塊A主体で、胎土はa-1'が目立つ。煮炊具は底部糸切りの小壺(21)以外は口縁部付近の小破片が主。

《11世紀後半～12世紀前半》

該期に位置付けられる土師器はいざれも食膳器具種で、4号溝中上層より出土する土器群と同様の器種が出土している。器種の内容は塊Aが薄手底部のa類10点、厚手底部のb類10点、段状底部のc類3点で、塊Bが断面方形の高台をもつa類2点、断面三角形状の低い高台をもつb類10点、柱状高台状の塊C 6点、無台の小皿A 3点、柱状高台状の小皿C 2点である。これらは生地のままのものを主体とするが、塊A b類と塊B b類、塊C類、小皿C b類において内面黒色のものが定量存在する。基本的に底部は糸切り、内面に渦巻き状の工具ナデ痕跡を残す。胎土はa-1'、d系統、e系統が存在し、d系統とe系統が主体的で、ほぼ半々程度で存在する。また、内面黒色のものがd系統胎土で占められる状況は4号溝中上層と同様の状況である。



第59図 1号溝上層～中層出土須恵器(2)・瓦・土師器(S=16)

番号	器種	法量	胎土	番号	器種	法量	胎土	番号	器種	法量	胎土	番号	器種	法量	胎土
1	須坏A口	12.4, 高3.2	C	9	須塊B台	6.8	C	17	須灰耳瓶	銅17.0	C	23	土塊B台	6.6	a - 1
2	#	口12.1	#	10	#	台7.0	#	18	須壺	口21.2, 須高7.3	#	24	須塊B台	6.2	#
3	#	口12.0	#	11	#	台7.5	#		外He + 内Daナヂ	#	25	塊A b底	6.2	d	
4	#	口12.8, 高2.9	#	12	須壺C台	6.0	#	19	#	口21.6, 須高7.2	#	26	塊B b台	6.8	#
5	#	口13.0, 高3.1	#	13	須コップ底	6.4	#		外He	#	27	#	台6.4	#	
6	#	口12.4, 高2.9	#	14	#	底6.4	#	20	瓦	厚2.0	#	28	塊C底	5.8	#
7	須塊A底	6.0	#	15	須ナラ鉢口	15.0	#	21	土塊A底	6.4	a - 1	29	#	底6.3	e
8	須塊B台	7.5	#	16	須広口鉢	18.8	#	22	黒塊B台	6.9	#	30	小塊Cb底	3.8	d

第32表 1号溝上層～中層出土須恵器・土師器観察表

第3項 当該土器群のまとめ

1. 9世紀後半～10世紀前半の土器群

当該時期の土器は4号溝下層と1号溝中層～上層から出土しているが、両遺構とも時期的に符合することと、土器群内容に類似性をもつこと、同一個体と思われるものが両遺構から出土していることから、同一土器群として理解し、両遺構出土土器をまとめ、当該時期の土器群として提示する。まず、器種構成であるが、食膳具／煮炊具／貯蔵具の比率は73／18／9で、当該時期の須恵器窯での器種構成に比べると、やや食膳具の割合が低い傾向がある(9世紀後葉の戸津8・9・10・11号窯跡の食膳具率は90%)。当該資料が個体識別による数値であるのに対し、窯の数値が口縁部計測によるため、やや食膳具率が高めに出る傾向はあっても、5～10%増し程度であり、それでも1割程度の差がある。つまり、生産の場よりも確実に食膳具消費量が少ないわけで、煮炊具の量が比較的多いことも、当該土器群の特徴としてあげられる。さて、煮炊具は土師器、貯蔵具は須恵器とほぼ分化しているが、食膳具は須恵器と土師器が競合し、個体数は須恵器が97点に対し土師器が95点と、ほぼ均衡した数値で構成される。やや時期に幅があるため、良好な数値とは言い難いが、中心となる時期は9世紀後葉～末に位置付けられる南加賀古窯跡群編年戸津11号窯跡段階から戸津35号窯跡段階のもので、その中の数値はやや須恵器が多い傾向をもつ。この時期に該当する土師器は外面赤彩内面黒色の土師器塊が主体的で、10世紀代に入って、内面黒色の塊や生地土師器塊が増加するものと予想するが、そのような時期的な区分での数値での比率を案分すれば、9世紀後葉代は須恵器7割、10世紀前半代は須恵器3～4割という数値であったろうと考えている。さて、当該時期の食膳具須恵器率について、南加賀地区の須恵器卓越が從来から言われているが、当該資料でもそれは該当し、食膳具の中での須恵器消滅は南加賀古窯跡群終焉段階である10世紀中頃と推察する。ただ、前述したように、10世紀前半代は須恵器率が確実に低下、生地土師器が主体的となって、器種も塊A主体の傾向をもつものと理解する。

さて、当該時期の中心となる9世紀後葉～末の土器群においては、墨書きされるものが目立ち、須恵器で12点、土師器で2点と須恵器に目立って確認されている。これは、食膳具での須恵器率の高さに起因するものであるが、それでも記入率としては須恵器の方が土師器の倍近くあり、須

須恵器を主体として記入したものと言える。墨書き内容については、小破片が多いため、判読困難なものが多いが、複数字句を記したものが目立つようで、特に、外赤内黒土師器塊Bの「上家」は本遺跡の性格を考える上で貴重である。出土遺構に直接関連するものではないが、周辺に格上の建物が存在した可能性をもつ。また、墨書きの他に、当該土器群には食膳具の須恵器と土師器に内底面を中心として黒い付着物が定量認められた。これは墨痕とは異なり、スス状に焦げた纖維状の付着物で、煙油状の痕跡も確認できなかった。つまり、燈明等の油を燃やしたものとは異なり、何か纖維状のものを器の中で燃やしたものと考えられる。これをどのような行為によるものか具体的に考察する資料に欠けるが、祭祀的な行為の一つとして考えておきたい。

さて、最後に、須恵器産地について若干述べる。当該時期の須恵器産地はほぼ南加賀古窯跡群で占められるが、一部能美窯跡群とと思われる胎土の緻密なものが存在し(2~3%程度)、また、高松・押水窯跡群と推定される須恵器が貯蔵具のみ4個体確認される。能美窯跡群の須恵器窯で当該時期に近いものとしては大口窯があるが、この段階は生産規模も小さく、近隣地域のみに供給していたものと考えられ、それは当該資料のなかでの能美窯産の少なさに出ていている。また、高松・押水窯について、器種が貯蔵具類に限られるため、内容物が目的の流通の可能性が高いが、松任市域で定量の高松・押水窯産須恵器が出土していることを考えると、製品として流通したものへの可能性もある。高松・押水窯産須恵器は小松市域では高松・押水窯の全盛時期でも確認されておらず、生産規模の縮小が行われたと思われる当該時期に出土することは興味深い。南加賀窯と高松・押水窯の間に存在した中規模須恵器窯跡群である末窯と能美窯の衰退とともに、両窯跡群が流通圏を広げた結果、賣されたものであると理解したい。

2. 11世紀後半～12世紀前半の土器群

当該時期の土器群は4号溝中上層から一括して多量に出土しているため、この遺構を中心として述べるが、やや補足として4号土坑についても触れる。

まず、4号溝中上層からの土器群の出土状況であるが、特徴的のはその遺物量である。4号溝は遺構面積約70m²、当該土器群はその中で厚さ10~20cm程度の单一土層から出土しており、遺物箱で11を数える。遺物の大半は土師器食膳具で個体数1281を数え、他は土師鉢7個体、土師器羽釜1個体、国産施釉陶器・中国産白磁等19個体程度である。单一遺構で、しかもその中の单一土層からこれだけの量が出土し、その中の大半が土師器食膳具である例はあまり見ない。また、この土師器食膳具で特徴的のは、大半が破片であることで、完形又は略完形に復元できたものは極少なく、完形品をこの場で一括廃棄した感じはない。例として適当でないかも知れないが、窯跡の灰原に近い出土状況を呈しており、この場で割られたというよりも、一度廃棄されたかして、器としては欠損したものが取りまとめられ、一括廃棄された状況を想定する。よって、当該土器群は若干の時間差を含むものが混在する可能性はもっているものの、段階を画するような土器群が混在する可能性は薄く、比較的短期間に使用された土器群の一括廃棄であると理解し、その廃棄は複数次に及ぶものではなく、単一の廃棄であったと予想する。この廃棄の性格は一過

性か短期間かの使用後の不要品をとりまとめて捨てた感じのものと思われ、この遺構での廃棄行為自体には儀礼や祭的な意味合いなどはあまり感じられない。

さて、次に、当土器群の特徴と編年的位置付けを試みるが、まず、器種については先述したように、土師器食膳具主体であり、煮炊具はほぼ皆無、国産施釉陶器・中国産磁器少量で、壺・すり鉢等日常容器は確認されない。この状況は当該時期が須恵器生産停止から在地中世陶器類生産開始までの在地産日常容器類の空白期間に位置するため、欠落する壺等の器種は伝世的に須恵器生産段階のものが使用される程度か他地域からの少量の広域流通品であったと予想したい。

さて、土師器食膳具については、既に田嶋明人氏（田嶋 1986・1988）と藤田邦雄氏（藤田 1992）によって当該時期の編年観が提示されているため、両者の編年観に沿って述べることとするが、型式記号は藤田氏のものを使用する。まず、当該資料の特徴を挙げれば、第一に、器種が塊類と小皿類にまとまるものの、無台の塊Aと輪高台の塊B、柱状高台状の塊C、無台の小皿A、柱状高台状の小皿Cに分けられ、さらに、細部において多様な形態差をもつことである。小皿A、柱状高台状の塊Cと小皿C、輪高台の塊Bが定量存在する土器群は中世I-I期とした加賀市田尻シンペイダン遺跡01大溝一括品（以下シンペイダン資料）において確認されているが、その前段階である中世I-I期の漆町遺跡3号井戸や加賀市敷地天神山遺跡1号溝は柱状高台器種が極少量か皆無の様相で、定型化された小皿Aはまだ出現しておらず、また、後続する中世I-II期の加賀市三木だいもん遺跡溝6や漆町遺跡4号井戸では輪高台の塊Bは量を減少させ、衰退傾向にある。つまり、器種的に見れば、シンペイダン段階に該当する資料と言えるわけで、器種構成比率でも小皿が5割弱の主体を占めることや塊Bが2割以上存在することの類似性をもつ。

それでは、当該資料の特徴をもう少し明確にするため、シンペイダン資料と個別器種の対比をし、その差異を提示してみたい。まず、当該土器群で古手と思われるものが一部存在し、いずれも胎土a-1'類の特徴をもつ。器種は塊A a類、塊A b類、塊B a類で、底部・体部薄手の特徴をもち、前段階の中世I-I期もしくは古代VII期の三浦遺跡上層段階まで逆上する可能性をもつ。これらを除外して当土器群を考えると、塊Aは厚手底部のb・c類主体で構成される。やや底部薄手のa類も定量あるが、b・c類よりもやや底部小型で、小皿Aとの識別が困難で、これに該当するものも含まれることと塊Aであっても小塊器形を呈す可能性をもつことを考えれば、比較的類似した様相として位置付け可能である。次に、塊Bであるが、a類は古手として除外すると、高台の著しく低いb類器形でほぼ占められ、少量足高のc類がそれに加わる。b類の高台の低さはシンペイダンのものよりもやや形骸化の様相をもつものの、内面黒色のものが6割半程度の高い率をもつ点でシンペイダン資料と類似しており、同様の様相として位置付けて妥当と思われる。次に、塊Cであるが、底部付近の破片のみであるため、全体的な器形は不明であるが、シンペイダンで皿A・Cとされたものに類似する。構成率はシンペイダンよりも若干多い6%を占める。また、同様の柱状高台状底部をもつ小皿Cについても同様、シンペイダンよりも多い8%を占め、柱状高台をもつタイプはシンペイダン段階に比べ、定着の様相をもっている。柱状高台

器形は次の三木だいもん遺跡溝6段階に増加する傾向を考えれば、やや新しい様相として位置付け可能である。主体を占める小皿Aについては少量のやや厚手・深身器形を除けば、比較的薄手の小型底部から低平に体部が開く器形に統一されている。この器形はシンペイダン資料に比較すると、やや低平で薄手の特徴をもつ傾向があるものの、底径は似た大きさであり、以後、口径の割に底部大型化する傾向を考えれば、シンペイダン資料とほぼ同時期と考えられる。

以上、各器種について対比してきたが、概ね同様の様相として位置付けられるものの、一部新しい様相も見られるわけで、それは胎土の特徴でも同様である。さて、田嶋氏は先の編年案（田嶋 1986）で当該時期の胎土の変化について既に指摘しているが、シンペイダン段階に先行する中世I-I期では硬質の焼きの砂粒を含んだ胎土の特徴をもつてのに対し、後続する中世I-II₂期では砂粒のあまり含まない焼きの甘いものが一般的とされている。つまり、シンペイダン段階が胎土転換期に位置付けられるもので、両者の胎土が混在する様相であったと言える。さて、当該資料については、主にd類とe類に分類できているが、d類は硬質の焼きで砂粒を含んだ古手の胎土、e類は焼きの甘い砂粒をあまり含まない新出の胎土に該当する。当該資料では2種の胎土が器種・器形と呼応して、偏る傾向が見られ、つまり、d類胎土は塊B b類、塊A a類などの古手器種・器形で目立つ傾向をもつてのに対し、e類胎土は新しい時期に主体的となる塊A b類と小皿A類に主体的に存在する。また、古手の要素として理解できる内面黒色はd類胎土でのみ見られ、e類胎土には1個体も存在せず、古手要素はd類、新出要素はe類という全く2時期に区分すべき土器群を混在して提示しているかのような在り方を示す。しかし、この胎土の偏在性は新しい要素である柱状高台状底部のものにd類胎土が半数近く存在することや、古手器種である塊B b類・塊A a類にe類胎土が少ないながらも定量存在すること、また、4号土坑という一括性の高い遺構より全く同器種（小皿C b類）のd類胎土とe類胎土の完形品が共存している事例から、d類胎土とe類胎土の併存は2時期混在の様相ではなく、産地や製作者グループの違いを示すものと理解したい。ただ、大局的にはd類からe類への胎土転換は確実にあったようで、以後、南加賀で確認できる土師器食膳具胎土はほぼe類に統一される。さて、当該資料とシンペイダン資料とのd類胎土とe類胎土を比較すると、シンペイダンでは明確な数値の提示がないものの、報告書を見た感想ではd類系統の胎土が主体的であった可能性が高く、当該資料のe類胎土主体構成の様相とは若干異なる。d類胎土よりもe類胎土が後出する胎土の前提から考えれば、当該資料は明らかにシンペイダン資料よりも後出する様相をもっていると言えるわけで、器形・器種に新しい要素を感じられることと呼応し、後出的様相として捉えられる。しかし、田嶋氏が中世I-II₂期の特徴とした新しい胎土には統一される様相とは明確に異なり、中世I-II₁期の概念づけの最大の特徴を多様な要素（新旧の要素）が混在する様相として性格づけられれば、まさに当該資料はそれに該当する内容をもっていると言えるであろう。

以上、当該資料をシンペイダンとほぼ同時期の中世I-II₁期の範疇に属するものとして位置付け、その型式設定を多様な要素が混在する様相として特徴づけたが、これは前段階のI-I期

の様相と後続するⅠ-Ⅱ期の様相が混在する様相であるわけで、所謂過渡的様相としての多様性であり、2時期の様相が混在した様相と理解されるものである。この過渡期を通じ、土師器食膳具はより中世の様相を意識して行き、京都系の非クロロ土師器を受容して行くわけで、中世的な土師器食膳具組成へ転換する大きな過渡期に位置付けられるものと評価したい。なお、当該時期はシンペイダン出土資料から11世紀末を前後する曆年代観が提示されているが(平安京藤原国明邸推定地内S E 8出土の土器群の中でシンペイダン出土の中国製白磁と土師器皿に類似する土器が寛治5年(1091)墨書銘の須恵器系鉢と共に伴っている、田嶋1979)、この年代観は当該資料の国産陶器や中国産白磁の年代観ともほぼ一致し、この曆年代観を支持するものである。

注

- (1) 柱状高台状底部に多く確認される小孔について、12世紀前半から中頃に集中する傾向が見られるることは、既に品田高志氏が指摘しているが(品田1992)、氏はこの小孔の形成される理由について、成形段階での成形台上の突起物の痕跡と想定している。氏が資料として提示した北田遺跡ではそのような突起物に糸が引っ掛けたような状況を確認しており、これを根拠としているが、氏もこの中で述べているように、塗町遺跡100号土坑の資料はこれに該当せず、当該資料と同様の小孔の空き方を示す。当該資料の例を細かく観察すると、小孔はまず糸の引っ掛けが全く確認できないことと、小孔が袋状に中で広がっている特徴が見られ、特に第54図74では穴の中で粘土がねじれたような痕跡を確認できる。これは底部部分の粘土成形段階での痕跡と予想され、第55図121に示した柱状高台状底部の底部円柱作りの痕跡も併せて、小孔形成理由を想定すれば、底部円柱作り段階での粘土円柱の粘土練り込み不足による粘土の隙間と想定し、それがそのまま整形段階で手を加えられない底面にのみ残ったものと予想する。北田遺跡のものがこれに該当するかは判断できないが、同時に類似した器種に見られることは興味深く、品田氏が指摘する粗雑化への方向性という意味では同様の見解である。当該時期の土師器食膳具の内外面のナデ調整痕は極めて粗雑で、特に内底面での巻き状ナデ痕は1回の回転で調整を終了するような調整段階での簡略化が看取でき、この調整の粗雑化は内面黒色の塊Bb類でも確認できる。このような成形・整形・調整段階での粗雑化はその容器を日常での飲食に使用しない、儀器的な色彩を感じさせ、非クロロ土師器の完璧な粗雑化への流れを痛感せられる。
- (2) 内面黒色のものは、d類粘土のみに見られるという、胎土の偏在性はあるが、基本的に生地のものと同様の内面に粗いナデの痕跡を残すもので、単に焼き方のみが異なる製品である。意識的に黒色にする行為はそれなりに理由があったものと思われるが、9世紀後半～10世紀代に盛行する内面黒色とは質的に異なるものであり、精製品としての意識は欠落しているものと理解したい。

引用文献

- 品田高志 1992 「柏崎市・北田遺跡出土土器をめぐって—中世成立期における土器の一様相ー」『新潟考古学談話会報』第9号 新潟考古学談話会
- 田嶋明人 1979 「01 大構出土土器の特色と年代」『加賀市田尻シンペイダン遺跡発掘調査報告書』 石川県教育委員会
- 田嶋明人 1986 「9世紀後半から13世紀にかけての土師器の変遷」『塗町遺跡!』 石川県立埋蔵文化財センター
- 田嶋明人 1988 「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題(報告編)』石川考古学研究会・北陸古代土器研究会
- 藤田邦雄 1992 「加賀における様相—土師器—」『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』 北陸中世土器研究会
- 望月精司 1992 「加賀国における須恵器生産の終焉」『北陸古代土器研究』第2号 北陸古代土器研究会
- 山本信夫 1993 「太宰府白磁分類と編年(基礎編)」 石川県立埋蔵文化財センター勉強会資料

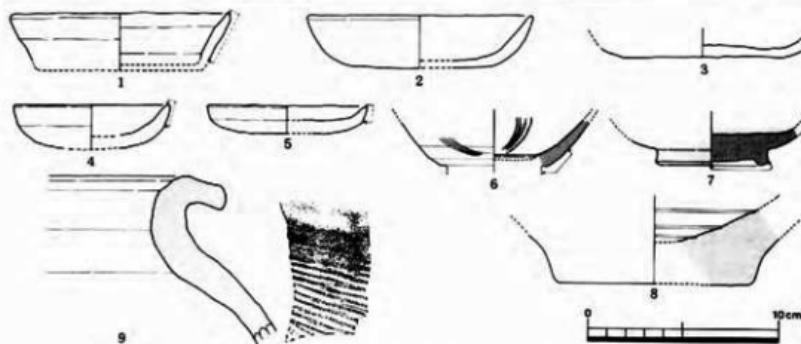
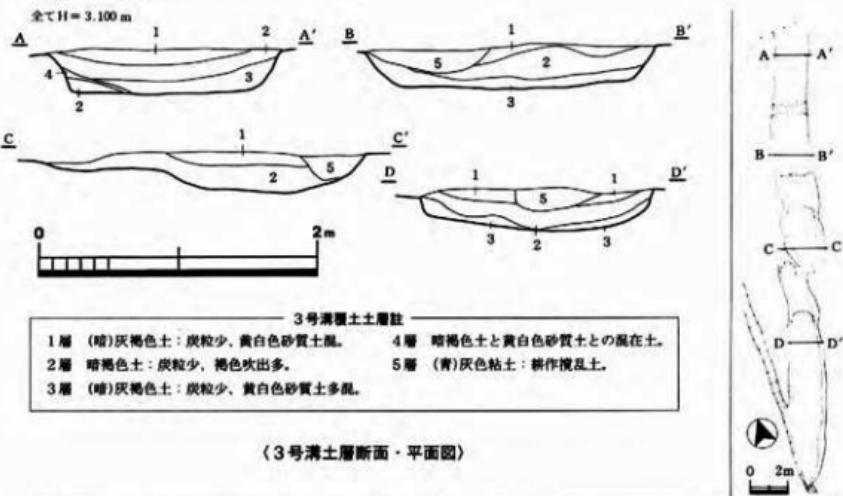
第6節 中世の遺構と遺物

第1項 遺構

当該時期の遺構は、3号溝のみであるが、遺物は遺物包含層や4号溝上層からも出土している。

1. 3号溝（第60図上）

調査区域の北西側、1号溝の西側に位置する溝で、1号溝よりも若干西側に主軸を振る。溝の幅は2m前後、深さは確認面から30cm程度を測る。覆土は上・下層とも暗灰褐色系のもので、中



第60図 3号溝遺構図 ($S = \frac{1}{40}$)・3号溝出土遺物 ($S = \frac{1}{3}$)

層がやや粘土質を帯びるが、上下層はやや砂質系である。遺物は少なく、中世の土器を上層から下層まで疊りに出土するが、他の時代（古墳時代中期～平安時代）の遺物も混在している。さて、この構は下底面に所々段をもち、平滑ではなく、構が途中で途切れ、土坑の連続したような形態を呈す。形は構であるが、下底面に段をもつため、用・排水のような構の機能は想定しづらい。

第2項 遺物

当該時期の遺物は3号構の他、4号構上層と遺物包含層から出土している。以下に概要を記す。

1. 3号構出土遺物（第60図下）

当遺構から出土した遺物は土師器皿と国産・中国産陶磁器類、壺・すり鉢等の日常陶器類で、土師器皿27点、国産陶器2点、中国産磁器3点、日常陶器類9点で構成される。土師器皿はいずれも非クロロ製で、口径12cm前後の大と口径8cm前後の小の2法量が存在する。大は底部薄手、体部外傾する器形で、口縁端部外側に横ナデによる面を形成する1や3のタイプと体部立ち上がりのやや丸い横ナデ幅の狭い2とに分けられ、小も5のような低平器形で体部短く直立気味の体部横ナデタイプと4のようなやや立ち上がりの丸い深身タイプに分けられる。これらの土器に類似するものは当遺跡の西側に位置する銭畠遺跡II・1号構下層において出土しており、その報告では13世紀末～14世紀初頃に位置付けたものである（望月1993）。次に、国産・中国産陶磁器類であるが、国産陶器は美濃・瀬戸と思われるもの的小破片2点のみで内容は不明。中国産磁器については青磁のみで、図示した2点の他に口縁部小破片1点が出土している。詳細は不明だが、13～14世紀頃と推察される（藤田邦雄氏よりご教示）。次に、日常容器類であるが、半数は珠洲焼の壺で、他は在地産の加賀焼である。図示できたものは2点のみで、9の珠洲焼の壺口縁部は口縁部の長く外反する器形から珠洲焼編年Ⅰ期頃、12世紀後半（吉岡1989）に、10の産地不詳（珠洲・加賀・越前以外）の底部破片は、大型の壺と思われ、内面には沈線が巡り、使用痕のため、器面がツルツルしている。

2. 3号構以外の出土遺物

4号構上層で5点の土師器皿（15世紀後半頃）が出土する以外は、国産・中国産陶磁器類と壺・すり鉢等の日常容器類である。国産陶器類は美濃・瀬戸1点、中国産陶磁器は青磁のみ8点出土しており、ほぼ13～14世紀のものと推察される。日常容器は珠洲焼47点、加賀焼19点、越前焼8点で（産地識別は宮下幸夫氏による）、珠洲焼の量が過半数を占めているが、時期にばらつきがあるため、産地別構成量を示しているとは言えない。ただ、ここで出土する珠洲焼は壺・壺・すり鉢の一通りの器種を有しており、いずれも珠洲焼編年でのⅠ期～Ⅱ期の範疇に入り、13世紀後半に下るものはない。特定産地のものが比較的時期の偏る傾向は興味深い。また、越前焼は12世紀後半～13世紀前半と15世紀の壺・すり鉢が、加賀焼は13世紀頃の壺・すり鉢が出土している。

引用文献

- 望月精司 1993 「鎌倉・室町時代の遺構と遺物」『銭畠遺跡II』小松市教育委員会・有限会社叶井
吉岡康暢 1989 「総論珠洲古陶」「珠洲の名陶」珠洲市立珠洲焼資料館

第4章 考察

第1節 松梨遺跡出土土師器の蛍光X線分析

第1項 分析の目的と分析試料の概要

今回、三辻利一氏に蛍光X線分析を依頼した資料は、松梨遺跡出土の土師器資料で、須恵器については肉眼観察による分類のみに止め、出土遺物の各項目の報告の中で、産地比定を試みている。さて、今回、土師器資料のみを蛍光X線分析の対象としたのは、須恵器の生産と流通の実態が比較的判明しつつあるのに対し、土師器の生産と流通の実態が依然として不鮮明であるためで、これは須恵器においては生産地が比較的特定でき、生産地資料の胎土分析が盛んに行われているのに対し、土師器については生産構造が限られた生産地資料のみに限定され、生産地資料と消費地資料との比較検討が困難な状況であることに起因する。また、土師器は構造的な窯を使わなくても容易に焼成できるため、消費地周辺での小規模単位の生産が可能であり、胎土の帰属が困難であるためで、このため、肉眼観察による胎土分類がどこまで産地比定での信憑性をもちえるのか、蛍光X線分析のデータをクロスチェックすることが重要となってくる。

さて、今回の蛍光X線分析試料は、古墳時代後半（5～7世紀初頭）、古代前半（8世紀後葉～9世紀前葉）、古代後半（9世紀後葉～10世紀）、古代末（11世紀末前後）の4時期の土師器を対象とした。各試料は、事前に筆者が肉眼観察で、胎土分類したものを探している。その胎土分類の詳細については、本文を参照願いたいが、古墳時代後半～古代後半の胎土は基本的に砂質素地のa系統の胎土と粘土質素地のb系統の胎土に分けている。ただ、古墳後半と古代のa類・b類は細かく言えば、同一の胎土とは言えないもので、系統的に同質のものという意味で、同種胎土記号を使っている。これに対し、古代末の胎土はa系統・b系統とは異質の粉っぽい胎土ではなく占められ、粉っぽい素地に砂粒の均質に入るd類とd類よりも一層粉っぽい素地で砂粒の入らないe類に分けられる。つまり、肉眼観察では基本的にa類・b類・d類・e類の4種類に大別できるわけであり（a'類はa類の砂粒の多いもの、d'類はd類の砂粒の多いもの、e'類はd類とe類の中間的特徴をもつもの）、これら4種の胎土を基本として各時期の分析試料を抽出している。また、基本的に椀類を主体とする食膳具と壺類を主体とする煮炊具とで若干砂粒の入り方が異なるため、椀類と壺類とに分けて提出した。

これらの胎土の産地帰属がこの分析の主眼であるが、土師器産地試料として対比可能なものは、在地の基幹的窯場である南加賀窯跡群と能美窯跡群の試料のみで、この2窯跡群の試料対比を軸として産地同定を試みる。在地基幹的窯場試料としては南加賀窯跡群でニッリグミノキバラ窯跡灰原出土の土師器（9世紀後半）と戸津1号土器窯より出土土師器試料（9世紀後半、前回分析、三辻・望月1993）とを使用し、能美窯跡群では土師器生産関連試料として位置付けられる徳山出

A遺跡と深田遺跡（下徳山）の土師器試料を使用した。そして、基本的にこれに該当しない試料については、遺跡近傍の在地小規模生産品と予想するが、古墳後半の時期は基本的に基幹的窯場での土師器生産が行われていないことを前提に、この試料が在地小規模生産による土師器と位置付けできるものと考える。つまり、二つの在地基幹的窯場と古墳後半の在地小規模生産土師器試料との対比を基本として、産地同定を試みるものである。

（望月精司）

第2項 蛍光X線分析

1.はじめに

須恵器は全国各地に多数の窯跡が残っているので、ここから出土する須恵器片を分析し、地域差を示す因子を見つけることができれば、これらの因子を使って、古墳などの遺跡から出土する須恵器を窯跡に結びつけることによって産地を推定することができるはずである。このような考え方方に立って、全国各地の窯跡出土須恵器の蛍光X線分析が始まられた。既に、各地の1000基ほどの窯跡出土須恵器が分析され、K、Ca、Rb、Srの4因子がとくに有効に地域差を示すことが明らかになっている。

この地域差の原因を調べるために、全日本の花崗岩類の分析も平行して進められているが、窯跡出土須恵器の地域差に対応するように、花崗岩類にも地域差があることがわかった。花崗岩類の分析結果から、K、Ca、Rb、Srは主として、長石類中に存在することが明らかになった。長石系4因子が須恵器の産地推定に威力を發揮した訳である。

一方、土師器の窯跡はほとんど残っていない。したがって、須恵器のように産地推定する訳にはいかない。また、窯跡出土須恵器の分析データをそのまま活用できるかどうかもわからない。須恵器粘土と土師器粘土が同じであるとは限らないからである。しかし、粘土を素材に使ったことは間違いない。

粘土は岩石が風化して生成したものであるが、 Al_2O_3 （アルミナ）と SiO_2 （シリカ）を主成分とする。しかし、この外にも、主成分元素としてK、Ca、Feも含むことは、どこの粘土を分析しても、これらの元素が観測されることから明らかである。これらの元素は母岩の残渣鉱物に由来するものと考えられる。したがって、K、Caは母岩中の長石類中に、Feは雲母や角閃石、輝石類中にあったものと思われる。そうだとすると、土師器の素材粘土についてもその産地について、これらの元素は何らかの情報をもっているものと思われる。これらの因子を考古学的情報に連絡させて、何らかの情報を引き出そうとしているのが現状である。例えば、一つの大きな遺跡に着目して、その遺跡から出土した各時期の土師器胎土の比較や器種と胎土の比較研究から、考古学的に有意な情報を引き出そうとするのも一つの試みである。

本報告では、松梨遺跡から出土した各時期の土師器の甕類、壺類の胎土を蛍光X線分析法で分析し、比較した結果について報告する。

2. 分析結果

試料の処理方法や分析方法は従来通りである。分析値は表1にまとめられている。これらの土師器胎土がどの程度に異なるかを定性的に図に示してみることにした。

図1にはニッケルグミノキバラ窯跡と戸津1号土器窯より出土土師器のRb-Sr分布図を示している。両者はほぼ重なって分布しており、胎土は元素分析からみて類似していることを示している。これらの試料をほとんど包含するようにして、南加賀窯領域を描いた。定的な領域であるため、他の土師器胎土との比較のためにのみ使用する。

南加賀窯に対して、能美窯の代表として、徳山出A遺跡、深田遺跡（下徳山）出土土師器のRb-Sr分布図を図2に示す。この領域は図1にも示してある。窯跡出土須恵器の分析データからも予想されるように、両者は類似する。しかし、K、Rb量が若干、能美窯の方が高い。図1をみると、南加賀窯の大部分の試料は能美窯領域を離れており、両者の相互識別は可能と思われる。

次に、各時期の土師器が南加賀窯領域に対応するかどうかをみてみた。そのために、各図には南加賀窯領域を示しておいた。

図3には古墳後半の土師器のRb-Sr分布図を示す。壺類と椀類に分けてプロットした。両者の間には若干のずれがあるが、両者とも南加賀窯領域には対応しないことがわかる。また、椀類の中には、3点の試料が他の試料から離れて分布しているが、この理由は目下のところ、よくわからない。この3点は明らかに、他の椀類の胎土とは異なる。

図4には古代前半の土師器のRb-Sr分布図を示す。壺類、椀類ともまとまって同じ領域に分布していることがわかる。このことは壺類と椀類の胎土が同じであることを示している。数点の試料は大きく離れて分布している。これらの試料にはCa、Sr量が多い。別胎土であると思われる。このことは別の場所で作られた土師器が若干含まれていることを意味する。しかし、大部分の壺類、椀類はまとまって分布している。一応、南加賀窯領域の右上部分に分布するが、図1と比較すると、南加賀窯の分布試料とは重ならない。したがって、古代前半の松梨遺跡の土師器は南加賀窯産とはいい難いが、南加賀窯域で作られた可能性は十分ある。

図5には古代後半の土師器のRb-Sr分布図を示す。壺類と椀類は重複して分布しており、やはり、同じ胎土であることを示している。また、図4と比較すると、古代前半の土師器と同じ領域に分布しており、古代前半から引き続いて同じ地域で作られた可能性があることを示している。

図6には古代末の土師器のRb-Sr分布図を示してある。大きく2群に別れて分布していることがわかる。図1と比較すると、両群とも南加賀窯領域には対応しないことがわかる。別産地の土師器である。さらに、図3、4、5と比較しても、対応するものはない。したがって、古墳後半の土師器とも、古代前半、後半の土師器とも胎土は異なる。したがって、別産地の土師器とみななければならぬ。

また、椀類のe胎土は他の椀類のd・d'・e'胎土とも明確に異なる。鉢類e胎土の中に1点、椀類e胎土と同じ胎土が含まれているが、他の2点は少しずれている。Rb-Sr分布図では椀類d・d'・e'胎土、鉢類d胎土の相違は認めにくいので、これらを一括して図6には描いてある。

図1 南加賀窯跡群出土土師器のRb-Sr分布図

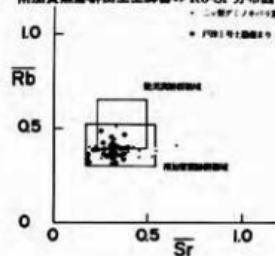


図2 能美窯跡群出土土師器のRb-Sr分布図

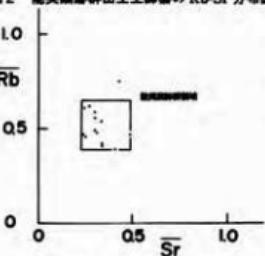


図3 古墳後半の土師器のRb-Sr分布図

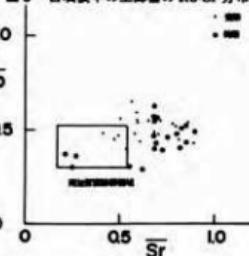


図4 古代前半の土師器のRb-Sr分布図

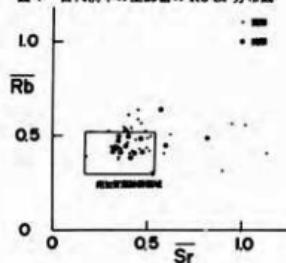


図7 古墳後半の土師器のK因子の比較

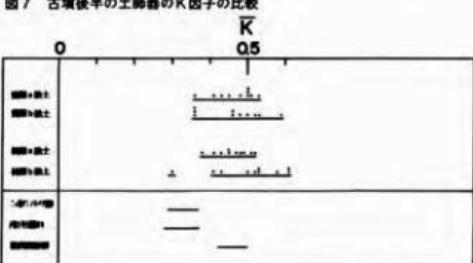


図5 古代後半の土師器のRb-Sr分布図

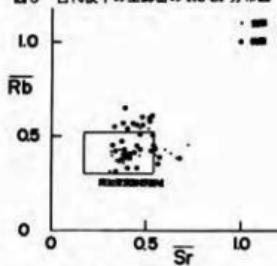


図8 古墳後半の土師器のCa因子の比較

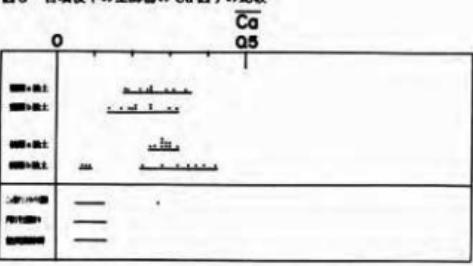


図6 古代末の土師器のRb-Sr分布図

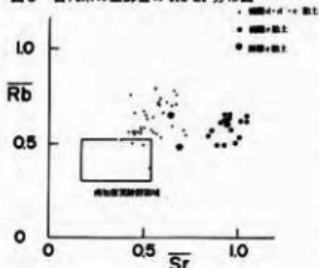
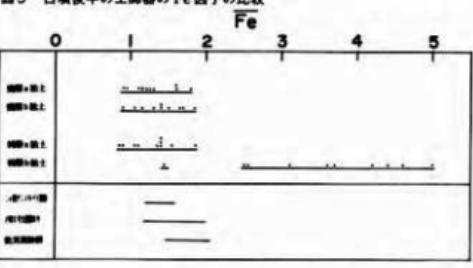


図9 古墳後半の土師器のFe因子の比較



Rb-Sr分布図は窯跡出土須恵器の地域差を調査する研究で、有效地に地域差を示す図として使用された。Rb-Srが人為的でなく、地質的な意味をもつ因子である限り、土師器にも適用され得る。Rb-Sr分布図上における分布位置の相違は胎土（したがって、素材粘土）の違いを示しており、同一産地では一色の粘土を使用して土器を作ったと仮定すると、生産場所の違いを示していることになる。そして、図1～図6を比較してみる限り、古代前半、古代後半の土師器胎土は古墳後半、古代末の土師器胎土とは別物であることを明示している。しかも、いずれの土師器胎土も南加賀窯や能美窯の土師器胎土とも対応しない。したがって、これらの窯跡群で製作された土師器ではないが、同じ地域産の可能性はある。

次に、胎土の肉眼観察で、壺類、椀類をa、bの2種類の胎土に分類した結果を蛍光X線分析の結果とつき合わせてみた。図7～9には古墳後半の土師器のK、Ca、Fe因子を比較してある。

図7のK因子をみると、壺類のaとb、椀類のaとbとにとくに差違はないことがわかる。壺類と椀類の間にも差違は認め難い。そして、これら松梨遺跡出土の古墳後半の土師器のK因子は南加賀窯には対応せず、むしろ、能美窯に対応することがわかる。

図8のCa因子では壺類のaとb、椀類のaとbはよく対応している。しかし、壺類に対して、椀類にCa量がやや

図10 K因子の比較

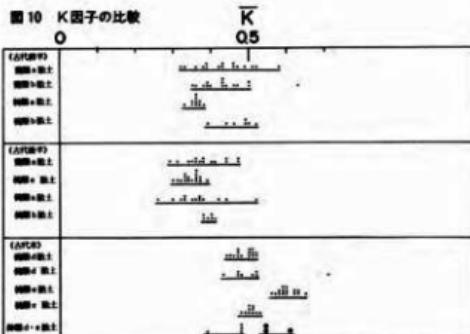


図11 Ca因子の比較



図12 Fe因子の比較



多い傾向があることがわかる。このことは図3において、壺類に対して椀類がSr量が多い方に偏って分布したことに対応する。Srは通常、Caと正の相関性をもつからである。そして、壺類も椀類もCa因子では南加賀窯にも、能美窯にも対応しないことがわかる。なお、椀類bの3点にはCa量は少ない。この3点は図3で南加賀窯領域の左下部分に分布した3点の試料である。この3点は他の土師器とは胎土が異なり、別産地のものである可能性をもつ。

図9にはFe因子を比較してある。壺類のaとbはFe因子でも全く同じであり、差違は認められない。ところが、椀類のaとbではFe因子が明らかに異なる。1点のみは同じである。このことから、椀類のaとbは異なる胎土であることが判明した。問題は別産地といえるかどうかである。このことについては知多半島の中世陶器（壺・壺類）と山茶椀の例について説明する。知多半島窯跡出土の中世陶器と山茶椀は長石系4因子では同質であった。しかし、Fe因子では明らかに異なる。前者にはFe量が多いのに対し、後者にはFe量が少なく、白色の胎土であった。これまでの研究で、長石系4因子は20~30km程度の範囲内ではあまり変化がないことがわかっている。それ故に、これら4因子を使って窯跡群として多数の窯をまとめることができた。ところが、Fe因子は比較的小地域内でも変わることがあり、そのため、須恵器窯群の形成にFe因子を除外してきたのである。岐阜・名古屋周辺から知多半島にかけては、一般的にはFe量の少ない粘土が多い。しかし、全ての粘土にFe量が少ない訳ではない。中にはFe量が多い須恵器窯も知られていた。山茶椀の場合は明らかにFe量の少ない粘土を選択的に採集して素材としたものである。松梨遺跡の古墳後半の椀類bの素材粘土は明らかに椀類aのそれとは異なる。しかし、椀類bの中に1点、椀類aと同じ胎土をもつものが含まれており、Fe因子が比較的狭い地域内でも異なる場合があることから、同じ地域内の別場所の粘土が素材となったと筆者は考える。南加賀窯や能美窯の土師器も、一般的にはFe量が少ないと図9に示されている。

こうして、松梨遺跡の古墳後期の土師器胎土は壺類のaとbは同じであり、椀類のaとbは異質であること、また、壺類と椀類ではCa、Sr量に若干の相違があることがわかった。この相違は素材粘土そのものが異なるのか、それとも、何か添加物があるためなのかは不明である。

次に、古代前半、後半、末の土師器のK、Ca、Fe因子の比較は図10~12に示されている。古代前半の土師器については壺類のaとbは3因子ともよく対応しており、元素分析からみると同じ胎土である。これに対して、椀類のaとbはK因子で若干違いが認められる以外は差異はない。K因子の違いをどの程度評価するかであるが、両者は壺類aのばらつきの内に入っている。壺類a・bと同じ粘土であるとする捉え方もできる。したがって、ここでは、椀類のaとbのK因子の差違を余り大きく評価せず、壺類a・bと同じであるとした。そうすると、Ca、Fe因子でも壺類と椀類a・bは対応しており、同じ胎土であると解釈できることになる。

次に、古代後半の土師器をみると、器種によってバラツキの大小に差違があるが、3因子ともよく対応しており、壺類、椀類とも同じ胎土であるとみられる。それで、古代前半の土師器胎土と比較してみると、K因子は若干少ない傾向があるが、Ca因子では差違は認め難い。しかし、

F e 因子では明らかに少なくなる

傾向は認められる。このことから、

古代前半の土師器と古代後半の土

師器胎土は類似しているが、必ず

しも、同じではないことがわかる。

古代末の土師器胎土は椀類 e と

鉢類 e を除いて、K, Ca 因子はよ

く対応する。しかし、Fe 因子では

椀類 e' も椀類 d' などと対応しな

くなる。特に、椀類 e は特異で、Rb - Sr 分布図でも図 6 に示したように、他の椀類、鉢類の胎土とは異なる。椀類 e は他の椀類とは別産地の製品とみられる。この型の胎土は古墳後半、古代前半・後半にはみられなかったものであり、外部地域、例えば、金沢市周辺などからの搬入品である可能性もある。

鉢類 e も椀類 e と類似しているが、Ca, Sr 因子で若干ずれており、必ずしも、同じ胎土であるとはいえない。椀類 d' などは F e 因子で 2 グループに分かれており、胎土観察では同じ d' であるが、F e 因子から必ずしも同じ胎土であるとはいえない。このように、古代末の土師器胎土は古墳後半～古代後半の土師器胎土に比べて複雑である。このことは産地が複雑化したことの反映ではないかと疑われる。すなわち、椀類 d、椀類 d'、椀類 e、椀類 e'、鉢類 d、鉢類 e はそれぞれ、別場所で作られた可能性をもつ。

以上の結果をまとめると、肉眼観察で a, b 2 種類に分類した結果は必ずしも、蛍光 X 線分析の結果と一致していない。古墳後半の椀類 a, b にのみ明確な差違が認められた。椀類 a に比べて、椀類 b は赤褐色を帯びているはずである。また、胎土に含まれている砂粒の多少はほとんど

元素分析の結果に影響していない。須恵器の場合も同じような結果が得られている。

また、どの時期の土師器も南加賀窯や能美窯の土師器胎土とは一致しない。このことから、松梨遺跡にはこれらの窯で製作された土師器が供給されていなかった可能性が高い。では、これらの土師器はどこで作られたか。古代前半、古代後半の土師器甕類、椀類の胎土が類似していることから、これらが地元産の可能性がある。松梨遺跡の周辺で製作されたものと筆者は考えている。

これに対して、古墳後半の土師器胎土は Ca, Sr 量がやや多いが、他の因子は類似している。松梨遺跡から余り遠くない所で作られたものであろうが、松梨遺跡への搬入品とみられる。

古代末に入ると、松梨遺跡への供給の模様は複雑となり、椀類の大部分と鉢類 d は松梨遺跡の周辺で製作された土師器とみられるが、椀類 e は明らかに外部からの供給品であり、鉢類 e もその可能性をもつ。

今回は元素分析の結果を定量的に分類した訳であるが、定性的とはいえる、分布図からみえる、各時期の土師器の需要・供給の模様を松梨遺跡を中心に描いてみた。当面、このような方法で、

石川県内の土師器胎土を分析して行くのも興味あることであろう。

(三辻利一)

表2 生産地出土土師器分析値

出土地	器種	標	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
二ツ塚	甕	1	0.358	0.092	1.26	0.444	0.311	0.104
グミノキバラ 高瀬	甕	2	0.351	0.160	1.60	0.378	0.394	0.093
	甕	3	0.333	0.139	1.34	0.375	0.447	0.094
	甕	4	0.294	0.064	1.57	0.343	0.247	0.063
	甕	5	0.320	0.086	1.19	0.509	0.327	0.098
	甕	6	0.349	0.038	1.39	0.397	0.193	0.051
	甕	7	0.341	0.174	1.62	0.406	0.419	0.102
	甕	8	0.347	0.153	1.53	0.350	0.453	0.124
	甕	9	0.288	0.099	1.67	0.388	0.237	0.096
	甕	10	0.353	0.173	1.42	0.351	0.523	0.139
	甕	11	0.367	0.273	1.44	0.412	0.646	0.190
	甕	12	0.347	0.080	1.57	0.442	0.318	0.119
	甕	13	0.317	0.105	1.18	0.340	0.301	0.091
	甕	14	0.338	0.174	1.40	0.383	0.537	0.139
	甕	15	0.287	0.053	1.54	0.403	0.218	0.065

第3項 蛍光X線分析結果に対する考古学的所見

三辻氏が第2項で述べた松梨遺跡出土土師器の蛍光X線分析の結果について、考古学の立場から所見を述べたい。

まず、古墳後半の土師器であるが、筆者は肉眼観察でa類とb類に分けている。両胎土は三辻氏の解釈では楕円にのみ差異が認められるものの、その差異は同じ地域内での採取粘土の違い程度のもので、ほぼ同一地域産と判断されている。しかし、両胎土は混入物の違いではなく、ベースとなる粘土素地の違いによって分けており、構成元素を細かく見ると、a胎土のSr量が0.65～0.85にまとまって分布するのに対し、b胎土はまとまりに欠け、0.4～0.65に主体をおく傾向があり、正の相関関係にあるCa量においてもa胎土にまとまりが確認できる。この点を大きく評価すれば、別胎土として提示も可能であるが、ただ、他の元素では類似点が多く、現在のところは、同一地域での粘土採取場所の違いによるものと見たほうが妥当かもしれない。さて、この両胎土であるが、その産地について、三辻氏は松梨遺跡の地元産ではなく、近郊地域からの搬入品であると判断されている。これは次の古代の土師器を地元産とする前提に基づく見解と予想するが、この松梨遺跡に比較的近い、距離で1km弱に位置する消費遺跡、錢畠遺跡の古墳後半の土師器の胎土分析試料（三辻・望月1993）と比較すると、いずれの因子でも良く類似していることに気づく。この胎土でもa・bの両方が存在し、いずれも錢畠遺跡の報告では在地小規模生産による遺跡近郊の地元産を想定した。古墳時代後半の時期は基本的に基幹的窯場で土師器生産を行っていない段階と想定され、遺跡近郊の地元生産品で販賣するのが基本であると理解している。この遺跡近郊という範囲がどの程度を示すものかは判断できないが、流通経路を必要としない、集落単位又は集落集合体の中での生産品であったものと予想する。

次に、古代であるが、基本的にこの時代は基幹的窯場での土師器生産が定着し、かなりの量の土師器が消費地に供給されている。当遺跡では在地窯跡群である南加賀窯跡群と能美窯跡群がその生産地であるが、三辻氏の分析結果では、K、Rb量の分布域のずれによって、両窯跡群の土師器は識別可能としている。ただし、この土師器試料が極少量であるため、分布域に偏りがあり、Rb-Sr分布図で重複があることを考えれば、やはり、両窯跡群の識別には誤判別が伴うことも考えておく必要がある。さて、窯跡群での土師器生産は基本的に須恵器と同一の粘土を使用しているものと予想されるため、窯跡群産の土師器の量の少なさを補うため、須恵器の分析値を補正して使う必要があると考える。そうなると、南加賀窯跡群ではK量で0.45まで、Ca量で0.2まで、Rb量で0.7までその範囲を拡大する必要があり、能美窯跡群ではK量で0.35からに、Ca量で0.2までその範囲を拡大する必要がある（三辻・望月1993）。この須恵器分析値を含めた元素分布域で古代前半と後半の土師器を比較した場合、一部のものを除いて良く合致し、三辻氏の窯跡群産ではないとした見解とは異なる。つまり、筆者は一部の土師器を除いて、大半が南加賀窯跡群及び能美窯跡群産と考えた訳で、これは、筆者の産地同定をお願いした試料に偏りがあったことに起因するもので、今回の提示した窯跡群産土師器とは厳密な意味で対応していないことによる。

さて、南加賀窯跡群産と能美窯跡群産の識別は蛍光X線分析では須恵器においても困難であり、誤判別を伴うものであり、肉眼観察に頼らざるおえない。印象としては、a胎土が南加賀窯跡群産、b胎土が能美窯跡群産と想定しており、能美窯跡群産と推定するb胎土のRb量とK量がa胎土よりも比較的高めで分布することに対応している。ただ、厳密な意味ですべて対応しているとは言い難く、印象の域を出ないものである。以上の古代の土師器にも窯跡群産の分布域からずれて存在する一群が少量存在する。三辻氏も別胎土が少量含まれることを指摘しているが、これらはSr量で0.6以上に分布するもので、Ca量でも0.2以上にまとまる傾向をもつ。これらと対応するものは古墳後半の土師器群で、すべての因子においてほぼ一致し、同様の胎土と理解できる。つまり、遺跡近郊で小規模生産された地元産土師器と位置付けられるもので、古代においては基幹的窯場生産の土師器と地元産土師器とが併存する様相であったものと評価できる。ただ、この基幹的窯場生産と地元産とは肉眼観察での識別が難しく、蛍光X線分析による識別が有効である。今後、蛍光X線分析結果と肉眼観察の併用によって、胎土特徴を抽出するつもりである。

次に、古代末であるが、肉眼観察でd'・d''・e'・e''の4種類に分類した胎土は、蛍光X線分析ではd'・d''・e'胎土とe胎土がかなりはつきりと分布域が別れ、e胎土以外はd系統胎土の砂の混入の度合いによる差異であることが分かった。さて、この2系統の胎土は、三辻氏も指摘するように、基幹的窯場である南加賀窯跡群・能美窯跡群のいずれの分布域にも属さず、この時期には確実に基幹的窯場での土師器生産が終焉を迎えたことを物語っている。そうなると、遺跡近郊の地元産かということになるが、この胎土は遺跡近郊の小規模生産が予想される古墳後半の胎土とも異なり、今まで当遺跡には供給されていなかった別の産地かということになる。ただ、d系統の胎土については、Rb-Sr分布で古墳後半よりもやや左上にずれる傾向はあるものの、他の因子では比較的類似し、古墳後半の地元産土師器に近い胎土であると評価できる。三辻氏もd系統の胎土を遺跡周辺で製作された土師器という評価をしている訳で、異なる産地ではあるが、遺跡近郊での生産地と見るのが妥当と思われる。問題はe胎土で、三辻氏は外部搬入品と判断し、金沢市周辺をその産地に想定している。しかし、e胎土についても、古墳後半の椀類b胎土の一群とのみ対比すれば、いずれの因子においても一部重複する部分をもち、地元産の可能性はありえ、これ以後、e胎土が小松周辺において主体となる胎土であり、肉眼観察でも金沢市周辺のものとは異なる印象を受けることを加味すれば、e胎土についても在地生産品と考えるのが妥当である。ただ、古代末の土師器胎土が古墳後半と様相を異にするのは肉眼観察でも間違いない、粘土採取場所が異なるか、比較的良好な粘土の採取できる場所を選択的に使用していたのか、意識的に粘土を変えていたのは間違いないようである。また、e胎土は新しい様相をもつ土師器群に採用されている胎土であり、同一器形でもd胎土とは調整手法が異なり、粘土の化学組成のまとめを考えれば、d胎土とe胎土は異なる製作者集団による製品であったものと予想され、遺跡近郊であっても複数の生産地・生産者集団による供給品、三辻氏の指摘した産地が複雑化する時代であったと評価する。

以上、古墳後半・古代前半・後半・古代末の3時期の土師器の产地比定を試みたが、これらをまとめ、土師器流通の実態を考察してみたい。まず、古墳後半であるが、基本的に遺跡近郊に存在する生産地において小規模生産されたものと判断される。この胎土は1km離れた鐵畠遺跡の土師器胎土とも比較的類似した特徴をもち、同様の特徴をもつ粘土が周辺に分布していたことが予想される。ただ、この時期の胎土は、分析値にややばらつきが認められ、細かな意味では複数の胎土が存在、粘土採取がかなりランダムに行われていた状況が想定される。ただ、複数の小規模生産地からの寄せ集め的様相も一部では想定でき、この点については一層の検討が必要である。

南加賀の窯跡群では8世紀初頭から確実に基幹的窯場での土師器生産が開始されるが、それと同時に一定量の土師器が梯川流域の消費地に供給される。今回の資料において、窯場生産の土師器量を明確に把握できていないが、螢光X線分析に提出したものでは8世紀後半～9世紀前半で食膳具17点中14点、煮炊具31点中26点が、9世紀後半～10世紀前半で食膳具35点中34点、煮炊具15点中11点がその可能性をもつ。ただし、これでも、この内の10数点は地元産と思われるものと分析値で重複するため、はっきりとした割合は出せず、若干の余裕をもって、7～8割半という程度が窯場生産品であったと推察する。器種別ではやはり小型品である食膳具の割合が高く、時期別では古代後半へ若干増加する傾向が見られる。以上の分析資料のみからの予想ではあるが、古代の土師器生産は基幹的窯場での土師器生産と地元での土師器生産が併存する形で存在し、基幹的窯場での生産が主体、それを補完する立場として地元の集落近郊の自給的土師器生産が、古墳後半から継続する形で存在していたものと予想する。しかし、この基幹的窯場での土師器生産と地元での土師器生産との割合は、地域によって、差があったものと予想でき、基幹的窯場から遠い地域、例えば、手取川扇状地域の石川郡においては、その割合が逆転する場合もあつたであろう。ただ、古代においては基幹的窯場での土器生産・流通の体制が基本であったわけで、須恵器も土師器も共通の窯場生産品として、基本的には「一郡一窯体制」の中城流通体制下に組み込まれ、地元でも生産可能だから、土師器は須恵器と別格ではなく、基幹的窯場流通品の不足分として地元が補完する立場を採っていたものと考える。

基幹的窯場での集中的土師器生産は10世紀の須恵器生産の終焉とともに停止するものと予想している。当遺跡では10世紀後半から11世紀の資料が欠けるため、当該時期の様相は把握できないが、11世紀末前後の資料では、分析値が南加賀の基幹的窯場の領域に属するものではなく、基幹的窯場での土師器生産の終焉が立証される。ただ、その产地については遺跡近郊に存在する生産地で生産されたものと思えるものの、他地域からの搬入品が半数を占める可能性も一部ではあり、やや流動的である。この問題については、今後再検討する必要があるが、ここでは遺跡近郊での地元産と仮定し、論を進めた場合、古代末は古墳後半と同様の土師器生産体制が採られたこととなる。しかし、肉眼観察では異なる特徴が観察でき、分析値でも古墳後半で主体となる胎土の分布域とは異なるところで集中し、明確に別れる2つの胎土が存在する。この2つの胎土のまとまりは、古墳後半には見られなかったものであり、古墳後半のランダムに分布する胎土特徴に対し、

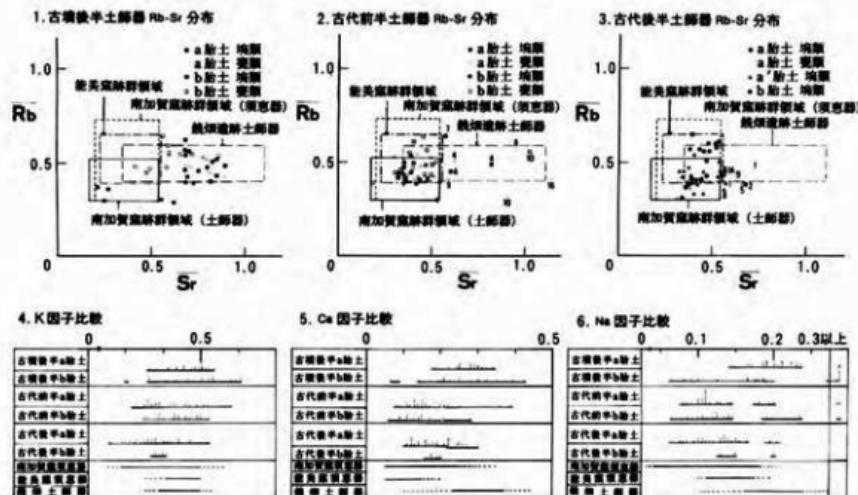
かなりまとまった場所での土器生産が行われ、それが複数存在する様相が想定される。これは地元産と言っても、古墳後半の土器生産とは異なる様相をもっていたことを物語り、古墳後半のような集落毎の極めて小規模な自給的生産体制を主体とする様相ではなく、専属的に集中生産するような小規模生産地が複数存在する様相が想起される。ただ、このような生産体制もその流通は遺跡近郊を対象とする狭域流通を前提としていたものと予想され、その土器生産は中世へと受け継がれて行く。中世の土器生産については、以前考察しているので（望月 1993）、ここでは触れないが、古代の基幹的窯場での生産が終焉すると同時に、土器生産体制は中世的生産体制へと強く傾斜、12世紀に完成するものと推察する。

最後に、これまで、考古学的立場から私見を述べさせていただいたが、その产地比定の部分では三辻氏の分析結果から基づいた見解とは異なる結果となってしまった。筆者の見解はあくまでも考古学の側から見た、思い入れの部分を多く含んだ見解であり、私の見解以外のなものでもない。三辻氏の客観的な分析結果に対し、異なる見方もできるということで、私見を述べさせていただいたのみである。多忙の中を、無理を押して原稿を下さった三辻氏に深く感謝する次第である。

（望月精司）

引用文献

- 三辻利一・望月精司 1993 「銭畠遺跡出土土器の蛍光X線分析」『銭畠遺跡Ⅱ』小松市教育委員会・有限会社叶井
望月精司 1993 「土器皿の編年と類型抽出の意味」『銭畠遺跡Ⅱ』小松市教育委員会・有限会社叶井



第2節 小松市松梨遺跡出土漆器の科学的分析

漆器文化財科学研究所 四柳嘉章

I. はじめに

ジャパンとよばれる漆器だが、その歴史は一部の美術工芸品を除いては不詳の点が多かった。ところが、近年の低湿地遺跡調査の急増は、とくに地域における漆器資料の増大をもたらし、漆工史再編成の時期を迎えている。かかる意味で奈良後半～平安前期に属する松梨遺跡出土漆器は、生産・流通・所有を考えるうえで重要な意義を有する。今回は漆塗膜の科学的分析と漆器考古学的観察を行ったので、以下にその結果を報告する。

分析にあたっては小松市教育委員会埋蔵文化財調査室望月精司氏、石川県工業試験場江頭俊郎・桑村忠男氏のご協力をいただいた。厚くお礼申し上げる。

II. 分析の方法

漆器分析（塗装工程、下地材料、顔料、塗装液の解明）にあたっては、次の分析法を用いた。
①塗膜分析……漆器の内外面数箇所から数mmの塗膜片を採取し、エポキシ系樹脂に包埋後その断面を研磨する。そして金属および偏光顕微鏡で観察し、サンプルである手板試料と比較検討しながら塗装工程（塗装）や下地材料の同定を行う。この方法によって表面観察ではわからない、時代や地域的な髹漆の特色が解明される。また製品の価値判断が把握できるので遺跡における所有階層の推定にも貢献でき、さらにデータが集積されれば製品の流通問題にも迫ることができる。
②赤外線（IR）吸収スペクトル法……塗装液の同定は顕微鏡観察だけでは不十分であり、本方法を併用する（固有の振動をしている分子に波長を連続的に変化させて赤外線を照射していくと、分子の固有振動と同じ周波数のIRが吸収され、分子の構造に応じたスペクトルがえられる）。ただし出土漆器は使用や保存状況によって劣化・変質の度合いがさまざまであり、これに対応できる各種データをふまえたうえで比較検討しなければならない。さらに場合によってはガスクロマトグラフィー、NMRなどの利用も必要となる。

本稿で用いる用語については基本的には漆工用語に従うが、意味が曖昧で誤解をまねくものについては、以下のように規定して使用する。

イ) 赤色漆について……赤の顔料である朱やベンガラが未同定の場合には「赤色漆」を使用する。よく使われる「赤漆（あかうるし）」は「赤漆（せきしつ）」との混同をさけるために用いない。内外面とも赤色漆の場合は「総赤色漆」、朱（HgS）と同定できた場合は「赤色（朱）漆」、「朱漆」あるいは慣例による「總（總）朱」「皆朱」「朱漆器」を用いることもある。

ロ) 黒色漆について……黒の顔料である炭素粒子や鉄系化合物粒子などを含むものを「黒色漆」、まぎらわしいが黒色顔料を含まないものを「黒色系漆」として区別する。なぜならば「黒色系漆」においては、黒色顔料を含まずとも漆自体の表層が茶黒色に変質することと、さらに下地色を反

射して肉眼では黒色に見えるからである。近年の筆者の調査では古代以来こうした方法が一般的と考えられるので、技術や材料化学の上からも両者の区別が必要となっている。未同定の場合は、はじめに「黒色漆（未同定）」とことわるか、慣例の「黒漆」を用いる。黒漆は赤の未同定を「赤色漆」としたので用語の対としてはバランスがわるいが、赤の場合には「赤漆（せきしつ）」という歴史的用語がすでにあるので仕方がない。内外面とも黒色漆の場合は「総黒色漆」、同じく黒色系は「総黒色系漆」（慣例による「総（懸）黒」は両者を含んだものである）。内面赤色外面黒色は「内赤外黒色漆」、同じく「内赤外黒色系漆」とする。赤色顔料が同定されている場合は「内朱外黒色漆」あるいは「内赤（ベンガラ）外黒色漆」とする。

ハ) 下地の分類について……一般の粗い鉱物粒子を用いたものは「地の粉漆下地」、珪藻土使用は「珪藻土漆下地」、より細かい砥の粉類似は「サビ漆下地」、炭粉漆を用いたものは「炭粉漆下地」、柿渋を用いたものは「炭粉渋下地」とする。

III. 分析結果

◇表面観察（図版1-1 a・b）

分析した筒形漆器（総黒色）は、フラットな底部から若干斜上方に立ち上がるもの。口径7.8cm、器高4.4cm、底径7.4cm。薄手で底部厚は5.5mm、口縁部厚は3.5mmを測る。樹種は未同定だが、広葉樹の縦（堅）木取りである。本漆器の特色は体部中央に線刻帯（4.5mm）を巡らす点にある。線刻は4本であり、1本の幅は1mm。2本の紐帶を表現したと思われる。よく観察すると、線刻は漆で盛り上げたうえから施されており、その漆は口縁部から底部にかけて縦位にも施されている。さらに割れ口と内面にも広く漆が付着していた。漆は縮み痕が顕著な生漆で、接着法も手慣れたものではない。一方器体の髹漆は上手であり、やや茶色がかるが光沢のある黒色を呈する。当初は無地であったものが、破損後の修復時に横位線刻帯を後補として追加したものであろう。

◇塗膜分析（図版1-2・3）

分析解説は下から塗装順に番号（①～）を付して説明する。層厚は内外面各3点を分析したものの平均値であり、必ずしも図版スケールとは一致しない。

（外面）（図版1-2）

①地の粉漆下地層。木胎に木地固めの後布着せはせず、漆と石英・長石を含む鉱物粒子を直接施したもので、層厚は97～200μm（1μmは0.001mm）。『延喜式』にいう「焼土」ではない。②漆層。層厚23～41μm。透明性は劣る。③黒色漆層。層厚12μm前後の均一な層。黒色顔料は0.1μm前後の微細な炭素系粒子と思われる（「掃墨」）。表層1μm前後に薄い茶黒色の変質部分（多糖・糖タンパク・ウルシオール成分による酸化劣化防止層）が形成されている。表面には細かい楔形の亀裂が見られる。

（内面）（図版1-3）

①地の粉漆下地層。層厚は97μm前後。表層の凹凸が著しい。②漆層。層厚36μm前後。透明性は劣る。③黒色漆層。層厚平均51μm前後で外面よりも厚い。黒色顔料は外面と同じ。表層2μm前後

に変質部分が形成されている。

◇赤外線吸収スペクトル法（図1）

図1の下段は現在の漆塗膜硬化時における赤外線吸収スペクトル、上段は出土漆器の下地であり、比較のために2つを掲載した。縦軸は透過率（T, %）、横軸は波数（cm⁻¹, カイダー）である。使用機器はバーキングエルマ社製顕微フーリエ変換赤外分光光度計1650 PC-DX型。試料は0.1mgを採取、KBr錠剤法によった。出土漆器の場合経年変化に加えて、使用や遺存状態に左右される部分が多く、単純に現在のものと比較できないこともある。

まず3400cm⁻¹（フェノール性-OH）に較べて、2925cm⁻¹（-CH₂-基）、2850cm⁻¹の吸収がやや少なく、1061cm⁻¹～1065cm⁻¹のゴム質の吸収が大きい。これは出土漆器に見られる時代を経たものの特色である。733.1cm⁻¹（ウルシオール側鎖）の山は明確ではないが、1720cm⁻¹、1475.9cm⁻¹、1465.3cm⁻¹（活性メチレン基）の吸収がみられる。全体の吸収スペクトルから考えて漆と同定して大過ないであろう。

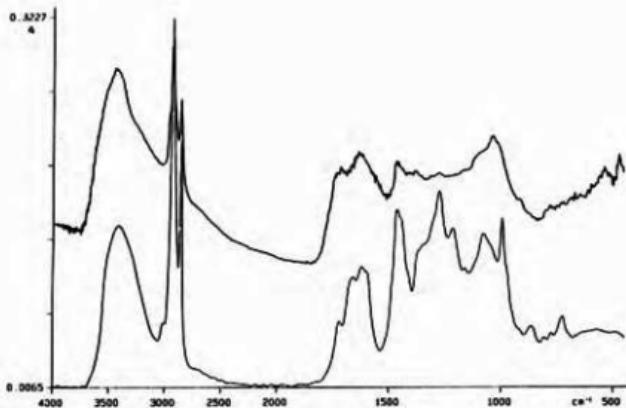


図1 漆器の赤外線吸収スペクトル（上段出土漆器の漆下地、下段現代の漆塗膜）

IV. 小 結

分析した筒形漆器は松梨遺跡1号構下層から出土したもので、下層は8世紀後半～9世紀前半の須恵器がプライマリーな状態で確認でき、「仁古万呂」「廣…」等の墨書須恵器も十数点確認されている。筒形漆器は古代では筒と呼ばれたものの一種であろうが、木地は広葉樹の縦(堅)木取りで薄手にロクロ挽きされている。その塗装工程(髹漆)の特色は、布着せはなく、内外面とも地の粉漆下地層を1層施した後、漆層、黒色漆層を各1層塗り重ねた本堅地の総黒色漆器である(各層に研ぎは施されていない)、漆下地(本堅地)漆器の髹漆としては簡素な方に属しよう。

胴部における線刻は後補と考えられるが、その意図するところは奈良時代の銅器や長屋王邸出土の漆器大鉢¹⁾などに見られる2本の紐帶（隆帯）をイメージしたものであろう。縦木取りである点も正倉院宝物の椀・盤・皿などに共通する特色である²⁾。本例と全く同じ器形の出土例はないが、平城宮跡6AAF区SK3137（770年頃）から、やや大型で身の深い筒形木器が出土している。筈は『延喜式』では祭祀用具に使用された例が多く、本例もそうしたものであったかもしれない。奈良時代の漆器はごくかぎられた人々の所有物であり、椀皿類はすべて総黒色であったが、朱漆器が出現した平安時代では食器における階層制を最も反映したものとなった。

【延喜式】（大炊寮宴會雜給）「其飯器參議已上並朱漆椀、五位以上葉椀」

【延喜式】（大膳上）「右新嘗會宴會料依前件、其雜器親王已下三位已上朱漆。四位已下五位已上烏漆、并土器」

したがって、漆器の存在は遺跡の性格を左右する重要な証拠品となるわけであるが、そのランクは表面観察では不詳な点が多く、塗装工程や材料を解明する必要がある。例えば、石川県羽咋市寺家遺跡出土の漆皿は（9世紀前半）、見た目ではかろうじて漆が残っている程度の粗雑なものと思われた。しかし塗膜分析の結果、布着せに研ぎを伴う8層の漆塗りが施された正倉院クラスの高級品であることが明らかになった。漆器を出土した同一土坑から木地荒型も共伴しており気多大社付属工房製品と推定されるが、中央と遜色ないものが生産されていたことが知られる例である³⁾。

奈良時代で留意すべき遺跡としては、まず石川県鹿島郡中島町下笠師E遺跡（8世紀後半）があげられる⁴⁾。斎車とともに漆器木地の荒型が大量に発見され、中にはパレススタイルとでもいるべき端反盤も含まれていることから、国衙工房との関連やその供給先が注目されている。8世紀後半とされている石川県金沢市三小牛ハバ遺跡からは、良質な盤や漆塗曲物が出土している⁵⁾。当遺跡は「三千寺」や則天文字の墨書須恵器、銅版鑄出如来立像、三彩壺、580枚の和同開珎などの出土から奈良と関連のある山林寺院跡とする意見が強いようである。漆器もあるいは搬入品であるかもしれない。越後では「沼垂城」「郡司符」木簡などが発見され奈良時代前期の官衙跡として注目を集めた、新潟県三島郡和島村八幡林遺跡から鏡箱のような漆塗円形容器が出土している⁶⁾。これも正倉院クラスのものであり、地方出土の漆器としては最上級のものであろう。

平安時代では9世紀前半とされる金沢市戸水大西遺跡から高杯・椀・皿・合子、そして漆皮の可能性がある箱などの漆器が出土した⁷⁾。地方ではまれにみる多種の漆器発見といえる。弘仁13年（823）の木簡も出土しており、加賀立国直前の官衙関連遺跡として重要である。隣接する戸水C遺跡（9世紀後半）からは、全国で初めて曲物とその蓋である漆紙文書がセットとなって出土した⁸⁾。このころになると地方の国衙や寺社富豪層による在地の生産体制が整備され、中央における生産は808（大同3）年の官司整理統合にみられるように、むしろ縮小している⁹⁾。

以上の事例や『延喜式』記載の諸国貢進漆器を引用するまでもなく、高度な技術を要する漆器生産は支配者の独占物であった。松梨遺跡出土の筒形漆器も熟練した薄手の木地に、やや簡略化

した髹漆工程をとるとはいへ光沢のある黒色漆を施したもので、器形の特殊性から考えると、一般集落で使用されたものでないことは明白である。

なお、本稿は平成5年度渋谷学術文化スポーツ振興財団助成金による成果の一部である。

註

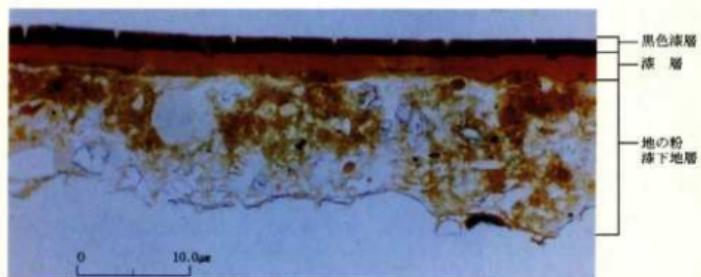
- (1) 奈良国立文化財研究所編『平城京長屋王邸宅と木簡』吉川弘文館、1991
- (2) 松田権六・岡田 譲ほか『正倉院の漆工』平凡社、1975
- (3) 四柳嘉章「古代～近世漆器の変遷と塗装技術」『石川考古学研究会々誌』34号、1991
四柳嘉章「北陸・東北における古代・中世漆器の漆技術と画期」『石川考古学研究会々誌』35号、1992
- (4) 「中島町下笠師E遺跡」『拓影』39号 石川県立埋蔵文化財センター、1993
- (5) 出越茂和・南 久和『金沢市三小牛ハバ遺跡』金沢市教育委員会、1988
- (6) 板井秀弥・田中 靖「新潟県八幡林遺跡と出土木簡」『日本歴史』521号、1991
「八幡林遺跡現地説明会資料」新潟県教育委員会、和島村教育委員会、1992
- (7) 金沢市教育委員会出越茂和氏教示
- (8) 平川 南「戸水C遺跡漆紙文書」『拓影』35号 石川県立埋蔵文化財センター、1991
- (9) 四柳嘉章「古代～近世漆器の変遷と塗装技術」『石川考古学研究会々誌』34号、1991



▲1 a 内面

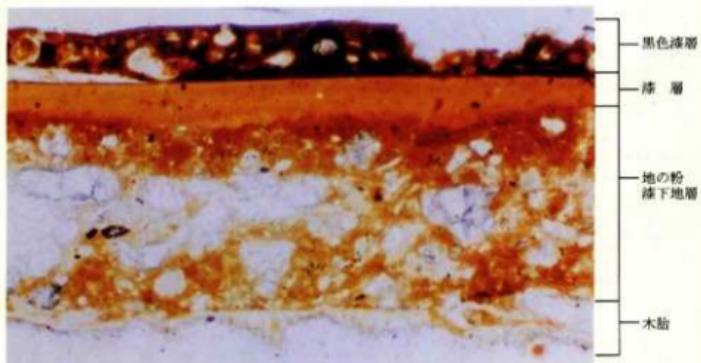


▲1 b 外面



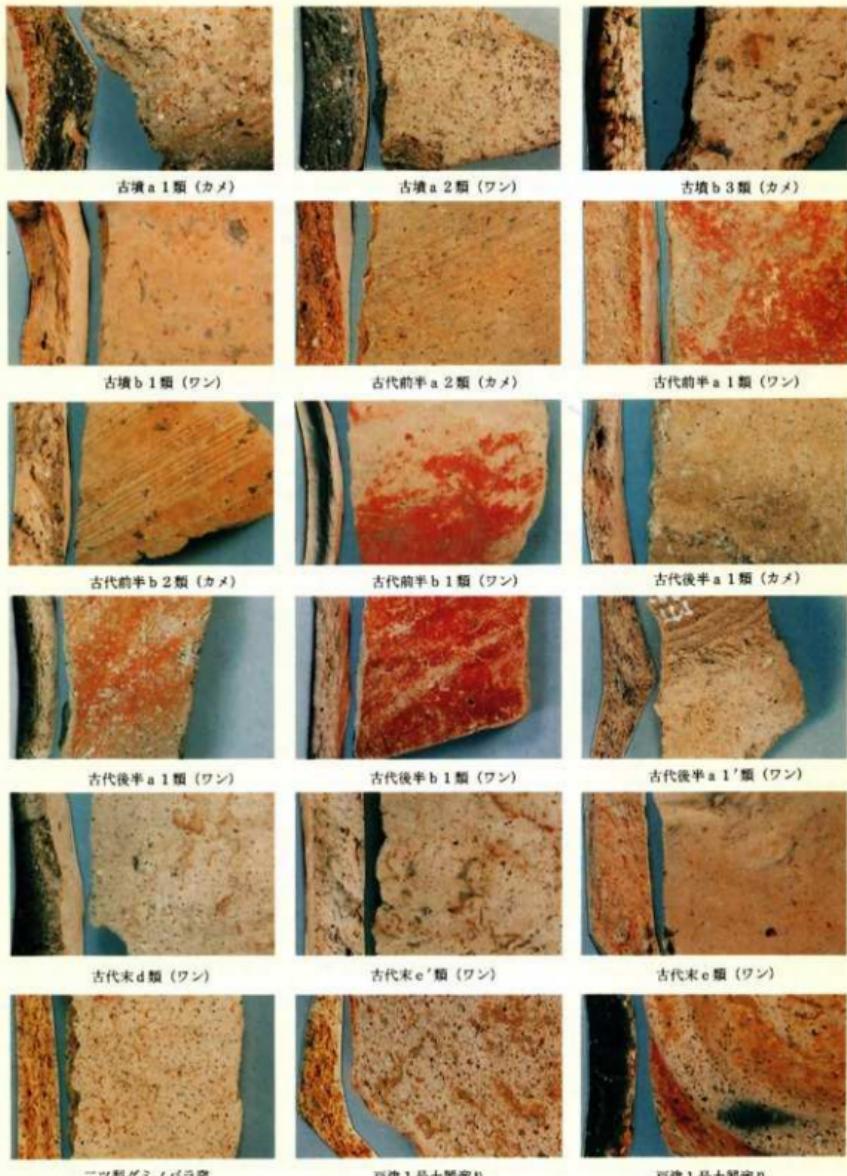
▲2 外面

× 200 (単ニコル)



▲3 内面

× 200 (単ニコル)

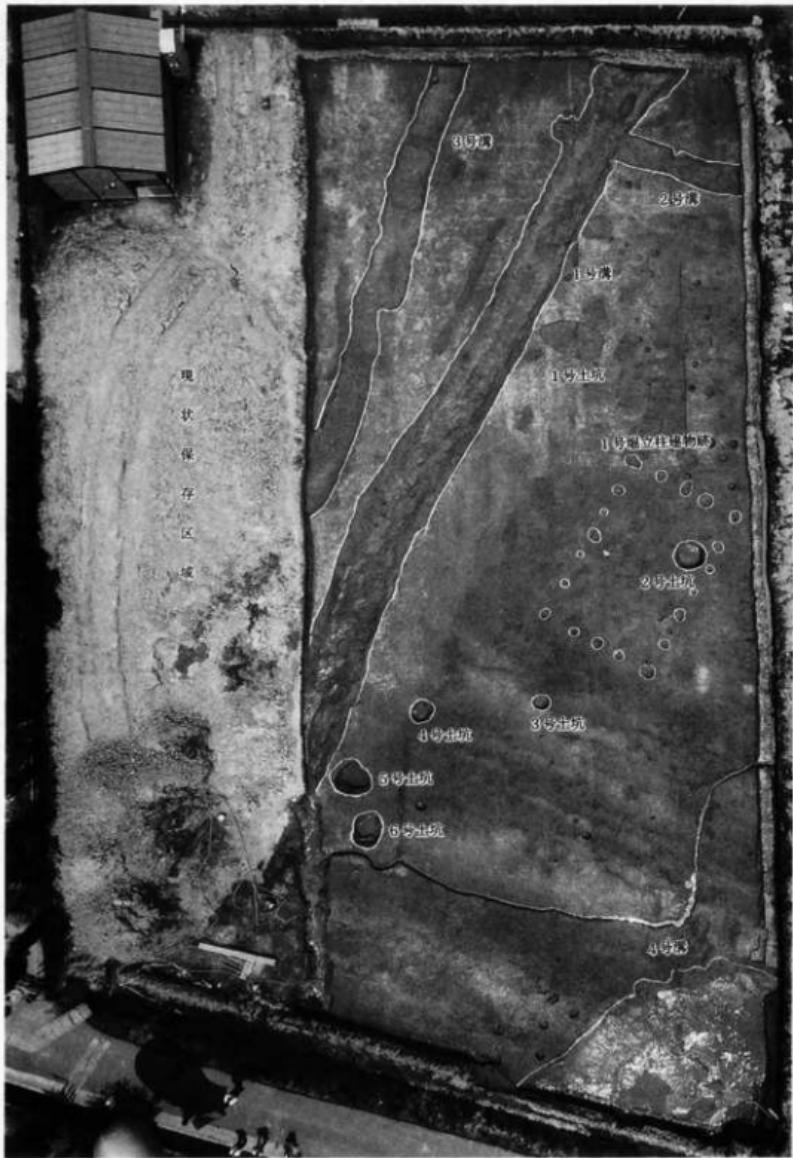


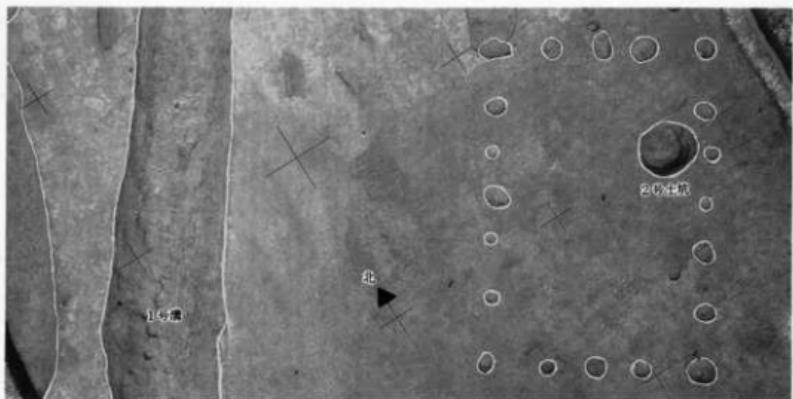


遺跡遠景（梯川流域東一西）



遺跡近景（南東から）

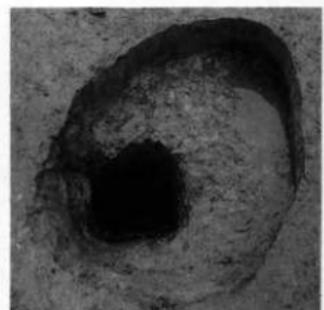




1号堀立柱建物跡全景



6号土坑全景（東から）



6号土坑全景（南から）



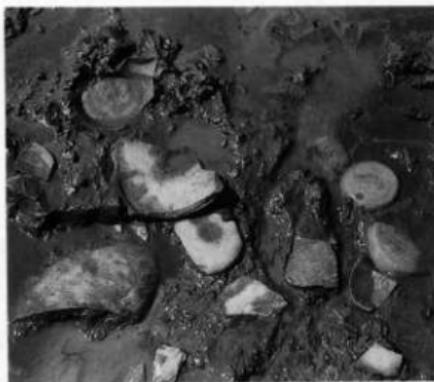
6号土坑井戸側（丸木舟）



6号土坑井戸側取り上げ



1号溝全景（南西から）



1号溝下底H区遺物出土状況



1号溝下底I区遺物出土状況



1号溝調査風景



1号溝覆土セクション（D-D'）



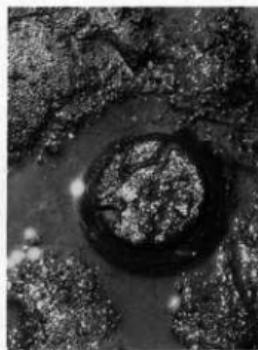
4号溝全景



4号溝覆土セクション（東側）



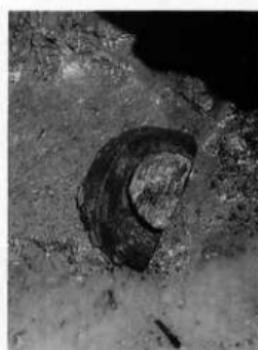
4号溝中層掘り下げ状況



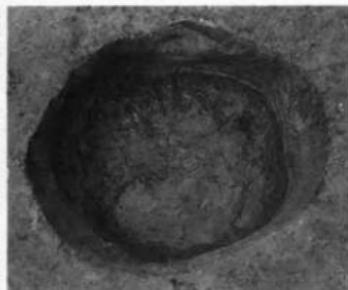
4号溝下底出土木製皿



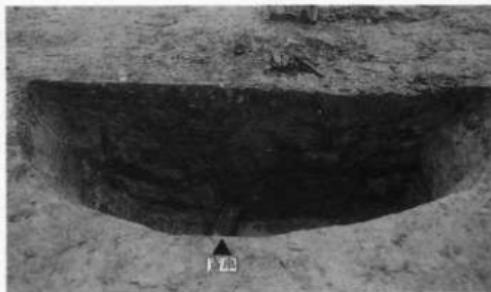
4号溝下層掘り下げ状況



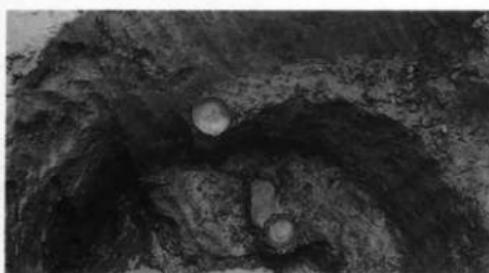
4号溝下底出土木製椀



2号土坑 全景



2号土坑 覆土セクション



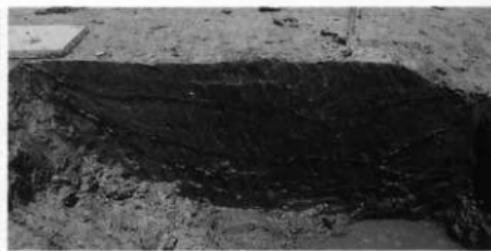
4号土坑 遺物出土状況



4号土坑 覆土セクション



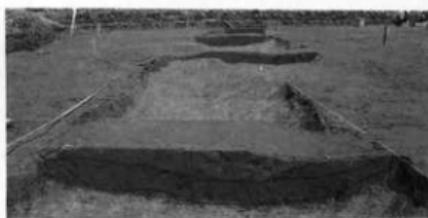
5号土坑 全景



5号土坑 覆土セクション



3号溝 全景 (南西から)



3号溝 覆土セクション (D-D')



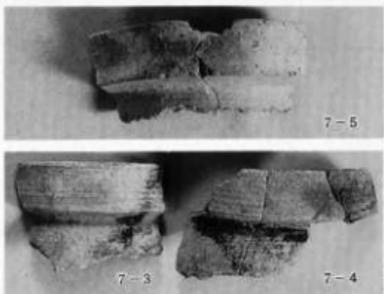
弥生時代中期以前の甕



6-4



6-5



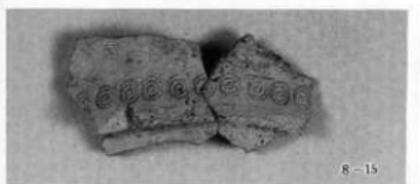
7-5



7-3

7-4

弥生時代後期の甕

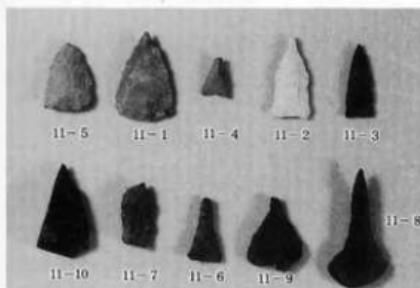


8-15



8-17

弥生時代後期の器台（スタンプ文）



11-5

11-1

11-4

11-2

11-3

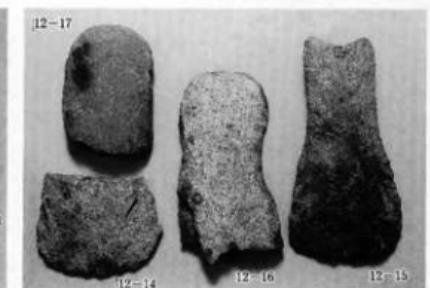
11-10

11-7

11-6

11-9

11-8



12-17

12-14

12-16

12-15

弥生時代の石器
(弥生時代の遺物)

23-8



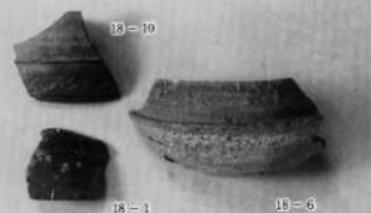
26-65

26-67

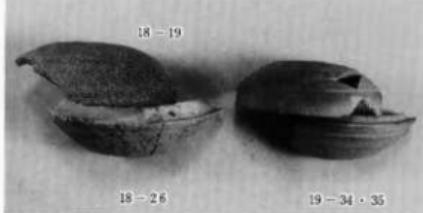
26-63

土師器把手

(古墳時代後期の土師器)



5世紀代須恵器坏



6世紀末～7世紀初須恵器坏



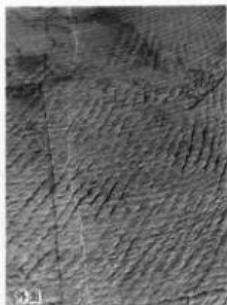
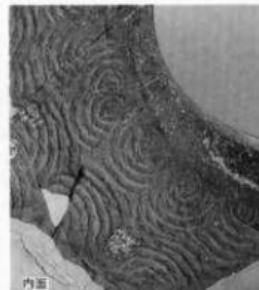
7世紀代須恵器坏



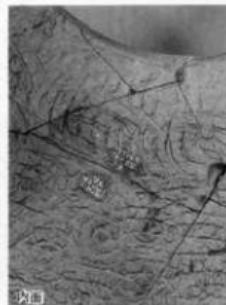
6世紀末～7世紀須恵器高坏



須恵器壺 (20-61)



須恵器壺 (20-62)

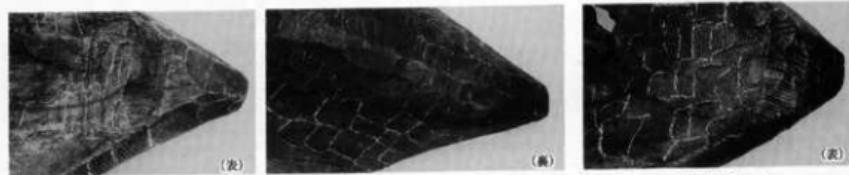




舳先側部分（14図）

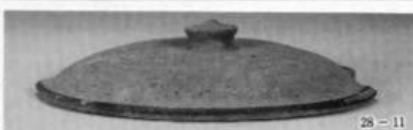
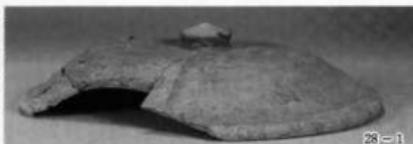


舳側部分（15図）

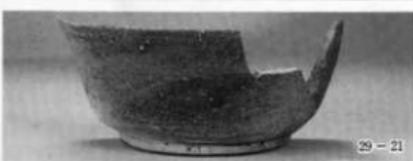
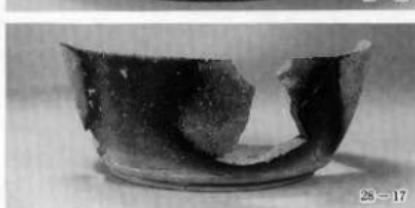


舳先側端部加工

舳側端部加工



須恵器壺B蓋



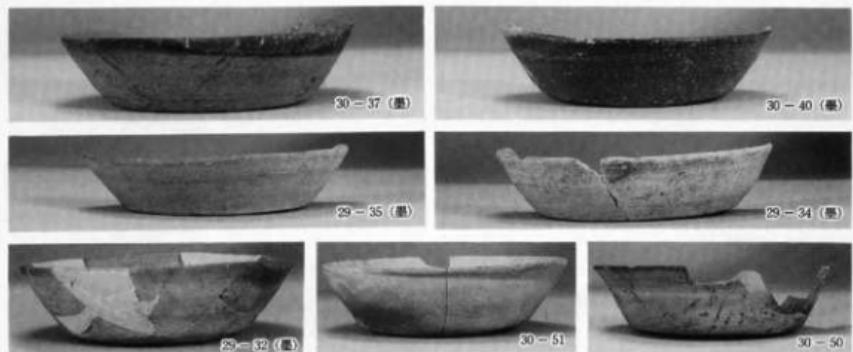
須恵器壺B身（大）



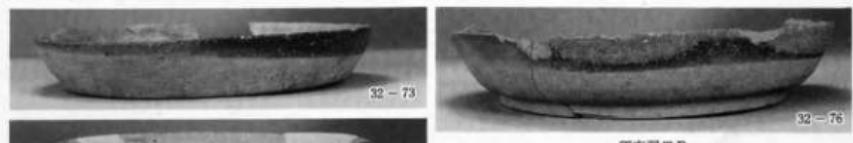
須恵器壺B身（小）



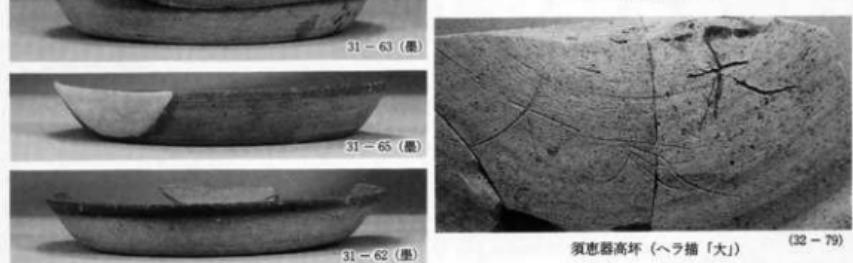
須恵器壺A



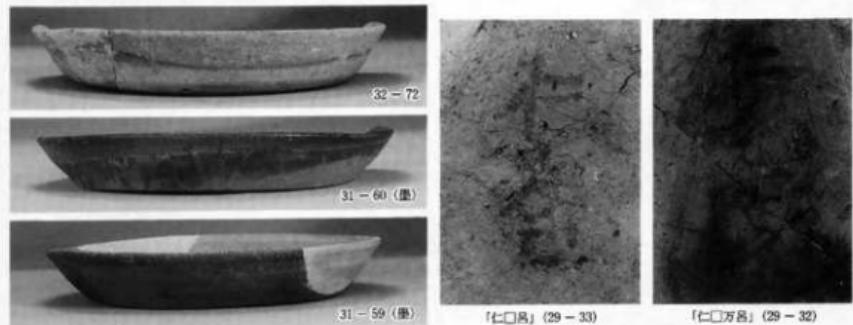
須恵器壊A



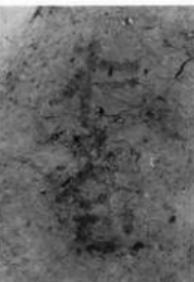
須恵器壊B



須恵器壊 (ヘラ描「大」)



須恵器壊A

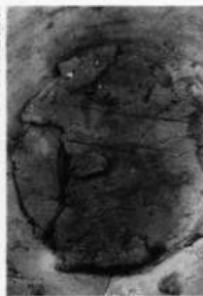


「仁□呂」(29-33)

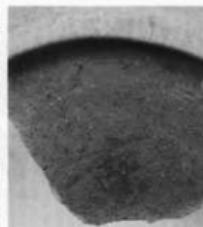


「仁□万呂」(29-32)

墨書き土器(1)



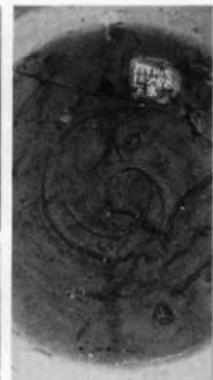
「仁古万呂」(31-59)



「廣□」(31-45)



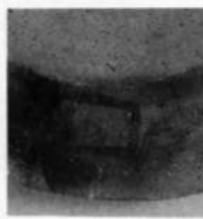
「十」太字系(30-38・39)



「十」太字 2字(30-37)



「十」太字(41-21)
(4号溝出土)



「口」太字大形系(29-36・35)



「口」太字大形系(31-62-63-61)



「十」細字系(31-65)



42-36

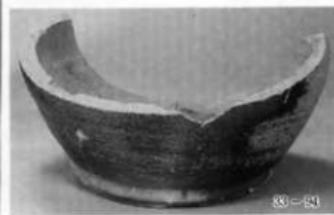
(4号溝出土)

墨書き器(2)

「口」象形(29-34)

「口」小形(31-60)

(4号溝出土)



83-53

須志器瓶類



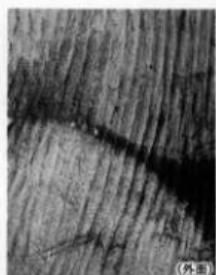
33-91



須恵器壺 (34-103)



須恵器壺 (35-107)



(外面)



(内面)



赤彩土師器壺B身



38-120



35-134



鉢津
(40-158-157)



赤彩土師器壺A



土師器小壺



「神功開寶」(4号拂出土)



金属器(環?)



40-155

40-155

羽口



(正面)

須恵器壺A (1号溝上層出土)

48-6



「新日□」墨書
須恵器壺A

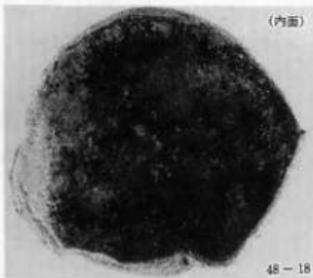


(底面)

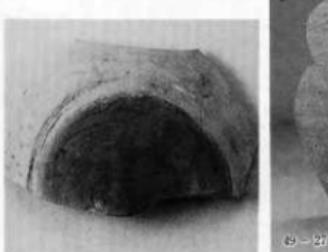


須恵器壺A (外面スヌ状)

48-13



(内面)



須恵器壺A (墨書)



須恵器長頸瓶

48-18

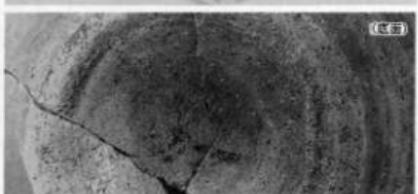
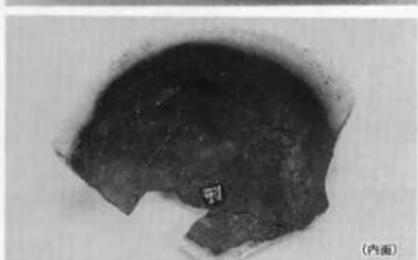
49-27



須恵器甕 (49-30)



内玉



土器器塊B (「上家」墨書き)



木器 細



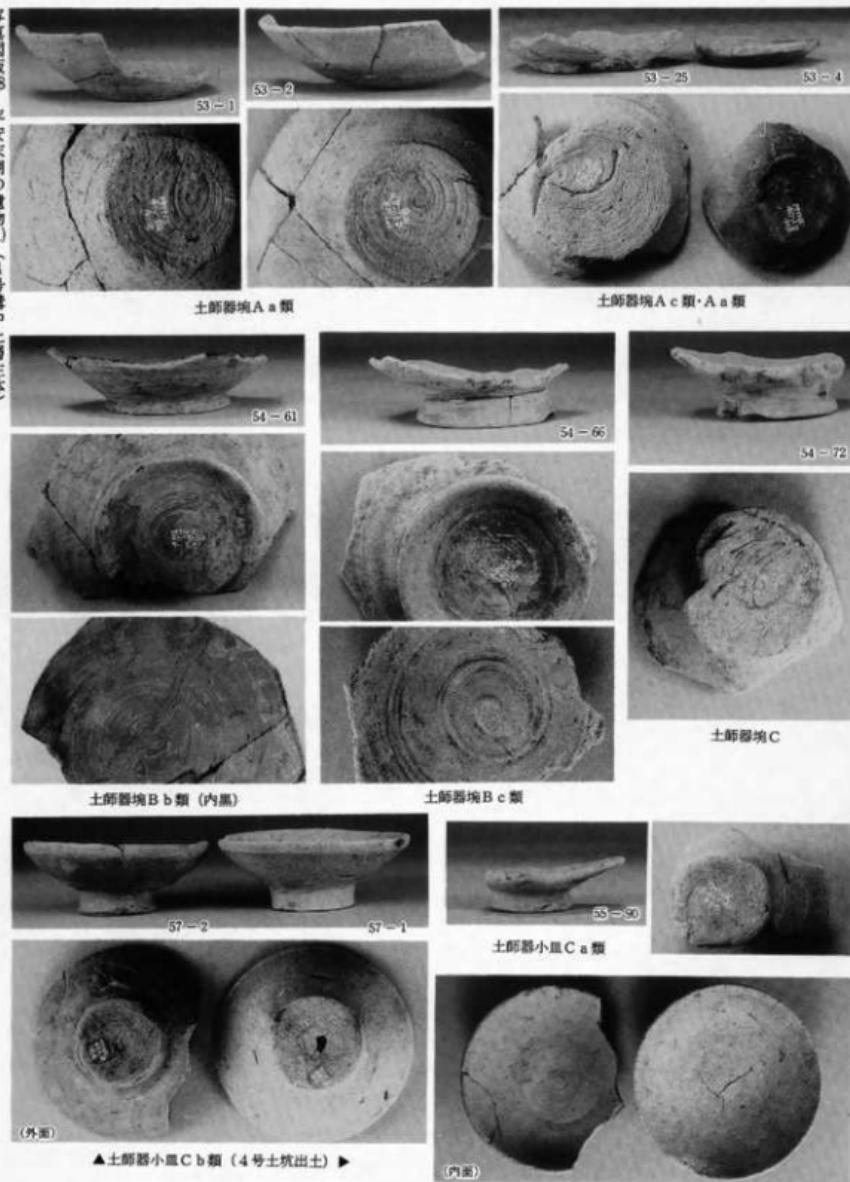
土器器塊A (底中央・体下位穿孔)

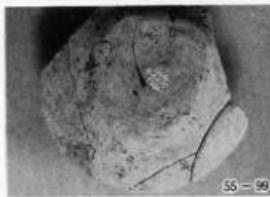
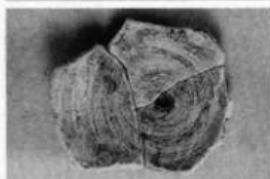
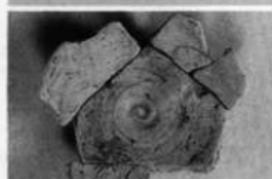


木器 細

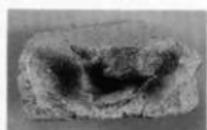
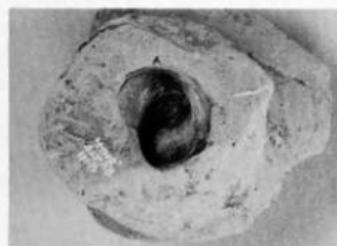


魚物底板

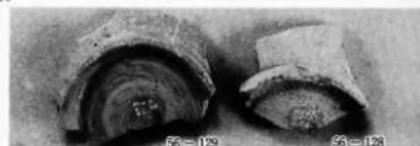




土師器小皿A

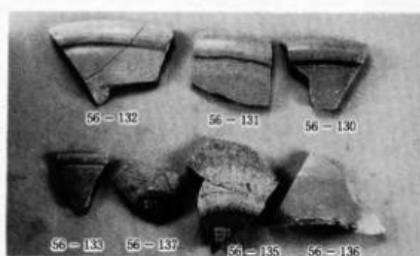
▲ 底部小孔の
粘土よじれ

柱状高台の底部断面



灰釉陶器

土師器鉢



白磁碗

土 鍋

松 梨 遺 跡

犬丸小学校プール建築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成 6 年 3 月 25 日 印刷

平成 6 年 3 月 31 日 発行

編集・発行 石川県小松市教育委員会

石川県小松市小馬出町91番地

平四 電話 0761 (22) 4111

印 刷 有限会社 米 野 印 刷
